

茨城県結城郡八千代町大字平塚

菱毛道西遺跡

－株式会社エフピコ工場建設に伴う遺跡の発掘調査－

2009

八千代町教育委員会
株式会社 エフピコ
株式会社 地域文化財コンサルタント

茨城県結城郡八千代町大字平塚

菱毛道西遺跡

—株式会社エフピコ工場建設に伴う遺跡の発掘調査—

2009

八千代町教育委員会
株式会社エフピコ
株式会社 地域文化財コンサルタント



藁毛道西遺跡周辺 空中写真（昭和22年米軍撮影）



調査前状況



遺構検出状況①(調査区南側)



遺構検出状況②(調査区北側)



調査終了全景①(調査区南側)



調査終了全景②(調査区北側)



2号住居跡カマド遺物出土状況（南東より）



古墳時代後期の出土遺物



平安時代の出土遺物



カマド補強材に転用された瓦



墨書土器 (24号住居跡出土)



墨書土器 (25号住居跡出土)



支脚に転用された送風羽口 (カマド内より出土)

序 文

このたび、株式会社エフピコ工場建設に伴い、八千代町平塚に所在する菱毛道西遺跡が発掘調査され、その成果を報告書として発行する運びとなりました。調査に至るまでには、遺跡が町の工業団地の区域内に所在することから、町部局も含め事業者と何度も協議を重ね、2次の試掘調査を実施し、残されている遺跡のほぼ全域を調査することになりました。調査の結果、豊富な遺物と併に古墳時代、平安時代の竪穴住居跡が多数発見され、この地域における大規模な集落跡であることが分かりました。

これらの成果が報告書にまとめられ、出土品を公開するなど、多くの方々に調査成果の活用を図ることにより、八千代町の古代の歴史研究や今後の文化財保護に役立てることができれば幸いに存じます。

最後に、この調査に多大なご理解・ご協力いただきました株式会社エフピコはじめ地元の皆さん、関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成21年6月

八千代町教育委員会教育長 高橋 昇

例 言

1. 本書は株式会社エフビコム建設に伴う菱毛道西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地発掘調査から報告書刊行に至る業務は、株式会社エフビコムから委託を受け、茨城県教育委員会と八千代町教育委員会の指導にもとづき、株式会社地域文化財コンサルタントが実施した。
3. 遺跡の所在地、調査面積、調査期間は下記のとおり。

所在地 茨城県結城郡八千代町大字平塚字菱毛道西 4455 番地 8 他

調査面積 10,000 m²

確認調査期間 1次 平成18年7月26日～同年8月4日

2次 平成18年12月17日～同年12月20日

本調査期間 平成19年9月13日～同年11月15日

整理期間 平成20年6月17日～平成21年6月17日

4. 調査担当者は下記のとおり。

調査指導 - 八千代町教育委員会 生涯学習課 社会教育係 山野井哲夫
- 確認・本調査 - 調査統括者・副地域文化財コンサルタント 調査研究部課長 齋藤 洋
調 査 員・副地域文化財コンサルタント 調査研究部 遠藤雄一郎
調 査 員・副地域文化財コンサルタント 調査研究部 野村浩史
- 整理調査 調査統括者・副地域文化財コンサルタント 調査研究部課長 齋藤 洋
調 査 員・副地域文化財コンサルタント 調査研究部 野村浩史
調 査 員・副地域文化財コンサルタント 調査研究部 大橋 生

5. 写真撮影担当者は下記のとおり。

- 現場写真 - 齋藤 洋 - 整理調査 - 野村浩史

6. 本書の編集は齋藤 洋が行い、大橋がこれを補佐した。執筆分担と文責は以下のとおり。

第1章、第1節、山野井哲夫 第2～4節、野村浩史 第2章、山野井哲夫 第3章、齋藤 洋
第4章、第1節、齋藤 洋 第2節、山野井哲夫

7. 出土遺物及び写真・原因等の資料全般は八千代町教育委員会が保管している。

8. 確認調査から発掘調査及び報告書作成に際し下記の諸機関・諸氏よりご協力・ご指導を賜った。御芳名を記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)

㈱エフビコム ㈱ダックス 茨城県教育庁文化課 八千代町企画財政課 八千代町生涯学習課
市立市川考古博物館 結城市教育委員会生涯学習課 南森田工業 ㈱欠中建設 ㈱中建設印鑑支店
木川正夫 大里嘉宣 野口文・野口春男 黒子昭好 諏訪 明 諏訪正一 人里孔孝 弦巻敬光
弦巻真美 宮木千世 阿久津眞助 江澤光一 荒井 弘 野口新市 山中将平 戸村孝夫 菅田和義
笠井宏悦 小川浩樹 森田剛正 中里康二 山路直克 赤井博之 川口武彦 斎藤伸明 土生朗治
松川由次 関宮正光

9. 現地調査及び整理調査にて御尽力を賜った諸氏は下記のとおり。心より御礼申し上げます。(順不同)

現地調査 青木みね子 荒川 博 石川 潤 海老原龍生 岡木裕一 小野崎文男 川村理華
北原 陸 国府田かおり 小坂加子 木幡 光 坂入良一郎 鈴木正弘 関 美代子
中島貞雄 中島トミ子 中島秀雄 中村 薫 野村由美子 横 勝雄 増田加津代
深山恒男 山本清二
整理調査 石井葉子 遠藤恵子 小川将之 川村理華 小林 嵩 田口るみ子 藤井陽子 増田杏里

凡 例

- 第2図 開発区域図は八千代町発行「八千代町都市計画図 1/10,000」を使用した。
- 第3図 開発計画概要図は八千代町発行「八千代町都市計画図 1/2,500」を使用した。
- 第5図 遺跡周辺地形図は「明治42年八千代村 1/5,000」を50%に縮小して使用した。
- 第6図 遺跡位置図は国土地理院発行地図「1/50,000」を使用した。
- 第7図 周辺遺跡分布図は茨城県教育委員会発行「茨城県遺跡地図 1/25,000」を70%に縮小して使用した。
- 実測図の縮尺は各図面に記した。
- 遺構・遺物の色調は『新版標準土色帖 2003年版（財団法人日本色彩研究所ほか）』を使用し、記載した。
- 遺構実測図における「K」は擾乱を示す。
- 本書の挿図に使用したトーン及び線の種別は以下のとおりである。



- 遺物観察表中の質量は、()は残存値、()は推定値を示す。単位はcm及びgである。
- 遺構実測図中の土層説明及び遺物観察表中の胎土における微・少・中・多量はそれぞれ、微量（土層内での割合が1～3%）・少量（5～10%）・中量（15～25%）・多量（30%以上）を意味する。
- 遺構実測図中のレベルは海拔高、方位は座標北を示す。
- 遺物写真図版は原則として土器類 1/3、瓦 1/4、その他 1/2 とした。
- 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。
- 遺構図中の●は土器・土製品類（瓦含む）、▲は石器・石製品、□は鉄製品を表す。

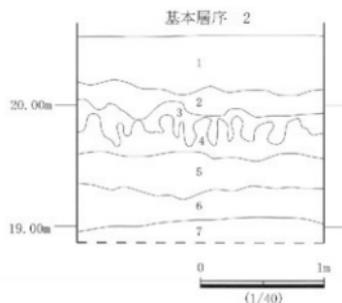
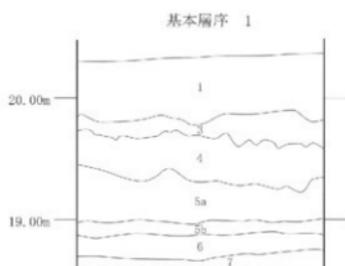
※資料の取扱いについて

項目	内容
水洗い	・出土した全ての遺物について行った。
注 記	・インクジェットプリンターを使用した。
復 元	・出土した全ての遺物について行った。
実 測	・遺物実測図は報告書掲載分について行った。
写真撮影	・報告書掲載分の遺物について行い、デジタルメディアに収納して保存している。 ・遺構に関する写真は、撮影内容・方向・日時等の必要事項を記載しアルバムに収納している。
台 帳	・遺物台帳・図面台帳・写真台帳を作成し、それぞれの資料検索が可能に記録している。
遺物保管方法	・収納内容を明記した専用コンテナに保管している。
資 料	・全ての遺物と関連する資料を八千代町教育委員会が保管している。

第1図 基本堆積土層



堆積土層の観察は、図に示している2箇所で行った。遺構の検出面は1層上面である。



土層説明

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------|
| 1. 10YR4/6 褐色ソフトローム (ハードロームが混じる) | 5a. 10YK5/8 黄褐色ハードローム |
| 2. 10YR5/4 に近い黄褐色ソフトローム (ハードロームが混じる) | 5b. 10YK5/8 黄褐色ハードローム |
| 3. 10YR5/4 に近い黄褐色ソフトローム (ハードロームが混じる) | 6. 10YR6/6 黄褐色ハードローム |
| 4. 10YR5/6 黄褐色ハードローム | 7. 10YK6/7 明黄褐色ハードローム |



基本層序 1



基本層序 2

目次

本文目次

巻頭カラー写真	
序文	
例言・凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 複層調査の方法	3
第3節 本調査の方法と経過	4
第4節 整理作業の方法と経過	12
第2章 遺跡の位置と遺構	13
第1節 地理的遺構	13
第2節 歴史的遺構	15

挿図目次

第1図 基本地積土図	
第2図 調査区域図	1
第3図 調査計画縦断面図	2
第4図 確認トレンチ前区図	3
第5図 遺跡周辺地形図	13
第6図 遺跡位置図	14
第7図 周辺道路分布図	16
第8図 調査区全体図	19
第9図 1号住居跡	23
第10図 1号住居跡カマド	24
第11図 1号住居跡出土遺物①	24
第12図 1号住居跡出土遺物②	25
第13図 1号住居跡出土遺物③	26
第14図 2号住居跡	28
第15図 2号住居跡カマド	29
第16図 2号住居跡出土遺物①	30
第17図 2号住居跡出土遺物②	31
第18図 2号住居跡出土遺物③	32
第19図 2号住居跡出土遺物④	33
第20図 3号住居跡	35
第21図 3号住居跡カマド	37
第22図 3号住居跡出土遺物	37
第23図 4号住居跡	39
第24図 4号住居跡カマド	41
第25図 4号住居跡出土遺物①	41
第26図 4号住居跡出土遺物②	42
第27図 4号住居跡出土遺物③	43
第28図 5号住居跡	45
第29図 5号住居跡カマド	46
第30図 5号住居跡出土遺物	46
第31図 6号住居跡	48
第32図 6号住居跡カマド	49
第33図 6号住居跡出土遺物①	50
第34図 6号住居跡出土遺物②	51
第35図 6号住居跡出土遺物③	52
第36図 7号住居跡	54
第37図 7号住居跡カマド	56
第38図 7号住居跡出土遺物①	57
第39図 7号住居跡出土遺物②	58

第3章 調査の成果

第1節 検出された遺構の概要	21
第2節 古墳時代の住居跡	22
第3節 平安時代の住居跡	106
第4節 棚立住建物跡	151
第5節 土坑	182
第4章 総括	186
第1節 検出された住居跡の構造的特徴と出土遺物について	186
第1項 古墳時代	186
第2項 平安時代	188
第2節 委毛遺内遺跡と熊野原司の遺跡	164
第1項 古墳時代後期の大型掘立柱居跡	164
第2項 平安時代掘立柱居跡出土の瓦	164

写真図版 報告書抄録

第40図 8号住居跡	60
第41図 8号住居跡カマド	61
第42図 8号住居跡出土遺物①	62
第43図 8号住居跡出土遺物②	63
第44図 9号住居跡	65
第45図 9号住居跡カマド	66
第46図 9号住居跡出土遺物①	67
第47図 9号住居跡出土遺物②	68
第48図 10号住居跡	70
第49図 10号住居跡カマド	71
第50図 10号住居跡出土遺物	71
第51図 11号住居跡	73
第52図 11号住居跡カマド	74
第53図 11号住居跡出土遺物①	74
第54図 11号住居跡出土遺物②	75
第55図 11号住居跡出土遺物③	76
第56図 12号住居跡	78
第57図 12号住居跡カマド	79
第58図 12号住居跡出土遺物①	80
第59図 12号住居跡出土遺物②	81
第60図 12号住居跡出土遺物③	82
第61図 13号住居跡	84
第62図 13号住居跡カマド	85
第63図 13号住居跡出土遺物①	86
第64図 13号住居跡出土遺物②	87
第65図 14号住居跡	90
第66図 14号住居跡カマド	91
第67図 14号住居跡出土遺物①	91
第68図 14号住居跡出土遺物②	92
第69図 28号住居跡	94
第70図 28号住居跡カマド	95
第71図 28号住居跡出土遺物	96
第72図 30号住居跡	98
第73図 30号住居跡カマド	99
第74図 30号住居跡出土遺物	100
第75図 31号住居跡	101
第76図 32号住居跡	103
第77図 32号住居跡カマド	103
第78図 32号住居跡出土遺物①	104
第79図 32号住居跡出土遺物②	105
第80図 15号住居跡	106

第 81 図	16 号住居跡	108
第 82 図	16 号住居跡カマド	108
第 83 図	16 号住居跡出土遺物①	109
第 84 図	16 号住居跡出土遺物②	110
第 85 図	17 号住居跡	112
第 86 図	17 号住居跡出土遺物	112
第 87 図	18 号住居跡	114
第 88 図	18 号住居跡カマド	114
第 89 図	18 号住居跡出土遺物①	115
第 90 図	18 号住居跡出土遺物②	116
第 91 図	19 号住居跡	118
第 92 図	19 号住居跡出土遺物	119
第 93 図	20 号住居跡	120
第 94 図	20 号住居跡カマド	120
第 95 図	20 号住居跡出土遺物①	121
第 96 図	20 号住居跡出土遺物②	122
第 97 図	21 号住居跡	121
第 98 図	21 号住居跡カマド	124
第 99 図	21 号住居跡出土遺物①	125
第 100 図	21 号住居跡出土遺物②	126
第 101 図	22 号住居跡	129
第 102 図	22 号住居跡カマド	129
第 103 図	22 号住居跡出土遺物①	129
第 104 図	22 号住居跡出土遺物②	130
第 105 図	23 号住居跡	132
第 106 図	23 号住居跡カマド	132
第 107 図	23 号住居跡出土遺物	133
第 108 図	24 号住居跡	135
第 109 図	24 号住居跡出土遺物①	135
第 110 図	24 号住居跡出土遺物②	136
第 111 図	25 号住居跡	137

第 112 図	25 号住居跡出土遺物	138
第 113 図	26 号住居跡	139
第 114 図	26 号住居跡カマド	139
第 115 図	26 号住居跡出土遺物①	140
第 116 図	26 号住居跡出土遺物②	141
第 117 図	27 号住居跡	143
第 118 図	27 号住居跡カマド	143
第 119 図	27 号住居跡出土遺物	144
第 120 図	29 号住居跡	145
第 121 図	29 号住居跡カマド	145
第 122 図	29 号住居跡出土遺物	146
第 123 図	33 号住居跡	147
第 124 図	33 号住居跡カマド	147
第 125 図	33 号住居跡出土遺物①	148
第 126 図	33 号住居跡出土遺物②	149
第 127 図	34 号住居跡	151
第 128 図	1 号掘立柱建物跡	151
第 129 図	1 号土坑	152
第 130 図	2 号土坑	153
第 131 図	3 号土坑	153
第 132 図	4 号土坑	154
第 133 図	5 号土坑	154
第 134 図	6 号土坑	155
第 135 図	遺構配属状況図	155
第 136 図	遺構別個別分類状況	156
第 137 図	瓦毛瓦葺建柱（山姥持柱）で固定される築物の様子	157
第 138 図	支脚一覽表	158
第 139 図	カマド横に張り出しを持つ住居跡	159
第 140 図	平成 19 年度「小倉市内遺跡発掘調査報告書」発掘からの地層変遷	159
第 141 図	豊毛町西遺跡と岡田遺跡の位置	161
第 142 図	豊毛町西遺跡と岡田遺跡の発掘から出た土瓦の比較	162
第 143 図	豊田周辺の古く奈良時代後期の遺跡と瓦山・遺跡分布図	166

表目次

第 1 表	飯沼上段城間切遺跡一覽表	18
第 2 表	1 号住居跡遺物観察表	26
第 3 表	2 号住居跡遺物観察表	33
第 4 表	3 号住居跡遺物観察表	38
第 5 表	4 号住居跡遺物観察表	43
第 6 表	5 号住居跡遺物観察表	47
第 7 表	6 号住居跡遺物観察表	52
第 8 表	7 号住居跡遺物観察表	58
第 9 表	8 号住居跡遺物観察表	63
第 10 表	9 号住居跡遺物観察表	68
第 11 表	10 号住居跡遺物観察表	72
第 12 表	11 号住居跡遺物観察表	76
第 13 表	12 号住居跡遺物観察表	82
第 14 表	13 号住居跡遺物観察表	88
第 15 表	14 号住居跡遺物観察表	93
第 16 表	23 号住居跡遺物観察表	96
第 17 表	30 号住居跡遺物観察表	101

第 18 表	32 号住居跡遺物観察表	105
第 19 表	16 号住居跡遺物観察表	110
第 20 表	17 号住居跡遺物観察表	113
第 21 表	18 号住居跡遺物観察表	117
第 22 表	19 号住居跡遺物観察表	119
第 23 表	20 号住居跡遺物観察表	122
第 24 表	21 号住居跡遺物観察表	127
第 25 表	22 号住居跡遺物観察表	131
第 26 表	23 号住居跡遺物観察表	134
第 27 表	24 号住居跡遺物観察表	136
第 28 表	25 号住居跡遺物観察表	138
第 29 表	26 号住居跡遺物観察表	141
第 30 表	27 号住居跡遺物観察表	144
第 31 表	29 号住居跡遺物観察表	146
第 32 表	33 号住居跡遺物観察表	150
第 33 表	瓦毛瓦葺建柱 平安時代瓦州土住居跡	165
第 34 表	住居跡一覽表	168

第1章 調査に至る経緯と調査方法

第1節 調査に至る経緯

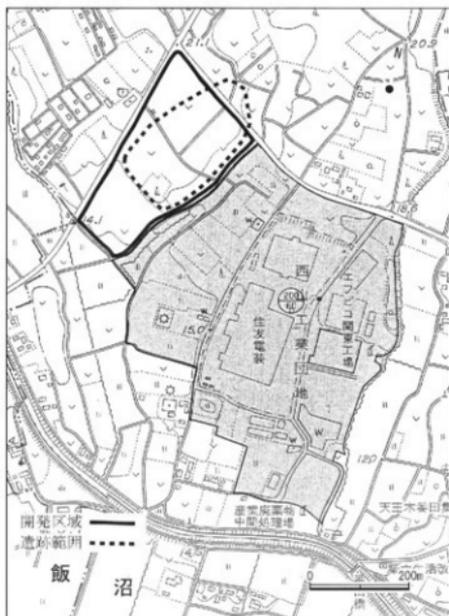
平成18年5月23日、株式会社エフビコから新工場建設にあたり、埋蔵文化財の照会があった。開発面積は約71,000㎡で、現状は畑、一部山林である。開発区域内の約38,000㎡の範囲は、奈良・平安時代の集落跡である菱毛道西遺跡が確認されていることから、その取扱いについて協議を開始した。

開発計画地は、町の総合計画及び都市計画の中で西山工業団地の拡大地域に位置づけられていることから、町部局の企画財政課を含め、開発計画の内容、埋蔵文化財の状況について協議を重ね（6/16、6/29）、試掘・確認調査を実施する事になった。試掘・確認調査（1次）は、遺跡範囲約38,000㎡（28筆）中、作付けのある畑及び山林部分を除いた調査可能な部分約20,000㎡を対象に、幅2m、長さ20mのトレンチを23か所（合計920m）設定し、平成18年7月26日から8月4日かけて実施した。その結果、11か所のトレンチから古墳時代と平安時代の竪穴住居跡が10軒、土坑4～5基が確認された。遺構は、東側の谷津に沿って台地上の約18,000㎡の範囲に集中して確認された。

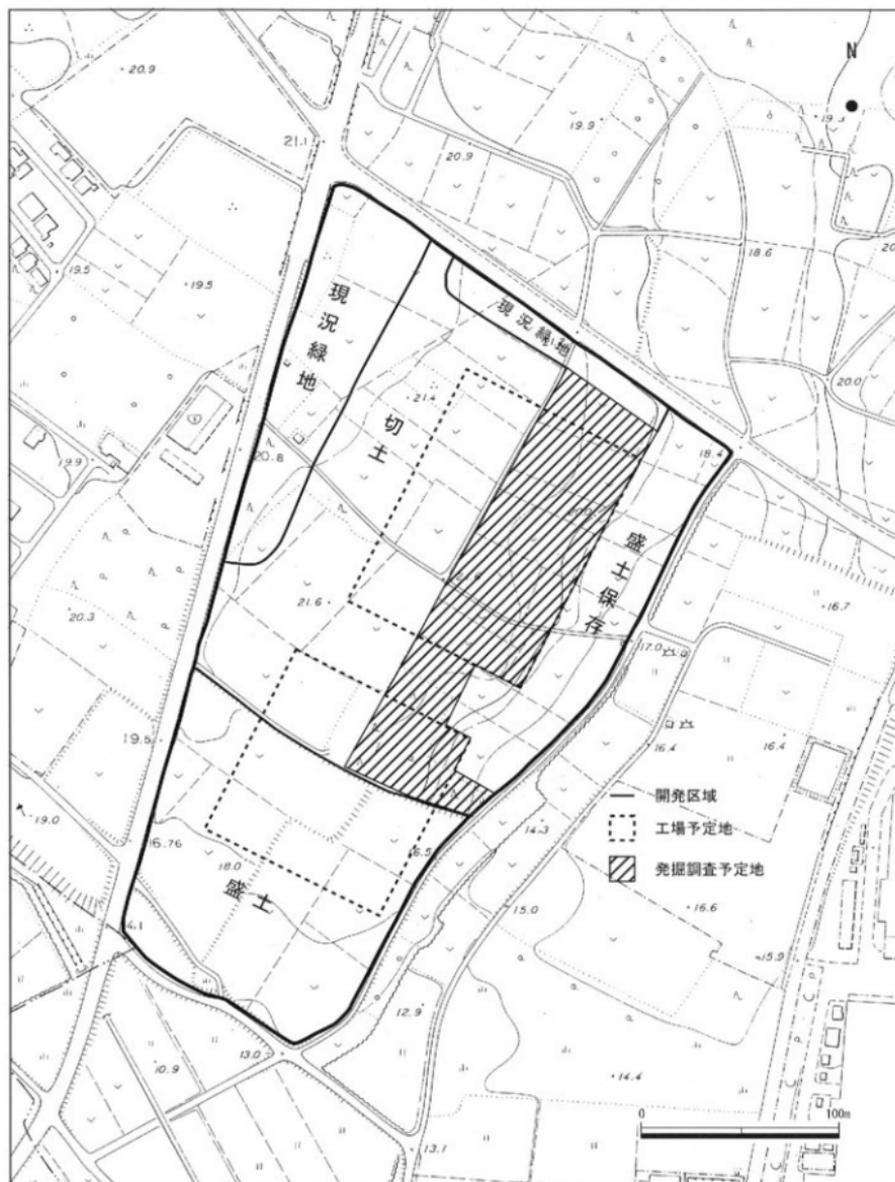
以上の結果を踏まえ、平成18年8月18日に今後の埋蔵文化財の取扱いと発掘調査について協議し、土木工事の届出を茨城県教育委員会に提出した。遺跡は、造成工事によって現状保存は困難であり発掘調査が必要と判断されたため、試掘・確認調査の結果報告及び今後の発掘調査について、地権者を対象に説明会を開催した（8/29）。平成18年9月5日、茨城県教育委員会から土木工事についての通知があり、工着手前の発掘調査の実施、盛上工事部分の工事立会、未確認部分の試掘・確認調査の実施について指示を受けた。この通知を受け、工着手時期及び試掘・確認調査（2次）について協議をもった（9/27）。

未確認部分の試掘・確認調査（2次）は、前回実施できなかった約18,000㎡を対象に、幅2m、長さ20mのトレンチを18か所（合計720m）設定し、平成18年12月17日から12月20日かけて実施した。その結果、前回と同様台地の東寄りの3か所のトレンチから、古墳時代と平安時代の竪穴住居跡が4軒確認された。

2回の試掘・確認調査の結果に基づき、発掘調査の対象範囲、期間、経費等について協議し（H19/1/17）、その後、茨城県土地利用合理化協議会（3/29）を経て、平成19年5月17日、株式会社エフビコと株式会社地域文化財コンサルタントとの発掘調査委託契約及び、八千代町教育委員会を含めた三者による発掘調査の協定書を締結した。平成19年8月9日、発掘調査と工事の日程等について最終協議を行い、発掘調査の届出を茨城県教育委員会に提出した。発掘調査は、10,000㎡を対象に平成19年9月13日から開始した。（山野井哲夫）



第2図 開発区域図（八千代町都市計画図1/10,000）

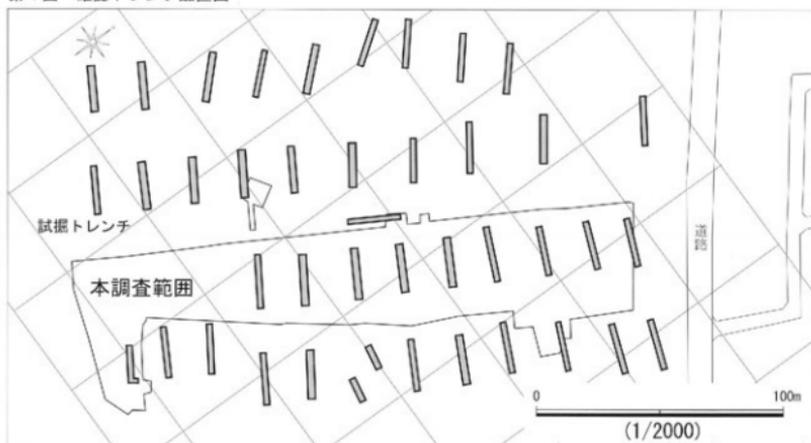


第3図 開発計画概要図（八千代町都市計画図1/2,500）

第2節 確認調査の方法

今回、(株)エフビコが工場新設に伴う開発計画を進める事となった当該地は『茨城県遺跡分布地図』による遺跡番号134番・遺跡名 菱毛道西遺跡(奈良・平安)に該当する事から、八千代町教育委員会が主体者となり、開発予定面積の約38,000㎡を対象とした確認調査を行う事となる。現場調査は八千代町教育委員会 生涯学習課社会教育係 山野哲夫氏の指導のもと、(株)地域文化財コンサルタント 調査研究部課長 齋藤 洋、同社 調査研究部 遠藤雄一郎・野村浩史、同社嘱託職員 深山恒夫・横 鶴雄・川村理華の6名により履行された。調査の日程は地権者の都合に配慮した結果2期に分ける事とし、第1期が平成18年7月26日～同年8月4日まで、第2期が平成18年12月17日～同年12月20日までの延べ12日間にわたるものである。確認調査の方法は、八千代町教育委員会にて事前で作成された確認トレンチの配置図に合わせて重機による表土除去を行い、その後、人力にてトレンチ精査を行い遺構検出に努めた。今回の確認調査では、開発予定地に対して2m×20mのトレンチを40本、2m×10mのトレンチを2本設定して調査を実施し、その延べ面積は1640㎡に及んだ。このトレンチ調査により当該地には集落が存在する事が明らかとなる。その後、この結果をもとに茨城県教育委員会及び八千代町教育委員会で事業計画を考慮しながらの協議を重ね、平成19年1月17日付で今回の本調査範囲を決定する事となる。

第4図 確認トレンチ配置図



第3節 本調査の方法と経過

現場調査の方法

7月と12月に実施した確認調査の結果を踏まえ、遺跡の保存が困難となる区域を本調査の対象とし、埋蔵文化財発掘調査を行った。調査区の範囲は、建設予定の工場の形状に合わせて南北にやや細長く設定された。調査期間内での作業をより効率的に進めるべく、プラン確認の段階で比較的遺構数の多かった南側区域より発掘調査を開始した。調査方法に関しては教育委員会と事前に打ち合わせを行い、事業者の費用負担の軽減と作業期間の短縮を考慮し、迅速化に努めた。

住居跡の上層観測ベルトは古墳時代の大型のものは十字に設定し、また遺物に関しては北を基準に時計回りにA～Dの4区に分割し、さらに上・中・下の3層に分けて取り扱った。平安時代の小型の住居は南北を軸にベルトを設定し、遺物は東側をA区、西側をB区とし、上・下の2層に分けて取り扱った。

検出遺構及び検出遺物の記録保存は写真と図面で対応している。写真撮影は35mm一眼レフカメラを用いモノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用して行った。また500万画素相当のデジタルカメラにより補足的かつ詳細な写真撮影及び作業風景の記録を行った。平面図の作成及び遺物の取り上げ作業は、世界測地系に基づいた基準点を設置し、これをもとに光波測距器を活用して行った。土層断面図の作成では農林水産省農林水産技術会ほか監修の新版標準土色帖を用い色調の記録を行った。



現場調査の経過

平成 19 年 9 月

13 日 本日より菱毛道西遺跡の表土除去作業を開始する。夏の間に耕作地に残された農作物もすっかり成長し、種々雑多な草に覆いつくされた調査対象区域に 0.7 バックホー 3 台が導入された。今回の表土除去面積は約 10,000 m²。限られた期間内に表土除去作業を行うため、作業時間を超過しての作業が予想される。本日は日暮れ時まで重機の稼働は続いた。



14 日 表土除去 2 日目。今回の調査対象区域は耕作地だった事もあり、表土は非常に軟らかい。遺構確認面まではおよそ 30 ~ 40 cm を測る。北側より掘り進めている表土除去作業も全体の 1/3 ほどの進捗を見せているものの、重機作業は最大稼働をしており、本日も日没を迎えたものの、明日以降の効率的な作業進行を考慮し、ライト点灯のもと作業を継続した。



15 日 表土除去 3 日目。本日は調査対象区域南側の表土除去に先立ち、残されている切り株及び低木の除去作業を行う。遺構を壊す事のないように慎重に作業を行う。表土除去の際、住居のプランが調査対象区域外にまたがっている部分に関しては、住居プランの全容が明らかになるように部分的な拡張を行った。

16 日 表土除去 4 日目。作業も残すところ 1/3 程度。調査対象区域最南端では東側にほぼ直角に調査範囲を拡張した。このように、確認調査において住居跡と認識された箇所への拡張作業を行った。また対象区域西隣にやや離れて存在している住居跡 1 軒 (14 号住居跡) のための調査区も設定した。



18 日 表土除去 5 日目。本日をもって表土除去作業をすべて完了する。回送車の到着に合わせ順次搬入を行う。車道に付着した泥の清掃作業を入念に行った。

19 日 プレハブと簡易トイレの設置を行う。防犯上の理由により、調査対象区域中央付近西側に設置した。

25 日 2t トラックにより機材搬入を行う。プレハブ横にテント 2 張を設置する。刃物類は施設可能な小型の物置を設置し保管する事とした。すべての調査準備が完了し、遺構確認作業を開始する。今回の調査対象区域は南北に細長く広域で



ある事から、調査範囲を南北で分断し、表土除去の段階で比較的道構数の多いと認められた南側区域の調査を先行して行う事にした。調査区中央付近より南へ向かい道構確認作業を開始する。道構と確認されたものから随時白線を引き、全景写真撮影に備えた。道構確認作業も南側区域の中程に達して本日の作業を終了する。



26日 本日も引き続き南側区域の道構確認作業を行う。ほぼ1日かけ確認作業と清掃作業を行い、道構確認状況の全景写真撮影を行う。全景写真の撮影は、隣接する工場(エフビコ)の屋上より許可を得て行った。最終的に南側区域で確認された道構は、不確定なものも含めて住居跡21軒、土坑30基余り、ほかに柱穴群なども認められた。



27日 本日より道構の掘削作業を開始する。調査区の西隣にやや離れて存在する14号住居跡、全調査区のほぼ中央に位置する13号住居跡から開始した。この古墳時代のものと思われるやや大きめの住居跡に関しては、十字にベルトを設定し、住居跡内部を便宜上4分割して掘削作業を行った。

28日 引き続き13、14号住居跡の掘削作業を継続する。両住居跡ともに、40cmほど掘り進むと褐色土層となり、程なく床面が検出された。それに伴い遺物も検出され、13号住居跡では主に甕と思われる土器片多数、14号住居跡では土器片のほか炭化材が数点確認された。



同年10月

1日 13、14号住居跡の床面を検出する作業と同時に土層断面写真撮影のための清掃作業を行う。清掃作業が完了ののち写真撮影を行い、その後図面の作成を行った。13号住居跡に隣接する土坑の掘削作業を開始する。それぞれ半蔵、土層断面の確認を行い、道構と確定されたものに関して写真撮影、及び図面の作成を行う。15・16・17号住居跡の掘削作業を開始する。15号住居跡に関しては耕作機械の削平により僅かにカマド付近の輪郭を残すのみである。16・17号住居跡などの古墳時代以降のものと思われる住居跡に関しては、カマドを通す軸にベルトを設定し、住居跡内部を2分割して掘削作業を行った。これらの住居跡は残存する掘り込みが浅く、床面まで5~20cm程である。16号住居跡ではカマド付近に遺物が集中し、多くの瓦の検出が目を引いた。この16号住居跡の遺物に関しては後に行われる現地説明会において一般公開するべく現況のまま保存する事とした。18・19・20・21号住居跡の掘削作業を開始する。



2日 朝晩の気温も秋めいて過ごしやすくなったものの、日中の掘削作業ではまだまだ汗ばむ陽気が続いている。引き続き16号住居跡の調査を行う。土層断面の写真撮影の後、図面の作成を行う。18・20・21号住居跡についても同様の作業を行う。19号住居跡は、耕作機械の削平によりカマドの一部及び周溝などを残すのみである。14号住居跡のベルトの除去作業を行う。この過程で主柱穴、貯蔵穴、周溝、間仕切り溝が確認され、半蔵などの掘削作業を行う。またカマドの調査も開始する。13号住居跡に関しても同様の作業を行う。



3日 うす曇りの天気ゆえ、日中の作業では強い日差しは避けられ、また写真撮影にも適した陽気である。18・20・21号住居跡で図面の作成の完了したもものからベルトの除去作業を行う。14号住居跡のカマド、貯蔵穴の上層断面及び遺物検出状況の写真撮影を行う。22・23・24・25・26号住居跡の掘削作業を開始する。13号住居跡の遺物はある程度の確まりを見せているものの、細片が多く検出作業に時間を要した。13号住居跡の主柱穴及び周溝の掘削ののち、遺物検出状況の写真撮影を行う。



4日 18・20・21号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行う。21号住居跡はカマド付近での遺物の検出が顕著である。27・28・29号住居跡の掘削作業を開始する。引き続き14号住居跡のカマドの調査を継続する。25・26号住居跡の土層断面の写真撮影を行う。30号住居跡の掘削作業を行う。13・14・19号住居跡の遺物の原位置の記録を行ったのち15号住居跡も含めて平面図の作成を行う。



5日 1・2・3号上坑の完掘写真の撮影を行う。23・24・29号住居跡及び重複する27・28号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。27号住居跡は28号住居跡よりも新しいと判断されるものの、耕作による攪乱も加わり全容が判然としないうえ、土層断面で確認するべく両住居通してベルトを設定した。16・18・20号住居跡のカマドの調査を行う。31号住居跡の掘削を開始する。16・17・18・20・21号住居跡の遺物の原位置の記録作業及び平面図の作成を行う。



9日 33・34号住居跡の掘削を開始する。31・33号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。31号住居跡は南側半分のみ調査であるが、これは確認調査の段階で北側半分が削平により失われている事を認知していたためである。

10日 南側区域遺構掘削作業も概ね完了し、残る作業は図面作成後になるため、先行して終了全景のための写真清掃を13・14号住居跡近辺より開始する。7号土坑・30号住居跡の土層断面図の作成を行う。22・27・28号住居跡のカマドの調査を行う。調査対象区域の基本層序を確認するため、全調査区の中央、16・17号住居跡近辺と調査区南側、25・29号住居跡近辺にそれぞれテストピットを設定し、約2m掘り下げて基本層序の確認を行った。23・26・30号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行う。



11日 26・27・30号住居跡のカマドの調査を行う。27号住居跡の遺物検出状況の写真撮影及び遺物原位置の記録作業を行う。優先して平面図の作成を行い、終了ののち重複関係にある28号住居跡の掘削を行った。28・30号住居跡の支柱穴の掘削を行う。28・30号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行う。23・27号住居跡及び7号土坑の平面図の作成を行う。



12日 26・30号住居跡のカマドの調査を継続する。30号住居跡ではカマド付近に大型の裏2面体と思われる土器片が検出された。また同住居跡の支柱穴及び貯蔵穴の上層観察を行い記録した。26号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行い、取り上げ作業を行った。図面への記録作業等を行っている間、これから調査を行う北側区域の遺構確認作業を開始する。遺構と確認されたものから順次白線を引き写真撮影に備えた。北側区域の遺構はほぼ住居跡のみの検出となり、13軒を数えた。ほぼすべてが古墳時代のものと思われる。28・29・30・33号住居跡の平面図の作成を行う。



15日 33号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行う。同住居跡の床面より平瓦の細片が多数検出された。引き継ぎ30号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行う。26・30・33号住居跡の遺物取り上げ作業を行う。本日は写真撮影に適した天候ゆえ、南側区域の終了全景写真撮影を行う事になった。そのため遺物取り上げ作業も急を要する作業となった。また同時に調査に使用していた機材及び土嚢、ブルーシート等の撤去を早急に行なって撮影に備えた。すべての準備を終えたのち再び工場の屋上から写真撮影を行った。22・24・25・26号住居跡の平面図の作成を行う。



16日 本日は南側区域の全住居跡の個別の写真撮影を行う。昨日までに南側区域の清掃が終了していたので、多少の清掃作業及び掘削作業を行った後、写真撮影を行った。北側区域、1号住居跡の掘削作業を行う。31・34号住居跡及び1・

2・3・6号土坑の平面図の作成を行う。

18日 2・3・4・5号住居跡の掘削を開始する。2号住居跡の遺物は、完形ではないもののある程度器形の判別のできる図体としての検出が顕著である。

19日 6・7号住居跡の掘削を開始する。1・2・5号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。

22日 南側区域より出土した遺物の整理を簡単に行う。2号住居跡のカマドの調査を開始する。3・6号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。

23日 8・9・10号住居跡の掘削を開始する。6号住居跡のカマドの調査を行う。4・7号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。4・5・6号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行う。

24日 11号住居跡の掘削を開始する。1号住居跡の主柱穴及び貯蔵穴の掘削を行う。3号住居跡の遺物の取り上げ作業を行う。10号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。6号住居跡は、遺物取り上げの段階で、当初床面と思われた面は床ではなく、さらに掘り下げられる事が判明した。よって十字ベルトを設定し直し、再び掘削を行った。1・7号住居跡の遺物検出状況の写真撮影を行なった後、遺物の取り上げ作業を行う。1・3・4・5・6・7号住居跡の平面図の作成を行う。

25日 11号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。1・3・4・5・6・9号住居跡のカマドの調査を行う。

26日 9号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。1・5号住居跡の全景写真撮影を行う。





同年 11 月

4 日 本日は午後より菱毛道西遺跡の現地説明会が開催されるため、午前中は見学のための準備作業を行う。ロープを巡らし順路を確定させる。見学に際しては遺構説明及び発掘作業の見学も同時に行うため、終日は現在進行している作業を継続して行った。8号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。また6号住居跡の新たに追加される土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。



5 日 8号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。また6号住居跡の新たに追加される土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。12号住居跡の掘削を開始する。

7 日 2号住居跡の遺物検出作業を引き続き行う。同住居跡カマド周りの遺物の出土は顕著で、特にカマドの構築材として土器の使用が見られるため、掘削作業は慎重を期して行った。7号住居跡の全景写真撮影を行う。2・4号住居跡の遺物出土状況の写真撮影を行い、終了後遺物取り上げ作業を行う。2号住居跡の平面図の作成を行う。





8日 12号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。2号住居跡のカマドの遺物検出状況の写真撮影を行う。同住居跡カマドの遺物は多重に組まれており、また遺存状態もよいため構築材としての機能を十分にうかがう事ができる。6・8・9・10・12号住居跡の遺物出土状況の写真撮影を行い、終了後遺物取り上げ作業を行う。3号住居跡の全景写真撮影を行う。32号住居跡の土層断面の写真撮影及び図面の作成を行う。8・9号住居跡の平面図の作成を行う。

12日 全調査区の終了全景写真撮影を行う。11・12・16・32号住居跡の遺物出土状況の写真撮影を行い、終了後遺物取り上げ作業を行う。10・11・12・16号住居跡のカマドの調査を行う。10・11・16号住居跡の全景写真撮影を行う。10・11号住居跡の平面図の作成を行う。

15日 本日は、多少の遺物の取り上げ作業及び平面図の作成作業を行なった後、機材の撤去作業を開始する。15時をもって、すべての調査及び撤去作業を終了する。



第4節 整理作業の方法と経過

平成20年6月17日

14日 本日より出土遺物の洗浄作業を開始する。

同年7月

2日 洗浄作業が完了し、注記作業を開始する。

9日 注記作業を完了する。

22日 遺物の接合作業を開始する。業務の都合により作業を中断する。



同年8月

18日 遺物の接合作業を開始する。

27日 遺物の実測作業を開始する。

同年9月

17日 実測作業が終了した遺物から観察表の作成を開始する。

22日 遺物のトレース作業を開始する。



同年10月

9日 遺構のデジタルトレースを開始する。

同年11月

28日 発掘時に撮影したネガフィルム及びデジタルカメラデータの整理作業を開始する。

同年12月

12日 遺物写真の撮影を開始する。撮影は整理室に付設の専用スタジオにて実施する。

18日 業務の都合により作業を中断する。



平成21年4月

1日 DTPソフトにて原稿、トレース図の編集作業を行う。

7日 グラフィックソフトにて入稿用の版組レイアウトの作成を開始する。

同年6月

17日 編集作業が完了する。木日をもって菱毛道西遺跡の整理作業のすべての工程を完了する。



文責・野村浩史

第2章 遺跡の位置と環境

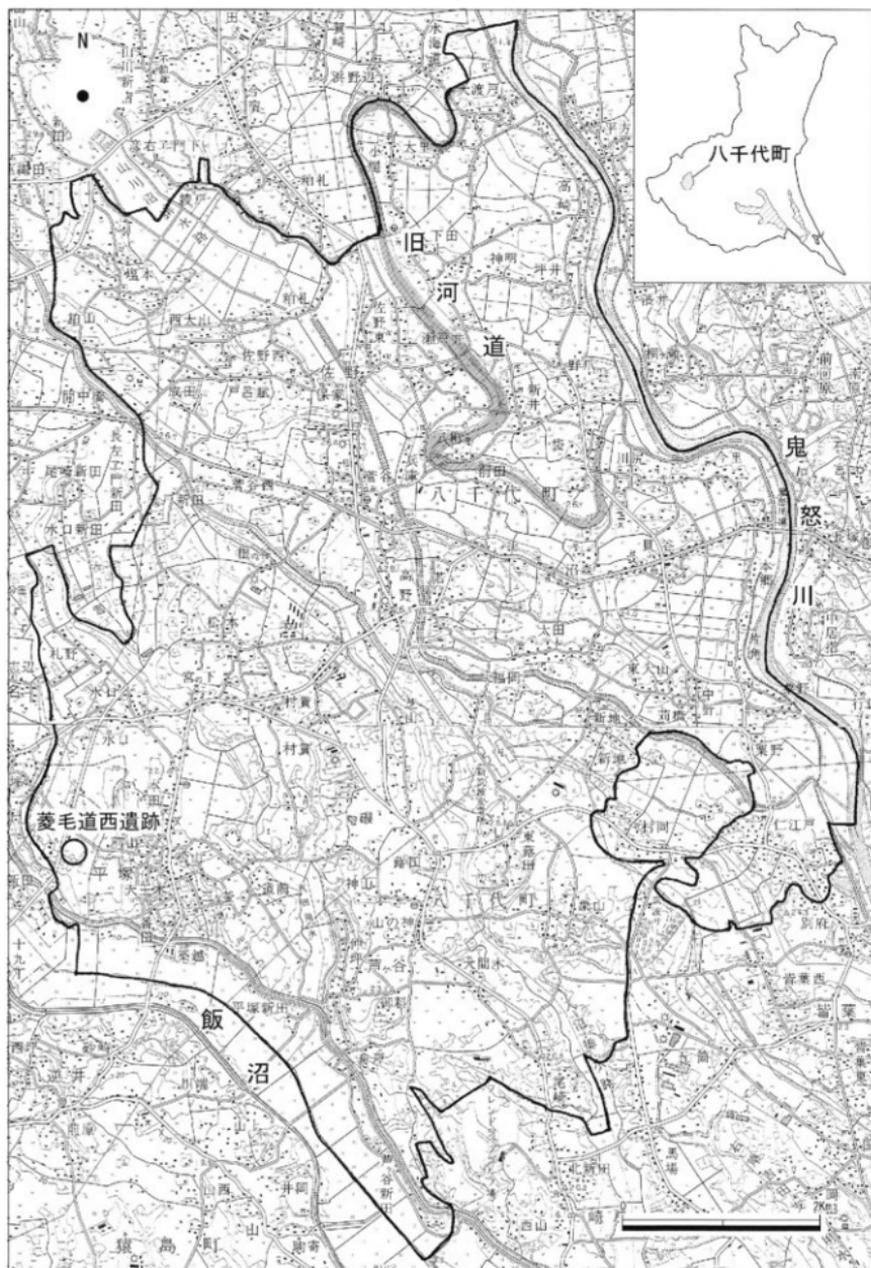
第1節 地理的環境

八千代町は、関東平野のほぼ中央、茨城県県西地区に位置し、東は南流する鬼怒川に接している。北西部から南東部にかけて洪積台地である結城台地からなり、東部は沖積地である鬼怒川右岸の低地、南部は飯沼川の低地から結城台地の奥深くまで続く開析谷が形成されている。

菱毛道西遺跡は、飯沼川低地に面する八千代町下結城地区の大字平塚に所在する。飯沼川低地から幅約150mの太い谷津が結城台地の北方に約500m入り込んだ所で二又に分かれ、東に分かれた幅約30mの細い谷津が更に北側に延びている。菱毛道西遺跡は、この細い谷津に沿った標高17mから21mの台地上に立地する。地形は東側の細い谷津に向かってなだらかに傾斜し、現状はほとんどが畑で、一部山林が残されている。遺跡の立地する台地からは、南方に広大な飯沼を望む事ができる。



第5図 遺跡周辺地形図（明治42年八千代村1/5,000を50%に縮小）



第6図 遺跡位置図 (国土地理院 1/50,000)

当初の分布調査では、東西約170m、南北約300mの範囲に、遺物が僅かに散布している状況であったが、試掘調査の結果、遺跡は谷津に面した台地の東寄りに立地し、保存状態はたいへん良好な事が確認された。遺跡の範囲は、東西約120m、南北約350mと推定される。昭和39年の旧地形図から判断すると、遺跡は更に南方に広がる事が考えられるが、昭和40年代にはすでに2m近く取りざされており、現状では遺跡を確認する事はできない。

谷津を挟んで対岸の東側の台地は、旧地形図を見ると小さな谷がいくつも入り込んでおり遺跡の立地を推定する事はできるが、台地一番は工業団地として開発されており、一部残された畑から須恵器片が多量に出土しているものの、現状では遺跡の広がりを確認する事はできない。

第2節 歴史的環境

飯沼に面した台地上には多くの遺跡が立地しているが、菱毛道西遺跡が所在する飯沼上流域周辺の地域だけでも現在60か所以上の遺跡が確認されている。飯沼上流域左岸の結城台地側は、古河市（旧三和町）尾崎から恩名、八千代町平塚にかけて、右岸の猿島台地側は、古河市（旧三和町）東諸川から東山田、坂東市（旧猿島町）逆井から山にかけての地域である。

この地域で旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていないが、飯沼右岸の中流域にあたる八千代町芦ヶ谷の淀北遺跡（Ⅷ091）から頁岩製のナイフ形石器が出土している。飯沼上流域でもその後の縄文時代の遺跡の立地を見ると、旧石器時代の遺跡も発見される可能性が考えられる。

縄文時代になると40か所以上の遺跡が確認されている。この内縄文時代早期に遡る遺跡は9遺跡、前期になると14遺跡に増加する。この時期は「縄文海進」がピークに達し、海岸線が関東地方の奥深くまで入り込んだ時期であり、内陸にも只塚が形成されている。飯沼一番は「古鬼怒湾」の奥部にあたり、この地域では右岸台地に長左衛門新田貝塚（Ⅲ018）があったが、土取りのため消滅してしまった。左岸では飯沼中流域に鴻野山貝塚（旧石下町）などが知られている。縄文時代中期から後期にかけて、八千代地区、三和地区全体では遺跡数は前期より減少しているが、飯沼流域では逆に遺跡数は20か所以上に増加している。このことから、縄文時代中期・後期においては人々の生活の場は、飯沼流域を中心に営まれていた事がうかがわれる。

縄文時代晩期になると、他の地域と同様にこの地域でも5遺跡と極端に減少する。遺跡の分布は飯沼左岸の三和地区に集中している。飯沼右岸では、中下流域に猿島地区の香取遺跡、神明遺跡などがある。

飯沼上流域の縄文時代の主な遺跡として、飯沼左岸に立地する北下山遺跡（Ⅲ011）があげられる。この遺跡は、北側の細い谷津田を隔てて菱毛道西遺跡と向かいあった遺跡である。昭和54年に土取り工事に伴い調査されたが、遺跡の大部分は消滅した。縄文時代早期から前期・中期・後期・晩期にかけての多量の縄文土器の他、石器や石製品、土偶などの土製品も出土している。

弥生時代の遺跡は、飯沼左岸に鶴山東遺跡、番田遺跡（Ⅷ141）、飯沼右岸に江口遺跡（Ⅲ112）など5遺跡が確認されている。飯沼右岸の中下流域でも生子新田遺跡など5遺跡が確認されている。いずれも弥生時代後期の上器が出土している。現在のところ飯沼流域では弥生時代中期に遡る遺跡は確認されていないが、近隣では八千代町尾崎前山遺跡で弥生時代中期の竪穴住居が調査されている。

飯沼上流域で古墳時代の遺跡は、30か所以上確認されている。飯沼の両岸で遺跡数に差があるものの、飯沼左岸で10数か所、飯沼右岸で20数か所確認されている。これらの遺跡の内古墳は、飯沼左岸では三和地区に出墳と推定される永光寺古墳（Ⅲ174）1基のみ現存している。尾崎古墳群（Ⅲ009）は数基の円墳が確認されていたが、すでに消滅しており古墳群の構成は不明である。八千代地区でも芦ヶ谷の舟戸遺跡（Ⅷ084）



第7図 周辺遺跡分布図 (茨城県遺跡地図 1/25,000 を70%に縮小)

から円筒埴輪が出土しており古墳の存在が考えられるが、現存していない。飯沼右岸では、三和地区に前方後円墳1基、円墳2基が現存する五十塚古墳群（三001）、直径4.5m、高さ約5mの円墳である八幡塚古墳（三002）、東浦古墳（三021）、猿島地区で塚山古墳（猿013）などの円墳が現存している。これらの古墳はすべて、飯沼を周りに臨む台地縁辺部に立地している。前期古墳は、旧千代川村の柴崎古墳群1号墳や旧石下町の六所塚古墳などの前方後円墳が、鬼怒川流域に立地しているが、飯沼流域では前期古墳は見られない。飯沼上流域では、五十塚古墳群（三001）の1号墳（円墳）が5世紀後半の築造と考えられているが、その他の古墳は調査されておらず時期を特定する事は難しいが、多くは古墳時代後期になって造られたものと考えられる。

古墳時代の集落遺跡は、今回発掘調査された菱毛道西遺跡以外は詳細は不明であるが、古墳時代前期から中期、後期にかけて、時期によって遺跡数に差があるものの、飯沼上流域全体で約30か所の遺跡が確認されている。なお、飯沼中流から北に入り込んだ入沼左岸に立地する旧石下町の陣屋遺跡は、埴輪窯跡と関係が考えられている。

律令期になると、飯沼周辺の地域は下総国に属し、概ね飯沼を境にして左岸の三和地区から八千代地区にかけて新城市、八千代から石下地区にかけて岡田郡（豊田郡）に、右岸の三和地区から猿島地区にかけて猿嶋郡に比定されている。奈良・平安時代の遺跡は、飯沼両岸で40か所以上確認されている。古墳時代から継続している遺跡もあるが、新たに立地した遺跡が多い。これらの遺跡は、飯沼から台地に入り込んだ谷津に面して立地しており、谷津の水田開墾が進んでいった事がうかがえる。集落遺跡以外で注目されるのは、須恵器窯跡である。飯沼左岸の三和地区に立地する浜ノ台窯跡（三154）、新崎窯跡（三155）、古屋敷窯跡（三159）、古屋東窯跡（三160）の4遺跡が同じ台地上に近接して立地している。これらの窯跡で生産された須恵器は、当時は文字通り沼であった飯沼を利用して舟で運ばれていたと考えられる。八千代地区の淀北遺跡（八091）は、飯沼中流域の左岸台地縁辺部に立地し、南側に小さな谷津に面する遺跡で、台地から南斜面にかけて須恵器が多数散布しており、地形的にも須恵器窯の可能性が考えられる。また粕田ヶ入遺跡（八140）は、工業団地南端に一部残された加から須恵器が多量に出土している。今回発掘調査された菱毛道西遺跡の平安時代の竪穴住居跡からは、瓦片が多量に出土している。菱毛道西遺跡が属していたと考えられる下総国結城郡内で瓦が出土する遺跡としては、新城市の結城廃寺跡と八幡瓦窯跡がある。結城廃寺跡は結城郡の郡寺と推定されており、瓦を供給した八幡瓦窯跡とともに国指定史跡に指定されている。奈良時代から平安時代にかけて、猿嶋郡出身の安部猿嶋伯耆守という人物がいる。墨縄は東北の蝦夷戦争に副将軍として参加している。蝦夷戦争には、東国から多くの人々が動員されているが、飯沼周辺の人々も墨縄とともに戦争に従軍したと考えられる。また、天台宗を開いた最澄の弟子で、円珍の師匠にあたる徳円という天台僧がいる。徳円は猿嶋郡余部郷、現在の三和地区仁連御辺出身の人物である。10世紀になると飯沼周辺の地域は平将門が活躍した舞台となる。平将門の乱を記した『将門記』に登場する「広河の江」という地名は、現在の飯沼の事である。

中世の城館跡に飯沼右岸の猿島地区に逆井城跡（猿006）がある。逆井城跡は、飯沼を挟んで多賀谷氏と対峙した北条方によって飯沼の周辺に築かれた城跡である。菱毛道西遺跡のほぼ真南に位置し、遺跡から遠景を望む事ができる。古代から中世にかけて広大な沼であった飯沼は、江戸時代の享保年間に飯沼廻り24か村の人々の願いにより新田開発が行われた。飯沼を排水するため新堀が開削され、この時現在の飯沼川や東仁連川が開削されている。享保12年（1727）に一応新田開発は完了し、検地が行われ新田が誕生した。しかし、その後も新田の維持や改良は明治以降も続けられ、多くの人々の努力によって現在の水田地帯に生まれ変わったのである。

文責・山野哲夫

第1表 飯沼上流域周辺遺跡一覧表

飯沼右岸の主な遺跡		飯沼左岸の主な遺跡	
古 河 市 三 和 地 区	001 五十塚古墳群(古墳群)	古 河 市 三 和 地 区	009 尾崎古墳群(古墳群)
	002 八幡塚古墳(古墳)		010 恩名観音面(縄・古)
	003 大塚古墳群(古墳群)		011 北下山遺跡(縄・古)
	013 五十塚金くそ遺跡(弥)		020 恩名遺跡(縄・奈平・中)
	018 長左衛門新田貝塚(貝塚)		149 尾崎木田遺跡(縄・弥・古)
	021 東浦古墳(古墳)		150 稲荷塚遺跡(奈平・中)
	111 東浦遺跡(縄・古・奈平・中)		151 松山遺跡(奈平・中)
	112 江口遺跡(縄・弥・古)		152 杉ノ前遺跡(奈平)
	113 前久保北遺跡(縄・奈平・中)		153 殿山遺跡(縄・古・奈平・中)
	114 前久保遺跡(縄・弥・古)		154 浜ノ台窯跡(須恵器窯跡)
	115 中田遺跡(縄・古)		155 峯崎窯跡(須恵器窯跡)
	116 金堀台遺跡(縄・古)		156 新立北遺跡(縄)
	117 大綱東遺跡(縄・奈平・中)		157 南丸山西遺跡(縄・古)
	118 米倉A遺跡(古)		158 南丸山東遺跡(縄)
	119 米倉B遺跡(古)		159 古屋敷窯跡(須恵器窯跡)
	120 米倉C遺跡(奈平)		160 古屋東窯跡(須恵器窯跡)
	121 馬船北遺跡(縄・奈平・中)		161 一ノ木北遺跡(縄・奈平)
122 馬船遺跡(奈平)	162 古屋遺跡(縄)		
123 西山西遺跡(縄・古・奈平)	163 一ノ木南遺跡(縄・古・奈平)		
124 北山西遺跡(縄)	164 富添遺跡(縄・奈平)		
125 北山東遺跡(縄)	165 山王前遺跡(縄・奈平)		
126 西山遺跡(縄)	166 馬場下遺跡(古)		
127 西山東遺跡(縄・古)	174 永光寺古墳(古墳)		
坂 東 市 猿 島 地 区	001 内野西遺跡(縄・古)	八 千 代 町	134 菱毛道西遺跡(古・奈平)
	002 内野東遺跡(縄・古)		135 太夫久保遺跡(縄・奈平)
	003 大日坂遺跡(縄・古)		138 平塚本山遺跡(奈平)
	004 大鳥大神前遺跡(城館跡)		139 平塚本田南遺跡(奈平)
	005 寺ノ内遺跡(古・奈平・中)		140 粕田ヶ人遺跡(奈平)
	006 逆井城跡(城館跡)		141 番田遺跡(縄・弥・古・奈平・中近)
	007 金久曾遺跡(縄・古・奈平)		145 三ツ釜遺跡(縄・奈平・中近)
	008 八幡遺跡(縄・古・中)		147 内野D遺跡(奈平)
	009 植篠西遺跡(古)		149 内野B遺跡(縄・奈平)
	010 植篠東遺跡(縄・古・窯跡)		150 内野A遺跡(縄・奈平)
	011 逆井塚越遺跡(縄・古・奈平)		151 札野遺跡(縄・奈平)
013 塚山古墳(古墳)	084 舟戸遺跡(縄・古・奈平・中近)		
014 今泉遺跡(縄・古)	091 淀北遺跡(旧・縄・奈平・中近)		

* 遺跡番号は茨城県遺跡地図の番号を用いた。* 本文中の遺跡番号には地区名の頭文字を付した。(例: 八 134 菱毛道西遺跡)

* () 内は原則として遺跡の時代を頭文字で表示した。特微的な遺跡の場合は種類を表示した。

* 旧=旧石器時代、縄=縄文時代、古=古墳時代、奈平=奈良・平安時代、中=中世、近=近世

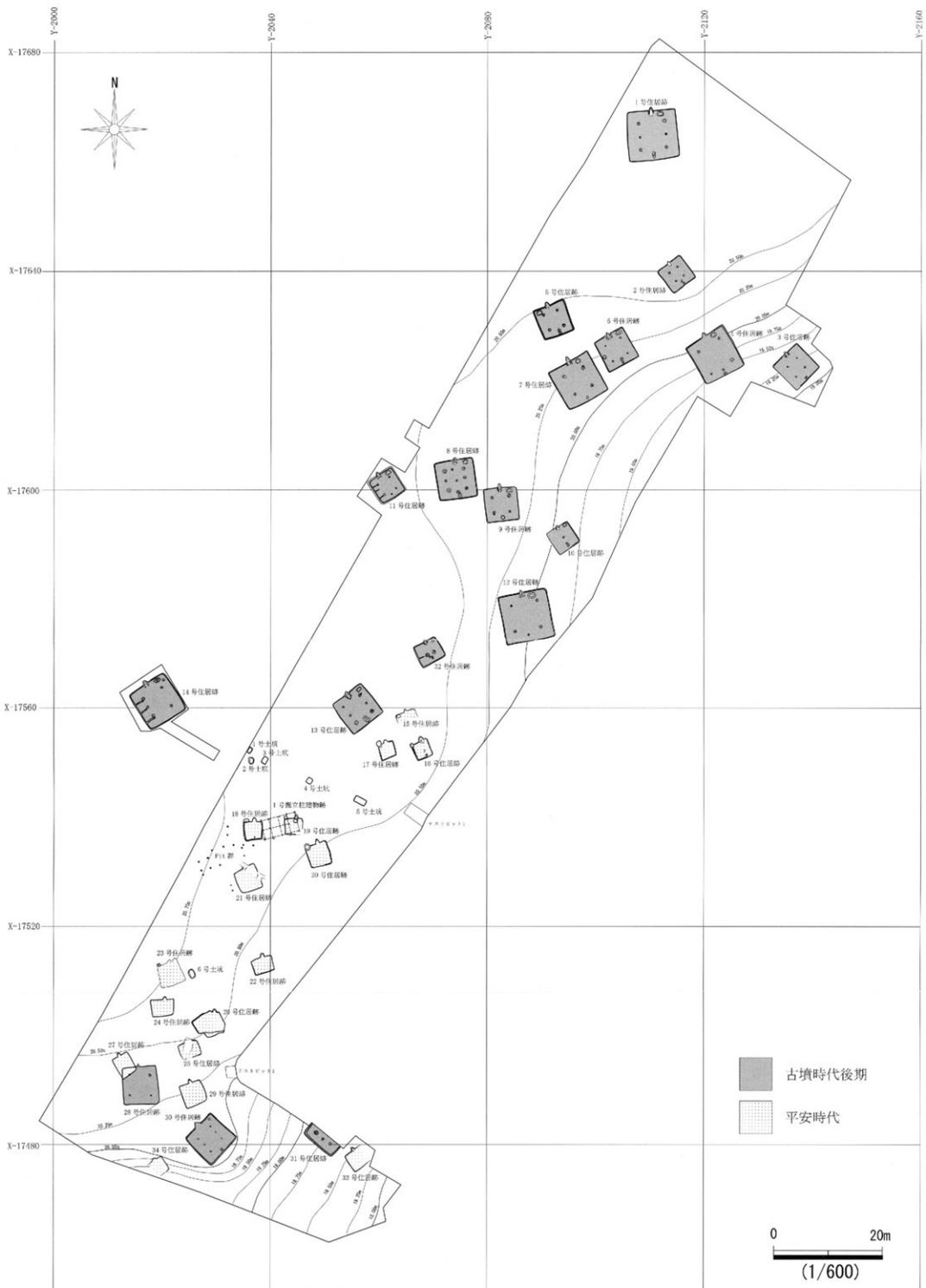
* 参考文献 ・『茨城歴史 原形古代編』茨城県史編纂委員会 1985.3 ・『茨城県遺跡地図 地名表』茨城県教育委員会 2001.3

・『八千代町史 通史編』八千代町史編さん委員会 1987.3 ・『八千代町史 資料編 考古Ⅰ』八千代町史編さん委員会 1988.3

・『八千代町遺跡地図』八千代町教育委員会 2003.3 ・『三和町史 通史編 原形・古代・中世』(和町史編さん委員会 1990.3

・『和町史 資料編 原形・古代・中世』二和町史編さん委員会 1992.3 ・『猿島町史 通史編』猿島町史編さん委員会 1998.3

・『猿島町史 資料編』猿島町史編さん委員会 1993.3



第 8 図 調査区全体図

第3章 調査の成果

第1節 検出された遺構の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は、古墳時代に帰属する住居跡が18軒、平安時代に帰属する住居跡が14軒、時期不明の住居跡が2軒、同じく時期不明の掘立柱建物跡が1棟と、近世以降のものと考えられる方形～楕円形を呈す土坑6基である。今回本調査を実施した調査区内での時代別の遺構分布状況としては、古墳時代の遺構は調査区北側を中心に纏まっていたものの本調査区全体に遍在し、遺構の規模は比較的大型で、遺構確認面から床面までの掘り込みが深いものも多く、覆土及び遺物の遺存状況は大変良好である。続いて、平安時代の遺構の検出は調査区南側半分に限定され、遺構の規模はそのほとんどが小型であり、遺構確認面からの床面までの掘り込みは相対的にやや浅めである。遺物に関しては、墨書土器やカマドの補強材として用いられていた遺存状況の良い「瓦」の出土もある。また、カマドを正面に見た左側ないし右側に平面形状方形～楕円形の掘り出しが付設した構造特徴を持つ住居跡も6軒検出している。本遺跡での総合的な遺構の分布状況として、今回本調査範囲とした東側には旧地形の「谷」が調査区とほぼ平行して入り込み、検出された各時代の遺構は、この「谷」の縁辺に沿った南北方向を中心軸に展開していた事が明らかとなる。本節以下で時代別に纏めた各遺構の詳細を報告する。



—調査区南側遺構検出状況—

第2節 古墳時代の住居跡

1号住居跡

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、規模は東西、南北両軸ともに9.3mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね40cmであり、覆土の遺存状況は良好で、5層からなる典型的な自然堆積の様相を呈す。本遺構には比較的遺存状況の良いカマドも付設し、カマド両袖と明瞭に赤色還元した火床面も検出している。このカマドの付設位置をもって住居跡の主軸方向を定めるならば、本遺構の主軸方向はN-4°-Wとなる。(以後、本文中の主軸方向はカマドの付設位置により算出する)床面では全体的に若干の硬化が認められ、さらにカマド付近ではより顕著な硬化面が認められる。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P4の主柱穴と思われるビット4基と、左記主柱穴より二回り程直径の小さいP-5～P-6の補助柱穴と思われるビット2基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模はP-1～P-4の直径が約50cm～70cm、P-5～P-6が約35cm～40cmを測る。これらの柱穴の深さは40cm～70cmと計測値の幅はあるものの、いずれもしっかりと掘り込まれたものである。また、その他のビットであるP-7は出入り口施設に伴うものであると考えられる。カマド横東側には平面形状が長方形を呈し、規模が長軸110cm、短軸90cm、深さ35cmを測る貯蔵穴も付設している。遺物の出土はカマド、貯蔵穴付近に集中して認められ、特にカマド内には遺物が多く遺り、接合後ほぼ完形となった土師器の甕、甔等がある。これらの遺物は6世紀末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



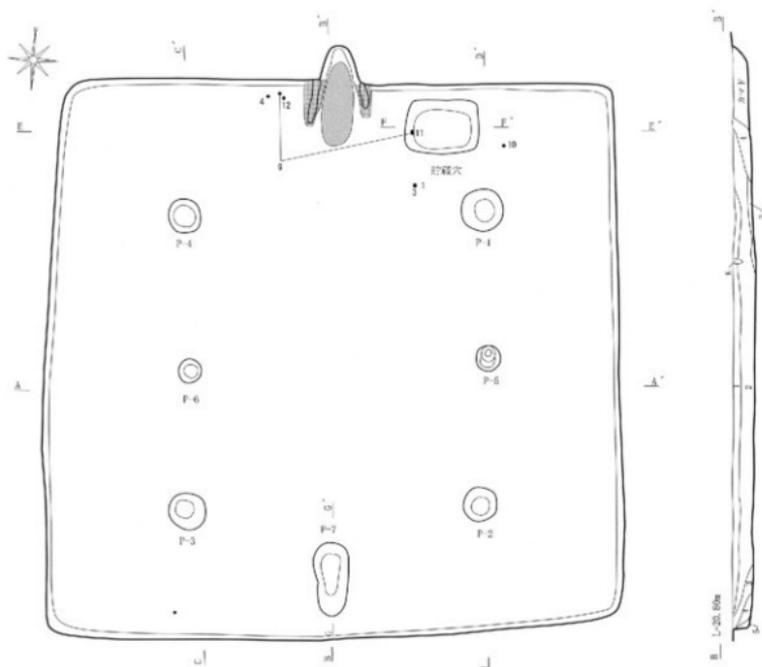
— 1号住居跡完掘全景 —



— 1号住居跡セクション —



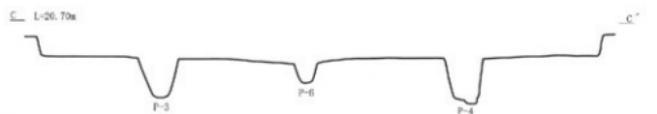
— 1号住居跡遺物出土状況全景 —



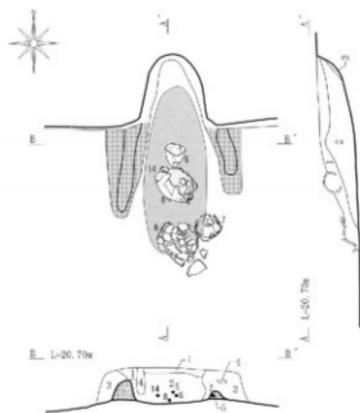
- SI-01 土層説明
 1. 10YR 3/2 ~ 3/3 黒~暗褐色土
 2. 10YR 3/4 暗褐色土
 3. 10YR 4/3 紅土・赤褐色土
 4. 10YR 5/4 紅土・黄褐色土
 5. 10YR 5/6 黄褐色土

- SI-01 貯蔵穴土層説明
 1. 10YR 4/3 紅土・赤褐色土
 2. 10YR 4/4 暗褐色土
 3. 10YR 4/6 褐色土

- L-20. 50a
 P-7



第9図 1号住居跡



- SI-01 カマド土層構造
 1. 7.0層 3/4 に白い焼曲土
 2. 7.0層 3/4 暗紫色土 磁土ブロック中。
 3. 7.0層 3/3 暗紫色土 磁土粒少。
 4. 6.0層 1/5 暗紫色土 磁土粒多。
 5. 7.0層 6/5 に白い乳白色土 磁土少、山砂少。

0 1m
(1/40)

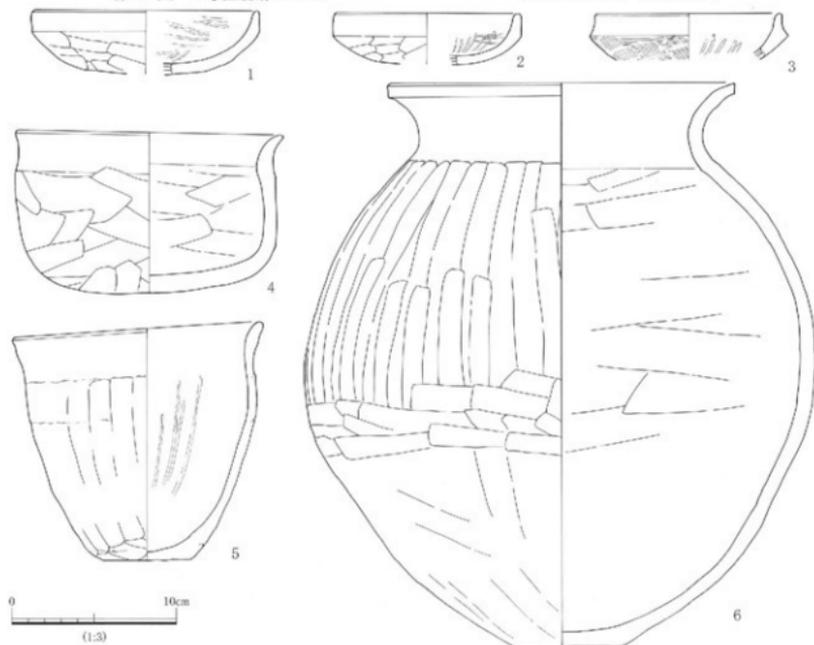
第10図 1号住居跡カマド



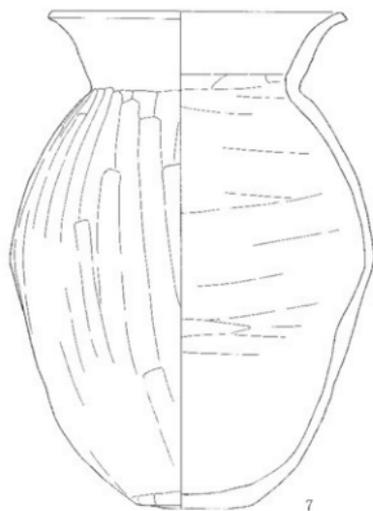
—1号住居跡カマド遺物出土状況—



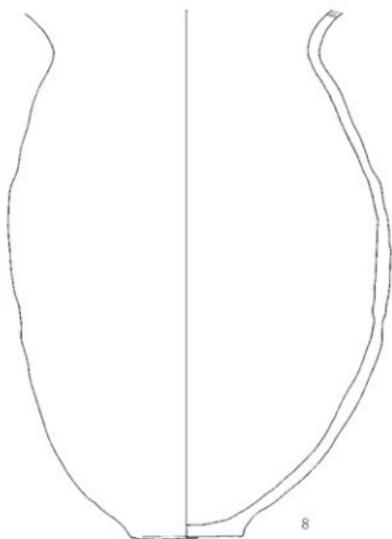
—1号住居跡カマド完掘状況—



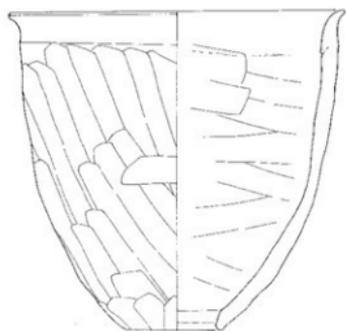
第11図 1号住居跡出土物①



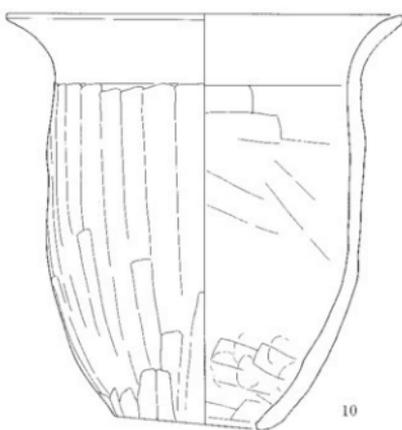
7



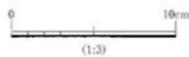
8



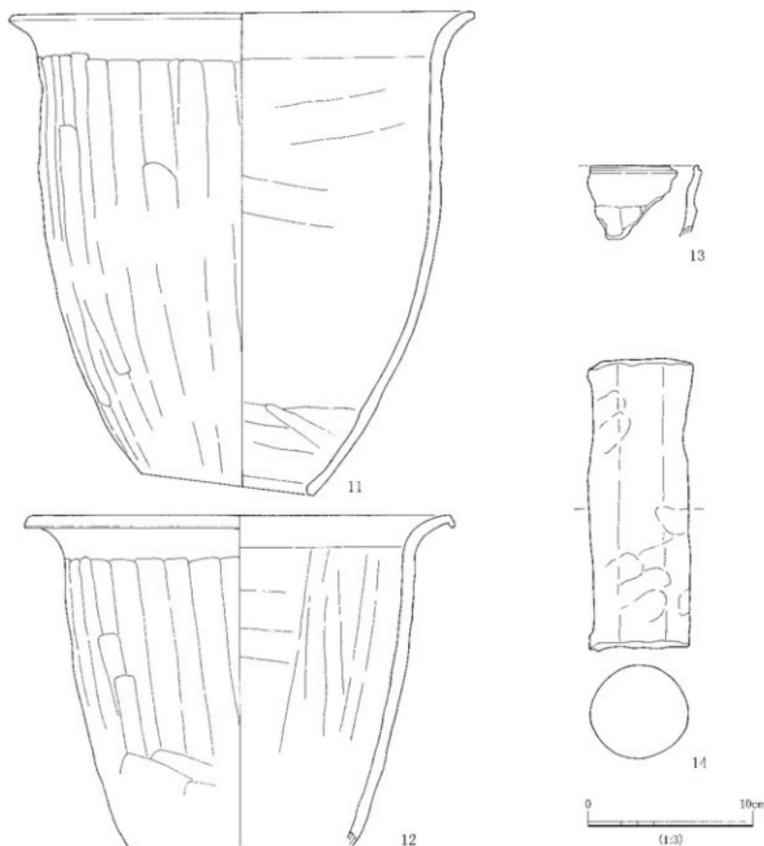
9



10



第12図 1号住居跡出土遺物②



第13図 1号住居跡出土遺物③

第2表 1号住居跡遺物観察表

遺物No.	種類	器種	口径	器高	底径	器底の特徴	器形の特徴	色澤	胎土	焼成	備考
1住 1	土師	坪	14.8	<1.0>	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、近い縁を有する。口縁部はほぼ直立する。口縁部～底部 1/4	口縁部外面はヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。	内 7.075/4 外 2.100/4	緑砂 石高 黒泥 長石	黄褐色	
1住 2	土師	坪	11.5	<3.2>	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、近い縁を有する。口縁部はほぼ直立する。口縁部～底部 1/5	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。	内 7.980/2 外 2.200/4	石高 黒泥 長石	黄褐色	
1住 3	土師	坪	11.4	<2.9>	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、近い縁を有する。口縁部はほぼ直立する。口縁部～底部 1/5	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はミガキ。外面は緩い斜毛銅線。	内 10.00/4 外 3.810/4	黒砂 黒泥 長石	黄褐色	
1住 4	土師	鉢	16.3	9.8	-	底面は平底に近い丸底。体部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。残存率：完形	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面はヘラケズリ。	内 7.910/4 外 2.930/4	黒砂 黒泥 長石	黄褐色	
1住 5	土師	小型 甕	15.0	14.3	5.1	底面は平底。胴部は緩やかに内湾し、残存率：ほぼ1/2	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は緩いミガキ。外面は緩いヘラケズリ。	内 10.00/2 外 2.930/4	黒砂 黒泥 長石	黄褐色	
1住 6	土師	甕	20.8	34.6	6.2	底面は平底。胴部は球形を呈し、最大径を中央に有し、縁りがある。口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～底部 3/4	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面上部は緩いヘラケズリ。中部は緩いヘラケズリ。下部は1/2準ヘラナダ。	内 7.910/2 外 0.975/4	黒砂 黒泥 長石	黄褐色	

1住 7	土師 甕	17.5	30.3	6.8	底部は平気。胴部は強く内湾し、中央に最大径を有す。口縁部はくの字に外反する。 残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外両面にニコナダ。内面はヘラナダ。外面は縦位のヘラクスリ。	内 3035/3 外 3035/5	練砂 石灰 炭粉 長石 黒石 黒土	普通
1住 8	土師 甕	-	32.3	6.7	底部はやや上り気味の平気。胴部は横平かに内湾し、口縁部は強く外反する。 残存率：口縁部～底部2/3	内外両面に器部割存。	内 3038/2 外 3038/4	練砂 炭粉 黒石 黒土	普通
1住 9	土師 甕	20.3	19.5	6.0	口縁部は平気。胴部は横平かに内湾し、口縁部は強く外反する。 残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外両面にニコナダ。内面はヘラナダ。外面は斜位のヘラクスリ。胴部外面中央に一部横位のニコナダ。	内 3037/3 外 3038/1	練砂 石灰 炭粉 黒石 黒土	輪槽が崩れ残る。
1住 10	土師 甕	23.8	25.2	9.0	口縁部は平気。胴部は横平かに内湾し、口縁部は強く外反する。 残存率：ほぼ完整	口縁部は内外両面にニコナダ。内面はヘラナダ。下部は柳土彫り等ヘラナダ。外面は縦位のヘラクスリ。	内 3036/3 外 3036/4	練砂 石灰 炭粉 黒石 黒土	普通
1住 11	土師 甕	(27.7)	29.0	10.5	口縁部は平気。胴部は横平かに内湾し、口縁部は強く外反する。 残存率：口縁部～底部9/10	口縁部は内外両面にニコナダ。内面はヘラナダ。外面は縦位のヘラクスリ。	内 3036/3 外 3036/4	練砂 石灰 炭粉 黒石 黒土	普通
1住 12	土師 甕	(27.4)	32.1	-	底部欠損。胴部は横平かに内湾し、口縁部は強く外反する。口縁で下方に陥まれる。 残存率：口縁部～胴部下半1/3	口縁部は内外両面にニコナダ。内面はヘラナダ。外面は縦位のヘラクスリ。内面に縦方向の筋条痕を有す。	内 3034/4 外 3035/2	練砂 炭粉 黒石 黒土	普通
1住 13	土師 甕	概々			胴部に窪を有し、口縁は底縁的に深く、口縁で抬り上げられる。 残存率：口縁部片	口縁部は内外両面にニコナダ。外面は縦位のヘラクスリ。	内 3034/2 外 3035/3	黒土 炭粉 黒石	普通
1住 14	土師 次甕				高さ 17.9 cm 径 6.3 cm 厚さ 3.7cm 重さ 810 g	指による整形。	3035/1	長石 炭粉 黒石	普通

2号住居跡



— 2号住居跡発掘全景 —

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN39°Wを指す。規模は北東、南西両軸ともに5.2mを測る。この規模は、当該遺跡で検出している他の古墳時代の住居跡と比較すれば小型の部類となる。遺構確認面から床面までの深さは概ね40cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、6層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構には長胴甕を組み合わせて補強した遺存状況の良いカマドも付設する。床面では遺構中心部からカマド付近にかけて顕著な硬化が認められ、四方壁下には浅い周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の支柱穴と考えられるビット4基も検出しており、各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約40cm～50cm、床面から底部までの深さは概ね50cm前後を測る。また、その他のビットとして、出入口施設に伴うビットと考えられるP-5～P-6の検出もある。遺物の出土範囲は遺構全体に及び、これら

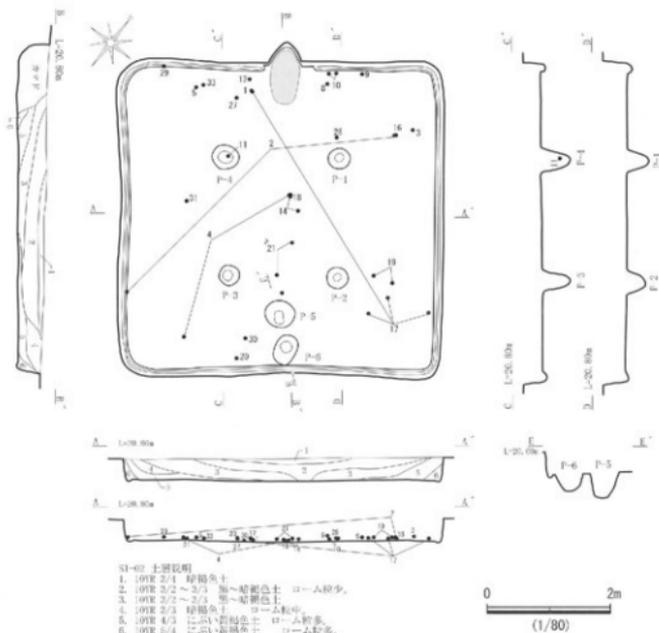
の遺物の主となる器種器形は土師器の甕、坏類であるが、若干数の小型土製品（手担、土鈴カ、勾玉模造品、土鍾等）も出土している。また、上記の通り、本遺構のカマドには長胴甕と小型の甕を補強部材として多用しており、その遺物の出土状況は構築時の様子を容易に想定しうるものである。相対的に本遺構から出土した遺物の遺存状況は良好である。これらの遺物は6世紀最終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



— 2号住居跡セクション —



— 2号住居跡遺物出土状況全景 —



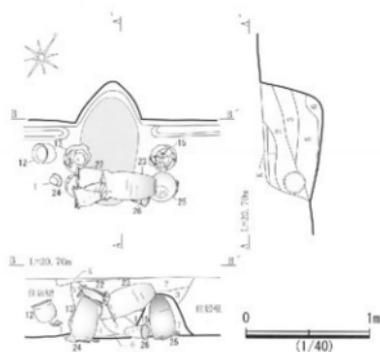
第14図 2号住居跡



— 2号住居跡遺物出土状況①—



— 2号住居跡遺物出土状況②—



- S1-02 カマド 土器説明
1. 7.5V2 3/2 褐色赤土 コーム粒中、粘土ブロック状。
 2. 7.5V2 3/3 褐色赤土 コーム粒中、粘土ブロック状。
 3. 7.5V2 3/3 褐色赤土 コーム粒・粘土、高少。
 4. 7.5V2 3/4 褐色赤土 コーム粒中、粘土ブロック状。
 5. 7.5V2 3/4 褐色赤土 コーム粒・粘土ブロック状。
 6. 7.5V2 3/4 褐色赤土 コーム粒少、粘土粒中。
 7. 7.5V2 3/4 褐色赤土 カマド柱部。

第15図 2号住居跡カマド



— 2号住居跡カマド遺物出土状況①—



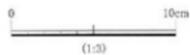
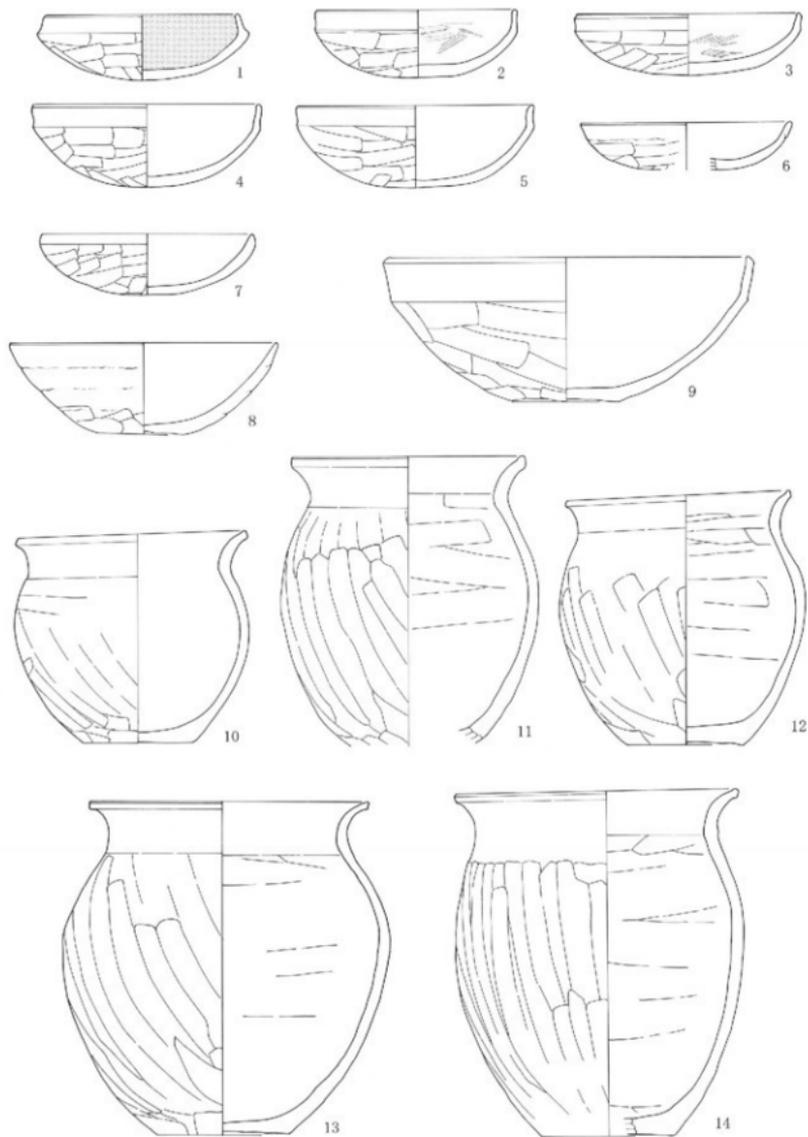
— 2号住居跡カマド遺物出土状況②—



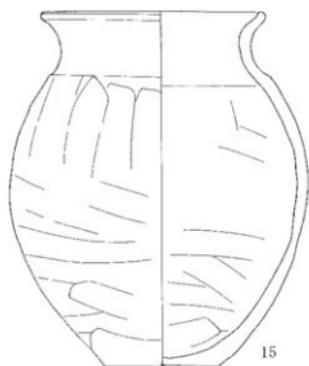
— 2号住居跡カマド調査風景—



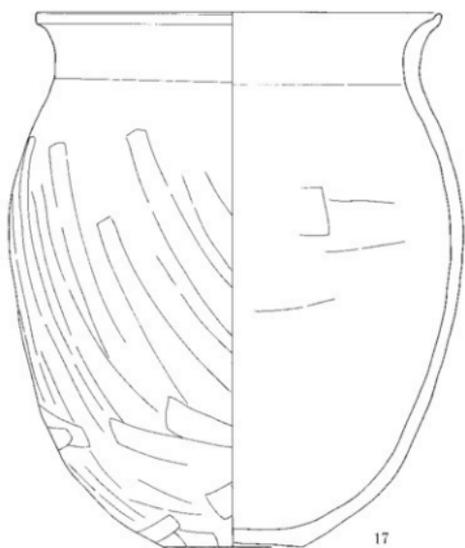
— 2号住居跡カマド完掘状況—



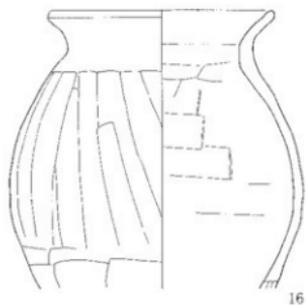
第 16 图 2 号住居跡出土遺物①



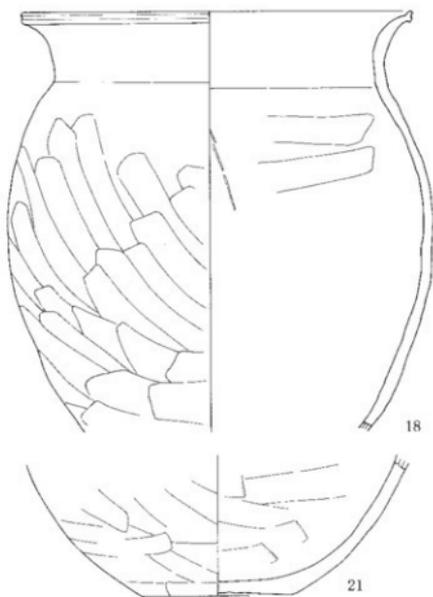
15



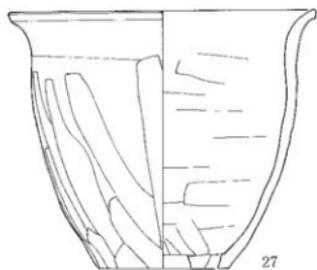
17



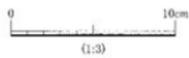
16



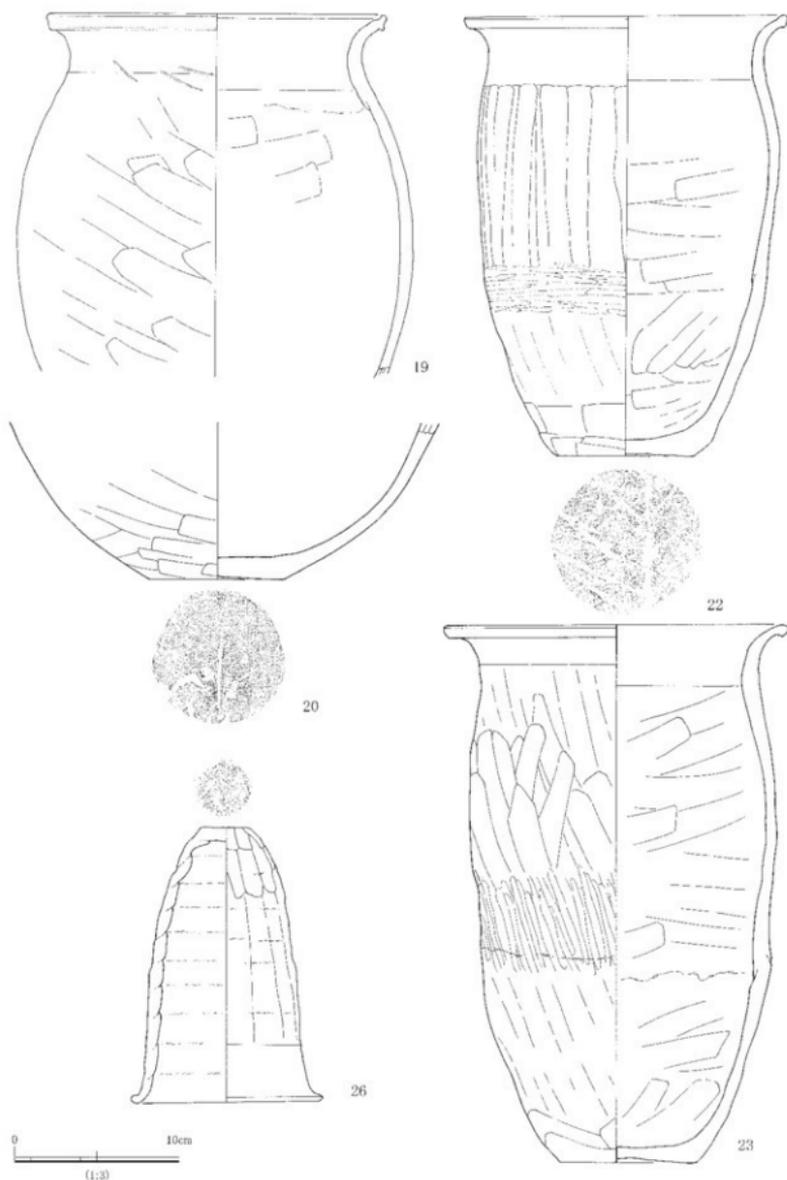
18



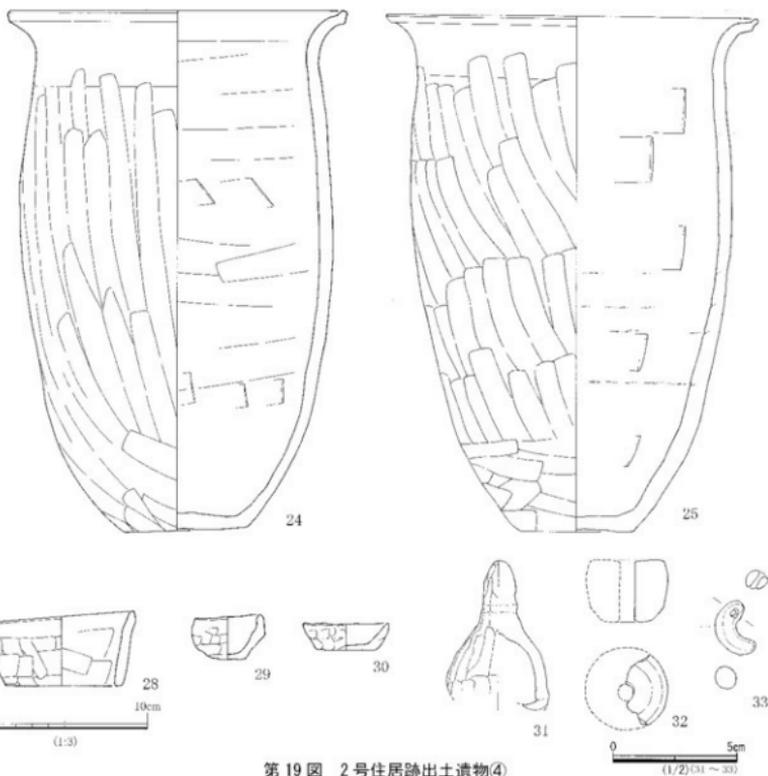
27



第 17 图 2 号住居跡出土遺物②



第18图 2号住居跡出土遺物③



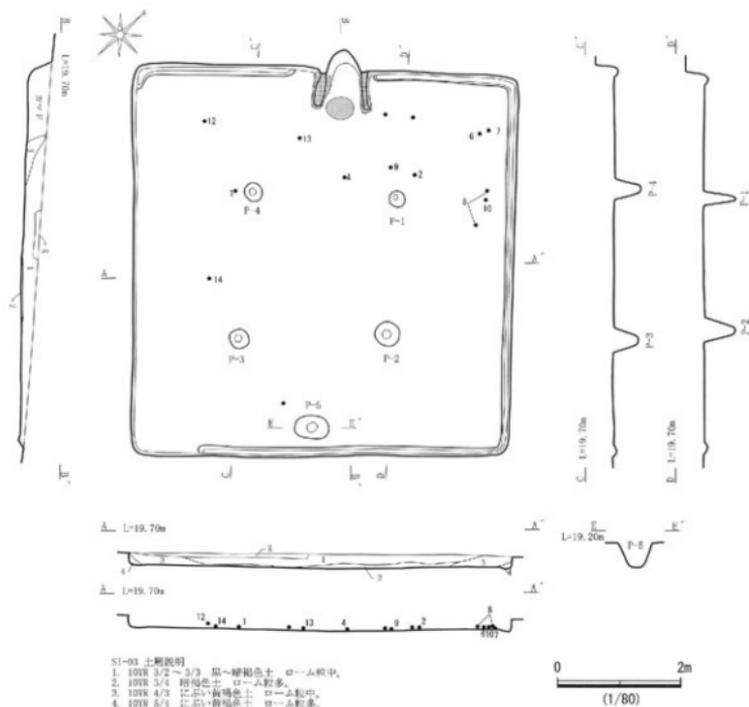
第19図 2号住居跡出土遺物④

第3表 2号住居跡遺物観察表

遺物No.	種類	形状	口径	高さ	底径	器壁の特徴	器底の特徴	色調	出土	備成	備考
2住1	土器	罎	(12.4)	4.3	—	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し、広い腹を有する。口縁部は内側平す。 残存部：口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。内面黒色染焼。	内 2.973/1 外 5985/A	赤土 少 量	普通	
2住2	土器	罎	(12.8)	4.5	—	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し、広い腹を有する。口縁部はほぼ直立す。 残存部：口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。	内 2.973/1 外 2.974/2	赤土 少 量	良好	
2住3	土器	罎	(14.4)	4.1	—	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し、広い腹を有する。口縁部はほぼ直立す。 残存部：口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。	内 1984/1 外 3.984/1	赤土 少 量	普通	
2住4	土器	罎	14.0	5.5	—	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し、広い腹を有する。口縁部はほぼ直立す。 残存部：口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。	内 973/5 外 3029/3	赤土 少 量	普通	
2住5	土器	罎	15.2	5.4	—	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し、広い腹を有する。口縁部はほぼ直立す。 残存部：口縁部～底部4/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。	内 2.975/1 外 10986/5	赤土 少 量	普通	赤色2号貯器
2住6	土器	罎	(13.6)	(3.1)	—	底部は平底。伏底は緩やかに内湾し、口縁部は急激的に狭く。 残存部：口縁部～底面1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。	内 2.984/2 外 2.984/3	赤土 少 量	普通	輪郭が残る。
2住7	土器	罎	13.6	4.1	—	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し、広い腹を有する。口縁部はほぼ直立す。 残存部：口縁部～底部1/2	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は十字。外面はヘラケズリ。	内 2.975/2 外 3986/4	赤土 少 量	普通	
2住8	土器	罎	17.2	5.9	5.5	底部は平底。伏底は緩やかに内湾し、口縁部に直る。 残存部：口縁部～底面1/3	内面は十字。外面はヘラケズリ。後ナデ。外面下部はヘラケズリ。	内 2.975/3 外 10986/4	赤土 少 量	普通	輪郭が残る。

3号住居跡

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-48°-Wを指す。規模は北西、南東西軸ともに6.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね25cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、4層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では遺構中央部からカマド付近にかけて部分的な硬化が認められ、南西壁を除く三方壁下には浅い周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の支柱穴と考えられるピット4基も検出しており、各ピットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約30cm～40cm、床面から底部までの深さは概ね60cm前後を測る。また、その他のピットとして、出入り口施設に伴うピットと考えられるP-5の検出もある。遺物の出土はカマド付近に纏まり、その器種器形は土師器の坏類が中心となり埴類は少ない。また、敷点ではあるが小型の上製品（勾玉模造品、土玉、土錘）も出土している。これらの遺物は6世紀最終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



第20図 3号住居跡



— 3号住居跡完掘全景 —



— 3号住居跡セクション —



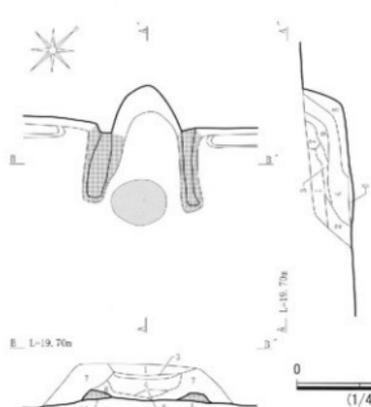
— 3号住居跡遺物出土状況全景 —



— 3号住居跡カマドセクション① —



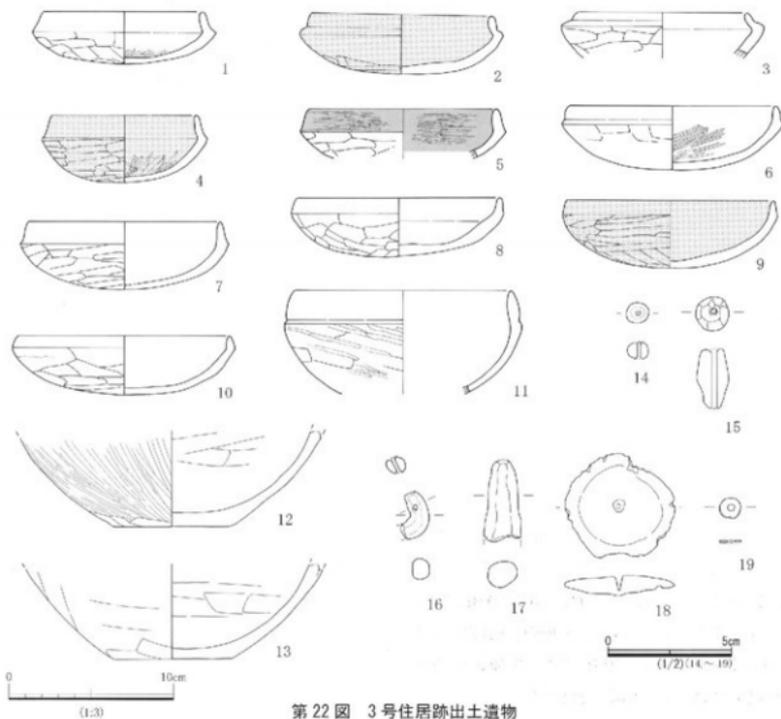
— 3号住居跡カマドセクション② —



— 3号住居跡カマドセクション③ —

- 51-02 カマド土層図説
 1. 7.519 5/3 にごい褐色土 コーム粒中,
 2. 7.519 5/3 にごい褐色土 コーム粒多,
 3. 7.519 5/3 褐色土 コーム粒中, 焼土ブロック,
 4. 519 4/6 赤褐色土 焼土粒多,
 5. 519 4/4 にごい赤褐色土 焼土粒多,
 6. 519 4/2 粘褐色土 焼土粒多,
 7. 7.519 5/4 にごい褐色土 コーム粒多,
 8. 7.519 5/4 にごい褐色土 コームブロック多,
 9. 2.519 5/4 にごい赤褐色土 焼土ブロック,
 10. 1019 5/2 にごい赤褐色土 土砂中, カマド跡。

第21図 3号住居跡カマド



第22図 3号住居跡出土遺物

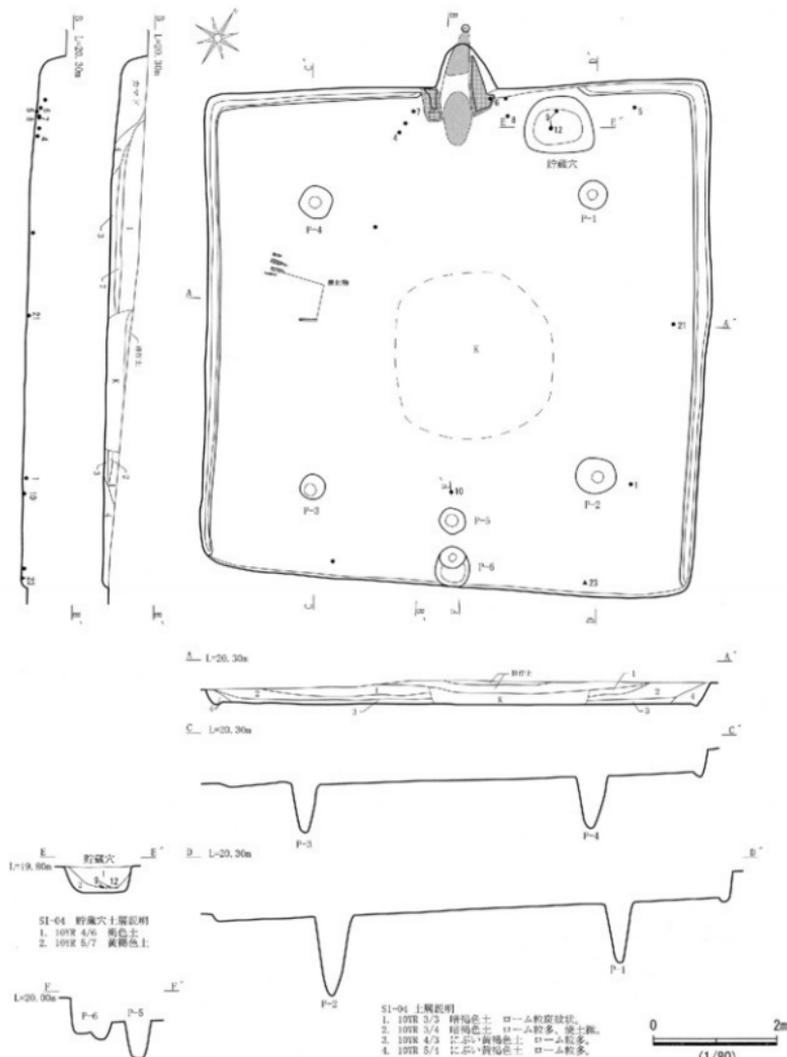
第4表 3号住居跡遺物観察表

遺構 No	種類	築地	口径	芯径	底径	経径の特徴	整形の特徴	色調	粘土	焼成	備考
3位 1	土師	坏	10.3	3.4	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：ほぼ完形	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はミガキ。外面はヘラタズリ。内外面色均整。	円 5596/4 径 1035/3	長石 少 緑石 少 赤土 無	普通	赤色3号片
3位 2	土師	坏	11.6	4.0	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 3/4	口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ。外面はミガキ。下部はヘラタズリ。内外面色均整。	円 5160/3 径 7,935/3	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 3	土師	坏	(11.0)	(3.1)	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 1/3	口縁部内外面共にヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。	円 5,594/3 径 7,935/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 4	土師	坏	9.4	4.5	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 4/5	口縁部内外面共にヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。内外面色均整。	円 5160/2 径 7,935/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 5	土師	坏	(12.0)	(3.2)	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 1/3	口縁部外面及び内面はミガキ。外面はヘラタズリ。内外面色均整。	円 2,557/3 径 7,935/4	長石 無 赤土 無 緑石 少	普通	
3位 6	土師	坏	(13.4)	4.2	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 1/3	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。内外面色均整。	円 3784/2 径 7,935/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 7	土師	坏	12.4	4.5	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 1/3	口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。	円 4160/1 径 5785/1	長石 少 赤土 無 緑石 少	良好	赤色3号片
3位 8	土師	坏	13.1	3.9	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：ほぼ完形	口縁部内外面共にヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。	円 5160/4 径 5160/1	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 9	土師	坏	13.4	4.6	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 4/5	口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。内外面色均整。	円 5160/2 径 5085/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 10	土師	坏	13.7	4.0	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 1/3	口縁部外面はヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。口縁部にスス付着。	円 1,938/4 径 1035/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 11	土師	坏	(14.0)	(6.9)	-	底部は丸底。外部は緩やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部は内縁する。 残存率：口縁部～底部 1/3	口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ。外面はヘラタズリ。口縁部にスス付着。	円 7,935/2 径 7,935/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	良好	赤色3号片
3位 12	土師	壺	-	(6.3)	7.6	底部は平底。胴部は緩やかに内湾する。口縁部は丸底。 残存率：胴部下平～底部 完形	内面はヘラタズリ。外面下部はミガキ。下部は斜位かヘラタズリ。	円 7,938/1 径 1038/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	
3位 13	土師	壺	-	(6.3)	7.7	底部は平底。胴部は緩やかに内湾する。口縁部は丸底。 残存率：胴部下平～底部 9/10	内面はヘラタズリ。外面はヘラタズリ。下部は斜位かヘラタズリ。	円 7,938/2 径 7,938/4	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	
3位 14	土製品	小玉				径さ 0.9cm 幅 0.5cm 厚さ 0.7cm 孔径 0.1cm 重さ 0.7g	指による彫形。	1,937/3	長石 無	普通	
3位 15	土製品	玉(楕円)				径さ 1.4cm 幅 1.3cm 厚さ 2.4cm 孔径 0.2cm 重さ 4.0g	指による彫形。	(1984)	長石 少	普通	
3位 16	土製品	勾玉				径さ 1.95cm 幅 1.1cm 厚さ 0.85cm 孔径 0.1cm 重さ 1.9g	指による彫形。	(1984)	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	
3位 17	土製品	不明				径さ 3.3cm 幅 1.5cm 厚さ 1.1cm 重さ 5.9g	指による彫形。	1,938/2	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	
3位 18	土製品	不明				径さ 4.3cm 幅 4.5cm 厚さ 0.8cm 重さ 11.7g	指による彫形。	(1984)	長石 少 赤土 無 緑石 少	普通	赤色3号片
3位 19	石製品	口玉				径さ 0.85cm 幅 0.85cm 厚さ 0.3cm 重さ 0.2g		5/8			石製

4号住居跡

本遺構の平面形状は若干歪んではいるがほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-30°-Wを指す。規模は北西、南東両軸ともに8.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは最深部で約40cmを測り、覆土の遺存状況は一部に現代の視乱が入り込むものの比較的良好で、4層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、広範囲に赤色還元した被熱面を検出している。更にこのカマドの構築特徴として、煙道が地山を掘り抜いて構築される所謂「掘り抜き煙道」であった事が判明する。床面では遺構中央部からカマド付近にかけて部分的な硬化が認められ、南東壁を除く三方壁下には浅い周溝が巡る。この床面からは対角線上に並びP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基も検出しており、各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約50cm～70cm、床面から底部までの深さは概ね100cm前後を測るが、最深のものでは130cmと深く穿たれる。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットと考えられるP-5～

P-6の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な楕円形を呈し、規模が長軸120cm、短軸90cm、深さ40cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は遺構全体にわたりに見られるが、特にカマド付近に纏まる傾向がある。出土遺物の器種器形は土師器の埴類が中心となり、坏類は少ない。また、数点ではあるが小型の土製品（勾玉模造品、土玉）と数木の炭化材も出土している。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



第23図 4号住居跡



— 4号住居跡完掘全景—



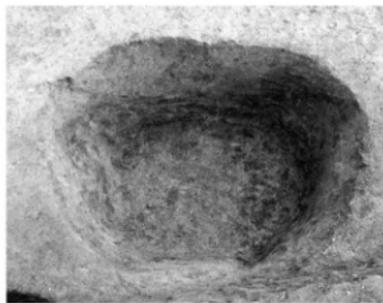
— 4号住居跡セクション—



— 4号住居跡遺物出土状況全景—



— 4号住居跡貯蔵穴遺物出土状況—



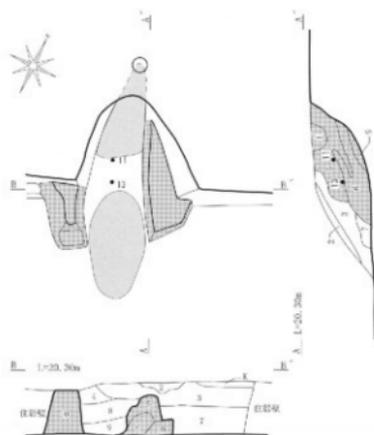
— 4号住居跡貯蔵穴完掘状況—



— 4号住居跡カマド遺物出土状況—

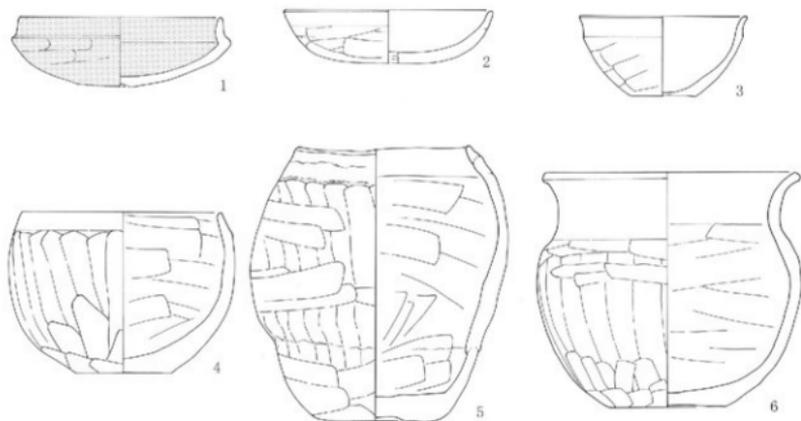


— 4号住居跡カマドセクション—

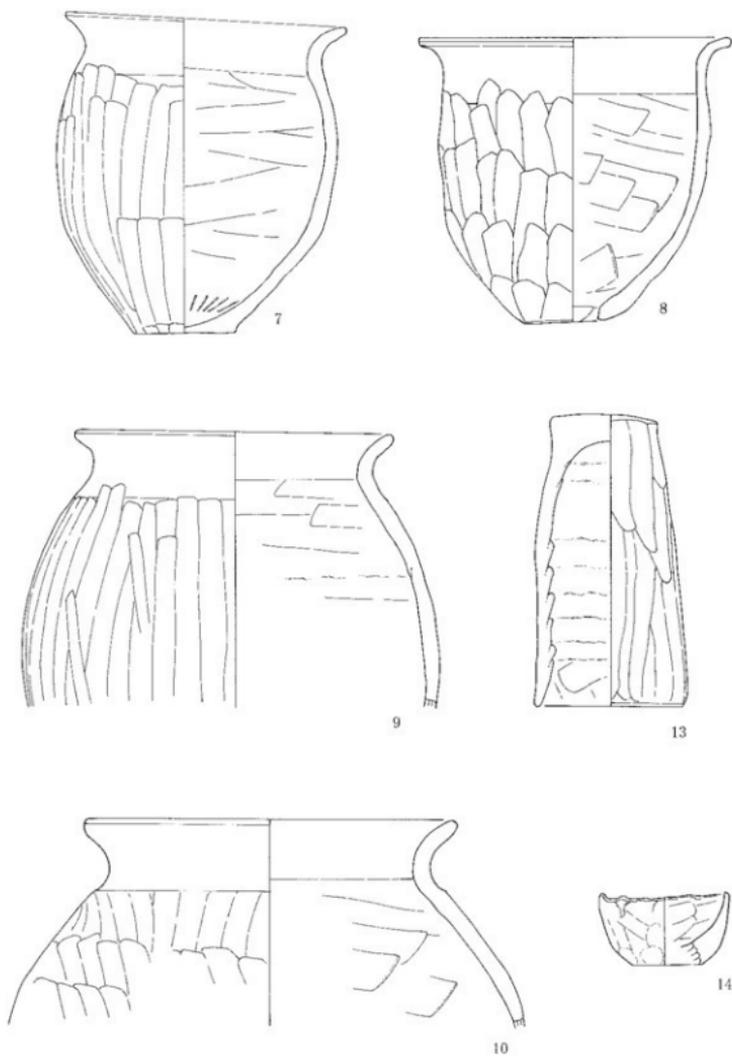


- 51-91 カマド・編み物
 1. 7.51X 3/2 青褐色土 焼土ブロック少。
 2. 7.51X 3/2 青褐色土 ローム粒中。
 3. 7.51X 3/4 青褐色土 ローム粒中。
 4. 7.51X 3/2 青褐色土 ローム粒中。
 5. 7.51X 4/2 灰褐色土 ローム粒・山砂中。
 6. 7.51X 3/4 青褐色土 焼土粒多。
 7. 7.51X 3/4 青褐色土 焼土粒中。
 8. 7.51X 4/2 灰褐色土 焼土粒・山砂少。
 9. 7.51X 3/2 赤・褐色土 焼土粒・山砂中。
 10. 7.51X 5/2 赤・褐色土 粘土・山砂少。

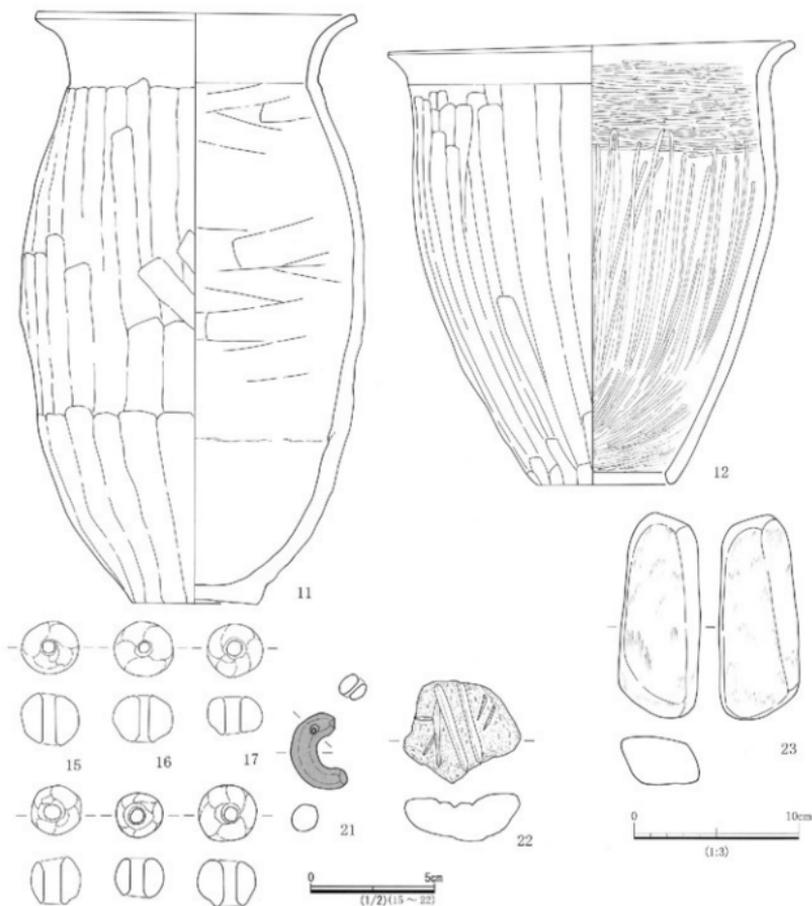
第24図 4号住居跡カマド



第25図 4号住居跡出土遺物①



第 26 图 4号住居跡出土遺物②



第27図 4号住居跡出土遺物③

第5表 4号住居跡遺物観察表

発掘No	種類	部材	口径	胴高	底径	器形の特徴	装形の特徴	色調	粘土	焼成	備考
4住1	土師	洋	13.0	4.6	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、深い腹を有する。口縁部は壁かに内湾する。 残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面はヘラケズリ。内外面黒色肌理。口縁部黒漆。	Ⅱ 3.5085/3 Ⅲ 3.5095/4	長石 黒 赤土	焼成	赤色ロリ 積
4住2	土師	洋	(13.4)	3.6	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、口縁部は壁かに内湾する。 残存率：口縁部～底部2/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面はヘラケズリ。	Ⅱ 3.5085/4 Ⅲ 3030/4	長石 中 小黒 赤土	普通	赤色ロリ 積 輪痕直ぐ 残る
4住3	土師	洋	(10.7)	5.3	4.1	底部は平底。体部は縦やかに内湾し、口縁部は壁かに内湾する。 残存率：口縁部～底部2/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面はヘラケズリ。	Ⅱ 5080/4 Ⅲ 3030/4	長石 黒 赤土 赤土	普通	赤色ロリ 積
4住4	土師	鉢	13.2	10.8	6.0	底部は平底。底部は縦やかに内湾し、口縁部は壁かに内湾する。 残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面はヘラケズリ。	Ⅱ 3030/4 Ⅲ 3.5086/4	長石 中 小黒 赤土	普通	赤色ロリ 積
4住5	土師	甕	11.5	18.0	6.9	底部は中央が狭み、壁かに上げ底となる。胴子手に凹線装束を有し、胴底に縦やかに内湾する。口縁部は内湾する。 残存率：口縁部	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面はヘラケズリ後ナデ。	Ⅱ 3030/4 Ⅲ 3030/4	長石 少 小黒 赤土	普通	赤色ロリ 積 輪痕直ぐ 残る

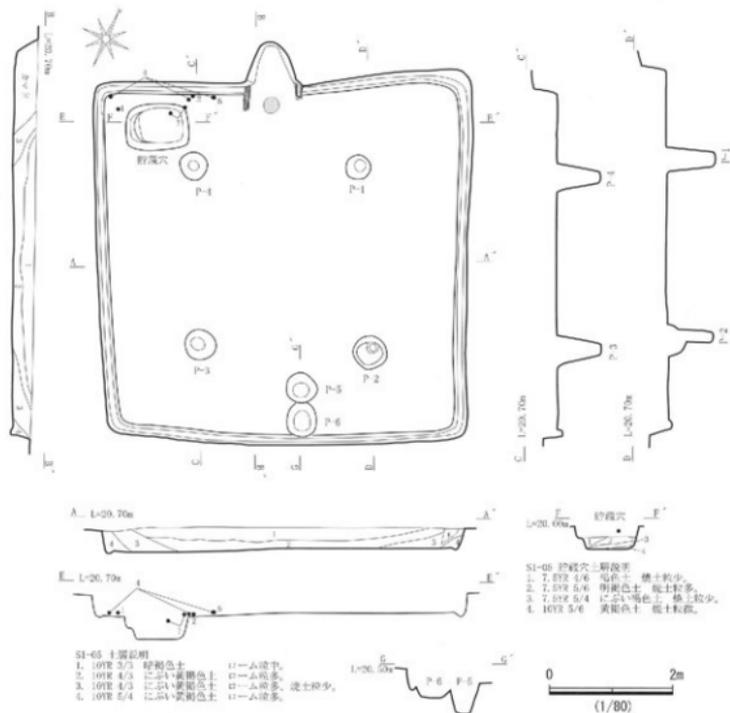
4位 6	土師	小型	16.0	15.5	7.4	胴部は平直、胴部は狭く内湾し、中央部に最大径を有する。口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は残存率：ほぼ完形	口縁部は内外歪みにヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は肩位のヘラクスリ。下部は肩位のヘラクスリ。	西 2.000/4 東 2.000/4	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 7	土師	実	18.0	20.7	6.6	胴部は平直で円筒状にやや突出する。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は残存率：完形	口縁部は内外歪みにヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は肩位のヘラクスリ。	西 1.006/3 東 1.006/1	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 8	土師	瓶	(20.4)	19.8	5.6	口は平直で底部全体に及ぶ。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外歪みにヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は肩位のヘラクスリ。	西 0.014/3 東 2.000/4	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 9	土師	葉	20.9	(18.2)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は残存率：口縁部～胴部 完形	口縁部は内外歪みにヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は肩位のヘラクスリ。	西 2.000/3 東 2.000/4	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色 特殊の傷 が浅い。
4位 10	土師	葉	(24.2)	(13.5)	-	胴部は狭く内湾すると推測され、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は残存率：口縁部～底部1/2	口縁部は内外歪みにヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は肩位のヘラクスリ。	西 1.000/3 東 2.000/2	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 11	土師	実	19.9	36.2	7.6	胴部はやや上り傾斜の厚板。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外歪みにヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は肩位のヘラクスリ。底部は手持ちヘラクスリ。	西 2.000/2 東 1.000/2	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	特殊な傷 が浅い。
4位 12	土師	瓶	26.9	28.9	9.0	口は平直で底部全体に及ぶ。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。残存率：口縁部～底部4/5	口縁部外面はヨコナデ。内面は下湾なく平直。外面は肩位のヘラクスリ。	西 2.000/4 東 1.000/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 13	土師 [支那]		9.8	10.3	6.9	胴部は平直。胴部はほぼ直立し、口縁部は緩やかに内湾する。残存率：ほぼ完形	内面は一部ヘラナデ。外面はヘラクスリ。底部はヘラクスリ製ナデ。	西 2.000/3 東 1.000/6	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	特殊な傷 が浅い。
4位 14	土師 [支那]	手捏	8.6	4.5	4.8	胴部は平直。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに内湾する。残存率：口縁部～底部4/5	内外面に粗粒整形後、磨ナデ。底部はナデ。	西 0.014/1 東 2.000/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 15	土師 [支那]	土玉				長さ 2.2cm 径 2.4cm 高さ 2.1cm 孔径 0.5cm 重さ 10.2g	指による整形。	0.010/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 16	土師 [支那]	土玉				長さ 2.2cm 径 2.4cm 高さ 1.9cm 孔径 0.4cm 重さ 9.9g	指による整形。	0.010/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 17	土師 [支那]	土玉				長さ 2.2cm 径 2.25cm 高さ 1.6cm 孔径 0.6cm 重さ 8.6g	指による整形。	0.010/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 18	土師 [支那]	土玉				長さ 2.0cm 径 2.0cm 高さ 1.9cm 孔径 0.7cm 重さ 8.0g	指による整形。	0.010/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 19	土師 [支那]	土玉				長さ 1.95cm 径 1.95cm 高さ 1.6cm 孔径 0.5cm 重さ 5.7g	指による整形。	0.010/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 20	土師 [支那]	土玉				長さ 2.3cm 径 2.4cm 高さ 1.9cm 孔径 0.5cm 重さ 10.2g	指による整形。	0.010/3	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 21	土師 [支那]	均玉				長さ 3.1cm 径 2.3cm 高さ 1.1cm 重さ 6.1g	指による整形。全周赤粉。	0.014/4	長石 多量 少 石	少 多 少	普通	赤色317 灰 色
4位 22	石製 [支那]	砥石				長さ 4.2cm 径 4.7cm 高さ 2.0cm 重さ 11.4g		2.010/3	-	-	-	-
4位 23	石製 [支那]	磨石				長さ 13.6cm 径 5.2cm 高さ 3.2cm 重さ 304.2g		2.010/2	-	-	-	-

5号住居跡



— 5号住居跡完掘全景 —

本遺構の平面形状は若干歪んではいながらほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-29°-Wを指す。規模は北西、南東両軸ともに6.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね40cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、4層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では遺構中央部からカマド前面にかけて顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には明瞭な周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の支柱穴と考えられるビット4基も検出しており、各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約50cm～60cmを測り、床面から底部までの深さは概ね80cmと深く穿たれている。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットと考えられるP-5～P-6の検出もある。また、カマド横両側には平面形状が不整な長方形を呈し、規模が長軸100cm、短軸80cm、深さ40cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は少量の土師器坏と薬類で、その他ではカマドの支脚として転用したと思われる、製鉄炉で使用される送風羽口の出土がある。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有していることから、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



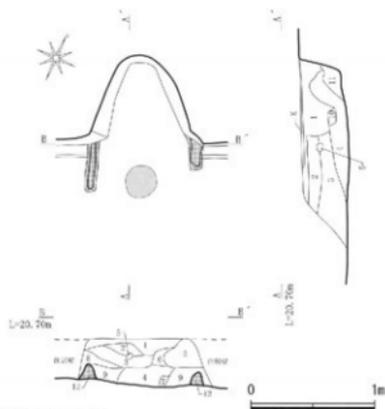
第28図 5号住居跡



— 5号住居跡セクション—



— 5号住居跡遺物出土状況全景—



- ST-95 カマド半掘形
 1. 7.5YR 5/4 土質赤色土 黄土粒少、山砂中。
 2. 7.5YR 4/3 赤色土 山砂少。
 3. 7.5YR 4/2 褐色土 山砂粒多。
 4. 7.5YR 3/4 緑褐色土 黄土粒少。
 5. 7.5YR 4/2 赤褐色土
 6. 10YR 6/3 土質赤褐色土 山砂少。
 7. STR 4/8 赤褐色土 焼土ブロック。
 8. 7.5YR 4/3 赤褐色土 ローム粒多。
 9. 7.5YR 4/3 褐色土 ローム粒多、山砂少。
 10. STR 4/3 土質赤褐色土 黄土粒中、山砂少。
 11. 7.5YR 5/3 暗褐色土 ローム粒多、焼土粒多。
 12. 10YR 5/3 土質赤褐色土 粒中。

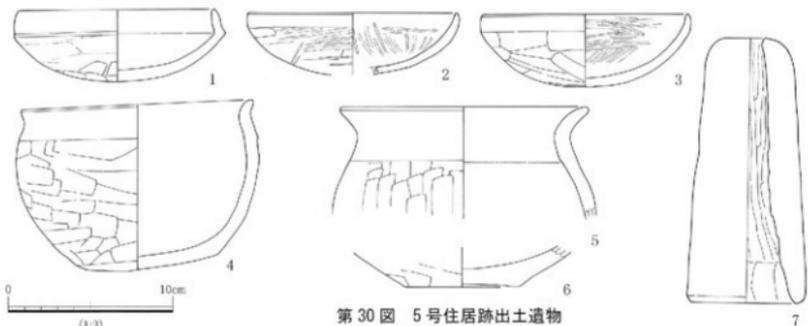
第29図 5号住居跡カマド



— 5号住居跡カマドセクション①—



— 5号住居跡カマドセクション②—



第30図 5号住居跡出土遺物

第6表 5号住居跡遺物観察表

遺構No.	部類	面種	口径	深さ	底径	形状	遺物の特徴	形状の特徴	色調	粘土	焼成	備考	
5住1	土室	弁	12.7	4.7	-	-	底面は丸底、体部は縦やかに内湾し、明瞭な縁を有する。口縁部は内湾する。 残存率：口縁部～底面1/5	口縁部は内外面にヨコナデ、内面はナブ、外面上部はヘラクスリ痕ナブ、下部はヘラクスリ。	赤 3093/3 赤 2,605/3	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	普通	赤色土 行 遺
5住2	土室	弁	(13.5)	(5.1)	-	-	底面は丸底、体部は縦やかに内湾し、にぶい縁を有する。口縁部は直立する。 残存率：口縁部～底面2/5	口縁部外面はヨコナデ、内面はミカキ、外面はヘラクスリ痕ナブ。	赤 2,606/4 赤 1037/3	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	普通	赤色土 行 遺
5住3	土室	弁	(13.3)	4.9	-	-	底面は丸底、体部は縦やかに内湾し、にぶい縁を有する。口縁部は直立する。 残存率：口縁部～底面1/3	口縁部外面はヨコナデ、内面はミカキ、外面はヘラクスリ。	赤 2,606/4 赤 2,605/4	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	普通	赤色土 行 遺
5住4	土室	袋	14.8	10.9	9.2	-	底面は丸底に近い平底、側部は縁やかに内湾し、口縁部は斜めに外反する。 残存率：ほぼ定形	口縁部は内外面にヨコナデ、内面はナブ、外面は横位の粗いヘラクスリ。	赤 2,604/3 赤 1006/3	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	普通	赤色土 行 遺
5住5	土室	袋	(13.8)	(7.5)	-	-	側部は縦やかに内湾し、口縁部は斜めに外反する。 残存率：口縁部～縁上1/6	口縁部は内外面にヨコナデ、内面はナブ、外面は横位の粗いヘラクスリ。	赤 1005/3 赤 2,035/4	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	普通	赤色土 行 遺
6住6	土室	袋	-	(2.7)	7.4	-	底面はややトゲ状の平底、側部は縦やかに内湾すると推察される。 残存率：底面 定形	内面は新瓦、外面は斜位のヘラクスリ。	赤 1801/4 赤 3106/4	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	悪い	
6住7	土室	支脚	-	-	-	-	長さ 16.2cm 幅 7.2cm 高さ 6.9cm	内面はヘラクスリ、外側はナブ。	赤 3080/3	長石 石英 赤鉄 炭	中 少 普通	普通	赤色土 行 遺

6号住居跡

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-37°-Wを指す。規模は北西、南東両軸ともに6.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね30cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、4層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面ではほぼ全体的に硬化が認められ、カマドを除く四方壁下には明瞭な周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基も検出しており、各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約25cm～30cmを測り、床面から底部までの深さは概ね70cmと深く穿たれている。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットと考えられるP-5～P-6と、南西壁下では用途は不明であるが平面形状楕円形を呈すP-7の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な長方形を呈し、規模が長軸110cm、短軸85cm、深さ40cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土はカマド周辺に纏まり、その器種器形は土師器の甕類と坏類が主体となるが、1点のみ透かしが入る須臾器の高坏脚部も出土している。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。補足として、本遺構南東側の壁下2カ所より、カマド構架材の原料と思しき青白色を呈す粘土の塊も検出している。



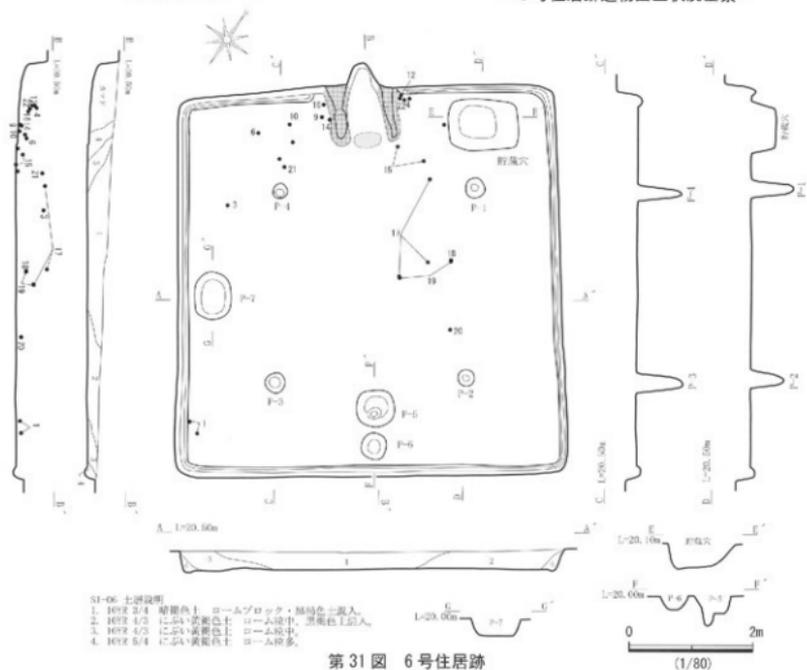
- 6号住居跡完掘全景 -



— 6号住居跡セクション—



— 6号住居跡遺物出土状況全景—



— 6号住居跡調査風景①—



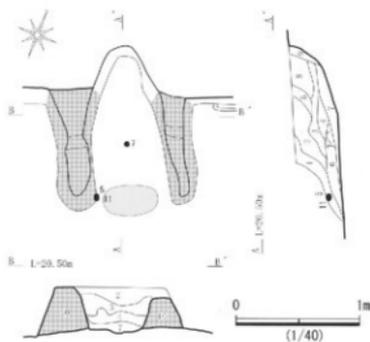
— 6号住居跡調査風景②—



— 6号住居跡遺物出土状況①—



— 6号住居跡遺物出土状況②—



SI-06 カマド土器説明

- | | | |
|---------------|----------|--------------|
| 1. 2.5W 4/3 | 褐色土 | ローム较多 |
| 2. 2.5W 1/4 | 褐色土 | ローム较多 |
| 3. 0.5W 4/3 | 褐色土 | 粘土较多 |
| 4. 0.5W 2/4 | 粘土質土 | 焼土中 |
| 5. 2.5W 4/3 | 褐色土 | ローム粒・焼土ブロック少 |
| 6. 2.5W 2/3 | 暗褐色土 | 焼土ブロック多 |
| 7. 2.5W 2/4 | 暗褐色土 | 粘土较多 |
| 8. 2.5W 4/3 | 褐色土 | ローム粒・焼土ブロック少 |
| 9. 2.5W 4/3 | 褐色土 | ローム较多 |
| 10. 10.5W 2/3 | いぶい・黄褐色土 | カマド焼土 |

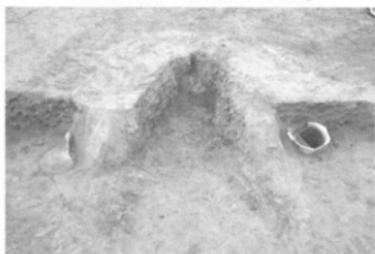
第32図 6号住居跡カマド



— 6号住居跡カマド遺物出土状況①—



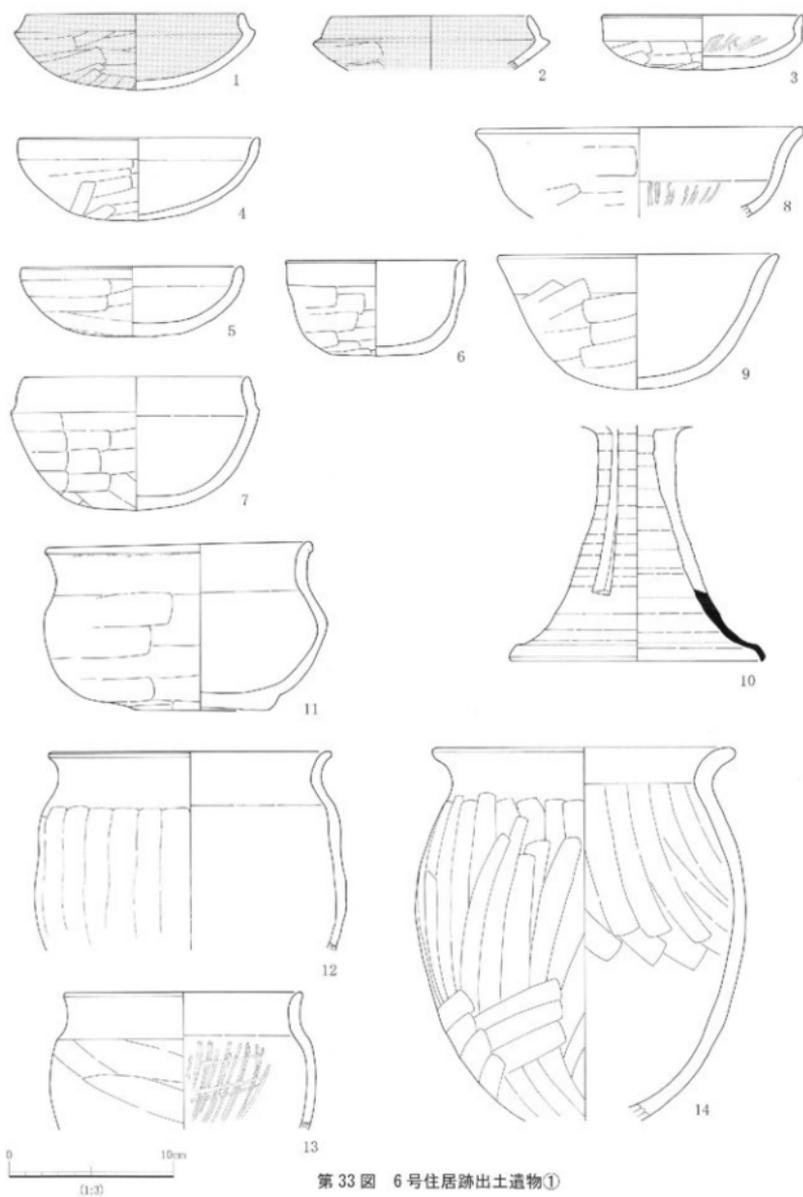
— 6号住居跡カマド遺物出土状況②—



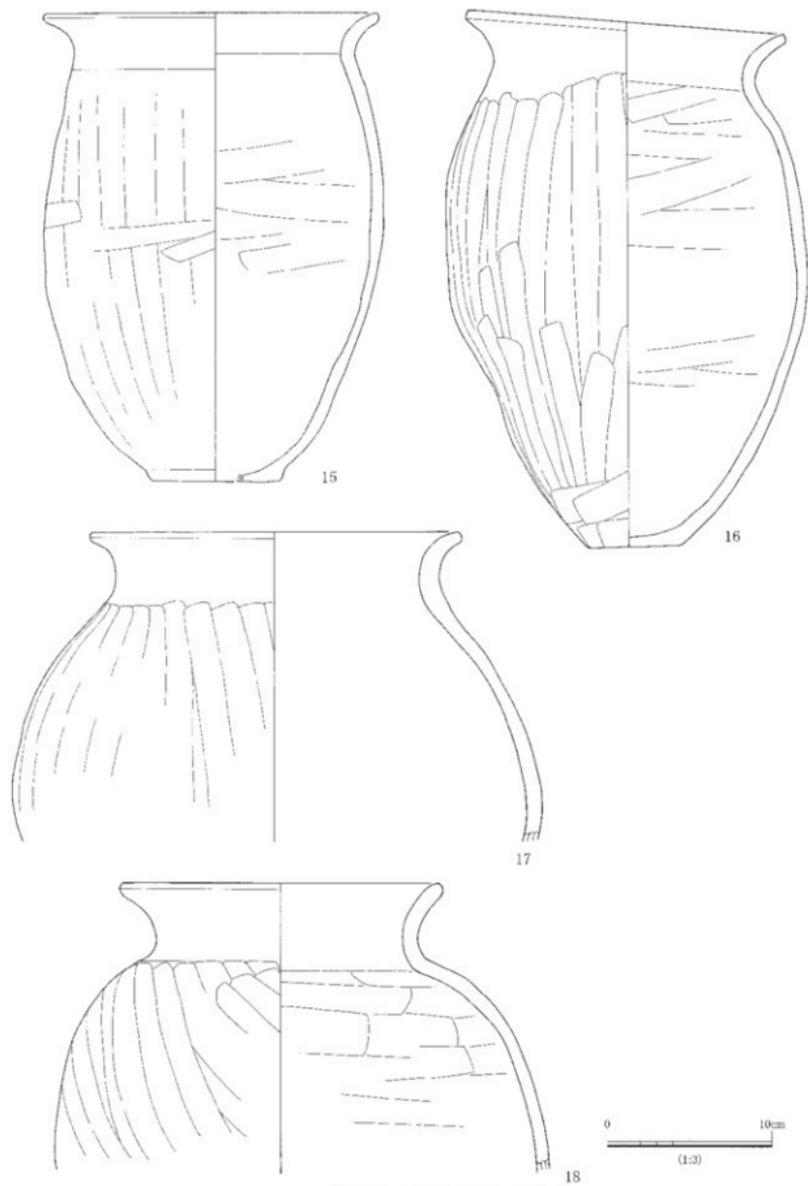
— 6号住居跡カマド完掘状況①—



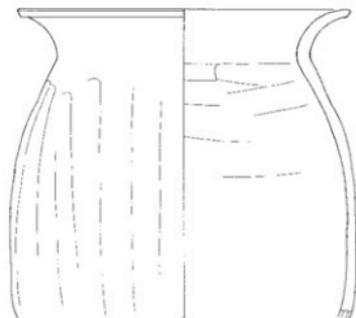
— 6号住居跡カマド完掘状況②—



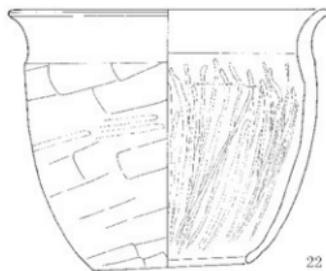
第 33 图 6 号住居跡出土物①



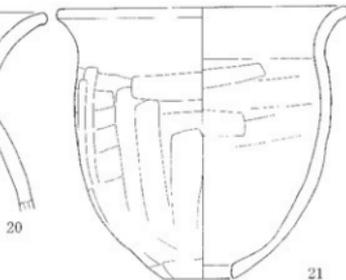
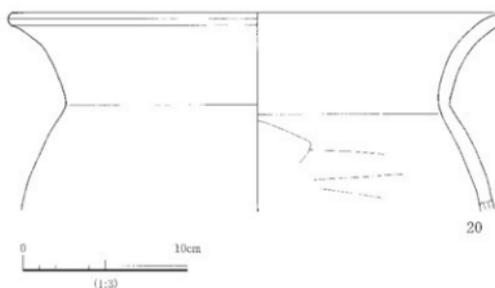
第 34 图 6 号住居跡出土遺物②



19



22



21

第35図 6号住居跡出土遺物③

第7表 6号住居跡遺物観察表

遺物No.	種類	形状	口径	器高	底径	器底の形状	器底の特徴	器身の特徴	内面	外面	土質	焼成	備考
6件 1	土師	杯	13.0	4.7	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、縁の直を有する。口縁部は内傾する。残存率：ほぼ完全	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。内外面黒色色染。	内面 円 底 片 径 1.516/1 外 径 2.316/0.9	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6位 2	土師	杯	(12.0)	(3.2)	-	体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～体部片	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。一面黒色色染。内外両面内見丸。	内面 円 底 片 径 1.516/2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄 赤褐色 赤褐色	
6件 3	土師	杯	(12.0)	3.1	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部はほぼ直立する。残存率：口縁部～底部1/2	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/0.9	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6位 4	土師	杯	14.4	5.1	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～底部1/2	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。内外面黒色色染。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6件 5	土師	杯	13.3	4.3	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部は直立する。残存率：口縁部～底部2/5	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/0.9	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6位 6	土師	杯	(10.8)	(5.9)	(5.3)	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部はほぼ直立する。残存率：口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6件 7	土師	鉢	13.5	6.2	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～底部欠板。	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6位 8	土師	高杯	(10.4)	(8.5)	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部はほぼ直立する。残存率：口縁部～体部1/8	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。内外面黒色色染。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6件 9	土師	鉢	(16.5)	8.3	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、流し縁を有する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～底部1/4	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	
6位 10	須恵	高杯	(14.5)	13.2	-	上縁部は欠損している。器底は緩やかに丸底に傾き、流し縁を有する。口縁部はほぼ直立する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内面 円 底 片 径 1.516/1.2 外 径 2.316/1.2	赤 土 質 中 硬 焼 成	赤 土 質	黄褐色	黄色337 黄	

6	11	土師	黄	15.7	10.2	4.2	胴部ははやや上げ気味の平底で内周し、中央で外周を有する。口縁部は外側に外反する。残存率：口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ状ナデ。	内 1000/0 外 1000/0	長石 多 石炭 多 黒炭 少	普通	赤色に付いた 縦溝が浅く 残存する。
6	12	土師	黄	(16.7)	(12.2)	-	胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面は低位のヘラクスリ。	内 1000/0 外 1000/0	長石 中 石炭 少 黒炭 少	普通	赤色に付いた
6	13	土師	緑	14.1	(5.4)	-	胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部上半1/2	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデの緩いナデ。外面は低位のヘラクスリ。	内 1000/0 外 1000/0	長石 少 石炭 中 黒炭 少	普通	赤色に付いた
6	14	土師	黄	17.8	(22.9)	-	胴部は平底。胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部下半3/4	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。下部は一部低位のヘラクスリ。	内 2.174/4 外 1.131/5	長石 中 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	15	土師	黄	13.9	28.6	7.6	胴部は平底。胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面は低位のヘラクスリ。下部は一部低位のヘラクスリ。	内 2.133/5 外 1.133/5	長石 少 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	16	土師	黄	19.0	32.1	5.6	胴部は平底。胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～底部1/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。下部は低位のヘラクスリ。	内 2.173/2 外 1000/2	長石 多 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	17	土師	黄	21.9	(18.9)	-	胴部は緩やかに内周すると外周され、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部2/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面は低位のヘラクスリ。一部内周している。	内 2.191/4 外 1000/3	長石 少 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	18	土師	黄	13.0	(17.9)	-	胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部2/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。一部低位のヘラクスリ。	内 1000/2 外 1000/3	長石 中 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	19	土師	黄	(19.9)	(18.9)	-	胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部下半1/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。一部低位のヘラクスリ。	内 1000/1 外 2.103/4	長石 少 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	20	土師	黄	(29.6)	(12.0)	-	胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部上半1/8	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。	内 2.103/4 外 2.103/4	長石 中 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	21	土師	黄	17.2	16.7	4.3	口は単孔で底部全体に及ぶ。胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。下部は低位のヘラクスリ。	内 1000/0 外 2.103/3	長石 少 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた
6	22	土師	黄	18.9	15.7	9.3	口は単孔で底部全体に及ぶ。胴部は緩やかに内周し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は低位のヘラクスリ。下部は低位のヘラクスリ。	内 1000/0 外 1000/3	長石 少 石炭 中 黒炭 中	普通	赤色に付いた 縦溝が浅く 残存する。

7号住居跡

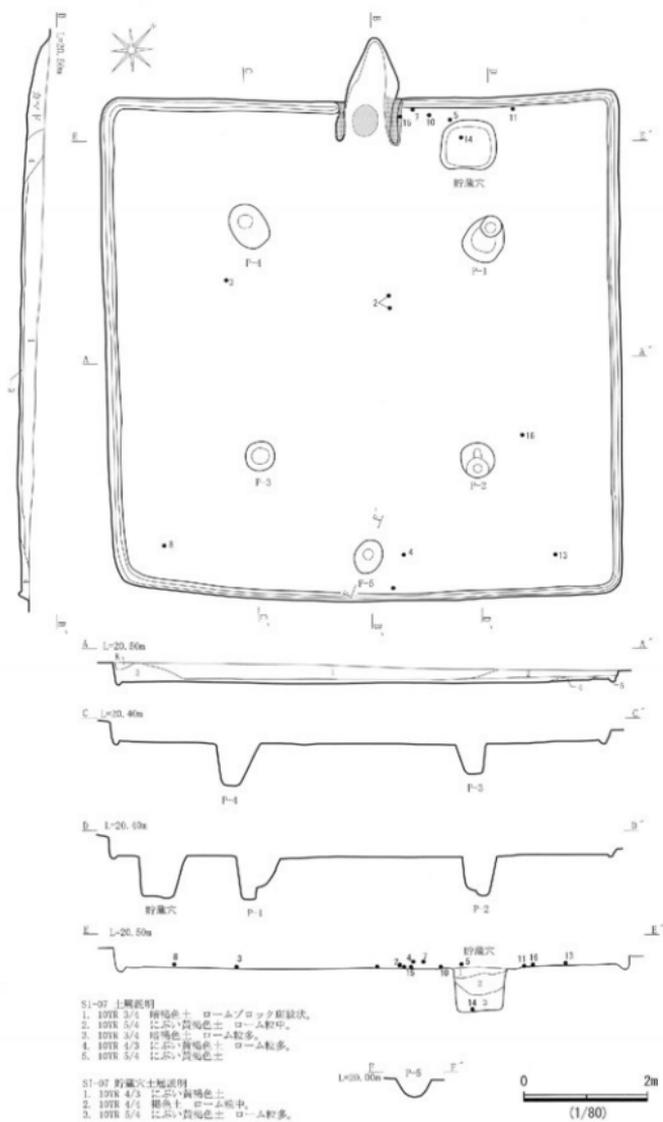
本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-42°-Wを指す。規模は北西、南東両軸ともに8.5mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね30cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、5層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両軸の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では出入り口付近とカマド前面で顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には浅い周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるピット4基も検出しており、各ピットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約50cm～80cmを測り、床面から底部までの深さは概ね70cmと深く穿たれている。その他のピットとして、出入り口施設に伴うピットと考えられるP-5の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な長方形を呈し、規模が長軸110cm、短軸85cm、深さ40cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は遺構全体に散見されるが、特にカマド周辺に纏まる傾向があり、その器種器形は土師器の甕類と甌、及び坏類が主体となる。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有していることから、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



— 7号住居跡調査風景①—



— 7号住居跡調査風景②—



第 36 図 7号住居跡



— 7号住居跡完掘全景—



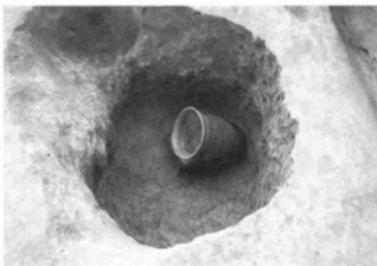
— 7号住居跡セクション—



— 7号住居跡遺物出土状況全景—



— 7号住居跡遺物出土状況—



— 7号住居跡貯蔵穴遺物出土状況—



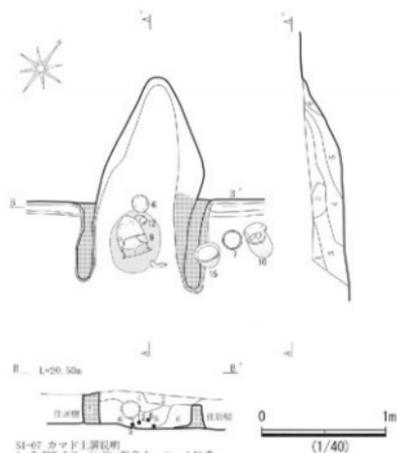
— 7号住居跡カマド遺物出土状況①—



— 7号住居跡カマドセクション—

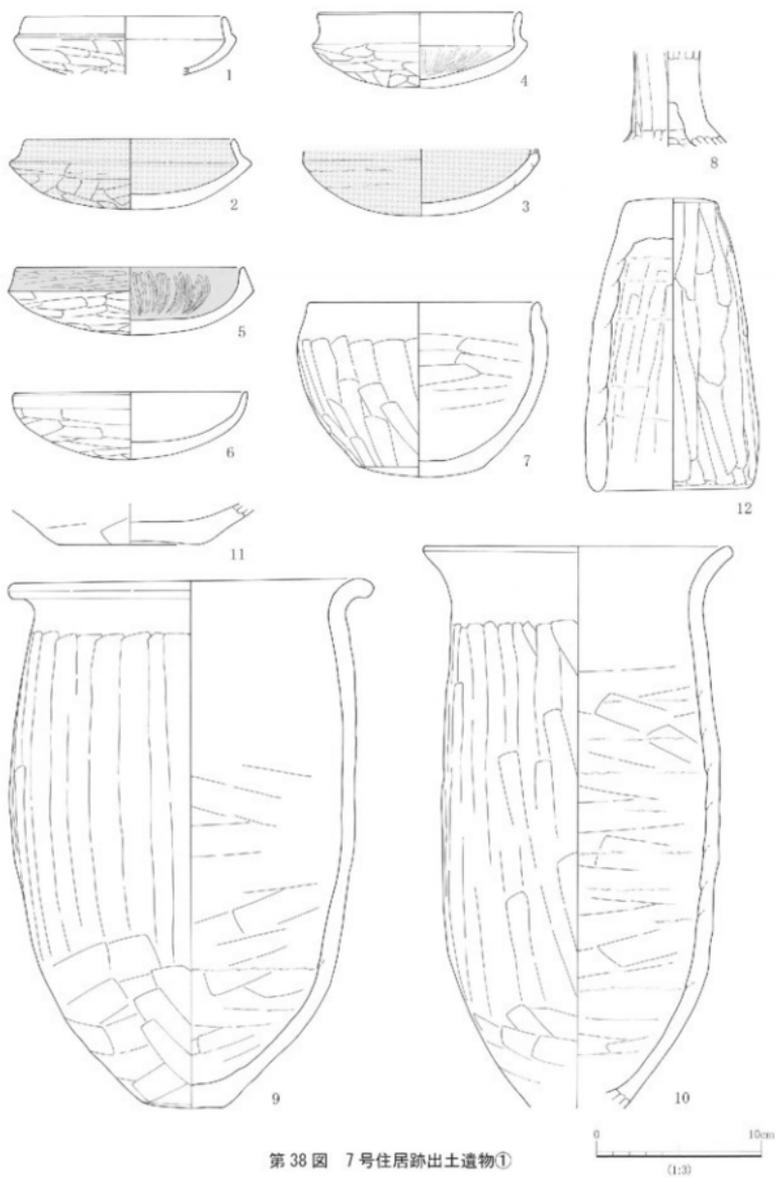


— 7号住居跡カマド遺物出土状況②—

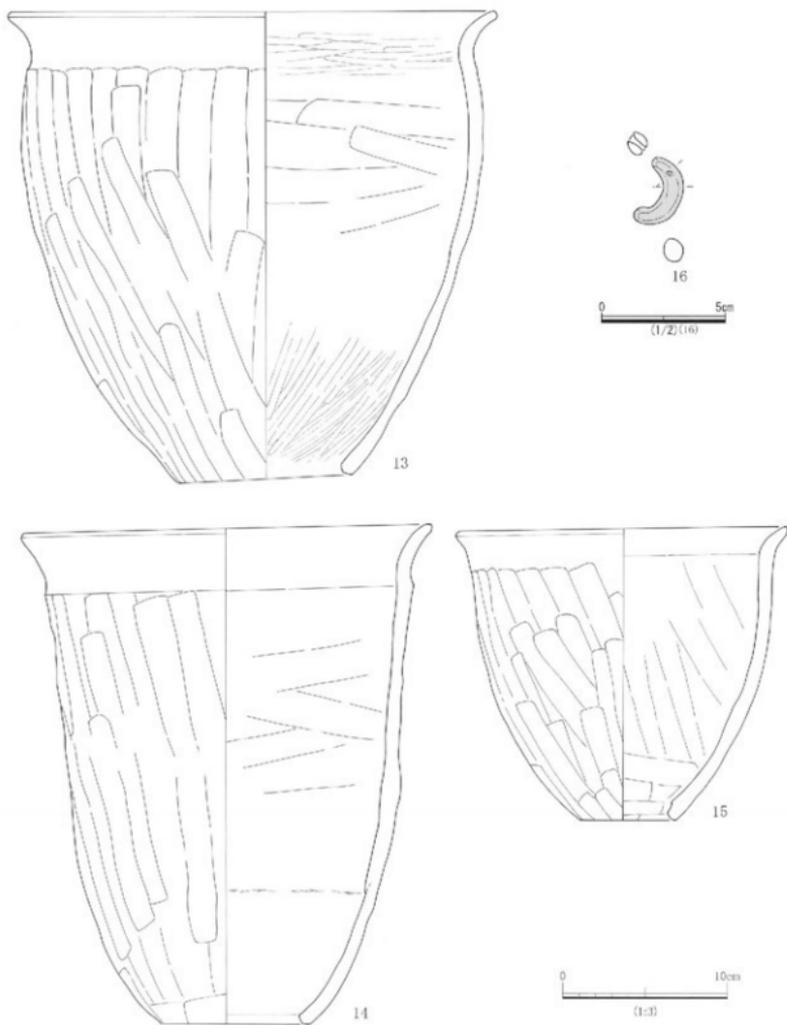


- 51-47 カマド土調説明
1. 2. 35R E/3 に濃い黄褐色土 コーーム粒多。
 2. 2. 35R E/4 黄褐色土 粘土粒中、粒多、炭粒強。
 3. 2. 35R E/4 に赤い褐色土 粘土粒少、粘土中。
 4. 2. 35R E/3 に濃い黄褐色土 粘土粒・粘土多。
 5. 2. 35R E/3 に赤い褐色土 粘土粒中、粒少。
 6. 35R E/6 明赤褐色土 粘土多。
 7. 105R E/3 に赤い黄褐色土 粘土・炭粒少。

第 37 図 7号住居跡カマド



第 38 图 7 号住居跡出土遺物①



第39図 7号住居跡出土遺物②

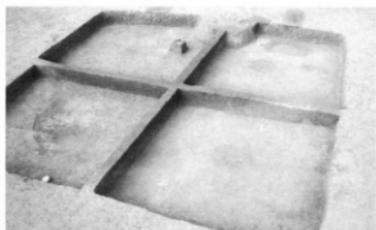
第8表 7号住居跡遺物観察表

遺物No	種類	型別	口径	器高	口径	器壁の特徴	器形の特徴	色調	粘土	構成	備考
7住1	土師	杯	(12.0)	(3.6)	-	体部は段やかに内湾し、明瞭な柱を有する。口縁部は内屈する。 残存率：口縁部～底部2/5	口縁部は内外面共にコナデ。内面はナデ。外面はヘラケズリ。	内 3.0/11.5 外 3.0/15.4	灰石 煉砂 少量	少量 普通	赤色土師 灰
7住2	土師	杯	12.0	4.4	-	底部は平底。体部は緩やかに内湾し、強い段を有する。口縁部は強く内屈する。 残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外面共にコナデ。内面はナデ。外面はヘラケズリ。口縁部が膨張している。内外正面色略同。	内 3.0/13.4 外 3.0/16.2	灰石 煉砂 少量	少量 普通	赤色土師 灰

7位 3	土師 坏	(4.1)	-	底面は丸底。底部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。残存率：残部～底面3/4	内外面共に割れている。内外面黒色化。	内 1.0193/1 外 2.9732/2	灰白色の 灰質 土質	普通	輪縁が浅く 残る。	
7位 4	土師 坏	(12.2)	5.7	底面は丸底。底部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。口縁部は僅かに残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外外共にヨコナガ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。	内 1.9797/1 外 1.0193/3	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰	
7位 5	土師 坏	13.7	4.2	底面は丸底。底部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。口縁部は残存率：口縁部～底面2/3	口縁部外面はミガキ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ後リガキ。残部～内面直縁。	内 2.9748/1 外 1.0193/4	灰白色の 粘砂質 土質	良好	赤色337 灰	
7位 6	土師 坏	14.0	5.2	底面は丸底。底部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。口縁部は直縁的に残存率：口縁部	口縁部外面はヨコナガ。内面はナダ。外面はヘラケズリ。	内 1.9797/3 外 2.9732/1	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰	
7位 7	土師 鉢	13.9	10.6	7.4	底面は平底に近い丸底。胴部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。口縁部は直縁的に残存率：口縁部	口縁部外面はヨコナガ。内面はヘラケズリ。外面はヘラケズリ。	内 1.0194/4 外 2.9732/5	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰
7位 8	土師 高杯	-	(5.8)	上縁及び、脚部直縁。脚部は直縁的に残存率：脚部3/4	内面は一部ヘラケズリ。一部ヘラケズリ。外面はヘラケズリ。	1.0194/1	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰	
7位 9	土師 変	21.0	32.4	5.0	底面は平底。胴部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外外共にヨコナガ。内面はヘラケズリ。外面は上縁及び口縁は直縁のヘラケズリ。下部は斜位のヘラケズリ。	内 1.9794/4 外 1.0193/2	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰
7位 10	土師 変	18.3	34.4	-	底面は平底。胴部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。残存率：口縁部～脚部下平3/4	口縁部は内外外共にヨコナガ。内面はヘラケズリ。外面は上縁及び口縁は直縁のヘラケズリ。下部は斜位のヘラケズリ。	内 1.9793/4 外 1.9732/4	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰
7位 11	土師 変	-	(2.6)	8.6	底面は多少立ち上がり底気味の平底。胴部は緩やかに内側に立ち上がり縁を有する。残存率：底面4/5	内面は割れている。外面は直縁のヘラケズリ。	内 1.9732/1 外 2.9732/1	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰
7位 12	土師 鉢 (残部)	9.3	17.8	6.3	底面は平底。胴部はほぼ直立し、口縁部はほぼ直立する。残存率：変形	内面はヘラケナダ。外面はヘラケズリ。	内 1.0194/2 外 1.0193/6	灰白色の 粘砂質 土質	普通	輪縁が浅く 残る。
7位 13	土師 瓶	(29.0)	28.6	10.6	口は単孔で底面全体に及ぶ。胴部は緩やかに内側に立ち上がり、口縁部は残存率：口縁部～底面3/4	口縁部外面はヨコナガ。内面は下縁及び上縁は直縁のヘラケズリ。外面は直縁のヘラケズリ。	内 1.9798/4 外 1.0194/2	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰
7位 14	土師 瓶	24.6	30.3	8.9	口は単孔で底面全体に及ぶ。胴部は緩やかに内側に立ち上がり、口縁部は残存率：変形	口縁部は内外外共にヨコナガ。内面は丁型なヘラケナダ。外面は斜位のヘラケズリ。	内 1.9793/6 外 2.9732/1	灰白色の 粘砂質 土質	良好	輪縁が浅く 残る。
7位 15	土師 瓶	19.5	17.8	6.5	口は単孔で底面全体に及ぶ。胴部は緩やかに内側に立ち上がり、口縁部は残存率：変形	口縁部は内外外共にヨコナガ。内面は下縁及び上縁は直縁のヘラケズリ。外面は斜位のヘラケズリ。	内 1.9793/4 外 1.9732/2	灰白色の 粘砂質 土質	普通	赤色337 灰
7位 16	土師 高杯				長さ 2.7cm 幅 2.0cm 厚さ 0.9cm 口径 0.15cm 底径 0.9cm	拍子による変形。変形。	2.9743	灰白色の 粘砂質 土質	普通	

8号住居跡

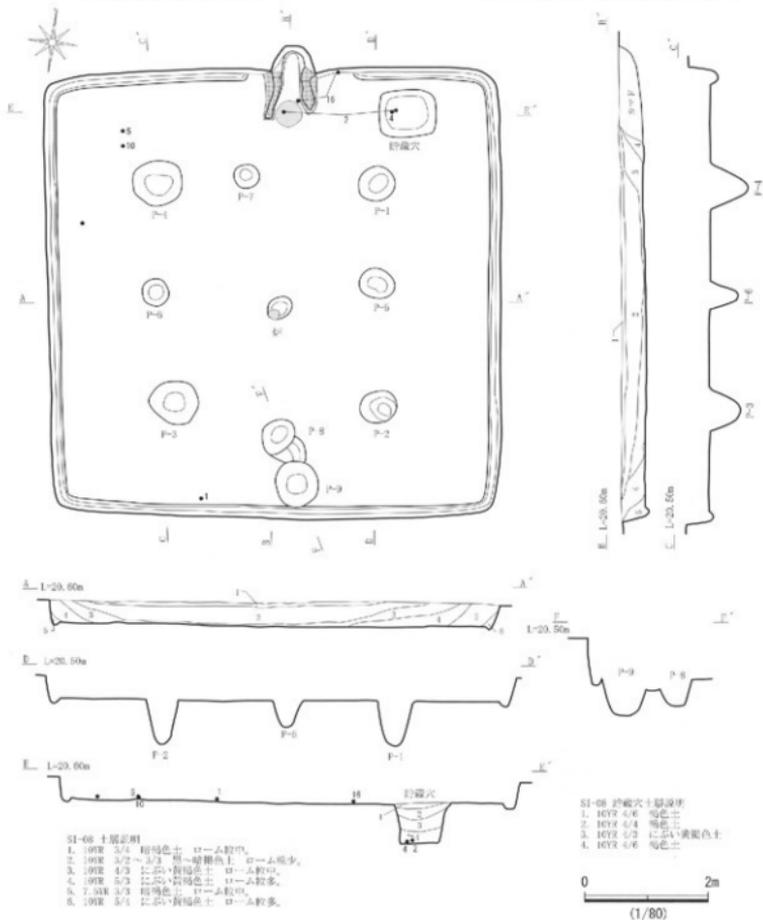
本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-8°-Wを指す。規模は北西、南東内軸ともに7.4mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね40cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、6層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構には遺存状況の良いカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。また、本遺構の中心部には平面形状円形を呈し、直径約45cmを測る断面形状が浅い皿状の地床炉も付設している。床面では出入り口付近からカマド前面までの動線上に顕著な硬化が認められ、カマドを除く四方壁下には明瞭な周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基と、左記主柱穴より一回り程直径の小さいP-5～P-6の補助柱穴と思われるビット2基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模はP-1～P-4の直径が約50cm～80cm、P-5～P-6の直径が40cm～60cmを測り、床面から底部までの深さは概ね50cmを測り、最深のものでは80cmと深く穿たれている。その他のビットとして、P-7～P-9も検出しているが、P-7がその検出位置から用途及び本遺構に伴うものなのかは不明、P-8～P-9が出入り口施設に伴うビットであると考えられる。また、カマド横東側には平面形状が長方形を呈し、規模が長軸90cm、短軸80cm、深さ70cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土範囲は遺構全体に及ぶが、特にカマド周辺に纏まる傾向があり、その器種器形は土師器の坏類と甕類及び瓶等が主体となる。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に属するものと考えられる。



— 8号住居跡セクション—



— 8号住居跡遺物出土状況全景—



第40図 8号住居跡



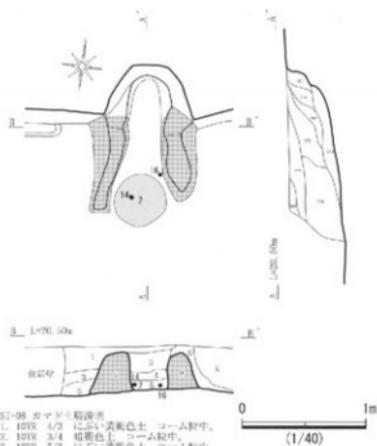
— 8号住居跡完掘全景—



— 8号住居跡カマド遺物出土状況—

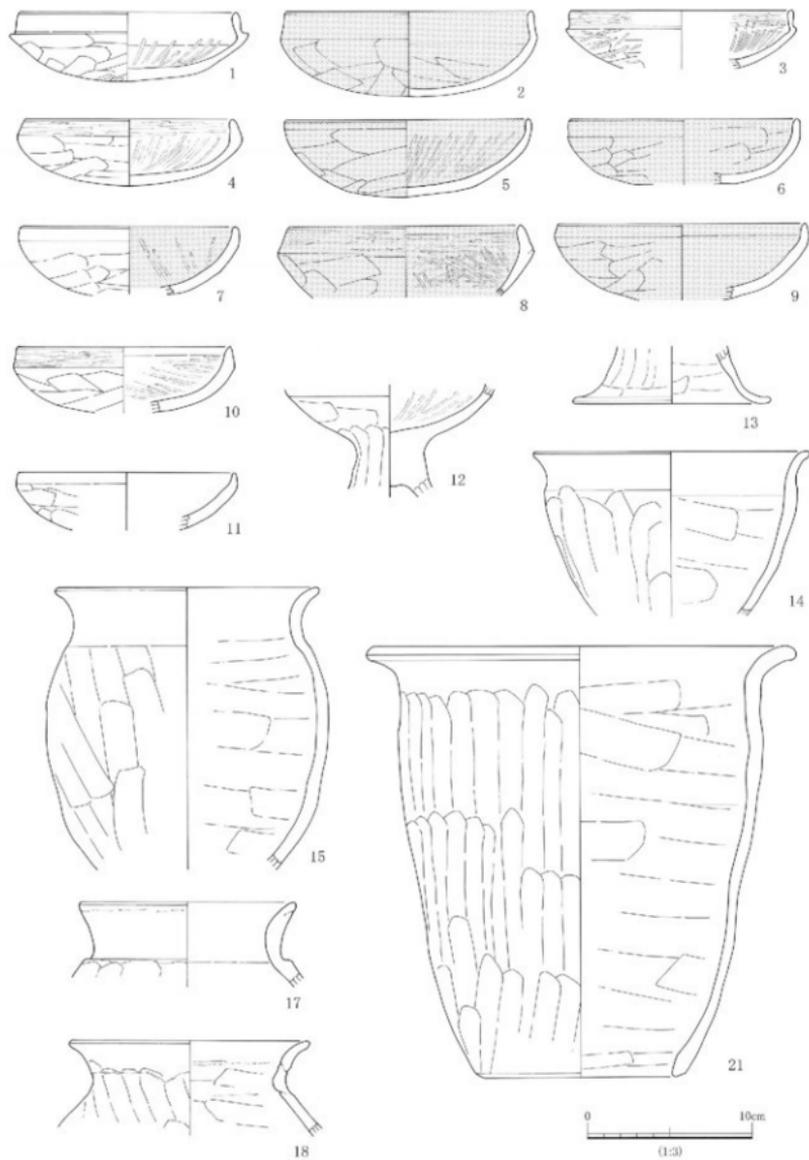


— 8号住居跡カマド完掘状況—

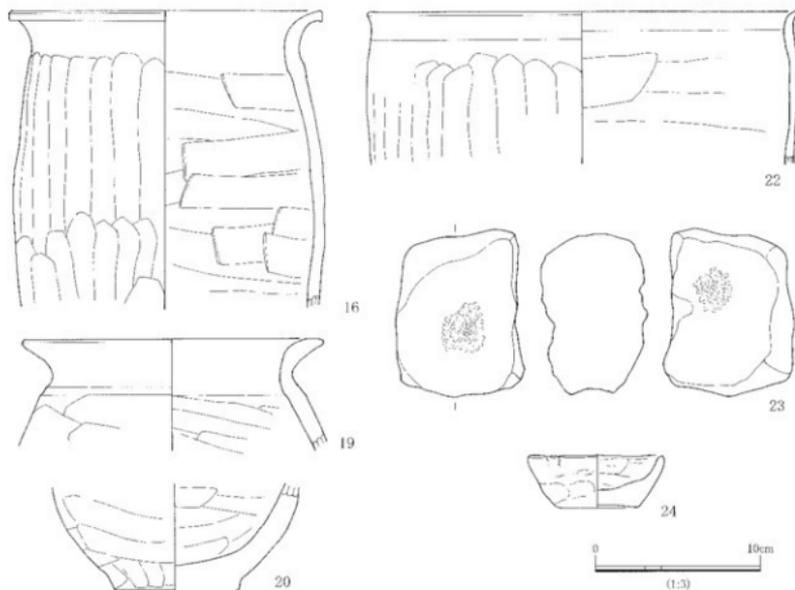


- S1-08 カマドの略図
1. 10YR 4/2 に近い黄褐色土 コーム状中。
 2. 10YR 3/4 暗褐色土 コーム状中。
 3. 10YR 5/2 に近い黄褐色土 コーム状中。
 4. 10YR 5/2 灰褐色土 コーム状中。
 5. 7.5Y 4/4 褐色土 砂・高土中。
 6. 10YR 5/2 に近い黄褐色土 コーム状・山崎中。
 7. 10YR 3/4 暗褐色土 焼土状の中、粘土少。
 8. 10YR 3/4 暗褐色土 焼土状中、砂・ブロック少。
 9. 10YR 5/2 に近い黄褐色土 土壁下部。

第 41 図 8号住居跡カマド



第 42 图 8 号住居跡出土遺物①



第43図 8号住居跡出土遺物②

第9表 8号住居跡遺物観察表

層位	No.	種類	器種	口径	器高	底径	底厚	器底の特徴	器身の特徴	色相	土質	地皮	備考	
8住	1	土師	杯	13.3	4.3	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ、一部はヘラミガキ痕あり。	内 3.0189/1 外 3.0134/8	赤土 黄褐色 赤褐色 黒褐色	少 微 散	普通	
8住	2	土師	杯	15.0	5.2	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部1/2	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はミガキ。一部ヘラケズリ。外面はヘラケズリ。内外面黒色地肌。	内 3.0193/5 外 3.0267/3	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	赤色ロウ 御
8住	3	土師	杯	(13.5)	(3.6)	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立的である。残存率：口縁部～底部1/8	口縁部は内外面共にミガキ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ後ミガキ。	内 3.0187/2 外 2.9784/4	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	赤色ロウ 御
8住	4	土師	杯	12.5	4.2	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。残存率：口縁部～底部2/3	口縁部は内外面共にミガキ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。	内 3.0186/0 外 3.0126/6	赤土 黄褐色 赤褐色	少 微	普通	赤色ロウ 御
8住	5	土師	杯	14.8	4.8	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。内外面黒色地肌。	内 3.0193/2 外 3.0198/3	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	
8住	6	土師	杯	(11.0)	(4.0)	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部1/6	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。内外面黒色地肌。	内 3.0185/5 外 3.0128/0	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	
8住	7	土師	杯	13.1	(4.2)	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部1/5	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ後ナダ。内面黒色地肌。	内 3.0170/0 外 2.9789/0	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	赤色ロウ 御
8住	8	土師	杯	11.2	4.1	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部1/6	口縁部は内外面共にヨコナダ。口縁部外面はミガキ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。内外面黒色地肌。	内 3.0190/0 外 3.0184/4	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	納骨の が 残る。 赤色ロウ 御
8住	9	土師	杯	(15.0)	(4.8)	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立的である。残存率：口縁部～底部1/8	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。内外面黒色地肌。	内 3.0189/2 外 3.0188/1	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	
8住	10	土師	杯	(12.4)	(4.2)	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部1/3	口縁部内面及び明部はヨコナダ。口縁部外面はミガキ。内面はミガキ。外面はヘラケズリ。	内 3.0185/4 外 2.9785/4	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	普通	
8住	11	土師	杯	(13.3)	(3.6)	-	-	底面は丸底。体面は緩やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は直立的である。残存率：口縁部～底部1/8	内面～口縁部外面までナダ製成。外面はヘラケズリ。	内 3.0184/1 外 2.9693/1	赤土 黄褐色 赤褐色	微 散	良質	赤色ロウ 御

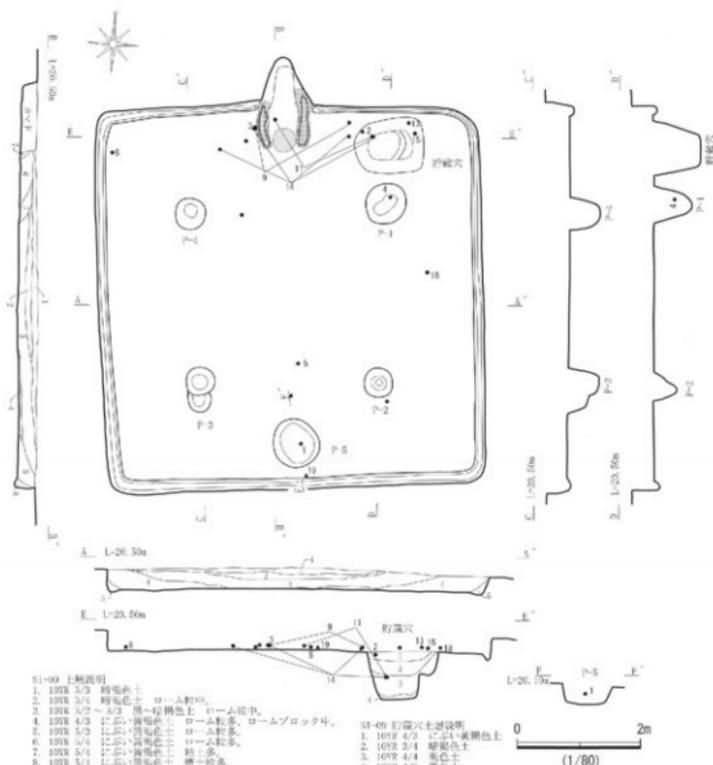
8住12	土師	京坪	-	(6.9)	-	口縁部は縁やかに内湾する。縁部は、口縁は膨らみを持って上方へ突き出ると推測される。 残存率：口縁部～胴部1/2	上部は内面はヒコナデ、上部は外面は高ヒコナデ、下部及び胴部はヘラクスリまたはヒコナデ。	内 7.000/5 外 2.000/3	長石 黄鉄 銅	黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住13	土師	京坪	-	(5.5)	(12.0)	胴部はラッタ状に縁やかに突き、縁部は強く膨らむ。 残存率：頸部1/6	胴部は内外面共にナデ、胴部内面及び外面はヘラクスリ後ナデ。	内 1000/4 外 2.00/1	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住14	土師	株	(16.7)	(10.2)	-	胴部は縁やかに内湾し、口縁部は縁やかに外反する。 残存率：口縁部～胴部上半1/3	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はヘラクスリ。外面はヘラクスリ。	内 6.000/2 外 1000/1	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住15	土師	炭	(15.5)	(17.2)	-	胴部は縁やかに内湾し、口縁部は縁やかに外反する。口縁部で上方に膨らむ。 残存率：口縁部～胴部下半1/5	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はヘラクスリ。外面は履位のヘラクスリ。	内 7.000/4 外 3000/4	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住16	土師	炭	19.0	(18.2)	-	胴部は縁やかに内湾し、口縁部は縁やかに外反する。口縁部で上方に膨らむ。 残存率：口縁部～胴部上半4/5	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はナデ。外面は履位のヘラクスリ後ナデ。	内 7.000/4 外 7.000/3	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住17	土師	炭	(13.2)	(5.2)	-	口縁部は外反する。 残存率：口縁部	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はナデ。外面は履位のヘラクスリ後ナデ。	内 7.000/4 外 1000/2	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	焼跡のみが見える。 茶色3377 灰
8住18	土師	炭	14.5	(5.8)	-	胴部は縁やかに内湾し、口縁部は強く膨らむ。 残存率：口縁部～胴部上半1/3	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はナデ。外面は履位のヘラクスリ後ナデ。	内 2.000/5 外 7.000/3	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	焼跡のみが見える。 茶色3377 灰
8住19	土師	炭	(18.1)	(6.3)	-	胴部は縁やかに内湾し、口縁部は強く膨らむ。 残存率：口縁部～胴部上半1/4	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はヘラクスリ。外面は履位のヘラクスリ。	内 7.000/4 外 2.000/1	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	良好	茶色3377 灰
8住20	土師	炭	-	(6.8)	7.5	底部は平底。胴部は縁やかに内湾する。 残存率：胴部下半～底部1/2	内外面及び底部はヘラクスリ。	内 1000/3 外 1000/3	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	良好	茶色3377 灰
8住21	土師	炭	26.0	26.5	12.8	口縁部は縁やかに内湾し、口縁部は縁やかに外反する。口縁部で上方に膨らむ。 残存率：口縁部～底部1/2	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はヘラクスリ。外面は履位のヘラクスリ後ナデ。	内 1000/4 外 7.000/4	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住22	土師	炭	(26.0)	(9.4)	-	胴部は縁やかに内湾し、口縁部は縁やかに外反する。 残存率：口縁部～胴部上半1/2	口縁部は内外面共にヒコナデ。内面はヘラクスリ。外面は履位のヘラクスリ。	内 7.000/4 外 1000/1	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰
8住23	右製 土師 炭	田代				長さ (10.0cm) 幅 (8.5cm) 高さ 6.9cm 重さ 640g		7.000/2				
8住24	土師 炭	平野 田	8.5	5.0	(4.7)	底部は縁やかに内湾し、口縁部は縁やかに内湾し、口縁部で上方に膨らむ。 残存率：口縁部～底部1/3	口縁部内外面及び外面はナデ。内面はヘラクスリ。	内 1000/3 外 2.000/3	長石 黄鉄 銅	長石 黄鉄 銅	普通	茶色3377 灰

9号住居跡

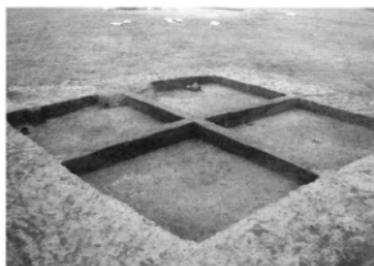


— 9号住居跡完掘全景 —

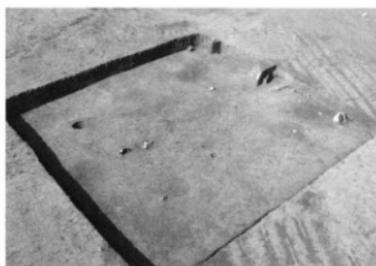
本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-6°-Eを指す。規模は東西、南北両軸ともに6.2mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね35cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、8層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構には比較的遺存状況の良いカマドも付設しており、今回の調査では両軸の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では出入り口付近とカマド付近を中心に顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には明瞭な周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約50cm～65cmを測り、床面から底部までの深さは浅いもので15cm、最深のもので60cmを測る。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットであると考えられるP-5の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な楕円形を呈し、規模が長軸120cm、短軸90cm、深さ80cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土範囲は遺構全体に及ぶが、特に遺構北側に纏まる傾向があり、その器種器形は土師器の坏類と小型の甕類及び瓶等である。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



第44図 9号住居跡



— 9号住居跡セクション—



— 9号住居跡遺物出土状況全景—



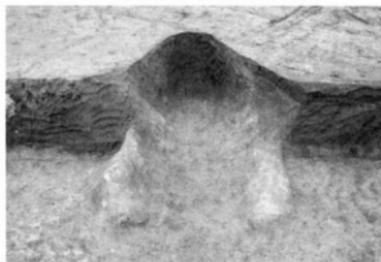
— 9号住居跡遺物出土状況①—



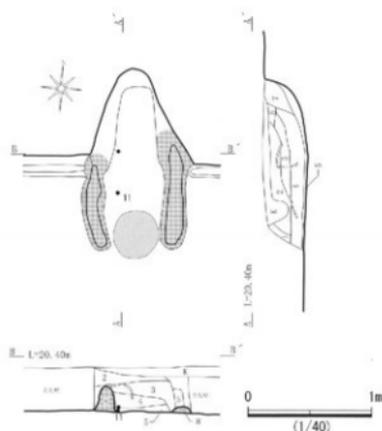
— 9号住居跡遺物出土状況②—



— 9号住居跡カマド遺物出土状況—



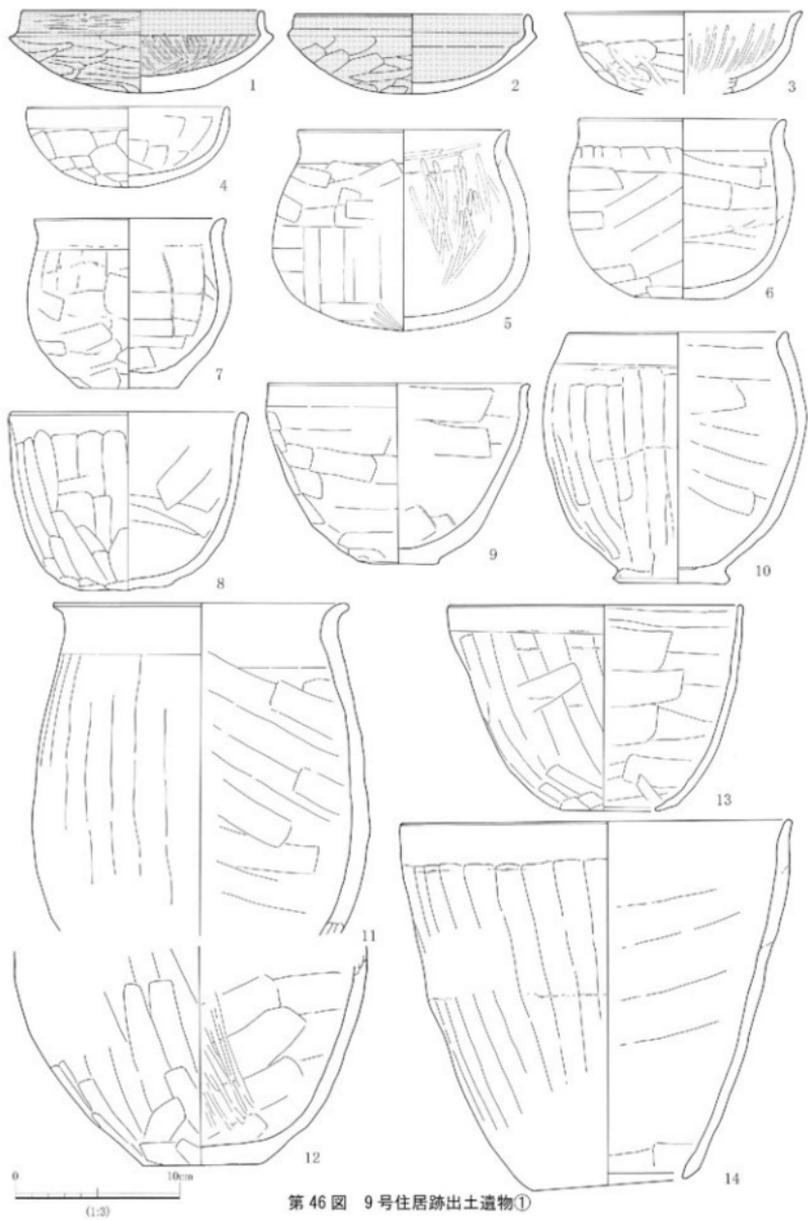
— 9号住居跡カマド完掘状況—



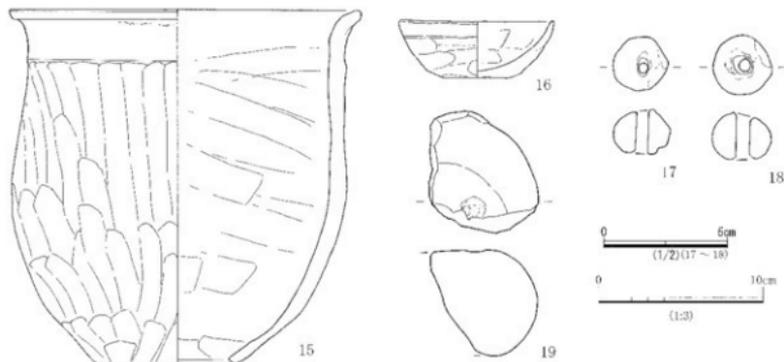
S1-09 カマド土物説明

1. 1BYR 5/2 灰黄褐色土 (柱石中)
2. 1BYR 5/4 に近い黄褐色土
3. 7. 6YR 5/3 に近い褐色土 炭土中
4. 7. 6YR 5/4 に近い褐色土 炭土ブロック多
5. 1BYR 5/4 に近い黄褐色土 コーム粒多、粘土粒少
6. 1BYR 4/6 褐色土 炭土中
7. 1BYR 4/4 褐色土 炭土中
8. 1BYR 5/2 に近い黄褐色土 カマド柱部

第45図 9号住居跡カマド



第46图 9号住居跡出土遺物①



第47図 9号住居跡出土遺物②

第10表 9号住居跡遺物観察表

遺物	種類	形状	口径	胴高	底径	器壁の特徴	器形の特徴	色調	出土	状況	備考
9号 1	土器	杯	14.6	5.1	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/5	口縁部外面はヨコナダ。口縁部内面はヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 2	土器	杯	14.3	4.9	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/5	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 3	土器	杯	14.3	(5.1)	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/5	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 4	土器	杯	12.2	5.0	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。残存率：口縁部～底面3/4	口縁部外面はヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 5	土器	鉢	(12.8)	12.2	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 6	土器	鉢	12.3	11.1	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 7	土器	鉢	(11.4)	(10.5)	6.0	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 8	土器	鉢	13.9	11.0	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 9	土器	鉢	15.5	11.1	4.9	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 10	土器	碗	13.2	15.0	6.3	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 11	土器	碗	(17.5)	(20.4)	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～胴部上1/3	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 12	土器	碗	(13.4)	7.2	-	底面に乳底。体部は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：底面～胴部下3/4	内面はヘラナダ。一部はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 13	土器	瓶	19.0	13.7	6.2	乳は厚く、底面は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 14	土器	瓶	23.3	22.4	8.8	乳は厚く、底面は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少
9号 15	土器	瓶	20.9	21.7	8.3	乳は厚く、底面は縦やかに内湾し、傾いれを有する。口縁部は縦やかに外反する。 残存率：底面～胴部上1/3	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外反はヘラナダ。外外面は乳底。	赤 7.774/2 黄 1.973/4	赤土	焼成	白色(37) 少 赤色(37) 少

9住	16	土製品 手探お	(9.2)	3.5	4.0	底部は平底、外部は縦やかに内底し、口縁部に空芯。 残存率：口縁部～底面2/3	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラナデ。	内 1005/3 外 1006/3	長石 黒 黒石 微	普通	軸長み頭が浅く。
9住	17	土製品 土玉				長さ 2.3cm 幅 2.2cm 厚さ 1.9cm 孔径 0.5 重さ 8.5g	指による整形。	1005/1	長石 微	普通	
9住	18	土製品 土玉				長さ 2.4cm 幅 2.4cm 厚さ 1.9cm 孔径 0.5cm 重さ 11.5g	指による整形。	1005/2	長石 微 黒石 微 石英 微	普通	
9住	19	石製品 磨石				長さ 7.5cm 幅 6.6cm 厚さ 6.5cm 重さ 41g		1005/2			

10号住居跡

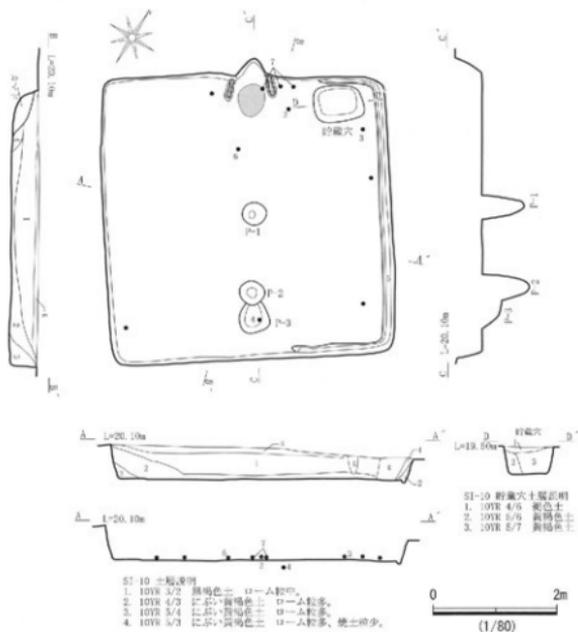


— 10号住居跡発掘全景 —

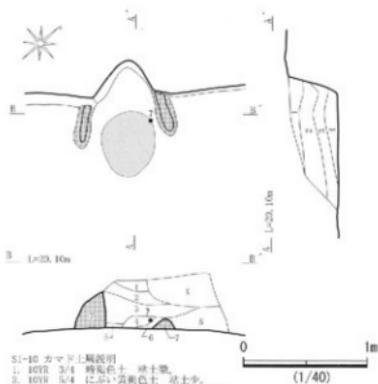
本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-35°-Wを指す。規模は北西、南東両軸ともに4.7mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね50cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、4層からなる自然堆積の塚相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両軸の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では全体的に顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には所々途切れはするものの浅い周溝が巡る。本遺構の床面では対角線上に配置された主柱穴と考えられるピットの検出は無く、遺構中心部にP-1を1基検出したのみである。P-1の平面形状は円形を呈し、規模は直径40cmを測り、床面から底部までの深さは70cmと深く穿たれる。その他のピットとして、出入り口施設に伴うピットであると考えられるP-2～P-3の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な長方形を呈し、規模が長軸80cm、短軸60cm、深さ50cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は少数ながら遺構全体に及び、その器種器形は土師器の坏類と小型の甕類及び若干の小型土製品である。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有していることから、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



— 10号住居跡遺物出土状況全景 —



第48图 10号住居跡



- SI-10 カマド土層説明
 1. H5R 3/4 黄褐色土 砂土層
 2. H5R 5/4 に近い黄褐色土 灰土少
 3. 7.5YR 5/4 に近い褐色土 砂土多・灰土少
 4. 7.5YR 5/4 褐色土 焼土粒少
 5. 7.5YR 4/6 褐色土 焼土粒多
 6. 5YR 4/7 赤褐色土 灰土多
 7. H5R 5/3 に近い黄褐色土 カマド跡部

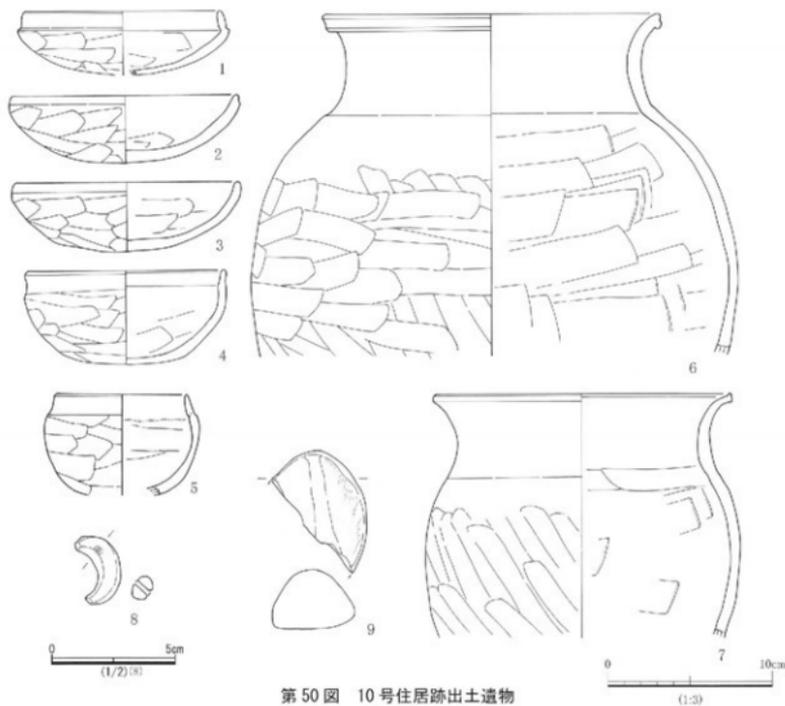
第49図 10号住居跡カマド



— 10号住居跡カマドセクション①—



— 10号住居跡カマドセクション②—



第50図 10号住居跡出土遺物

第11表 10号住居跡遺物観察表

遺構No.	種類	形状	口径	器高	底径	器底の特徴	器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
10住1	土師	杯	(11.8)	(4.6)	-	底部は大底。体部は緩やかに内湾し、内湾な縁を有する。口縁部は内湾する。 残存率：口縁部～体部1/4	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。	内 335E/1 外 2.335E/1	長石 多 黒鉛 多 黒鉛 少 黒鉛 少	普通	
10住2	土師	杯	13.6	4.3	-	底部は大底。体部は緩やかに内湾し、広い縁を有する。口縁部は直立する。 残存率：ほぼ完全	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。外面直線。	内 309E/3 外 2.309E/3	長石 多 黒鉛 多 黒鉛 少	普通	赤色スリ灰
10住3	土師	杯	13.1	4.3	-	底部は大底。体部は緩やかに内湾し、広い縁を有する。口縁部は直立する。 残存率：完形	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。	内 2.335E/3 外 2.335E/3	長石 多 黒鉛 多 黒鉛 少	普通	赤色スリ灰
10住4	土師	杯	11.8	6.8	-	底部は大底。体部は緩やかに内湾し、広い縁を有する。口縁部はほぼ直立する。 残存率：ほぼ完全	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。	内 2.335E/3 外 2.335E/4	長石 中 黒鉛 多 黒鉛 少	普通	赤色スリ灰
10住5	土師	小卑鉢	(7.8)	(6.2)	-	体部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。 残存率：口縁部～体部1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。	内 2.335E/1 外 2.335E/1	長石 少 黒鉛 多 黒鉛 少	普通	焼成不明が疑われる。
10住6	土師	甕	20.0	(26.9)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。口唇部で下方に溝が浅く掘られる。 残存率：口縁部～胴部上半分	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。口唇部から下部にかけては傾斜のヘラクスリ。	内 2.335E/1 外 2.335E/1	長石 中 黒鉛 多 黒鉛 少	普通	赤色スリ灰
10住7	土師	甕	17.6	14.9	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。口唇部で下方に溝が浅く掘られる。 残存率：口縁部～胴部上半分	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラクスリ状です。口唇部から下部にかけては傾斜のヘラクスリ。	内 1988E/2 外 2.335E/1	長石 少 黒鉛 多 黒鉛 少	普通	赤色スリ灰
10住8	土師	勾玉				長さ 2.9cm 幅 1.6cm 厚さ 0.8cm 重さ 4.8g		2.335E/2	長石 多 黒鉛 多	普通	
10住9	石師	磨石				長さ 7.8cm 幅 5.6cm 厚さ 3.6cm 重さ 150g	指による磨痕。	309E/3	長石 多 黒鉛 多	普通	

11号住居跡

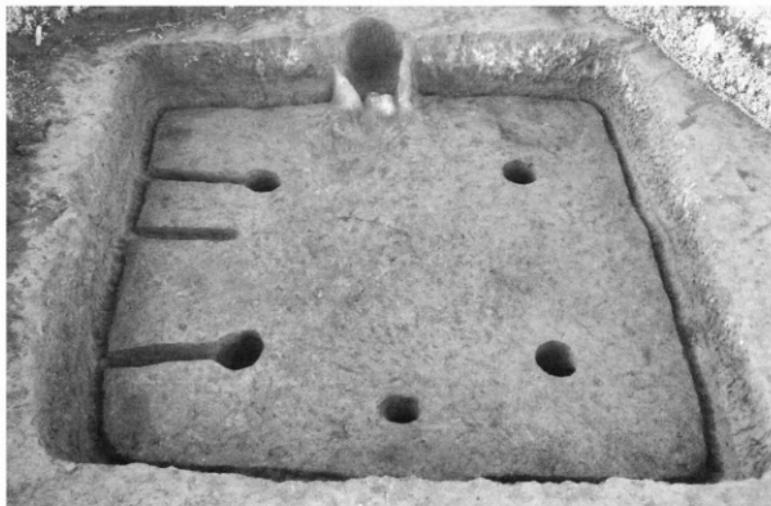
本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-34°-Wを指す。規模は東西、南北両軸ともに5.5mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね65cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、9層からなる明瞭な自然地積の様相を呈す。本遺構には遺存状況の良いカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出しており、この火床面直上では、カマド使用時の「灰」の堆積も観察する事ができた。床面では全体的に顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には明瞭な周溝が巡り、南西壁下では遺構中心部に向かい走る間仕切り溝3条も検出している。この住居跡の四方壁は直立せず、逆台形状に外側に開く特徴を有す。床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の支柱穴と考えられるビット4基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約30cm～50cmを測り、床面から底部までの深さは浅いもので50cm、最深のもので80cmを測る。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットであると考えられるP-5の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な楕円形を呈し、規模が長軸110cm、短軸80cm、深さ25cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は出入り口付近とカマド付近に集中する傾向があり、その器種器形は土師器の坏類と甕類及び甗等である。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有していることから、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



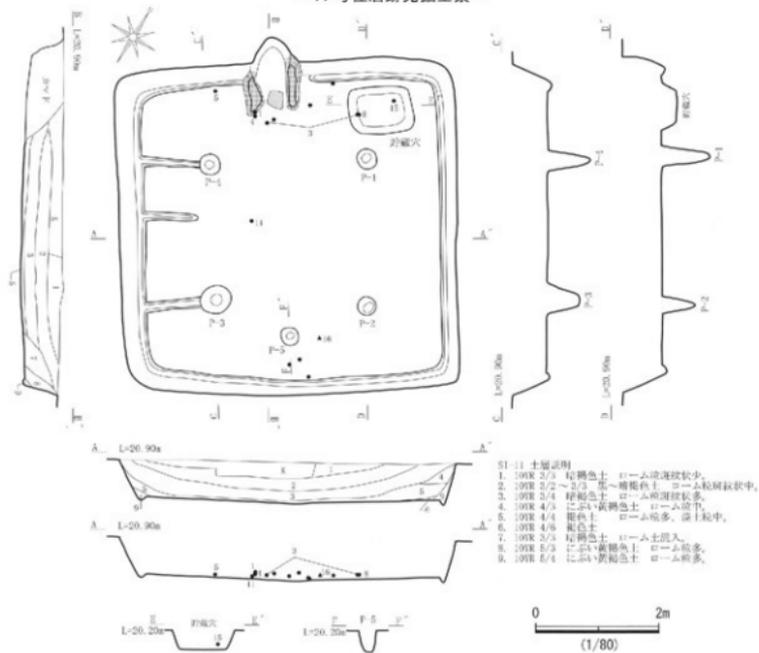
— 11号住居跡セクション—



— 11号住居跡遺物出土状況全景—



— 11号住居跡完掘全景 —



第 51 图 11号住居跡



— 11号住居跡カマドセクション—



— 11号住居跡カマド遺物出土状況—

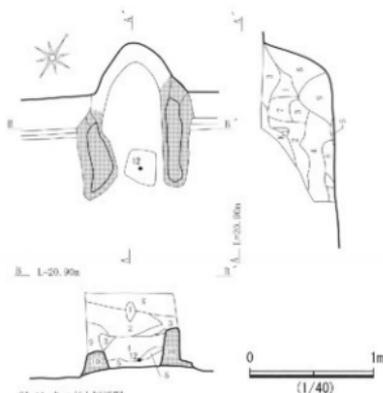


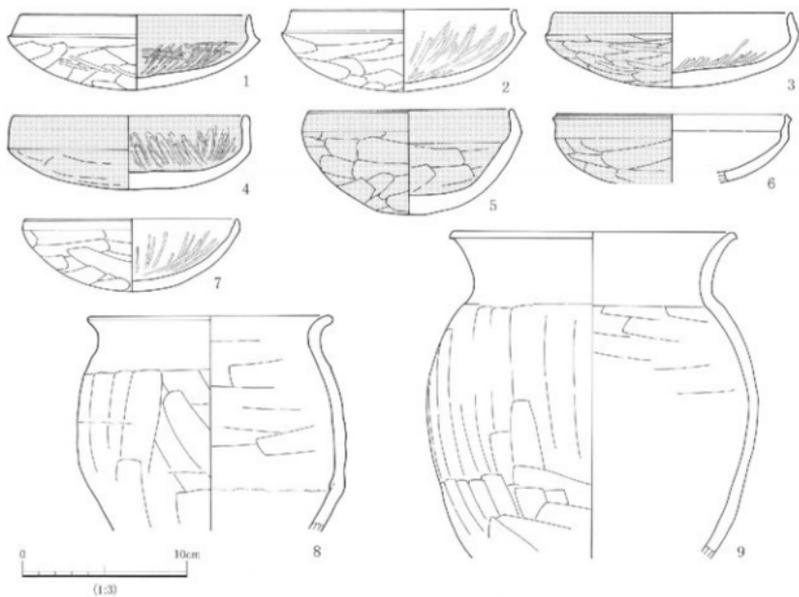
図 1-20. 90a

図 1-20. 90b

(1/40)

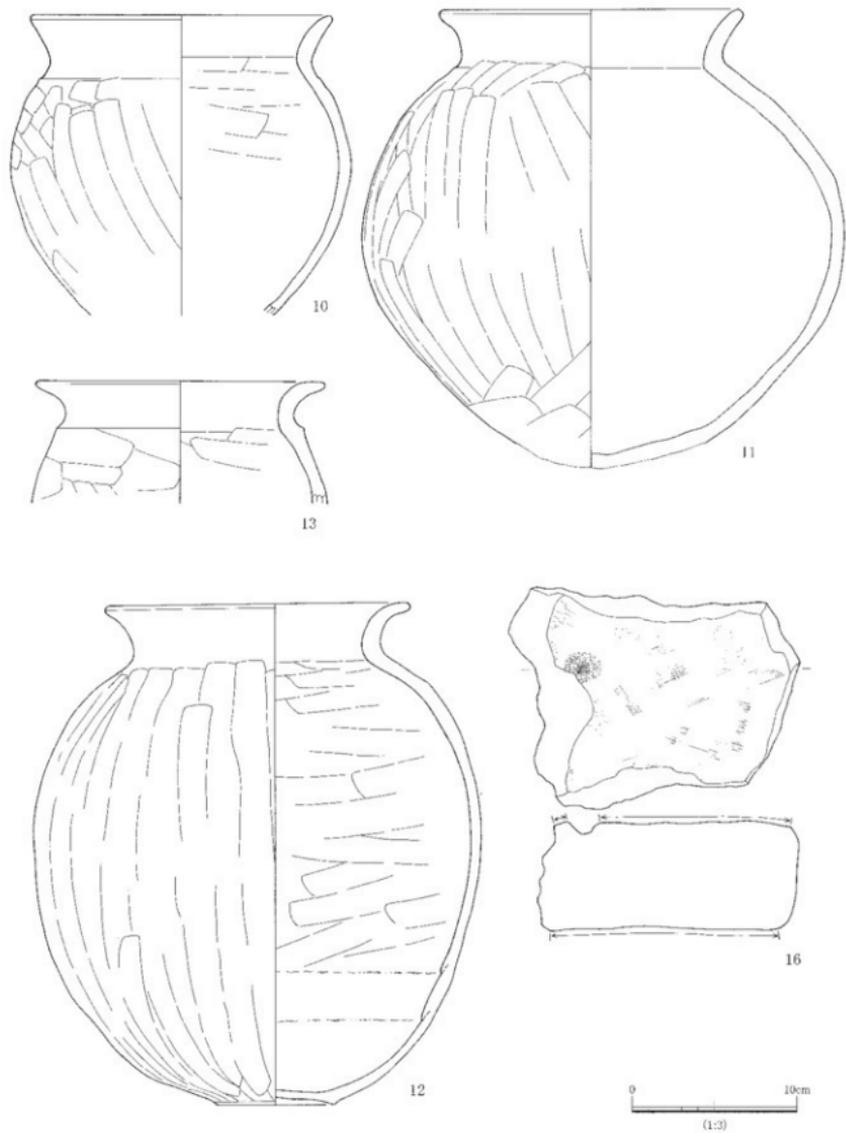
- ST-11 カマド土層説明
- | | | | | |
|----------|-----|-------|------|----------|
| 1. 199K | 4/3 | 12.00 | 黄褐色土 | 粘土少 |
| 2. 199K | 5/3 | 12.00 | 黄褐色土 | 粘土中 |
| 3. 7.59K | 5/3 | 12.00 | 褐色土 | 粘土中 |
| 4. 199K | 4/3 | 12.00 | 黄褐色土 | 粘土中 |
| 5. 199K | 4/3 | 12.00 | 黄褐色土 | 粘土中、炭化物少 |
| 6. 7.59K | 5/3 | 12.00 | 褐色土 | 粘土中 |
| 7. 7.59K | 5/4 | 12.00 | 褐色土 | 粘土多、炭少 |
| 8. 7.59K | 5/3 | 12.00 | 褐色土 | 粘土多 |
| 9. 199K | 5/3 | 12.00 | 黄褐色土 | 粘土中、粘土多 |
| 10. 199K | 5/3 | 12.00 | 黄褐色土 | 粘土中 |

第52図 11号住居跡カマド

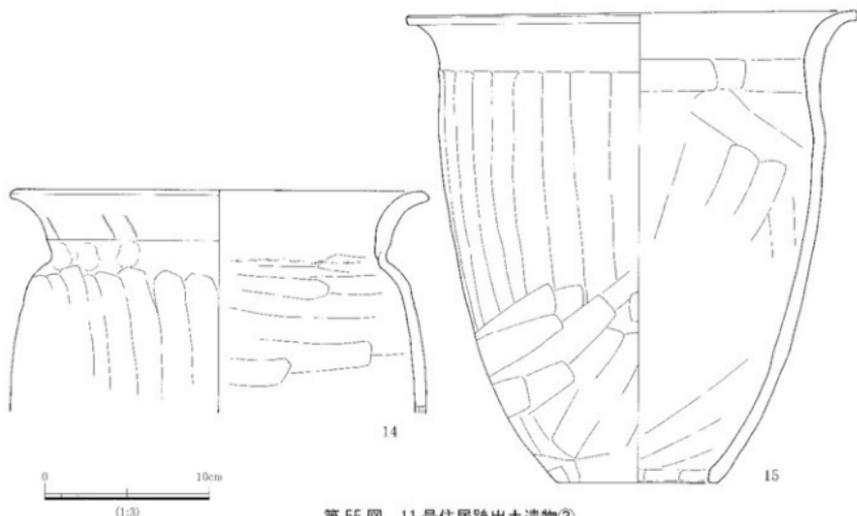


(1:3)

第53図 11号住居跡出土遺物①



第 54 图 11 号住居跡出土遺物②



第 55 図 11 号住居跡出土遺物③

第 12 表 11 号住居跡遺物観察表

遺物 番号	素材	器種	口径	器高	底径	用途	器壁の形状	器壁の特徴	重量	出土 位置	形状	備考
11 住 1	土質	杯	14.0	4.5			胴部は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/2 容 1,500/3	土中 表層	表層	黄色土質
11 住 2	土質	杯	13.7	5.1			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/4 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 3	土質	杯	14.4	4.7			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/4 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 4	土質	杯	14.1	4.6			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/4 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 5	土質	杯	12.5	6.4			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 6	土質	杯	14.3	4.2			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 7	土質	杯	13.0	4.5			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 8	土質	杯	14.5	4.3			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 9	土質	杯	16.8	4.0			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 10	土質	杯	18.0	4.8			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 11	土質	杯	17.9	28.0			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 12	土質	杯	17.8	30.6	7.0		底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質
11 住 13	土質	杯	17.9	7.3			底径は丸底、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は内湾する。底径は内径より若干大きい。底径は内径より若干大きい。	口縁部は内外面にヨコナダ、内面は丸底、外面はヘラケズリ。	内径 9.0/3 容 1,500/3	土中 表層	山形	黄色土質

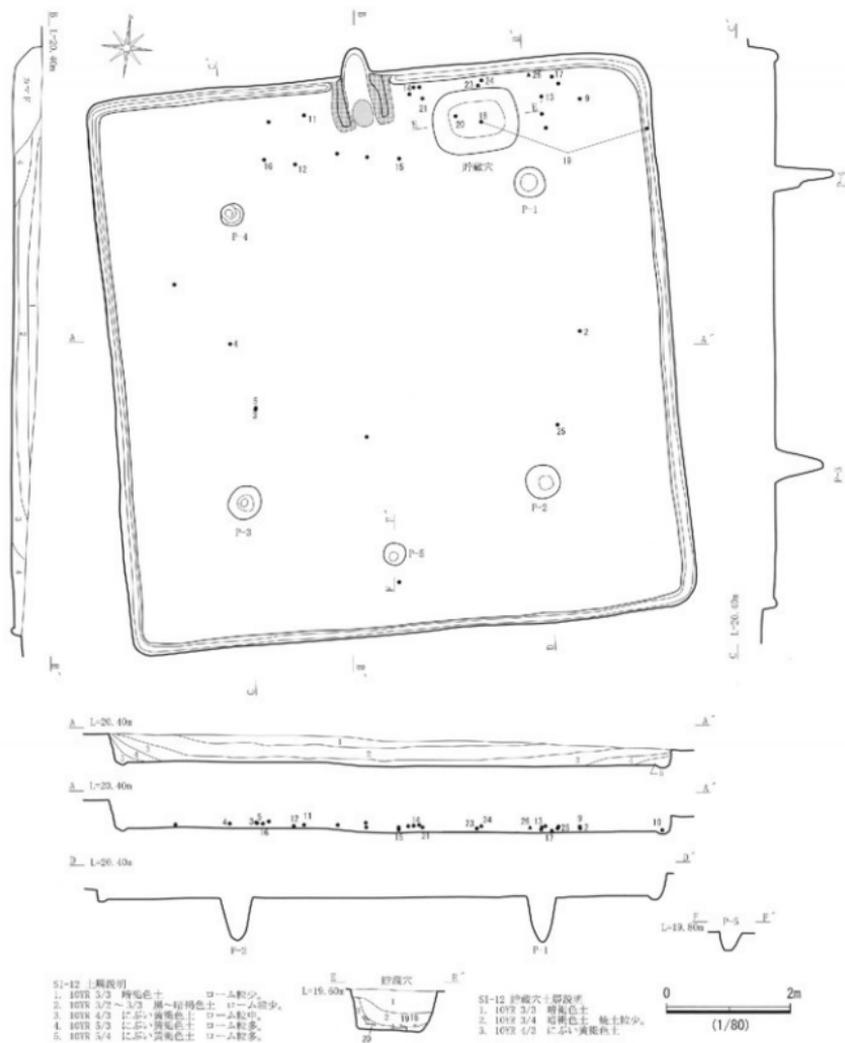
11住14	土師	甕	25.3	(13.7)	-	胴部は底やかに内湾し、口縁部は外反する。 残存率：口縁部～胴部上半1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラナデ、指痕あり。	内径 2.014m 外径 3.0067m	土石 中 磁石 少 石灰 少 陶粒 無	普通	編織の痕が残り、赤色の付着
11住15	土師	甕	27.0	28.6	0.6	口は平孔で胴部全体に及ぶ。胴部は底やかに内湾し、口縁部は外反する。 残存率：ほぼ完形	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は上部は編織のヘラナデ、下部は倒位のヘラナデ、下部には底位のヘラナデ。	内径 2.0305m 外径 3.0165m	土石 中 磁石 少 石灰 少 陶粒 無	普通	
11住18	石部	礎石				長さ 13.7cm 幅 17.6cm 厚さ 6.7cm 重さ 2200g		1.00003			

12号住居跡



— 12号住居跡発掘全景 —

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-11°Wを指す。規模は東西、南北両軸ともに9.1mを測り、本遺跡では1号住居跡に続き一辺の長さが9mを超える大型の住居跡となる。遺構確認面から床面までの深さは概ね40cmを測り、覆土の遺存状況は比較的良好で、5層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構には比較的遺存状況の良いカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では全体的に弱い硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には、所々途切れるものの浅めの周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約40cm～60cmを測り、床面から底部までの深さは概ね80cmと深く穿たれる。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットであると考えられるP-5の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な楕円形を呈し、規模が長軸140cm、短軸110cm、深さ70cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土範囲は遺構全体に及ぶが、特にカマド及び貯蔵穴周辺に纏まる傾向があり、その器種器形は土師器の坏類と大小の甕類及び甔等であり、若干ではあるが小型の土製品（土玉）の出土もある。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



第 56 图 12 号住居跡



— 12号住居跡セクション—



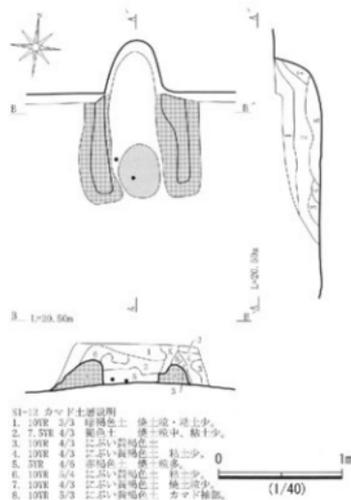
— 12号住居跡遺物出土状況全景—



— 12号住居跡遺物出土状況—



— 12号住居跡貯蔵穴遺物出土状況—



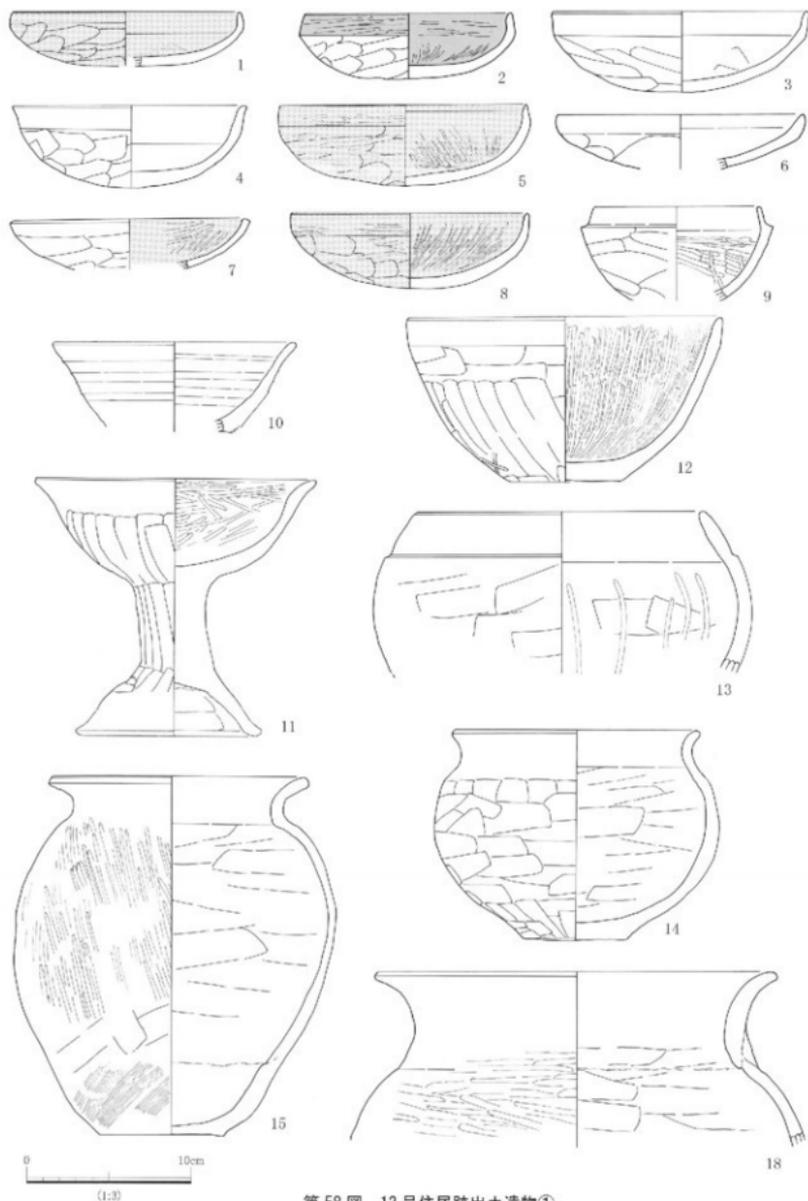
第57図 12号住居跡カマド



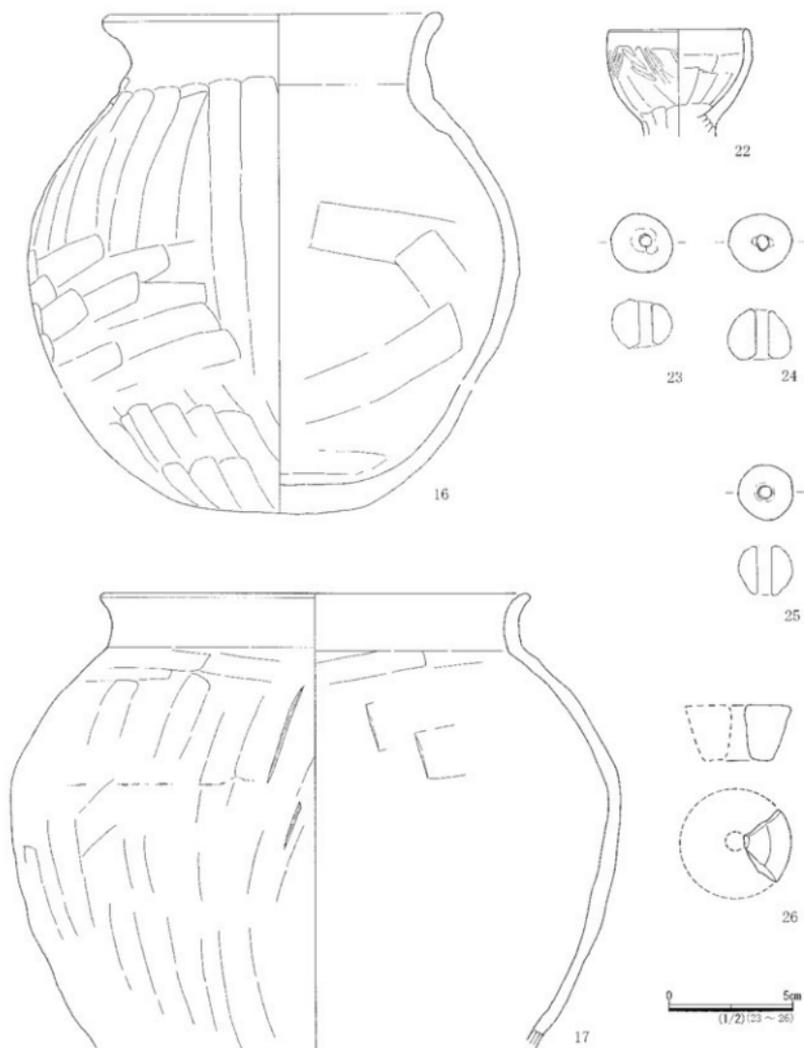
— 12号住居跡カマド遺物出土状況①—



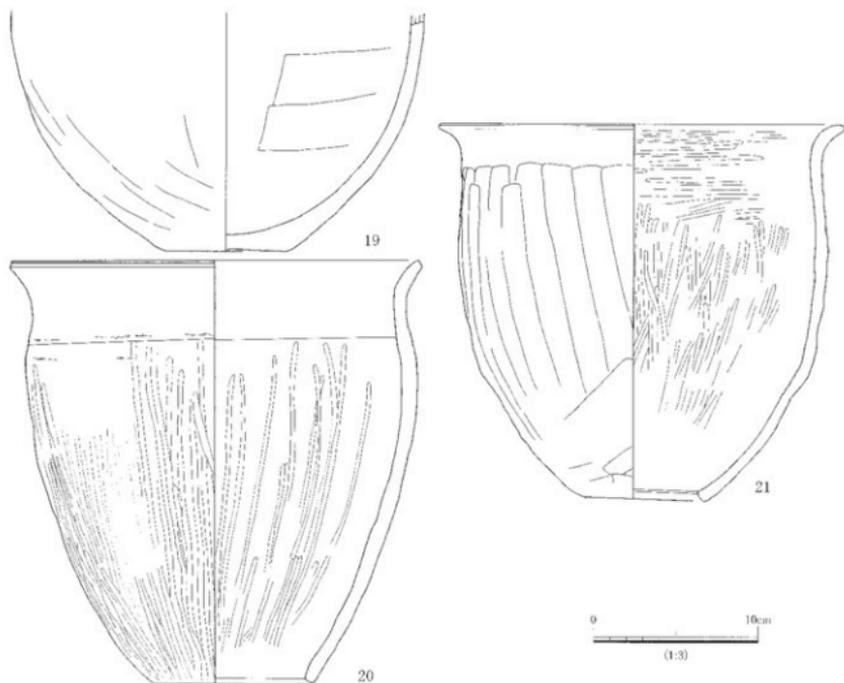
— 12号住居跡カマド遺物出土状況②—



第 58 图 12 号住居跡出土遺物①



第59图 12号住居跡出土遺物②



第 60 図 12号住居跡出土遺物③

第 13 表 12号住居跡遺物観察表

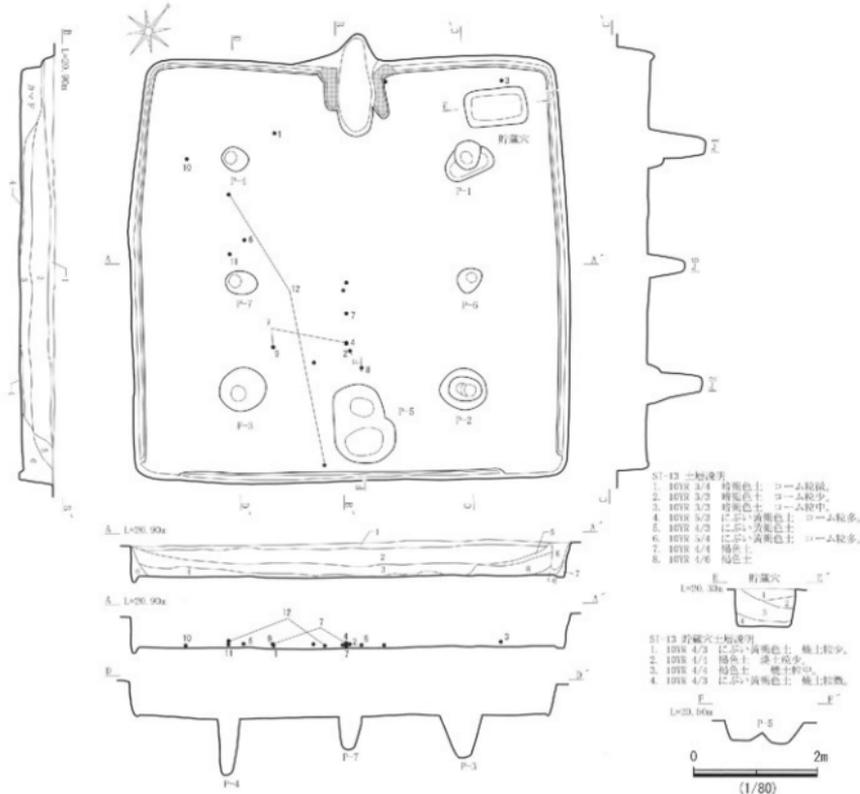
遺物	No	種類	器種	口径	器高	底径	底径	底径	器底の特徴	器形の特徴	重量	胎土	施装	備考	
12住	1	土師	杯	13.9	3.3	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ兼ナデ、内外両面黒色地肌。	内 5.015/1 外 1.930/2	長石 緑砂 石質	少 少 少	普通	赤色337 灰
12住	2	土師	杯	12.6	4.0	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。器形不明。	口縁部外面はミガキ、口縁部内面はヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ兼ナデ、外面一部球形、内面不整形。	内 5.015/2 外 1.010/2	長石 緑砂 赤炭 黒炭	中 少 少 少	普通	赤色337 灰
12住	3	土師	杯	15.7	5.0	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ。	内 7.530/4 外 1.930/4	長石 緑砂 石質	少 中 少	普通	赤色337 灰
12住	4	土師	杯	14.2	5.1	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ。	内 7.530/2 外 1.930/4	長石 緑砂 赤炭 黒炭	少 中 少 少	普通	赤色337 灰
12住	5	土師	杯	15.0	5.1	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ兼ナデ、内外両面黒色地肌。	内 7.010/2 外 1.900/2	長石 緑砂 石質	少 中 少	普通	赤色337 灰
12住	6	土師	杯	(14.8)	(3.2)	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ。	内 7.530/4 外 1.010/2	長石 緑砂 石質	少 中 少	普通	赤色337 灰
12住	7	土師	杯	(13.9)	(3.2)	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ。内面黒色地肌。	内 5.015/1 外 7.530/2	長石 緑砂 赤炭 黒炭	少 中 少 少	普通	赤色337 灰
12住	8	土師	杯	14.5	4.7	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ兼ナデ、一部ミガキ、内外両面黒色地肌。	内 7.530/4 外 7.530/1	長石 緑砂 赤炭 黒炭	少 中 少 少	普通	赤色337 灰
12住	9	土師	杯	(9.9)	(5.8)	-	-	-	底面は丸底、外部は縁やかに内湾し、強い稜を有する。口縁部にはほぼ残存せず。口縁部一部欠損。	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はミガキ、外面はヘラケズリ。	内 7.530/3 外 7.530/3	長石 緑砂 赤炭 黒炭	少 中 少 少	普通	赤色337 灰

12件10	1軒	表石 瓦葺	(14.9)	(5.5)	-	内部は直線的に開き、口縁部は僅かに残存す。口縁部～底部1/3	内面はロタコ納骨。外周上部はロタコ納骨、下部はロタコヘラクスリ。	円 7.508/5 外 7.508/4	長石 赤石 黒石 白石 黒石 赤石	少 多 多 少 多 少	普通	輪溝が浅く残る。
12件11	1軒	瓦葺	17.0	15.8	(10.6)	外部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに残存す。口縁部は緩やかにラッパ状に残存す。口縁部～底部6/7	口縁部外周はロタコ。内面はロタコ。底部から縦溝はヘラクスリ、内部内面はヘラクスリ。	円 1086/4 外 7.508/5	長石 黒石 赤石 黒石 赤石 黒石	多 多 多 少 少 少	普通	輪溝が浅く残る。 赤色ロタコ
12件12	1軒	瓦葺	19.0	10.0	6.6	底部は平坦。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/2	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。	円 7.508/3 外 7.508/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	少 少 少 少 少	普通	赤色のロタコ
12件13	1軒	瓦葺	(17.3)	(9.9)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに残存す。口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周はヘラクスリ。	円 1085/4 外 7.508/5	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	多 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ
12件14	1軒	瓦葺	14.6	13.0	6.2	底部は平坦。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/2	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周はヘラクスリ。	円 7.508/4 外 7.508/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 少 少 少 少	普通	赤色のロタコ
12件15	1軒	瓦葺	(15.1)	(2.0)	7.4	胴部は平坦。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部7/8	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。	円 1090/3 外 1090/3	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 少 少 少 少	普通	赤色のロタコ 輪溝が浅く残る。
12件16	1軒	瓦葺	19.6	(30.6)	-	底部は平坦。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。	円 7.508/4 外 7.508/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 少 少 少 少	普通	赤色のロタコ
12件17	1軒	瓦葺	(26.4)	(28.0)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/4	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。	円 1085/4 外 1085/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ 輪溝が浅く残る。
12件18	1軒	瓦葺	24.0	(18.7)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/3	口縁部は内外両面にロタコ。内面はヘラクスリ。外周は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。	円 1085/4 外 1085/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 少 少 少 少	普通	輪溝が浅く残る。
12件19	1軒	瓦葺	-	(14.1)	7.3	底部は平坦。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/2	内外両面にヘラクスリ。	円 7.508/3 外 7.508/2	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 少 少 少 少	普通	赤色のロタコ
12件20	1軒	瓦葺	24.7	25.9	9.3	口縁部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部4/5	口縁部は内外両面にロタコ。内外両面にロタコ。	円 1085/4 外 1085/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 少 少 少 少	普通	輪溝が浅く残る。 赤色のロタコ
12件21	1軒	瓦葺	(24.1)	22.9	6.9	口縁部は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。口縁部～底部1/3	口縁部外周はロタコ。内面はロタコ。外周は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外残す。	円 2.975/6 外 2.975/6	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ
12件22	1軒	瓦葺	8.5	(6.5)	-	内部は直線的に開き、口縁部は僅かに残存す。口縁部～底部4/5	内外両面にヘラクスリ。	円 1090/4 外 2.975/4	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	少 少 少 少 少	普通	赤色のロタコ
12件23	土製	土土				高さ 2.3cm 幅 2.1cm 長さ 2.1cm 厚さ 0.5cm 底径 0.9cm	指による彫形。	2.085/6	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	多 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ
12件24	土製	土土				高さ 2.9cm 幅 2.1cm 長さ 2.1cm 厚さ 0.6cm 底径 0.7cm	指による彫形。	31.65/6	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	多 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ
12件25	土製	土土				高さ 2.3cm 幅 2.3cm 長さ 2.2cm 厚さ 0.6cm 底径 0.7cm	指による彫形。	2.085/6	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	中 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ
12件26	土製	土土				高さ 4.3cm 幅 4.3cm 長さ 2.3cm 厚さ 0.7cm 底径 1.0cm	ヘラクスリ。	1.211/1	長石 赤石 黒石 赤石 黒石	多 多 多 少 少	普通	赤色のロタコ

1 3号住居跡

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN38°Wを指す。規模は北東、南西両側ともに7.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね60cmを測り、覆上の遺存状況は良好で、8層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では内袖の一部と、築き口と思われる位置より弱く赤色還元した火床面及び火床面の掘り方を検出している。床面では出入り口付近からカマド前面までの動線上に広がる顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には所々途切れはするものの明瞭な周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基と、左記主柱穴より一回り程直径の小さいP-6～P-7の補助柱穴と思われるビット2基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも不整な円形を呈し、規模はP-1～P-4の直径が約50cm～80cm、P-6～P-7の直径が40cm～50cmを測り、床面から底部までの深さは浅いもので60cm、最深のものでは90cmと深く穿たれている。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットであると考えられるP-5の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が長

方形を呈し、規模が長軸 100 cm、短軸 60 cm、深さ 80 cm を測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土範囲は遺構全体に及ぶが、特に遺構南側に纏まる傾向があり、その器種器形は土師器の甕類が主体となるが、若干の坏類も出土している。これらの遺物は 6 世紀終末～7 世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



第 61 図 13 号住居跡



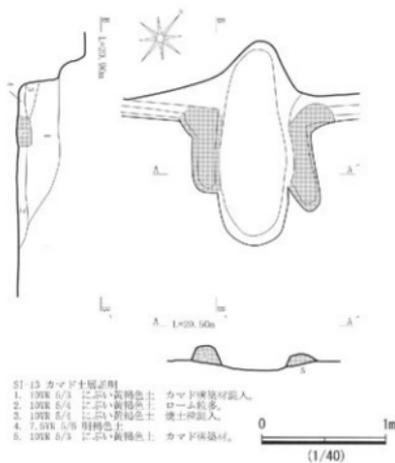
— 13 号住居跡セクション —



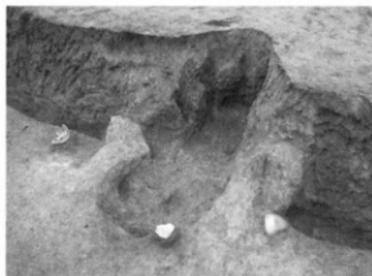
— 13 号住居跡遺物出土状況全景 —



— 13号住居跡完掘全景—



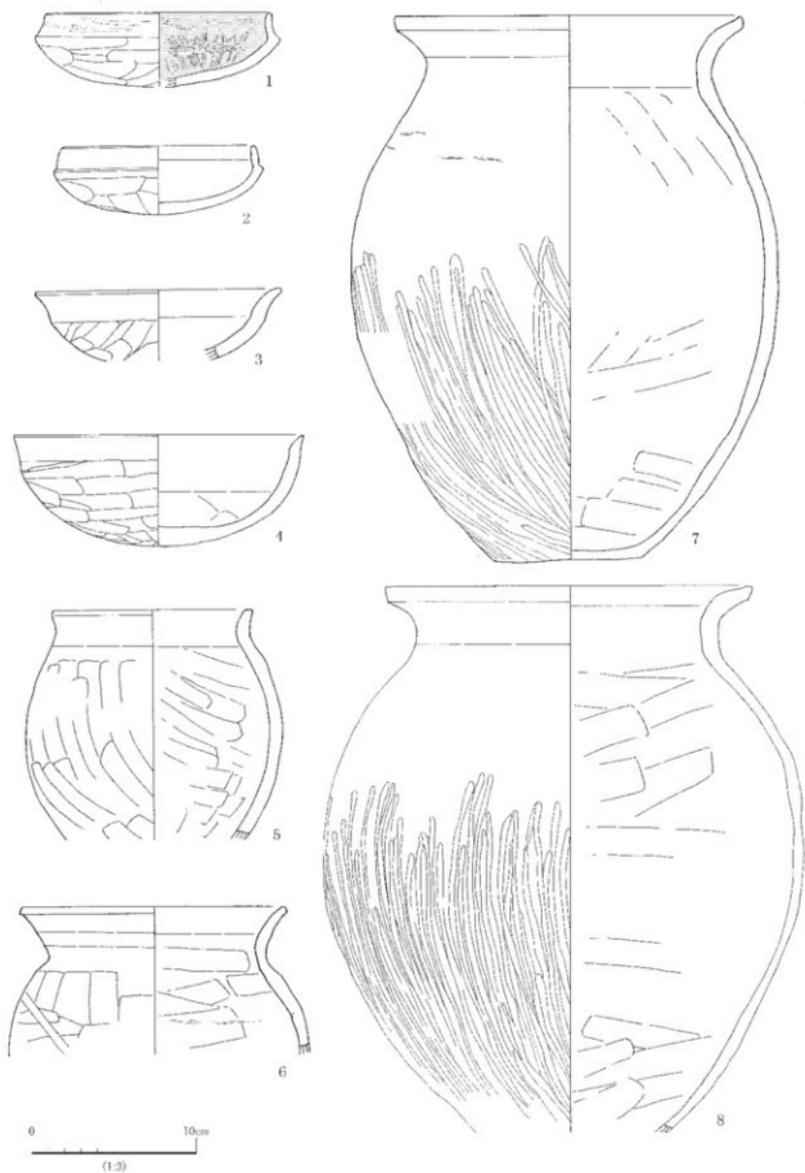
第 62 図 13号住居跡カマド



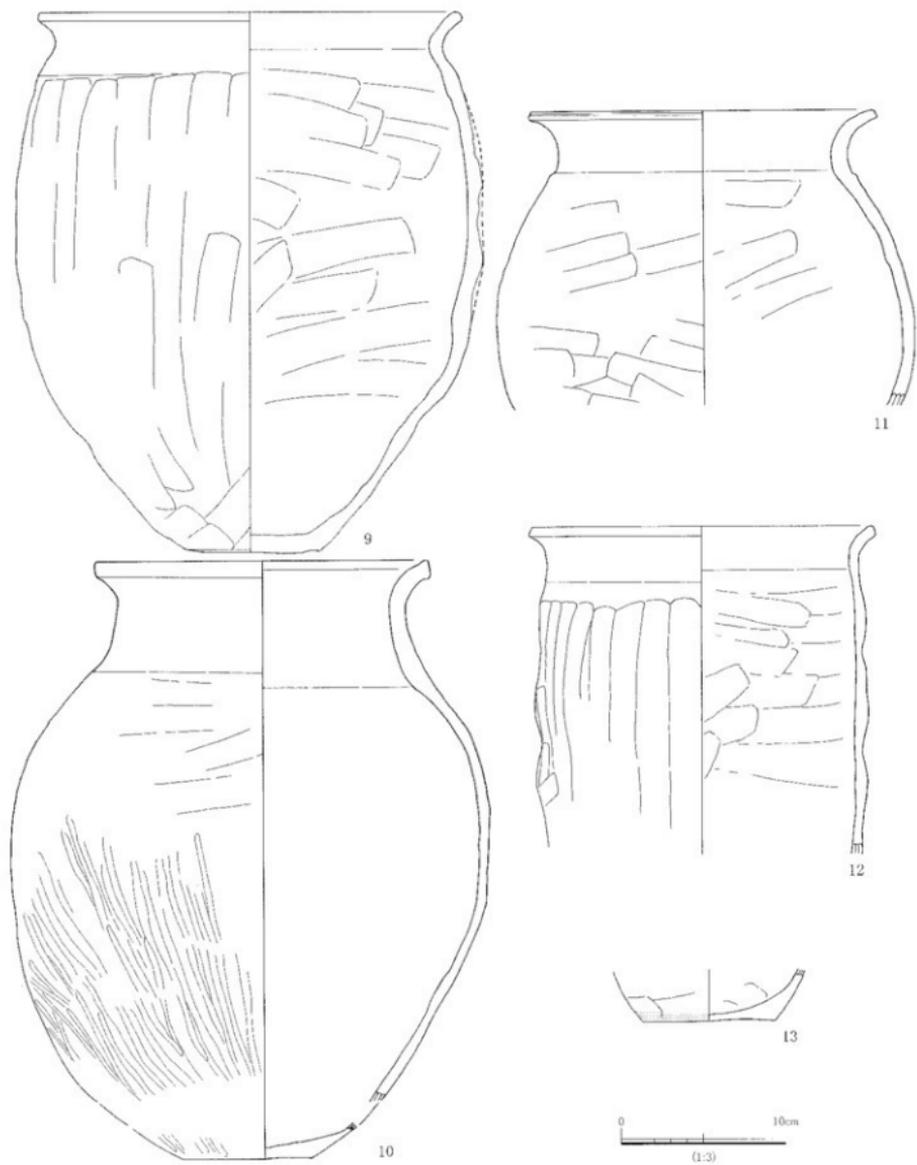
— 13号住居跡カマド完掘状況①—



— 13号住居跡カマド完掘状況②—



第 63 图 13 号住居跡出土遺物①



第 64 图 13 号住居跡出土遺物②

第14表 13号住居跡遺物観察表

遺構 No.	種類	形状	口径	径高	底径	器身の特徴	器身の修復	色澤	粘土	状況	備考
13住 1	土師	杯	14.7	(4.6)	-	底面は平底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。口縁部は厚さ約1.5cm。残存率：口縁部～底部3/4	口縁部は内外面共にヨコナデ、一部はヘラナデ。内面はヘラナデ。外面はヘラナデ。内面黒色光沢。	内 33.9 外 1000/3	長石 少 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 少
13住 2	土師	杯	11.8	4.3	-	底面は平底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに内湾する。残存率：口縁部～底部1/4	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラナデ後ナデ。	内 7,000/4 外 2,000/3	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 3	土師	杯	(13.0)	(4.3)	-	底面は丸底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに内湾する。残存率：口縁部～底部1/4	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラナデ付焼。内外一部スス付焼。	内 7,000/3 外 2,000/3	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 4	土師	杯	17.6	6.8	-	底面は平底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに内湾する。残存率：口縁部～底部1/4	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面はヘラナデ。	内 1000/1 外 2,000/3	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	良好	赤色17 散
13住 5	土師	甕	12.0	(14.1)	-	頸部は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：口縁部～頸部下半3/5	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は斜位のヘラナデ後ナデ。	内 7,000/2 外 800/3	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 6	土師	甕	15.8	(9.1)	-	頸部は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：頸部～腹部上半3/5	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ。	内 800/3 外 7,000/3	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	軸位が横 が横。
13住 7	土師	甕	21.0	33.3	8.0	底面は平底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。口縁部で厚かに上方に腫まされる。残存率：頸部～腹部	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ。	内 1000/3 外 7,000/2	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 8	土師	甕	22.2	33.3	-	頸部は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：頸部～腹部	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ。	内 7,000/3 外 1000/3	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 9	土師	甕	25.1	33.2	8.1	底面は平底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：口縁部～底部3/4	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。一部黄鉄。外面は縦位のヘラナデ。一部黄鉄。	内 2,000/3 外 1000/4	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 10	土師	甕	20.0	(36.3)	(7.8)	底面は平底。器身は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：口縁部～底部4/5	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ。下部はスス。	内 1000/4 外 1000/5	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 11	土師	甕	20.5	(18.0)	-	頸部は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：口縁部～腹部上半1/3	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ。	内 7,000/3 外 7,000/4	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 12	土師	甕	(20.5)	(20.1)	-	頸部は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：頸部～腹部上半1/2	口縁部は内外面共にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ。	内 5000/4 外 7,000/4	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	赤色17 散
13住 13	土師	甕	-	(3.2)	8.0	底面は平底。頸部は縦やかに内湾し、口縁部は縦やかに外反する。残存率：頸部1/2	内面はヘラナデ。外面は縦位のヘラナデ後ナデ。底部黒色光沢。	内 1000/3 外 5000/5	長石 中 緑石 少 黄鉄鉱 少	普通	

14号住居跡



— 14号住居跡完掘全景 —

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-34°-8を指す。規模は北東、南西両軸ともに8.0mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね60cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、9層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構には比較的遺存状況の良いカマドも付設しており、今回の調査では高袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面及び火床面の掘り方を検出している。床面では出入り口付近からカマド前面までの動線上に拡がる顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には明瞭な周溝が巡り、南西壁下では遺構中心部に向かい走る間仕切り溝3条も検出している。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるピット4基も検出している。各ピットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約50cm～60cmを測り、床面から底部までの深さは概ね70cmを測る。その他のピットとして、その検出位置から用途及び本遺構に伴うものかは不明のP-5も検出している。また、カマド横東側には平面形状が不整な楕円形を呈し、規模が長軸130cm、短軸80cm、深さ60cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は出入り口付近とカマド付近に集中する傾向があり、その器種器形は土師器の甕類と若干の埴類である。また、覆土下層から床面にかけて状態の良い炭化材も出土している。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



— 14号住居跡セクション—



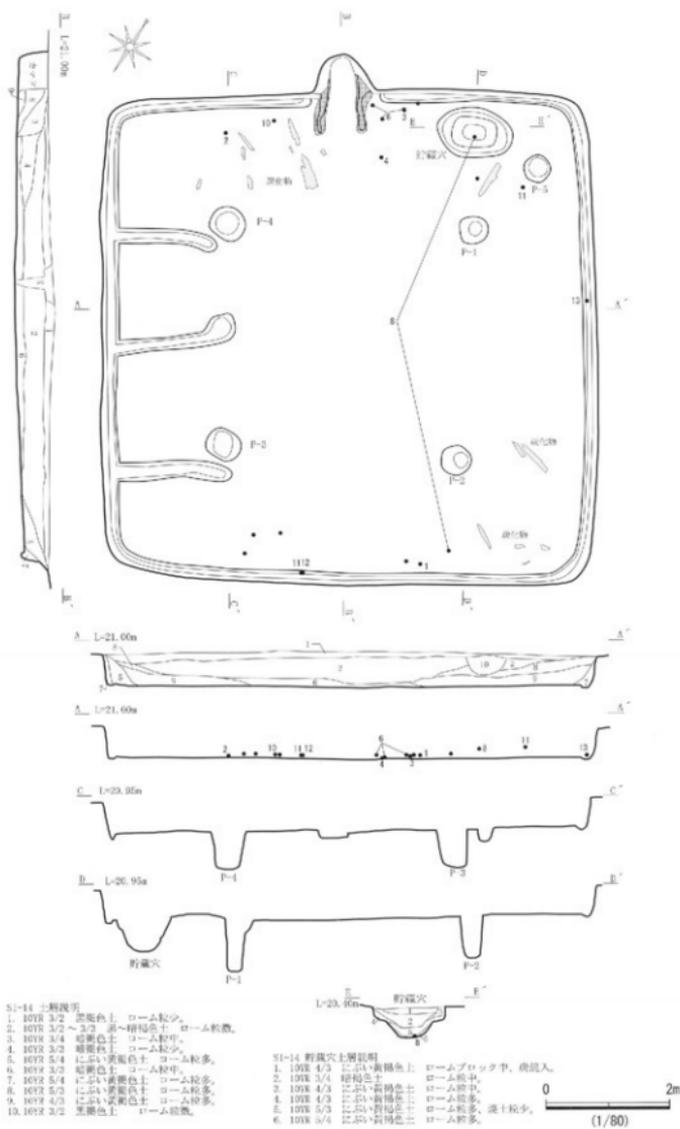
— 14号住居跡遺物出土状況全景—



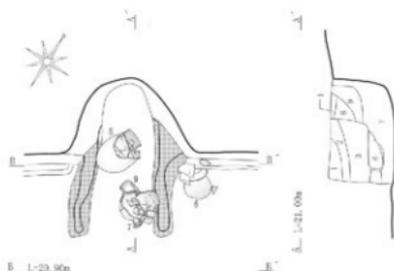
— 14号住居跡遺物出土状況—



— 14号住居跡貯蔵穴遺物出土状況—

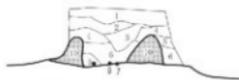


第 65 図 14号住居跡

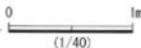


B. L=29.90m

A. L=21.00m



- ST-14 カマド土層説明
1. 10YR 3/3 厚層粘土 ローム粒少、粘土多。
 2. 10YR 4/3 粘土・炭粉粘土 ローム粒中、粘土少。
 3. 10YR 4/3 粘土・炭粉粘土 粘土中。
 4. 10YR 4/3 粘土・炭粉粘土 ローム粒・粘土少。
 5. 10YR 4/3 粘土・炭粉粘土 粘土多。
 6. 10YR 4/3 粘土・炭粉粘土 炭土粒少、粘土多。
 7. 10YR 4/3 粘土・炭粉粘土 炭土粒・粘土多。
 8. 7.5YR 4/3 褐色土 炭土粒、粘土中、炭化物少。
 9. 7.5YR 3/3 暗褐色土 炭土粒・粘土・炭化物少。
 10. 10YR 8/3 粘土・炭粉粘土 カマド跡地。



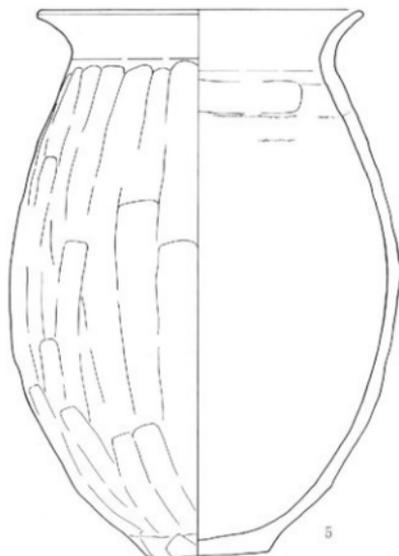
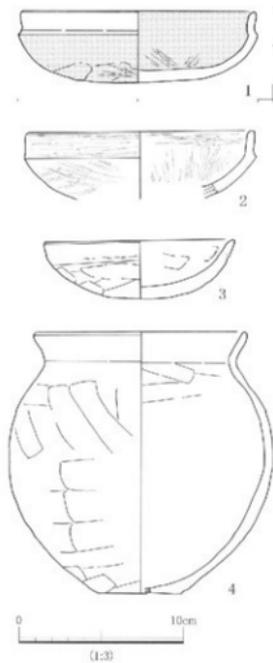
第66図 14号住居跡カマド



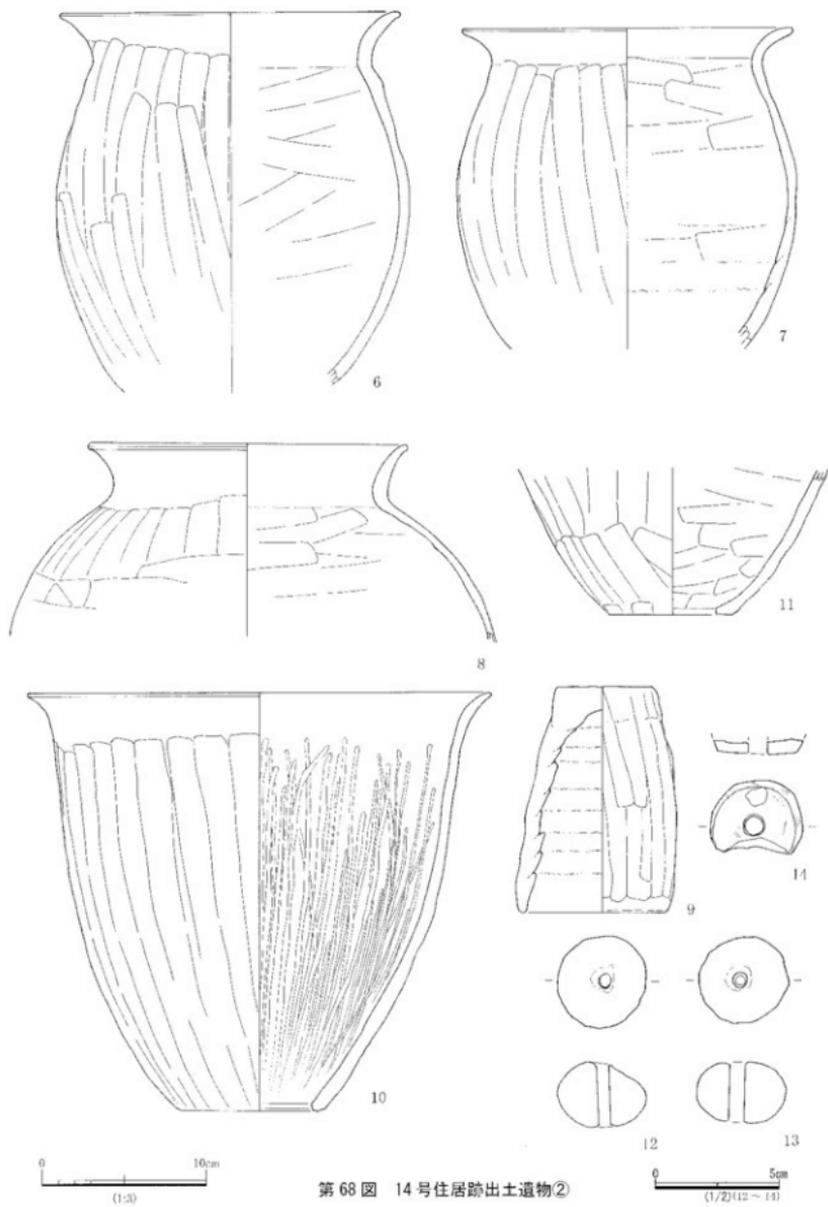
— 14号住居跡カマドセクション—



— 14号住居跡カマド遺物出土状況—



第67図 14号住居跡出土遺物①

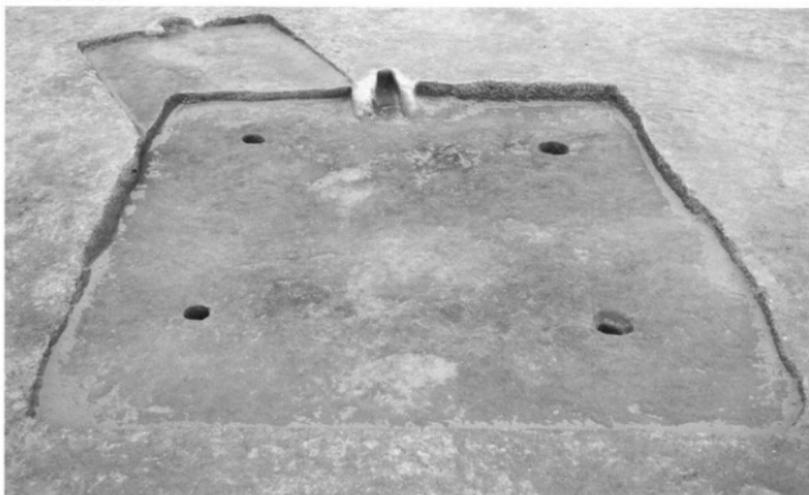


第 68 图 14 号住居跡出土遺物②

第15表 14号住居跡遺物観察表

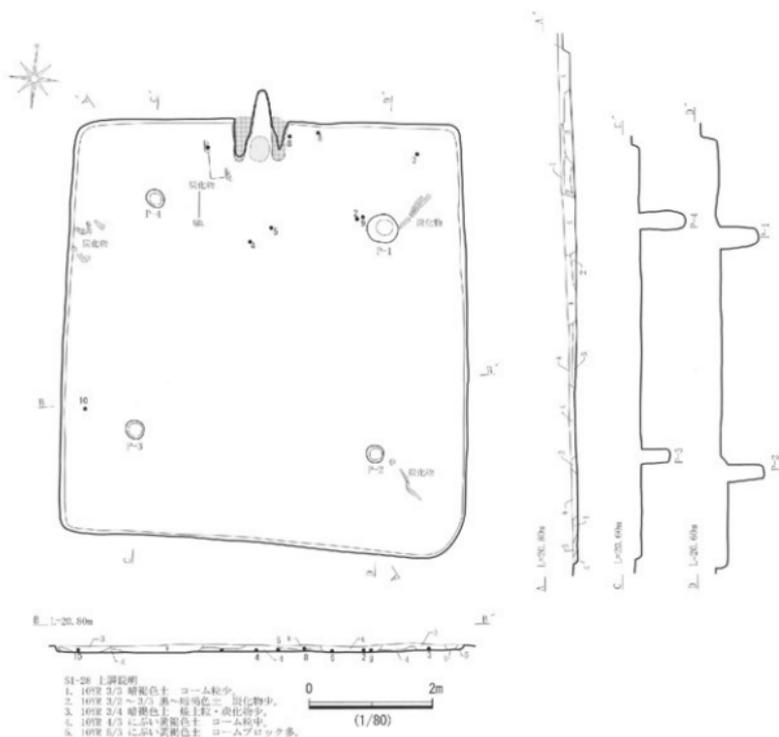
遺物No	種類	品名	寸法	数量	出土	観察の特徴	形状の特徴	色調	粘土	他属	備考
14住1	土師	平	14.2	4.4	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、頸部は緩やかに内湾し、口縁部はほぼ直線的。内面はほぼ丸底。残存率：口縁部～底面2/3	口縁部内面から外周下部にかけて器面剥落。内面は5.7cm。外周下部は内外面黒色炭化。	内 2.918/6 外 3.086/1	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住2	土師	平	13.8	(4.6)	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、頸部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的。残存率：口縁部～底面2/3	口縁部及び内外面黒化。	内 3.095/3 外 3.086/3	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住3	土師	平	11.5	3.6	-	底面は丸底。体部は緩やかに内湾し、頸部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的。残存率：口縁部～底面2/3	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面はヘラクスリ後ナダ。	内 3.095/3 外 3.113/2.1	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	不良	輪切り痕 が残る。
14住4	土師	葉	12.7	16.0	5.0	底面は平底。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は横粒のヘラクスリ。	内 3.114/3 外 3.114/2	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	不良	赤色ロ打 痕
14住5	土師	葉	19.2	33.3	7.9	底面は平底。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。内面は丸底。残存率：口縁部～底面2/3	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は横粒のヘラクスリ。	内 3.114/3 外 3.114/2	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	不良	輪切り痕 が残る。 赤色ロ打 痕
14住6	土師	葉	20.3	(23.3)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部下半3/4	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は横粒のヘラクスリ。	内 3.114/3 外 3.084/2	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住7	土師	葉	(19.7)	(19.7)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：口縁部～胴部下半1/3	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は横粒のヘラクスリ。	内 3.084/3 外 3.084/4	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住8	土師	葉	18.9	(11.9)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外反する。残存率：胴部～胴部下半4/5	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は横粒のヘラクスリ。	内 3.084/3 外 2.914/2	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住9	土師 葉	(丸脚)	8.6	13.9	5.8	底面は平底。胴部は緩やかに内湾し、頸部は丸底。残存率：完形	内面は輪切り痕を明確に残す。外周はヘラクスリ。	内 2.914/3 外 2.914/4	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住10	土師	瓶	27.8	25.2	8.3	口縁部は丸底。胴部は緩やかに内湾し、頸部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。残存率：ほぼ完形	口縁部は内外面共にヨコナダ。内面はヘラナダ。外面は横粒のヘラクスリ。	内 3.084/3 外 2.914/4	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住11	土師	瓶	-	(8.0)	6.9	口縁部は丸底。胴部は緩やかに内湾し、頸部は丸底。残存率：胴部下半～底面1/2	内面はヘラナダ。外周は横粒のヘラクスリ。	内 3.084/3 外 2.914/3	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	赤色ロ打 痕
14住12	土師	土瓦	長さ 3.5cm 幅さ 2.5cm 厚さ 31.4g	幅 3.7cm 厚さ 0.6cm	-	-	楕円による整形。	314/3	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	-
14住13	土師	土瓦	長さ 3.5cm 幅さ 2.5cm 厚さ 32.0g	幅 3.7cm 厚さ 0.7cm	-	-	楕円による整形。	2.914/4	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	-
14住14	土師	土瓦	長さ 3.1cm 幅さ 2.5cm 厚さ 32.0g	幅 3.7cm 厚さ 0.9g	-	-	楕円による整形。	114/1	長石 石灰 赤鉄 黒鉄 黒鉛 少	普通	-

28号住居跡



- 28号住居跡完掘全景 -

本遺構の北側の一部は平安時代の帰属と考えられる27号住居跡と重複している。平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-S-Wを指す。規模は東西、南北両軸ともに6.5mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね10～20cmと浅く、覆土の遺存状況は良好とは言えないものの、5層からなる自然堆積の様相を確認する事ができた。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では両袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出しており、この火床面直上では、カマド使用時の「灰」の堆積も観察する事ができた。床面では遺構中央部からカマド前面にかけて顕著な硬化が認められる。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の支柱穴と考えられるビット4基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径が約30cm～50cmを測り、床面から底部までの深さは概ね60cmである。遺物の出土は少量ながらカマド付近に纏まり、その器種器形は土師器の甕類と坏類が主体となる。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



第 69 図 28 号住居跡



— 28号住居跡調査風景①—



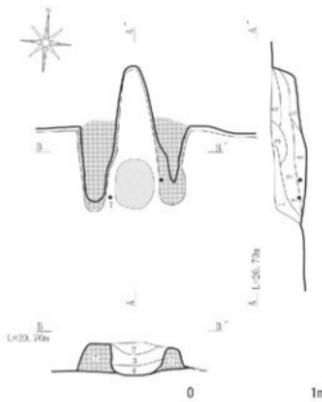
— 28号住居跡調査風景②—



— 28号住居跡セクション—

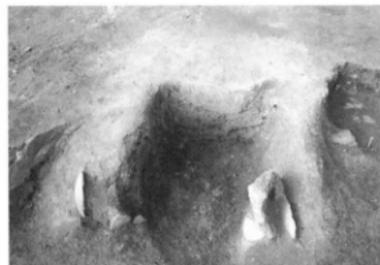


— 28号住居跡遺物出土状況全景—



- S1-28 カマド土版説明 (1/40)
1. 7.51R 3/3 和持土 焼土・砂土
 2. 7.51R 3/3 和持土 焼土・ブロック・土上
 3. 7.51R 3/4 和持土 焼土・ブロック多
 4. 7.51R 8/1 灰土 灰土
 5. 7.51R 3/2 和持土 焼土・粘土・緑り土
 6. 7.51R 3/4 和持土 焼土多
 7. 10TR 5/3 にぎい・和持土・カマド土版

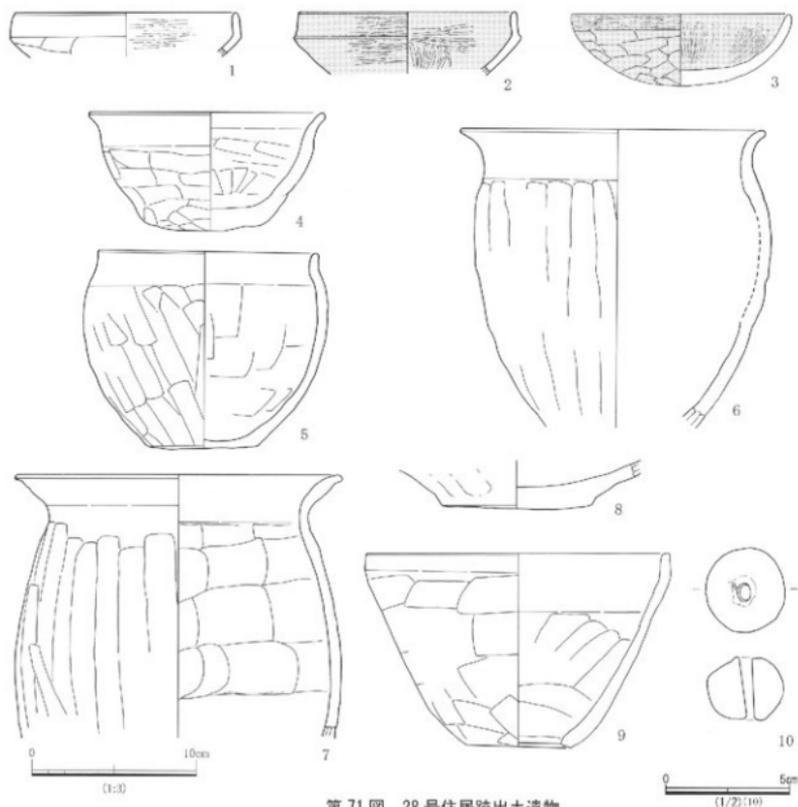
第70図 28号住居跡カマド



— 28号住居跡カマドセクション—



— 28号住居跡カマド完掘状況—



第71図 28号住居跡出土遺物

第16表 28号住居跡遺物観察表

遺物No	形制	器種	口径	器高	底径	器底の特徴	器形の特徴	色調	粘土	焼成	備考
28住1	土師	杯	(11.4)	(2.8)	-	器底は明瞭な稜を有し、口縁部はほぼ直立する。 残存率：口縁部～杯底上平1/5	口縁部外面はヨコナデ。内面はミガキ。外面はヘラタズリ。	9 6985/6 9 7.1085/5	土質 少 礫砂 少 灰質 少	普通	赤褐色打灰
28住2	土師	杯	(15.0)	(3.9)	-	器底は緩やかに内傾し、明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。 残存率：口縁部～杯底上平1/5	内外両面にミガキ。内外両面黒色焼成。	9 7.109/2 9 5955/5	土質 少 礫砂 少 灰質 少	普通	赤褐色打灰
28住3	土師	杯	13.0	4.8	-	底部に平坦。器底は緩やかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。 残存率：口縁部～器底2/3	口縁部外面はミガキ。内面はヘラタズリ。外面はヘラタズリ。内外両面黒色焼成。内面一部スス付着。	9 933/8 9 2.914/1	土質 少 礫砂 少 灰質 少	普通	赤褐色打灰
28住4	土師	鉢	14.1	7.3	-	底部に平坦。器底は緩やかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。 残存率：完形	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラタズリ。外面は赤位のヘラタズリ。	9 5955/4 9 5955/3	土質 中 礫砂 中 灰質 少	普通	暗褐色打灰
28住5	土師	小型罎	(13.0)	12.2	6.8	底部に平坦。器底は緩やかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。 残存率：口縁部～器底1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラタズリ。外面は赤位のヘラタズリ。	9 3099/1 9 4095/3	土質 中 礫砂 中 灰質 少	普通	赤褐色打灰
28住6	土師	罎	(18.1)	18.2	-	器底は緩やかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。 残存率：口縁部～器底下平4/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラタズリ。外面は黒位のヘラタズリ。	9 3304/3 6. 3304/4	土質 中 礫砂 中 灰質 少	普通	黒い

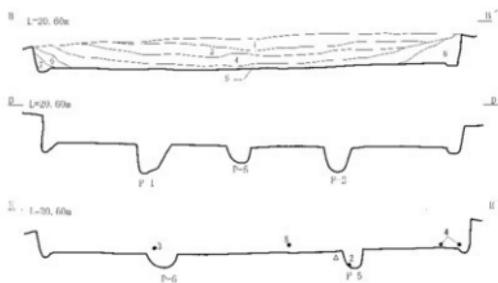
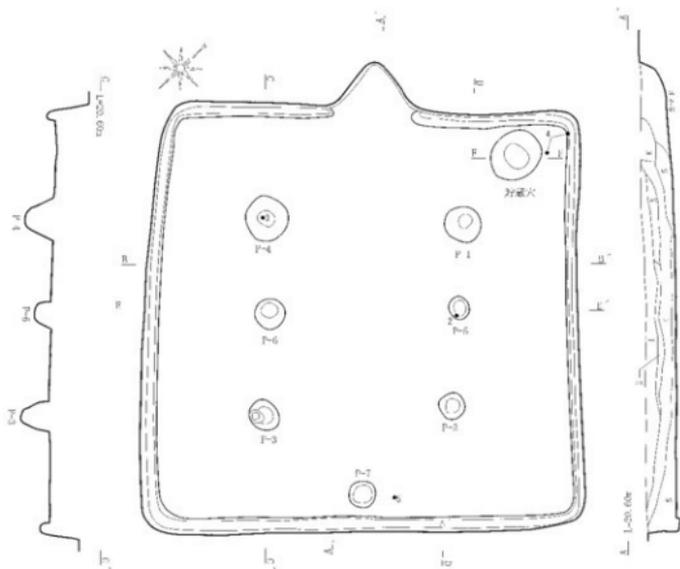
28件 7	土師	罎	(23.0)	(16.4)	—	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外湾する。 残存率：口縁部～胴部上半 1/6	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は履位のヘラケスリ。	P1 3.5X3.4 P8 10X12.4	灰石 緑石 石炭 加粒 生土塊	灰 少 少 加 少 加 少 加 少 加	普通	輪積み灰 赤色27 灰
28件 8	土師	罎	—	(3.0)	8.9	胴部は平底。胴部は緩やかに内湾すると推定される。 残存率：胴部下半～底辺 2/3	内面はナデ。外面はヘラナデ。	P1 3.5X3.4 P6 2.5X2.4	灰石 少 加 少 加 少 加	灰 少 少 加 少 加	普通	赤色27 灰
28件 9	土師	瓶	18.3	11.8	6.2	口は斜孔で底部全体に及び、体部は直線的に測き、口縁部はほぼ直立で残存率：ほぼ完形	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。外面は履位のヘラケスリ。	P4 10X12.4 P6 2.5X2.4	灰石 少 加 少 加 少 加	灰 少 少 加 少 加	普通	赤色27 灰
28件 10	土師 瓦	土玉				長さ 3.5cm 幅 3.1cm 厚さ 2.6cm 孔径 0.6cm 重さ 25.9g	指による整形。	5/8	灰石 加 少 加 少 加	灰 少 少 加 少 加	普通	

30号住居跡

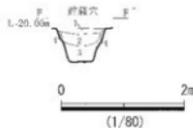
本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-47°-Wを指す。規模は北東、南西両軸ともに7.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね50cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、7層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査では焚き口と思われる位置より若干被熱した火床面の範囲のみを検出したに過ぎない。床面では出入り口付近とカマド付近で顕著な硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には明瞭な周溝が巡る。この床面からは対角線上に並ぶP-1～P-4の主柱穴と考えられるビット4基と、左記主柱穴より一回り程直径の小さいP-5～P-6の補助柱穴と思われるビット2基も検出している。各ビットの平面形状はいずれも円形を呈し、規模はP-1～P-4の直径が約40cm～70cm、P-5～P-6の直径が35cm～45cmを測り、床面から底部までの深さは概ね40cmを測る。その他のビットとして、出入り口施設に伴うビットであると考えられるP-7の検出もある。また、カマド横東側には平面形状が不整な円形を呈し、規模が長軸90cm、短軸80cm、深さ60cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は少量ながら出入り口付近とカマド付近に纏まり、その器種器形は長胴の甕類及び坏類が主体となる。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有していることから、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



— 30号住居跡発掘全景 —



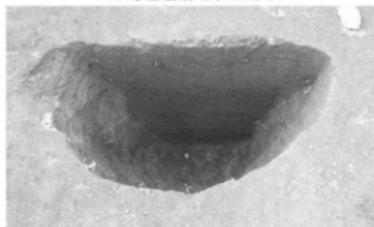
- SI 30 土層説明
1. 101R 3/4 暗褐色土 礫石多
 2. 101R 3/3 暗褐色土 礫石多
 3. 101R 3/2 暗褐色土 礫石多
 4. 101R 3/2 ~ 3/3 暗褐色土 礫石多
 5. 101R 1/3 暗褐色土 礫石多
 6. 101R 5/3 暗褐色土 礫石多
 7. 101R b/1 暗褐色土 礫石多
- S. 30 対竈穴上層説明
1. 7. D13 1/6 暗褐色土 礫石少
 2. 7. D13 5/6 暗褐色土 礫石少
 3. 7. D12 5/4 暗褐色土 礫石少
 4. 101R 5/6 暗褐色土 礫石多



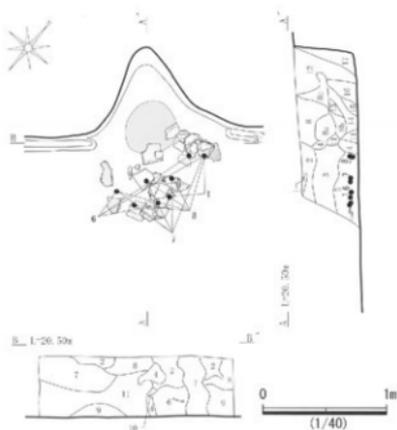
第 72 図 30 号住居跡



— 30号住居跡セクション—



— 30号住居跡貯蔵穴セクション—



- SI 20 カマド土器調査
1. 2. 3R 2/4 粘赤土 灰土跡多。
 2. 2. 5R 2/3 粘赤土 粘土ブロック少。
 3. 2. 5R 2/3 粘赤土 粘土ブロック状。
 4. 2. 3R 4/1 赤土 粘土ブロック状。
 5. 2. 5R 2/4 粘赤土 ローム状中。灰土跡少。
 6. 2. 5R 2/3 粘赤土 灰土跡少。
 7. 3R 4/3 に近い赤土 灰土跡少。
 8. 3R 2/3 粘赤土 ローム状中。
 - 8a. 3R 2/3 粘赤土 灰土跡少。
 - 8b. 3R 2/3 粘赤土 灰土跡多。
 - 8c. 3R 2/3 粘赤土 粘赤土。
 9. 3R 2/3 粘赤土 ローム状少。
 10. 3R 2/3 粘赤土 粘土ブロック状。
 11. 2. 3R 2/4 粘赤土 灰土跡多。
 12. 2. 5R 2/6 粘赤土 灰土跡多。
 13. 3R 2/2 灰赤土 粘土跡多。
 14. 3R 2/4 粘赤土 灰土跡中。
 15. 5R 2/2 粘赤土 灰土跡中・跡少。
 16. 2. 5R 2/3 に近い赤土 ロームブロック少。
 17. 2. 3R 2/4 に近い赤土 ローム状多。

第73図 30号住居跡カマド



— 30号住居跡遺物出土状況全景—



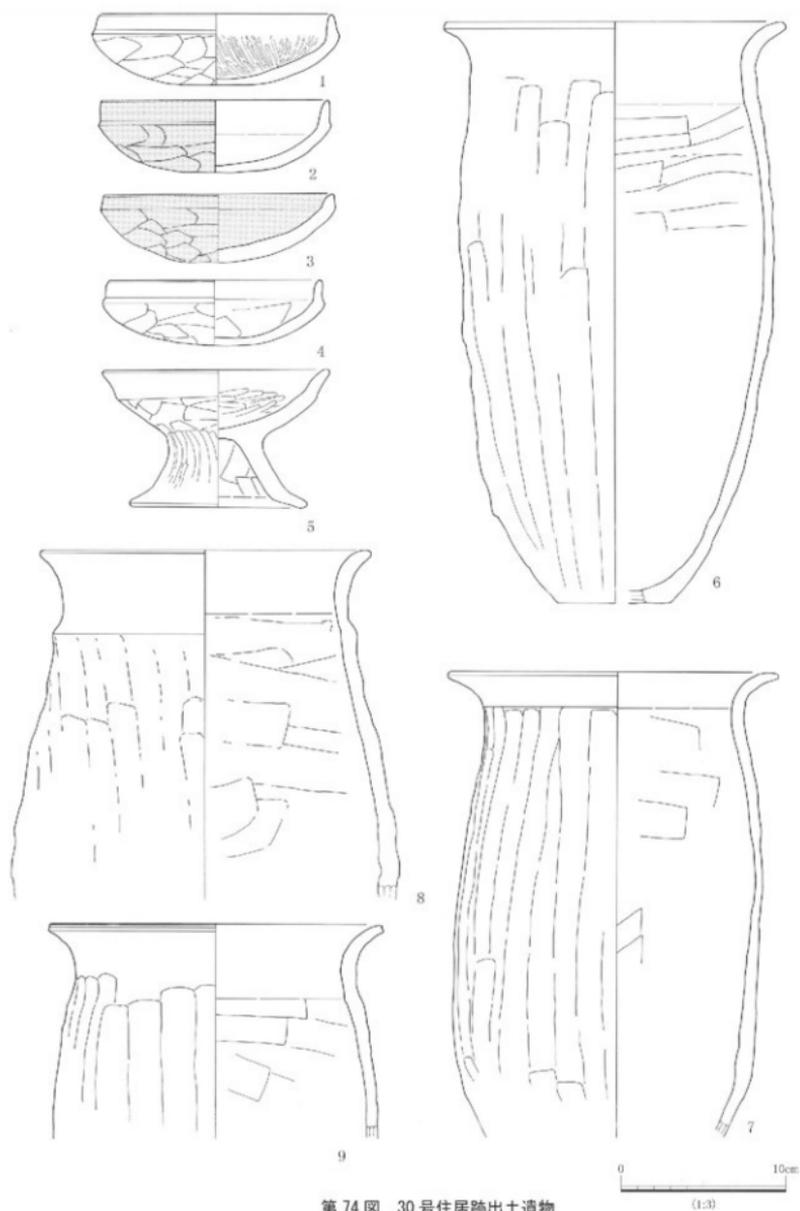
— 30号住居跡遺物出土状況—



— 30号住居跡カマド遺物出土状況①—



— 30号住居跡カマド遺物出土状況②—



第 74 图 30 号住居跡出土遺物

第17表 30号住居跡遺物観察表

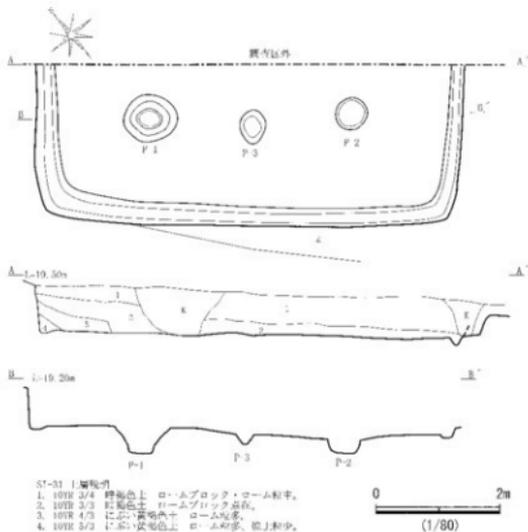
遺構 No	遺構 種類	口径	高さ	方位	詳細の位置	発見の遺物	発掘	土質	状況	備考
30件 1	土製 埴	13.9	4.4	-	底部は平坦、上部は緩やかに内湾し、内湾を境と見する。口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部4/5	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。内湾部は内外両面にヨコナダ、外面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30件 2	土製 埴	13.6	4.5	-	底部は平坦、上部は緩やかに内湾し、内湾を境と見する。口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部2/3	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30位 3	土製 埴	13.7	4.7	-	底部は平坦、上部は緩やかに内湾し、内湾を境と見する。口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部2/3	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 2.41/1	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30位 4	土製 埴	12.8	4.1	-	底部は平坦、上部は緩やかに内湾し、内湾を境と見する。口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部2/3	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30件 5	土製 高埴	(13.4)	(6.6)	(10.3)	底部は緩やかに内湾し、口縁部は緩かに内湾する。脚部は緩やかなフラットに傾く。残存率：口縁部～胴部3/4	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。脚部はミガキ、脚部は緩やかに内湾する。脚部内面はヘラクスリ、外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30位 6	土製 埴	20.2	(16.5)	(6.8)	底部は平坦、上部は緩やかに内湾し、内湾を境と見する。口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部7/8	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30位 7	土製 埴	19.4	(18.5)	-	底部は緩やかに内湾し、口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部1/4	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30位 8	土製 埴	(19.5)	(21.4)	-	底部は緩やかに内湾し、口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部1/6	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰
30件 9	土製 埴	(19.5)	(13.2)	-	底部は緩やかに内湾し、口縁部は緩かに内湾する。残存率：口縁部～胴部1/4	口縁部は内外両面にヨコナダ、内面はミガキ、外面はヘラクスリ。外周部は地均。	円 3.076/9 円 109/18/9	赤土 少 赤 土 赤 土 赤 土	普通	赤色土打 灰

31号住居跡

本遺構の北東側部分は調査区外となる。また、遺構が延びていたと思われる調査区外の範囲は、現代の耕作による強い削平を受けており、遺構は既に残存しない。確認し得た範囲での遺構の規模は、長軸が6.8mで短軸が2.6mを測り、遺構確認面から床面までの深さは概ね60cmを測る。覆土の遺存状況は良好で、1層からなる自然堆積の様相を呈す。床面では調査区際付近で若干の硬化が認められ、調査区内の壁下には明瞭な間溝が巡る。この床面からはP-1～P-3の3基のピットも検出している。

このうち、P-1～P-2のピットは

土柱穴であったと考えられ、P-3のピットは補助柱穴、若しくは出入り口施設に伴うピットである可能性が考えられる。各ピットの平面形状は不整な円形を呈し、規模ではP-1が直径90cm、P-2が50cm、P-3が40cmを測り、床面から底部までの深さはいずれも30cm前後と浅めである。本遺構から遺物は出土していない。本来



第75図 31号住居跡

であれば、上記の状況から本遺構は時期不明の遺構として報告するべきであろうが、確認し得た遺構の規模や柱穴の配置状況、及び周溝等の特徴から推測して、本竈では古墳時代に帰属する可能性のある住居跡として取り扱う事とした。



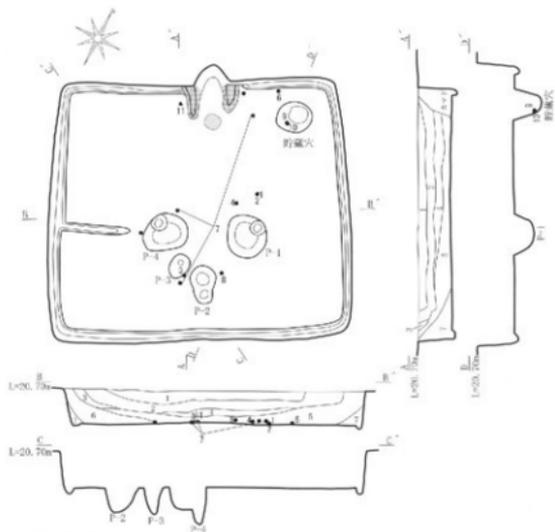
— 31号住居跡発掘全景 —

3 2号住居跡

本遺構の平面形状は歪ながらもほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-29°-Wを指す。規模は北東、南西両軸ともに4.8mを測り、遺構確認面から床面までの深さは概ね55cmを測る。覆土の遺存状況は良好で、7層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査では僅かに遺る袖部の痕跡と、焚き口と思われる位置より若干被熱した火床面の範囲のみを検出したに過ぎない。床面ではカマド前面付近と出入り口付近でより強い硬化が認められ、カマド下を除く四方壁下には明瞭な周溝が巡り、南西壁下では遺構中心部に向かい走る間仕切り溝1条も検出している。この床面では、形状及び規模から推測して主柱穴でとは考えられるP-1、P-4のビット2基を検出しているものの、その検出位置は通常主柱穴が配置されている状況とは異なるものである。このビットの平面形状はP-1、P-4ともに不整な円形を呈し、規模はP-1が直径70cm、P-4が直径80cmを測り、床面から底部までの深さはいずれも40cm前後である。また、その他のビットとしてP-2～P-3の検出もあるが、P-2は出入り口施設に伴うビットであると考えられ、P-3についてはその検出位置から用途及び本遺構に伴うものであるかどうかについては不明である。カマド横東側には平面形状が不整な円形を呈し、規模が長軸60cm、短軸55cm、深さ50cmを測る貯蔵穴も付設する。遺物の出土は少量ながらカマド付近と出入り口付近に纏まり、その器種器形は土師器の坏類と甕類が主体となるが、小型の手掘土器も出土している。これらの遺物は6世紀終末～7世紀前半の特徴を有している事から、本遺構は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。



— 32号住居跡完掘全景 —



S1-32 上層説明

1. 10YR 3/2 ~ 3/3 灰~緑褐色土 炭化物少。

2. 10YR 3/4 暗褐色土 炭化物多。

3. 10YR 3/3 暗褐色土 炭化物多。

4. 10YR 3/4 暗褐色土 炭化物少。

5. 10YR 6/3 紅褐色土 炭化物中。

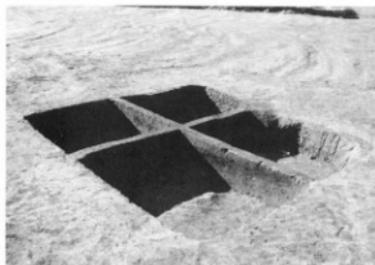
6. 10YR 3/3 紅褐色土 炭化物多。

7. 10YR 5/4 紅褐色土 炭化物多。

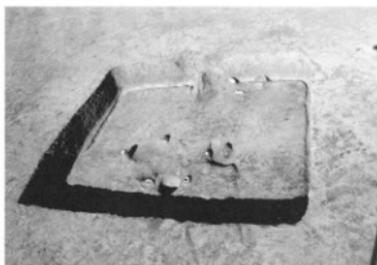
0 2m

(1/80)

第 76 图 32号住居跡



— 32号住居跡セクション—



— 32号住居跡遺物出土状況全景—



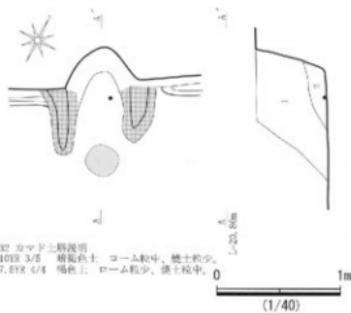
— 32号住居跡調査風景①—



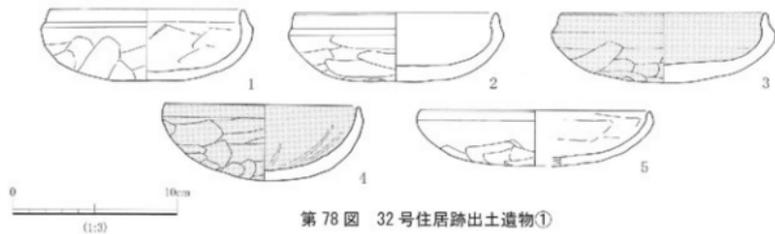
— 32号住居跡調査風景②—



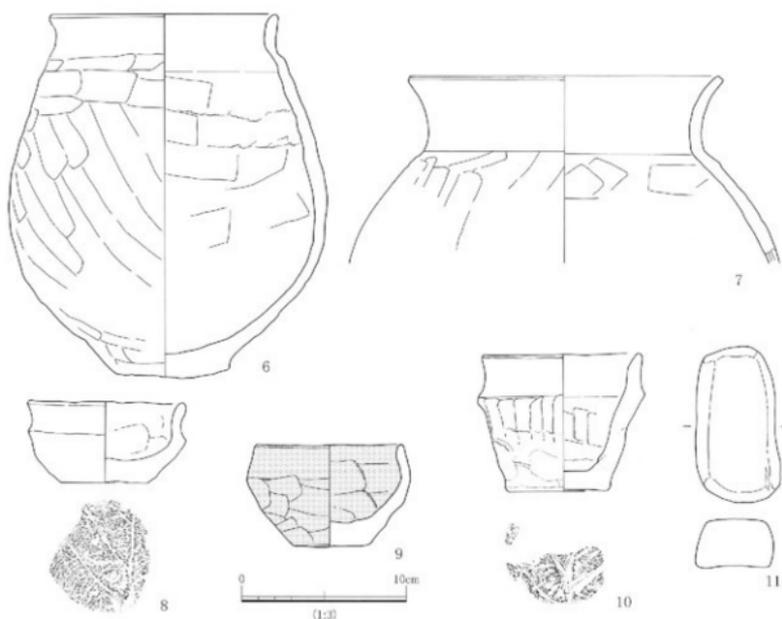
— 32号住居跡カマドセクション—



第77図 32号住居跡カマド



第78図 32号住居跡出土遺物①



第79図 32号住居跡出土遺物②

第18表 32号住居跡遺物観察表

遺物 No	種類	器種	口径	器高	底径	器形の特徴	装飾の特徴	色調	粘土	胎成	備考
32住 1	土製	罎	(11.7)	6.4	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は僅かに内傾する。 残存率：口縁部～底面1/2	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面上部はナデ、下部はヘラナデ。残ナデ。 内面スス付着。	赤 2.094/2 赤 2.094/1	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄 黒炭	管造	赤色30% 微
32住 2	土製	罎	(12.2)	6.2	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は僅かに内傾する。 残存率：口縁部～底面1/2	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面はヘラナデ。内面黒色点状。	赤 2.094/4 赤 1.035/3	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 3	土製	罎	(12.3)	6.4	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。 残存率：口縁部～底面1/2	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はナデ。外面上部はナデ、下部はヘラナデ。残ナデ。内外面黒色点状。	赤 2.094/4 赤 1.035/3	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 4	土製	罎	11.7	6.8	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。 残存率：口縁部～底面4/5	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面はヘラナデ。残ナデ。内外面黒色点状。	赤 2.094/3 赤 1.035/3	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 5	土製	罎	(13.0)	(3.5)	-	底部は丸底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は僅かに内傾する。 残存率：口縁部～底面1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面上部はナデ。外面下部はヘラナデ。残ナデ。内面一部スス付着。	赤 2.094/4 赤 1.035/1	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 6	土製	甕	13.5	22.4	6.6	底部は丸底に近い平底で同底状にやや突出する。胴部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。 残存率：口縁部～底面5/6	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は筒状のヘラナデ。内面一部スス付着。	赤 2.094/3 赤 2.094/3	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	軸組み状 赤色30% 微
32住 7	土製	甕	(18.6)	(11.4)	-	胴部は縦やかに内湾し、口縁部は筒状に内湾する。 残存率：口縁部～胴部上半1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は筒状のヘラナデ。内面一部スス付着。	赤 2.094/4 赤 2.094/3	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 8	土製 瓦	手瓦 21	9.3	5.0	5.2	底部は平底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は僅かに内傾する。 残存率：口縁部～底面5/6	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面上部はナデ。外面下部、底面は木葉痕状。	赤 2.094/2 赤 2.094/4	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 9	土製 瓦	手瓦 22	8.6	6.1	4.5	底部は平底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面は筒状のヘラナデ。底面は手持ちヘラナデ。内外面黒色点状。	赤 1.034/1 赤 2.094/1	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	赤色30% 微
32住 10	土製 瓦	手瓦 23	9.4	8.3	6.0	底部は平底。体部は縦やかに内湾し、明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。 残存率：口縁部～底面3/4	口縁部は内外両面にヨコナデ。内面はヘラナデ。外面上部はヘラナデ。外面下部はナデ。底面はナデ。木葉痕状。	赤 1.034/1 赤 2.094/3	長石 砂鉄 石英 赤鉄 黒鉄	管造	軸組み状 赤色30% 微
32住 11	石製	磨石				長さ 9.6cm 幅 4.5cm 厚さ 3.1cm 重さ 280.8g		2.05/2			

第3節 平安時代の住居跡

15号住居跡

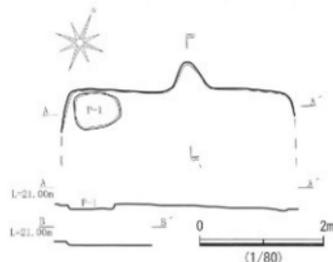
本遺構のほとんどは後世の削平により消滅しており、今回の調査で検出できた平面プランは北側壁とその中央部に付設するカマド煙道の痕跡のみである。このカマド煙道の痕跡から本遺構の主軸方向はN-20°-Wを指していた事がわかる。遺構覆土は僅かに進む程度で堆積状況の観察はできない。確認し得た北側壁一辺の長さは3.7mを測り、確認面から床面までの深さは最深部でも僅か3cmである。しかしながら、精査の結果カマド横西側では、床面の硬化と考えられる狭い範囲と、貯蔵穴であった可能性のある平面形状楕円形で断面が薄い皿状を呈す浅い掘り込みを検出する事ができた。本遺構からの遺物の出土は無い。以上の事から、本来は時期不明の遺構として報告するべきであろうが、遺構の検出位置や規模、構造の特徴から推定して、本稿では平安時代に帰属する可能性がある住居跡として取り扱う事とした。



— 15号住居跡完掘全景 —



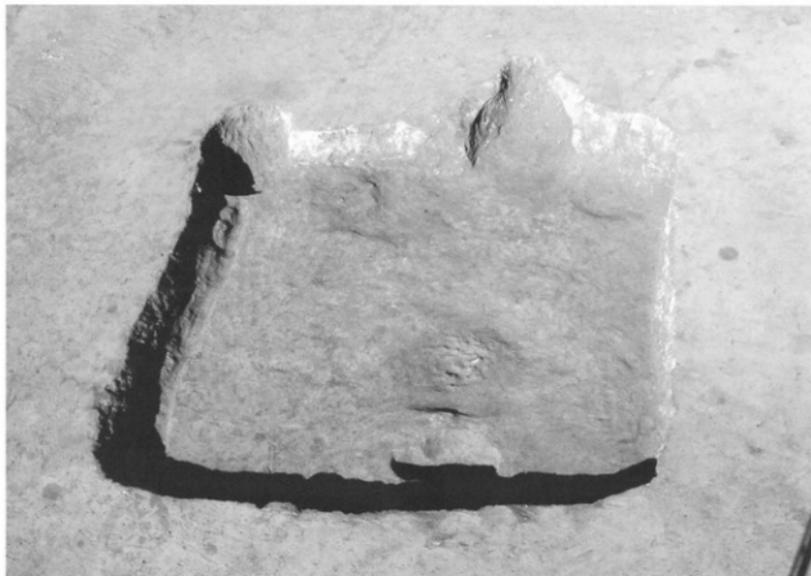
— 15号住居跡調査風景 —



第80図 15号住居跡

16号住居跡

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-24°-Wを指す。規模は北東、南西両軸ともに3.2mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね25cmを測り、覆土の遺存状況は良好で、6層からなる明瞭な自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査では焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面のみを検出したにとどまる。また、本遺構の中心部からやや南東寄りには、平面形状が円形を呈し、直径約35cmを測る断面形状が浅い皿状の地床がも付設する。床面では遺構全体に顕著な硬化が認められ、西側壁下の方に浅い炭溝が巡る。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、出入り口施設に伴うピットと考えられるP-1を1基検出したのみである。また、カマド横の西側隅には平面形状が不整な楕円形を呈した土坑状に窪む張り出しが付され、この張り出しの規模は長軸80cm、短軸60cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは凡そ約40cm程度である。遺物の出土は出入り口付近とカマド付近に集中する傾向があり、その器種器形は土師器、須恵器の坏類と甕類、また、カマド内からは、支脚に転用したと思われる製鉄炉の送風羽口と、社の補強素材として用いられたものと考えられる瓦も多数出土している。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。



— 16号住居跡完掘全景 —



— 16号住居跡調査風景—



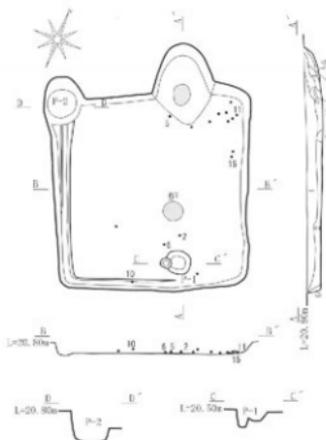
— 16号住居跡セクション—



— 16号住居跡遺物出土状況全景—



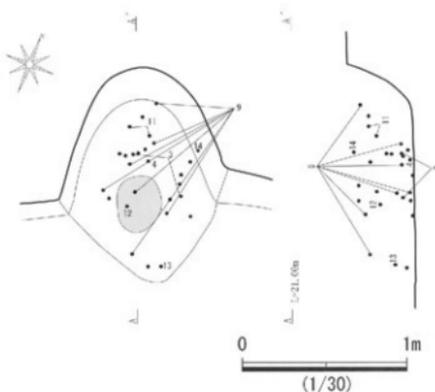
— 16号住居跡カマド遺物出土状況—



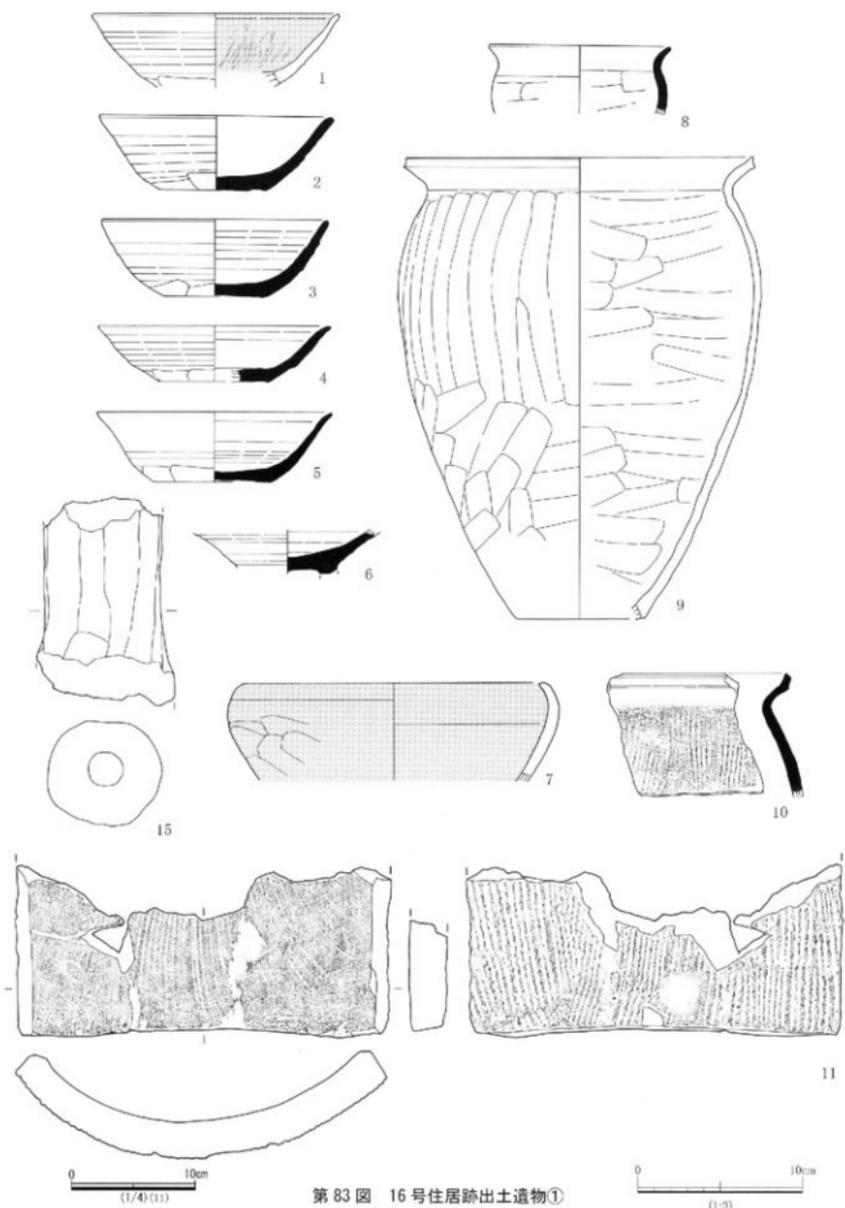
- SI-16 土器説明
1. 1092 2/3 紅褐色土 コームブロック調紋状底入。
 2. 1092 2/4 緑褐色土 コーム底中。
 3. 1092 2/5 に近い黄褐色土 コーム底中。
 4. 2, 3層 2/3 に近い褐色土 土器・儀具较多。
 5. 1092 2/5 に近い黄褐色土 コーム较多。
 6. 1092 2/4 に近い黄褐色土 コーム较多。

0 2m
(1/80)

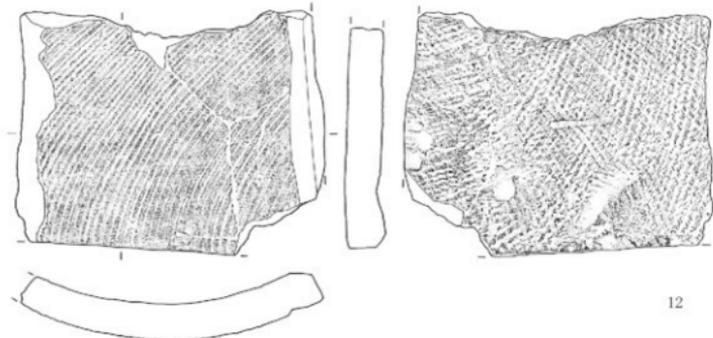
第 81 図 16号住居跡



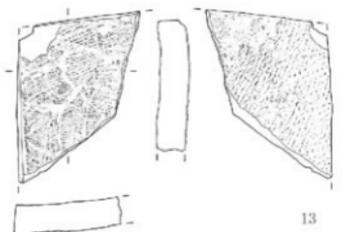
第 82 図 16号住居跡カマド



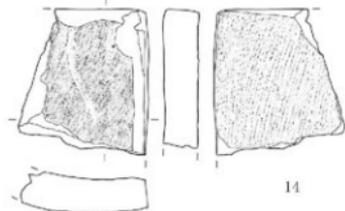
第 83 图 16 号住居跡出土遺物①



12



13



14

0 10cm
(1/4)12~13

第84図 16号住居跡出土遺物②

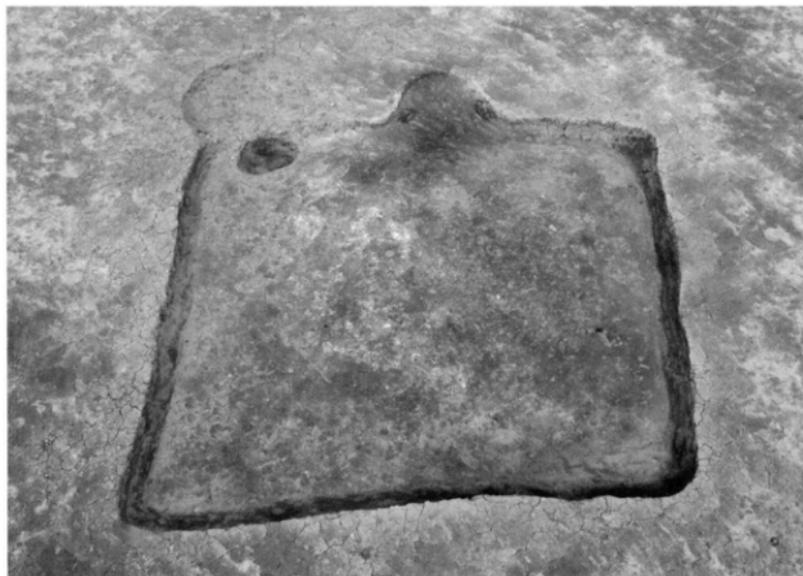
第19表 16号住居跡遺物観察表

遺物No	種類	形状	寸法	重量	底径	器状の特徴	器状の特徴	色質	胎土	組成	備考
16住1	土瓶	坪	(13.0)	(4.6)	-	底形は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～体部1/4	内外面共にコロボ割整。内面はロクコ割整後ヒダシ。外周体部上縁及び底部は手持ちヘラクスリ。内面着色処理。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤色土質 灰
16住2	瓶底	坪	14.1	4.5	6.6	底形は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面2/3	内外面共にコロボ割整。内面はロクコ割整後ヒダシ。外周体部上縁及び底部は手持ちヘラクスリ。酸化着色処理。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	不良
16住3	瓶底	坪	13.7	4.7	6.4	底形は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面3/4	内外面共にコロボ割整。外周体部上縁及び底部は手持ちヘラクスリ。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤色土質 灰
16住4	瓶底	坪	14.0	3.4	6.8	底形は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面1/2	内外面共にコロボ割整。外周体部上縁及び底部は手持ちヘラクスリ。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	普通
16住5	瓶底	坪	(14.2)	4.3	7.2	底形は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面1/3	内外面共にコロボ割整。外周体部上縁及び底部は手持ちヘラクスリ。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤色土質 灰
16住6	瓶底	高坪	-	(2.7)	-	体部は直線的に開くと差測される。底径のみ。 残存率：片部5/6	内外面共にコロボ割整。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	普通
16住7	土師	鉢	(18.1)	(6.6)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は強直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～胴部上半1/8	口縁部は内外面共にコボナテ。内面はヒダシ。外面はヘラクスリ。内外面着色処理。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤色土質 灰
16住8	瓶底	小瓶底	(10.9)	(4.2)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は強直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～胴部上半1/5	口縁部は内外面共にコボナテ。内面はヒダシ。外面はヘラクスリ。下部は底径のヘラクスリ。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	普通
16住9	土師	甕	(21.0)	28.4	(7.8)	底形は平底。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は強直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面1/2	口縁部は内外面共にコボナテ。内面はヒダシ。外面はヘラクスリ。下部は底径のヘラクスリ。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	良好
16住10	瓶底	甕	-	-	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は強直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～胴部上半破片	内面はヘラクスリ。下部は底径のヘラクスリ。外面は平行開き。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	普通
16住11	瓦	平瓦	長さ 24.1cm 幅 30.7cm 厚さ 3.1cm 重さ 1790g				内面は開明き。外面は高切り。両面が残る。両面はヘラによる面取り。一枚作り。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤色土質 灰
16住12	瓦	平瓦	長さ 20.0cm 幅 25.0cm 厚さ 3.0cm 重さ 1990g				内面は開明き。高切り。両面が残る。両面は高切り。両面が残る。両面はヘラによる面取り。一枚作り。	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	赤 赤 赤 赤 赤 赤	良好

16住	13	正	平正			長さ 14.0cm 幅 10.6cm 高さ 2.3cm 重さ 306.4g	凸面は鑄りさ。凹面は糸切り直。素 目が残る。追加はヘラによる玉取り 一枚作り。	IV 3.006/3 共 3.006/3	玉石 丸粒 細砂	少 気 家 少	良好	道具長 の 可能性あ り。
16住	14	正	平正			長さ 12.1cm 幅 10.5cm 高さ 3.9cm 重さ 447.6g	凸面は鑄りさ。凹面は糸切り直。素 目が残る。追加はヘラによる玉取り 一枚作り。	IV 0006/2 共 0006/2	玉石 丸粒	少 気 少	良好	
16住	15	土器 品	弱口			長さ 11.8cm 幅 8.3cm 高さ 6.9cm 重さ 849.6g	ヘラナデ。	100E/3	玉石 丸粒	少 少 多	良好	

17号住居跡

本遺構の平面形状は歪な長方形を呈し、主軸方向はN-14°Wを指す。規模は北東、南西軸ともに2.9mを測る。遺構確認面から床面までの深さは僅か8cm前後と浅く、覆土の堆積状況を把握する事はできない。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査では焚き口と思われる位置より弱い被熱痕を検出したのみである。床面では遺構中央部に顕著な硬化が認められ、北側では一部途切れはするものの、四方壁下に浅い周溝が巡る。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、貯蔵穴であった可能性のある平面形状が楕円形で浅い掘り込みを持つP-1を1基検出したのみである。また、カマド横の西側壁には床面と同じ高さで延びる平面形状が不整な楕円形を呈す張り出しが付され、この張り出しの規模は長軸100cm、短軸70cmを測る。遺物の出土はカマド付近に纏まり、その器種器形は土師器の甕と須恵器の坏類が主となるが、カマド内からは支脚として転用したものと思われる製鉄炉の送風羽口も出土している。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。



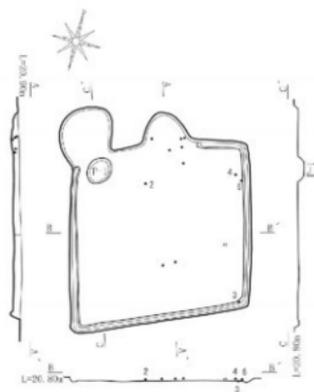
— 17号住居跡完掘全景 —



— 17号住居跡セクション—



— 17号住居跡遺物出土状況全景—



SI-17 土屋遺跡
1. 100N 2/4 粘褐色土 壁→△壁中、泥土控少。

0 2m
(1/80)

第85図 17号住居跡



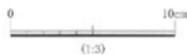
1



2



3



(1:3)



4



5



6

第86図 17号住居跡出土遺物

第20表 17号住居跡遺物観察表

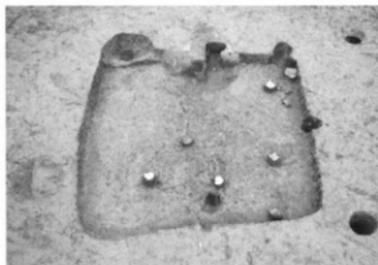
遺体	種類	形状	口径	器高	口径	器底の形状	器底の特徴	発掘	層土	検定	備考	
E7住 1	須恵	杯	(13.2)	4.5	6.7	底面は平底。器底は直線的に開き、口縁部に至る。残存率：口縁部～底面 3/4	内外面共にコクシ調整。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	内 10005/2 外 10005/3	長石 石英 黒鉛 磁石	中 少 少 少	普通	赤色土付 灰
E7住 2	須恵	杯	(13.8)	(4.4)	(7.3)	底面は平底。器底は直線的に開き、口縁部に至る。残存率：口縁部～底面 1/2	内外面共にコクシ調整。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	内 710/1 外 710/1	長石 石英 黒鉛 磁石	中 少 少 少	普通	
E7住 3	須恵	杯	12.9	4.3	5.9	底面は平底。器底は緩やかに内湾し、口縁部に至る。残存率：ほぼ完形	内外面共にコクシ調整。内面はコクシ調整手ナデ。外面器部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	内 2105/2 外 2106/3	長石 石英 黒鉛 磁石	少 少 少 少	普通	赤色土付 灰
E7住 4	土師	甕	—	(5.4)	(8.0)	底面はやや上げ直交状の平底。器底は緩やかに内湾すると推測される。残存率：胴部下半～底面 1/2	内面はヘラナデ。外面は横位のヘラケズリ。	内 1014/3 外 21035/4	長石 石英 黒鉛 磁石	少 少 少 少	普通	赤色土付 灰
E7住 5	土師	甕	—	(6.4)	(7.3)	底面はやや上げ直交状の平底。器底は緩やかに内湾すると推測される。残存率：胴部下半～底面 1/2	内面はヘラナデ。外面は横位のヘラケズリ。	内 21035/4 外 21035/4	長石 石英 黒鉛 磁石	中 少 少 少	普通	赤色土付 灰
E7住 6	土師 品	羽口				長さ 22.9cm、幅 7.7cm 厚さ 6.9cm 重さ 701.2g	ヘラナデ。	1004/3	長石 石英 黒鉛	少 少 少	普通	

18号住居跡

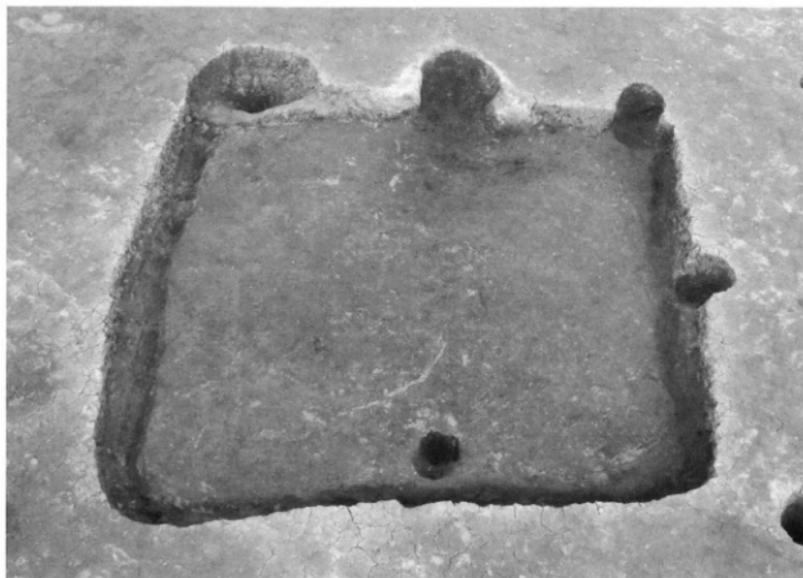
本遺構の平面形状は歪な長方形を呈し、主軸方向はN-1°-Eを指す。規模は長辺が3.5mで、短辺が3.2mを測る。本遺構の一部は後述の1号掘立柱建物跡(151頁・第128図)と重複しており、調査の結果、新旧関係では本遺構の方が古い事が明らかとなる。遺構確認面から床面までの深さは概ね20cmを測り、覆土の遺存状況は比較的良好で4層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査ではカマド袖の一部と、焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面を検出している。床面では遺構全体に顕著な硬化が認められ、北側の壁下を除く三方壁下では幅広の浅い周溝が巡る。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、出入り口施設に伴うピットと考えられるP-1を1基検出したのみである。また、カマド横の西側隅には平面形状が不整な楕円形を呈した土坑状に窪む張り出しが付され、この張り出しの規模は長軸100cm、短軸65cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは凡そ40cm程度である。遺物の出土は出入り口付近からカマドまでの動線上に纏まり、その器種器形は土師器、須恵器の坏類と甕類であり、相対的に須恵器の比率が高い。また、カマド内からは支脚として転用したものと考えられる製鉄炉の送風羽口も出土している。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有していることから、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。



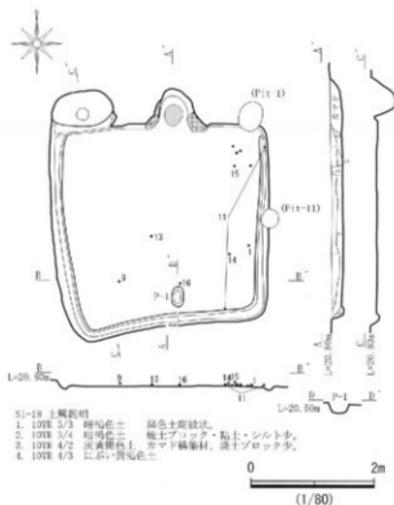
— 18号住居跡セクション —



— 18号住居跡遺物出土状況全景 —



— 18号住居跡発掘全景—



第 87 図 18号住居跡



第 88 図 18号住居跡カマド



— 18号住居跡カマドセクション—



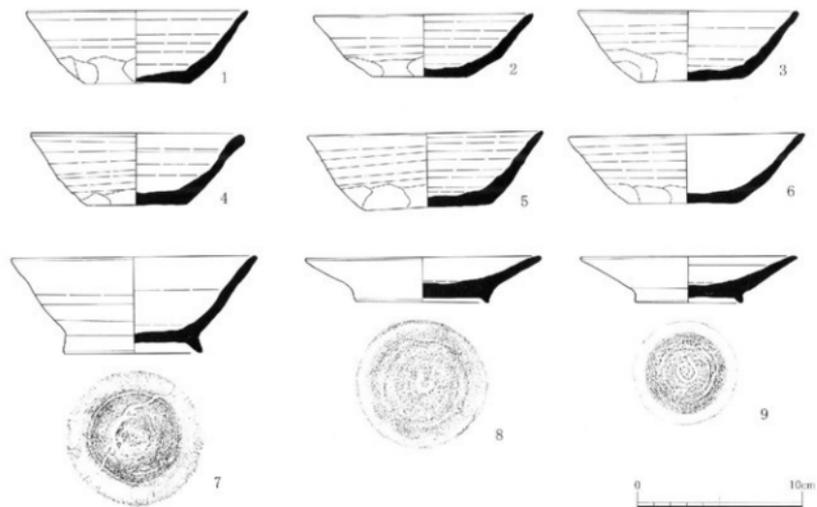
— 18号住居跡カマド遺物出土状況①—



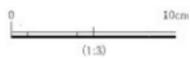
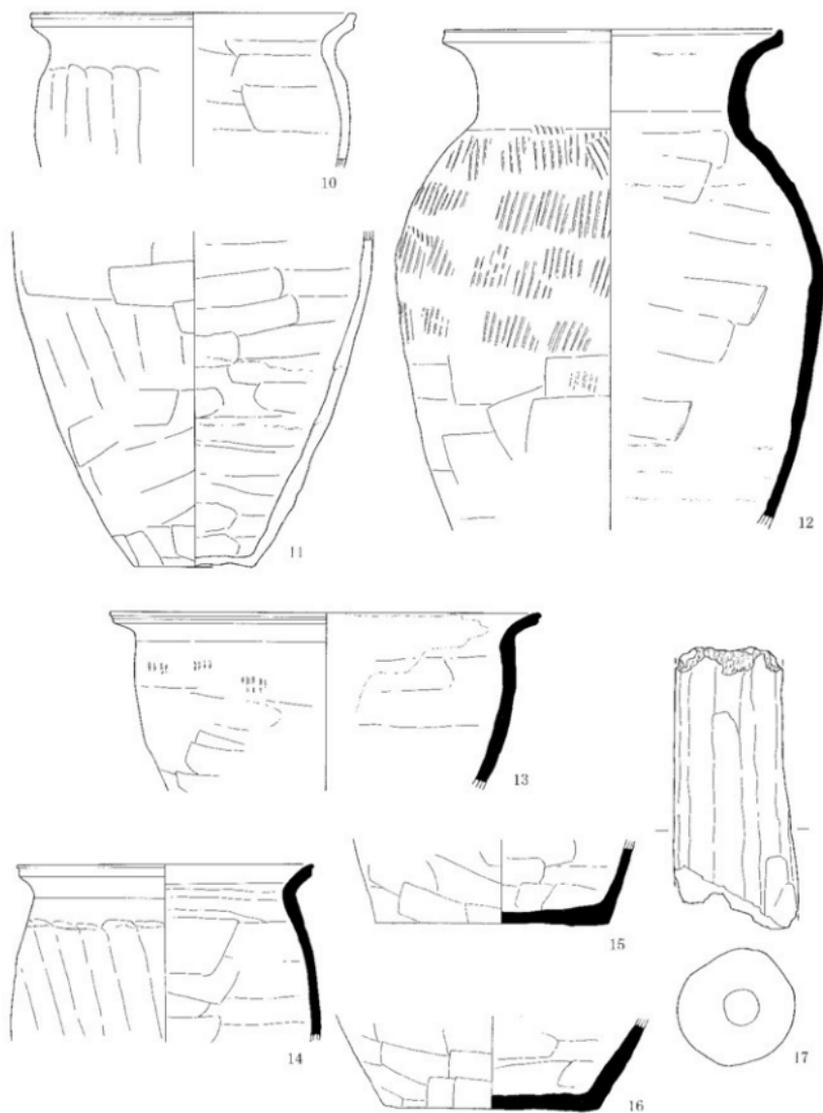
— 18号住居跡カマド遺物出土状況②—



— 18号住居跡カマド遺物出土状況③—



第 89 図 18号住居跡出土遺物①



第90图 18号住居跡出土遺物②

第 21 表 18 号住居跡遺物観察表

遺物 No	遺物 名称	品種	高さ	直径	重量	産地の特徴	形状の特徴	色澤	粘土	焼成	備考
18件 1	灰皿	坪	13.2	4.5	6.2	底部は平底。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10084/1 赤 516/1	粘土 赤土 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18件 2	灰皿	坪	13.1	3.9	5.8	底部は平底。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/5 赤 2195/2	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 3	灰皿	坪	13.2	4.3	6.3	底部は平底。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/2	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18件 4	灰皿	坪	13.0	4.8	6.0	底部は平底。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 2154/1 赤 2195/2	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18件 5	灰皿	坪	14.1	1.6	7.7	底部は平底。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 11008/5 赤 10005/4	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 6	灰皿	坪	14.3	1.3	6.6	底部は平底。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/3 赤 10087/3	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18件 7	灰皿	高台付皿	14.7	5.9	8.1	皿口はハの字状に付される。底に少量の赤土を含む。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/5 赤 10087/3	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 8	灰皿	高台付皿	14.2	2.7	8.0	皿口はハの字状に付される。底に少量の赤土を含む。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/3 赤 2195/5	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 9	灰皿	高台付皿	13.0	2.8	6.4	皿口はハの字状に付される。底に少量の赤土を含む。内部は連続的に開き、口縁部は平直。	内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/3 赤 10087/3	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 10	土釘	突 (19.3)	(9.5)	-	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外湾する。口縁部で上方に縮まされる。	口縁部は内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 11008/4 赤 516/4	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 11	土釘	突	(20.5)	7.2	-	胴部は平底。胴部は緩やかに内湾する。	内外両面にワタロコ調。	黄 11008/4 赤 516/4	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18件 12	灰皿	突	23.3	(30.8)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外湾する。口縁部で上方に縮まされる。	口縁部は内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。腹に傾成。	黄 10084/2 赤 10086/3	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 13	灰皿	突	26.0	(11.0)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外湾する。口縁部で上方に縮まされる。	口縁部は内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 1087/1 赤 2195/1	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18件 14	灰皿	突 (17.8)	(10.9)	-	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は緩やかに外湾する。口縁部で上方に縮まされる。	口縁部は内外両面にワタロコ調。外面は下部に横及び底部は手持ちヘラクスリ。	黄 10085/2 赤 2195/1	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 15	灰皿	突	(3.2)	14.1	-	底部は平底。胴部は緩やかに内湾する。	内部はヘラナゲ。外面は傾成のヘラクスリ。	黄 111/1 赤 374/1	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 16	灰皿	突	(3.8)	(13.0)	-	底部は平底。胴部は緩やかに内湾する。	内部はヘラナゲ。外面は傾成のヘラクスリ。	黄 2195/2 赤 2195/2	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰
18位 17	土釘	羽目	-	-	-	長さ 17.3cm 幅 7.2cm 厚さ 7.1cm 長さ 713.7g	ヘラクスリ。	7.086/4	赤土 中野 高野 黒土	焼 中	赤色337 灰

19号住居跡

本遺構の平面形状は、壁の一部が削平により消滅しているものの、概ね長方形を呈していたと推測され、主軸方向はN-1°Eを指す。規模は長軸が3.3mで、短軸が2.8mを測る。本遺構の一部は後述の1号掘立柱建物と重複しており、調査の結果、新旧関係では本遺構の方が古い事が明らかとなる。遺構確認面から床面までの深さは約5cm前後と極浅く、覆土の堆積状況を把握する事はできなかった。本遺構にはカマドも付設しているが、覆土が薄かった事から遺存状況が悪く、若干の被熱痕を検出したに過ぎない。床面では遺構中央部に顕著な硬化が認められ、確認し得た壁下には細い周溝が巡る。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、カマド手前にて、用途及び本遺構に伴うか否かも不明な土坑を1基検出したのみである。また、カマド横の西側隅には平面形状が不整な円形を呈した土坑状に窪み張り出しが付され、この張り出しの規模は直径約70cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは凡そ20cm程度である。遺物は出入り口付近とカマド付近で少量出土しており、その器種器形は須恵器の坏と土師器の甕類、及び瓦片である。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に構築するものと考えられる。



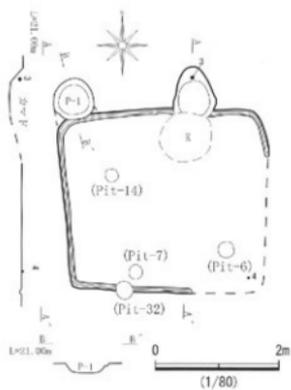
— 19号住居跡完掘全景 —



— 19号住居跡調査風景 —



— 19号住居跡遺物出土状況全景 —



第91図 19号住居跡



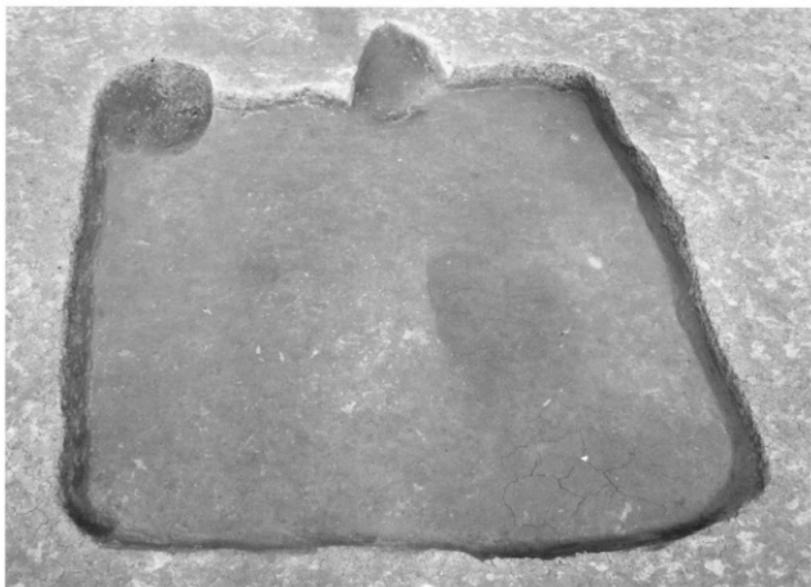
第92図 19号住居跡出土遺物

第22表 19号住居跡遺物観察表

遺物 No.	種類	器軸	口径	胎高	口径	器底の特徴	器底の研削	胎質	胎土	胎色	備考	
19住1	横皿	坪	(13.8)	3.9	(6.0)	底部はすぼみ、体部は直線的に深さ 白線部に厚心。 残存半：口径部～体部1/6	内外面共にコロコ調整。	内 10085/3 外 10085/2	長石 白磁 硬砂	少 量 中	普通	
19住2	土師	小型 甕	11.4	13.2	(8.1)	底部は平直、胎部は緩やかに内湾し 、口径部はくの字に外反する。 残存半：口径部～底部2/3	口縁部は内外面共にココナテ。内面 はヘラナテ。外面上部は縦位のヘラ クスリ、下部は縦位のヘラクスリ。	内 5084/1 外 7.5084/5	長石 白磁 硬砂	中 量 中	普通	赤色3377 線
19住3	土師	甕	19.2	(5.4)	-	胎部は緩やかに内湾し、口縁部はくの 字に外反する。口唇部で上方に揃 えまれる。 残存半：口径部～胴部上半1/5	口縁部は内外面共にココナテ。内面 はヘラナテ。外面は縦位のヘラクス リ。	内 7.5085/1 外 3085/1	長石 白磁 硬砂	中 量 中	普通	赤色3377 線
19住4	瓦	平瓦				長さ 19.2cm 幅 12.6cm 厚さ 2.8cm 重さ 89.6g	凸面は垂直リズ、溝面が浅く、胎 面は糸切り肌、胎土が残る。端部は ヘアによる面取り、一枚作り。	内 2.937/2 外 10384/4	長石 白磁 硬砂	少 量 中	良好	赤色3377 線

20号住居跡

本遺構の平面形状は長方形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを指す。規模は長軸が4.4mで、短軸が4.0mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね15cm前後を測り、覆土は3層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では焚き口と思われる位置から煙道にかけての赤色還元した被熱範囲を検出している。床面では遺構中央部からカマド前面にかけて顕著な硬化が認められ、北側と南側一部の壁下を除き、やや幅広の浅い周溝が巡る。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。本遺構にもカマド横の西側隅に平面形状が不整な楕円形を呈す土坑状の張り出しが付されており、この張り出しの規模は長軸120cm、短軸100cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは凡そ30cm程度である。遺物の出土は遺構の北側半分に濃まり、その器種器形は須恵器の坏類と甕類、及び土師器の甕類と耳皿、並びに模様の鉄製品等があり、その他では瓦片も出土している。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期末に帰属するものと考えられる。



— 20号住居跡完掘全景 —

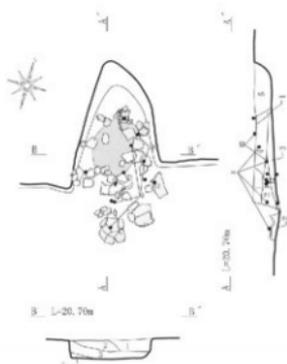


SI-20 土壁説明

1. 161Y 2/3 緑褐色土 ローム粒・シルト少
2. 161Y 2/3 緑褐色土 ローム粒少、粘土シルト中
3. 161Y 2/4 黄褐色土 ローム粒少、粘土シルト多、
(カマド構築材)

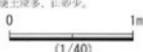


第93図 20号住居跡



SI-20 カマド土壁説明

1. 7.51K 2/3 緑褐色土 粘土・山砂多、焼土ブロック少
2. 7.51K 2/4 緑褐色土 山砂中
3. 7.51K 4/4 緑褐色土 赤土ブロック中
4. 7.51K 2/3 緑褐色土 山砂多
5. 51K 4/3 赤褐色土 焼土粒多、山砂少



第94図 20号住居跡カマド



— 20号住居跡セクション—



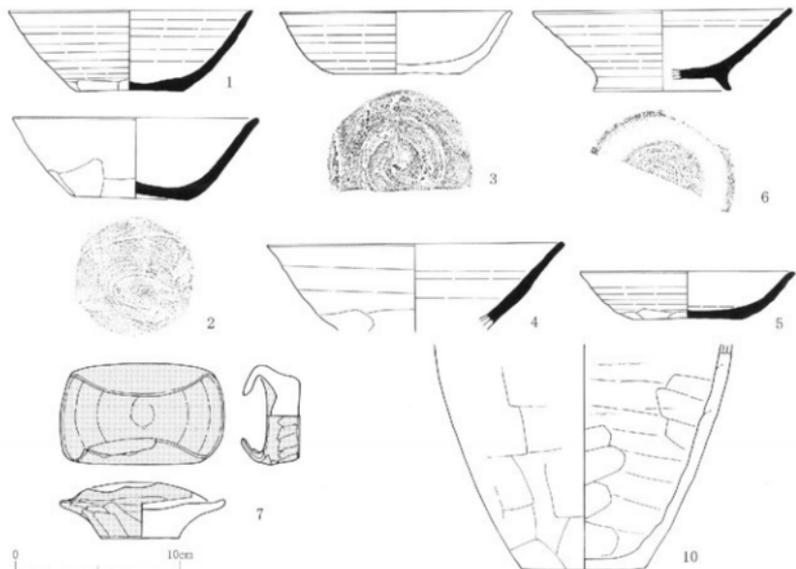
— 20号住居跡遺物出土状況全景—



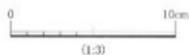
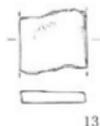
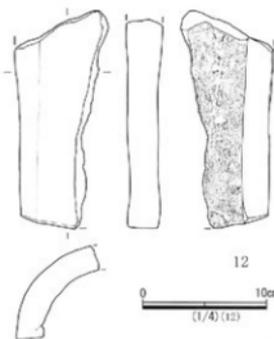
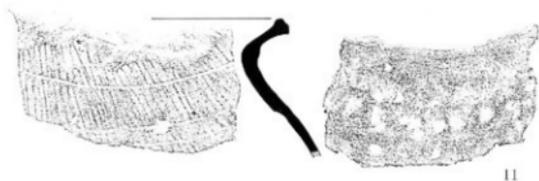
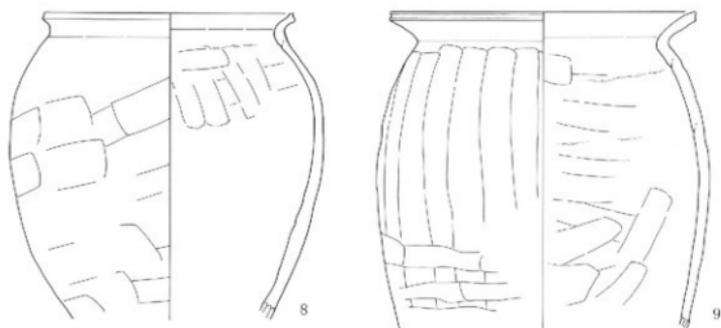
— 20号住居跡カマド遺物出土状況①—



— 20号住居跡カマド遺物出土状況②—



第95図 20号住居跡出土遺物①



第 96 図 20 号住居跡出土遺物②

第 23 表 20 号住居跡遺物観察表

遺物 No	種類	器種	口径	器高	底径	器柄の特徴	器形の特徴	色調	胎土	構成	備考
20 住 1	瀬恵	罎	14.7	5.0	6.3	底部は平底。体部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：完形	内外両面にロクロ調整。外面体部下部及び底部は手持ちヘラでスリ。陶化粘焼成。	赤 2.8%/1 赤 83%/2	長石 0 石炭 0 鉄砂 0		不良
20 住 2	瀬恵	罎	14.9	5.0	7.0	底部はやや上げ底気味の平底。体部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：完形	内外両面にロクロ調整後ナデ。外面体部下部は手持ちヘラでスリ。底面は回転車送り後ヘラでスリ。陶化粘焼成。	赤 100%/1 赤 100%/3	長石 0 石炭 0 鉄砂 0 灰田性ガラス 0		不良
20 住 3	土師	罎	13.8	3.8	7.6	底部は平底。体部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底径 1/2	内外両面にロクロ調整。内面はロクロ調整後ナデ。底部は回転ヘラでスリ。	赤 100%/3 赤 100%/5	長石 0 石炭 0 鉄砂 0 黒雲母 0		良好
20 住 4	瀬恵	谷倉付罎	17.8	(5.3)	-	底部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～体部 4/5	内外両面にロクロ調整後ナデ。外面体部下部は手持ちヘラでスリ後ナデ。	赤 2.9%/3 赤 2.8%/2	長石 0 石炭 0 鉄砂 0		赤色スリ 灰

20住5	須恵	坪	(12.0)	2.9	6.6	底面は平底。扉部は直線的に削き、口縁部は平直。 残存率：口縁部～底面3/4	内外面共にロクロ調整。外面底面下部は灰白色に平持ちヘラクスリ。強化磁焼成。	円 3.035/4 円 2.936/3	長径 中 短径 中 厚さ 中	不良	赤色ロ打痕
20住6	須恵	器台 打外	(18.0)	3.0	(8.1)	底面はヘの字状に付される。強く歪み感のある器。外面は直線的に削き、口縁部は平直。 残存率：口縁部～底面1/6	内外面共にロクロ調整。外面底面は平持ちヘラクスリ。	円 3.035/2 円 2.935/3	長径 少 短径 中 厚さ 中	普通	
20住7	須恵	耳皿	6.2 /10.0	3.5	4.6	底面は平底。扉部は直線的に削き、口縁部は平直。 残存率：ほぼ完全	内面は付クロ調整。外面は手持ちヘラクスリ。内外面共に黒色知炭。	円 3.030 円 3.030	長径 少 短径 中 厚さ 中	普通	
20住8	土師	甕	14.8	(18.7)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部はくの字に外反する。口縁部で上方に削き、ままされる。 残存率：口縁部～胴部下半4/5	口縁部は内外面共にヨコナデ。内面はヘラクスリ。外面は平持ちヘラクスリ。	円 3.031/3 円 2.935/2	長径 少 短径 中 厚さ 中	普通	輪溝が浅く残る。
20住9	土師	甕	(18.4)	(19.4)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部はくの字に外反する。口縁部で上方に削き、ままされる。 残存率：胴部上半～底面1/2	口縁部は内外面共にヨコナデ。内面はヘラクスリ。外面は平持ちヘラクスリ。	円 3.030/3 円 2.936/3	長径 少 短径 中 厚さ 中	普通	輪溝が浅く残る。
20住10	土師	甕	-	(13.8)	7.5	底面は平底。胴部は緩やかに内湾する。 残存率：胴部上半～底面1/2	内面はヘラクスリ。外面は横位のヘラクスリ。	円 3.035/3 円 2.935/3	長径 多 短径 中 厚さ 多	普通	輪溝が浅く残る。
20住11	須恵	甕	-	-	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部はくの字に外反する。口縁部で上方に削き、ままされる。 残存率：口縁部～胴部上半破片	口縁部は内外面共にヨコナデ。内面はヘラクスリ。外面は平持ちヘラクスリ。当て具痕が残る。外面は平行刃可。	円 3.035/3 円 3.035/2	長径 中 短径 中 厚さ 中	普通	赤色ロ打痕 輪溝が浅く残る。
20住12	瓦	丸瓦				長さ 17.9cm 幅 7.7cm 厚さ 2.1cm 重さ 533.1g	正面はナデ裏面。断面は有目が見える。縁部はヘラによる凹取り。一枚厚。	円 3.035/3 円 3.035/3	長径 中 短径 中 厚さ 中	良好	赤色ロ打痕
20住13	石製 土	硯石				長さ 33.9cm 幅 4.1cm 厚さ 0.9cm 重さ 19.2g		1536/4			
20住14	赤銅 土	釘				長さ 11.8cm 幅 1.7cm 厚さ 0.3cm 重さ 36.7g		098/2			

21号住居跡

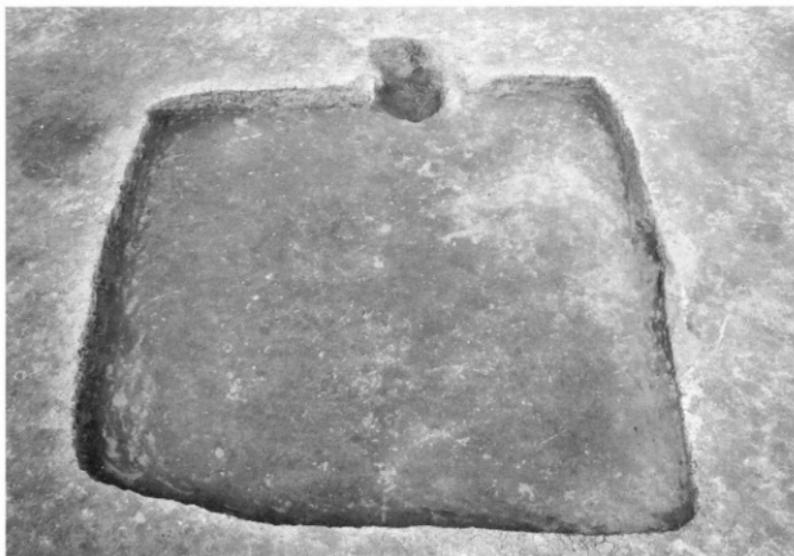
本遺構の平面形状は歪んだ方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを指す。規模は長辺が4.6mで、短辺が4.0mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね20cm前後を測り、覆土は5層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しているが、その一部に現代の掘削が入り込む事から遺存状況は良いとは言えない。今回の調査では火床面の僅かな被燃痕と、その火床面下の掘り方を検出している。床面では遺構中央部からカマド前面にかけて顕著な硬化が認められる。本遺構では主柱穴と考えられるビット、及びその他の施設に伴うビット類の検出は無い。遺物の出土は遺構の北側半分に限まり、その器種器形は須恵器の坏類と甕類、及び土師器の甕類であるが、圧倒的に須恵器の比率が高い。また、1点のみであるが灰釉陶器の破片も出土している。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期末に帰属するものと考えられる。



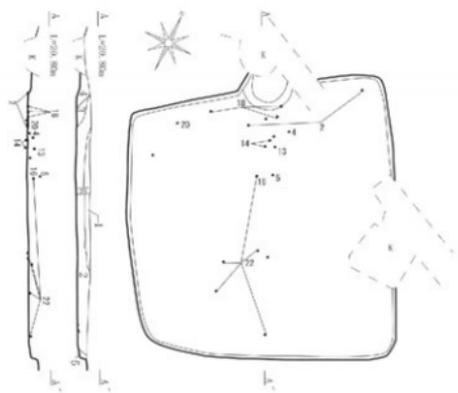
— 21号住居跡セクション —



— 21号住居跡遺物出土状況全景 —

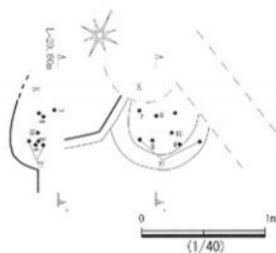


— 21号住居跡完掘全景—



- 51-21 土層説明
- | | |
|------------------|--------------|
| 1. 10YR 3/4 暗褐色土 | 12-1ム多、炭化物少。 |
| 2. 10YR 3/3 暗褐色土 | 13-1ム多、炭化物中。 |
| 3. 10YR 3/1 暗褐色土 | 14-1ム多。 |
| 4. 10YR 4/3 暗褐色土 | 15-1ム多。 |
| 5. 10YR 5/3 暗褐色土 | 16-1ム多。 |

第97図 21号住居跡



第98図 21号住居跡カマド



— 21号住居跡カマド遺物出土状況近景—



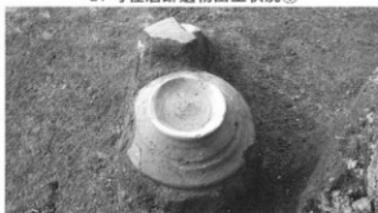
— 21 号住居跡調査風景 —



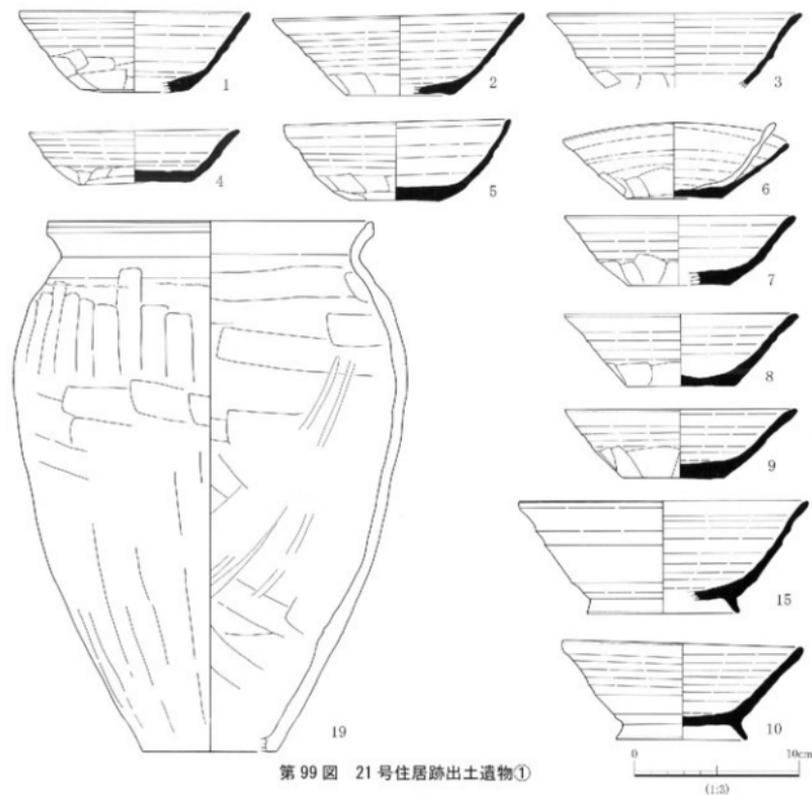
— 21 号住居跡遺物出土状況① —



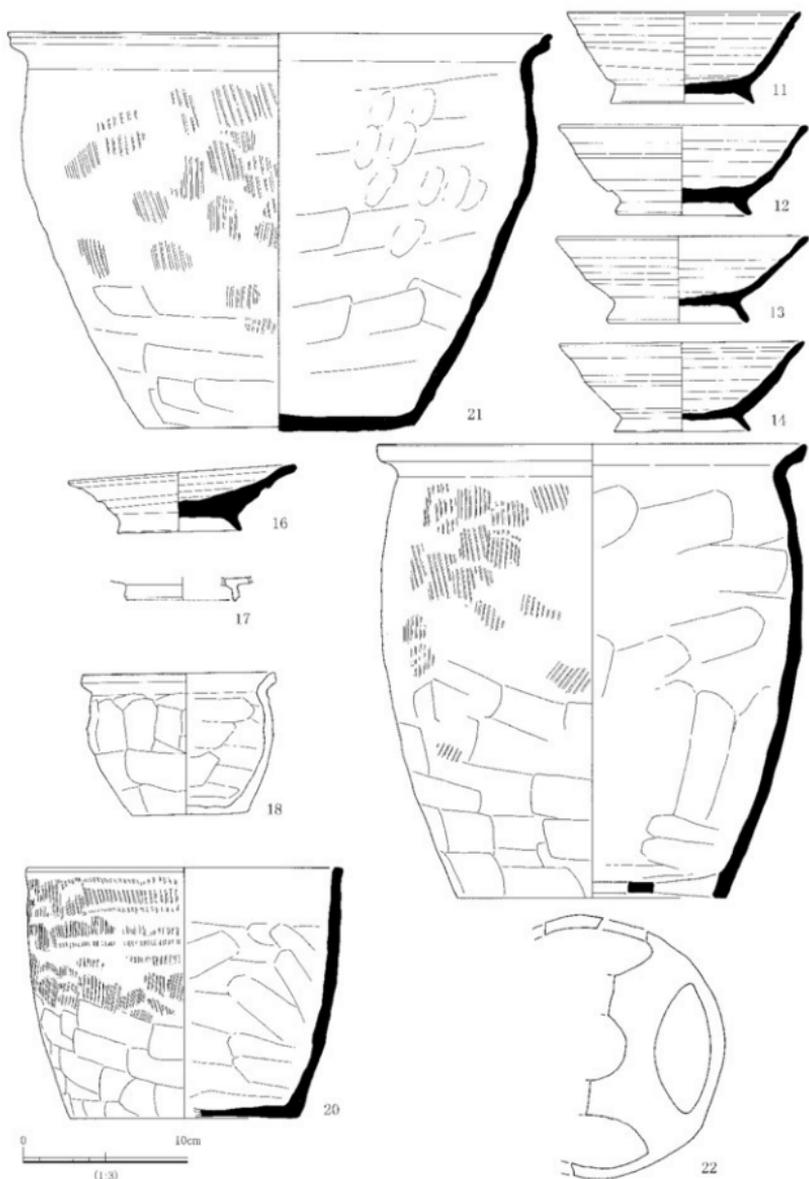
— 21 号住居跡遺物出土状況② —



— 21 号住居跡遺物出土状況③ —



第 99 图 21 号住居跡出土遺物①



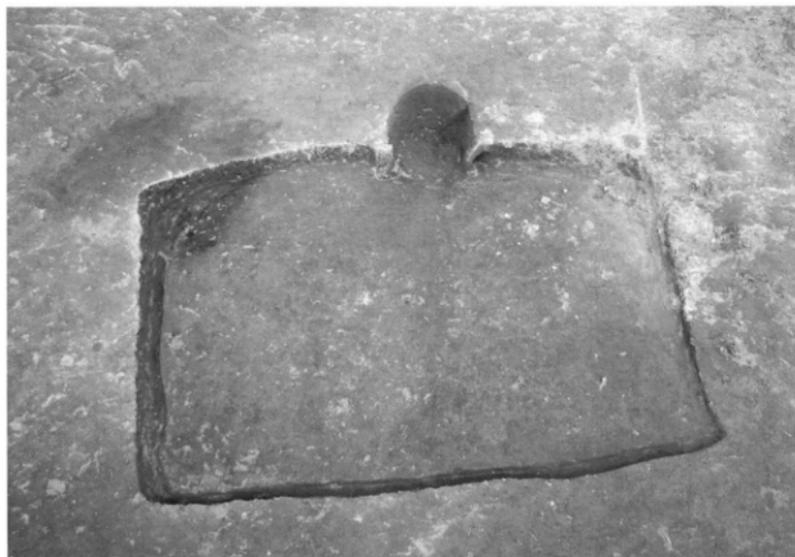
第 100 图 21 号住居跡出土遺物②

第24表 21号住居跡遺物観察表

遺物No.	種類	器種	口径	高さ	底径	特徴	器底の特徴	器底の特徴	色調	土質	組成	備考
21山1	須臾	杯	(13.8)	5.0	(6.6)	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部に歪む。 残存率：口縁部～底面1/3	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 1.0103/3 赤 1.0108/2	粘土 赤土 黄砂	少 中 少	黄緑	
21山2	須臾	杯	13.1	4.8	5.6	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部に歪む。 残存率：口縁部～底面1/2	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。酸化状態あり。	青 2.5108/3 赤 1.0104/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	
21山3	須臾	杯	13.4	(4.4)		体部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～体部2/3	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。	青 1.0103/2 赤 1.0103/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山4	須臾	杯	12.7	3.3	6.8	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面5/8	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 2.5107/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	
21山5	須臾	杯	13.6	1.8	5.4	底面は平盤、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～底面2/3	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 1.0104/2 赤 5.016/1	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	
21山6	須臾	杯	12.0 13.5	4.7	5.6	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部は歪む。歪みがある。	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 2.5107/2	赤土 赤土 黄砂	少 少 中	黄緑	
21山7	須臾	杯	(13.7)	4.3	(6.2)	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面2/3	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 2.5107/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	
21山8	須臾	杯	14.0	4.5	6.6	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面1/2	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 2.5107/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山9	須臾	杯	13.9	4.3	6.2	底面は平盤、胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面3/4	内外面共にロクロ製。外面体部下端及び底面は手持ちヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 5.016/1	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山10	須臾	高台付杯	14.3	6.0	7.9	高台はへの字状に付される。広めの高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面3/4	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。底面は回転ヘラケズリ。酸化状態あり。	青 2.5107/4 赤 2.5108/4	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山11	須臾	高台付杯	14.0	5.6	8.6	高台はへの字状に付される。狭く安定感のある高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面3/4	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。底面は回転ヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 1.0107/2	赤土 赤土 黄砂	少 少 中	黄緑	
21山12	須臾	高台付杯	14.9	5.6	7.9	高台はへの字状に付される。狭く安定感のある高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面3/4	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。底面は回転ヘラケズリ。	青 2.5107/2 赤 2.5107/1	赤土 赤土 黄砂	少 少 中	黄緑	
21山13	須臾	高台付杯	15.2	5.3	8.4	高台はへの字状に付される。狭めの高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面1/2	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。底面は回転ヘラケズリ。	青 2.5107/3 赤 2.5108/4	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山14	須臾	高台付杯	14.6	5.3	8.0	高台はへの字状に付される。広めの高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面2/3	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。	青 1.0108/5 赤 1.0105/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山15	須臾	高台付杯	(17.3)	6.9	(9.0)	高台はへの字状に付される。狭く安定感のある高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面1/5	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。底面は回転ヘラケズリ。	青 1.0103/2 赤 5.016/1	赤土 赤土 黄砂	少 少 中	黄緑	
21山16	須臾	高台付杯	13.6	3.7	7.4	高台はへの字状に付される。狭く安定感のある高台。胴部は直線的に開き、口縁部は歪みに反する。 残存率：口縁部～底面2/3	内外面共にロクロ製。外面体部下端は手持ちヘラケズリ。	青 2.5108/5 赤 2.5107/1	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	
21山17	須臾陶器	高台付杯	-	(11.2)	(6.0)	底面は平盤、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～底面1/3	内外面共にロクロ製。	青 1.0108/2 赤 5.016/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	良好
21山18	土製	小型甕	11.4	8.6	7.0	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～上方に僅かに残る。	口縁部は内外面共にロクロ製。内面はヘラケズリ。外面は削り及び揉み付けによる凹凸付着。	青 2.5103/2 赤 5.018/1	赤土 赤土 黄砂	少 少 中	黄緑	赤色337 黄
21山19	土製	土甕	(19.5)	(32.4)	(8.1)	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～体部2/3	口縁部は内外面共にロクロ製。内面はヘラケズリ。外面は削り及び揉み付けによる凹凸付着。	青 2.5108/2 赤 2.5108/4	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	結核が顕著 不純。
21山20	須臾	甕	(19.0)	16.3	(13.9)	底面は平盤、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～底面1/3	口縁部は内外面共にロクロ製。内面はヘラケズリ。外面は削り及び揉み付けによる凹凸付着。	青 2.5107/2 赤 2.5107/2	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	
21山21	須臾	甕	(32.6)	24.3	16.2	底面は平盤、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～底面2/3	口縁部は内外面共にロクロ製。内面はヘラケズリ。外面は削り及び揉み付けによる凹凸付着。	青 2.5108/3 赤 5.016/1	赤土 赤土 黄砂	中 中 中	黄緑	赤色337 黄
21山22	須臾	甕	(26.0)	27.6	16.2	底面は平盤、胴部は緩やかに内湾し、口縁部は歪む。 残存率：口縁部～上方に僅かに残る。	口縁部は内外面共にロクロ製。内面はヘラケズリ。外面は削り及び揉み付けによる凹凸付着。	青 5.016/1 赤 5.016/1	赤土 赤土 黄砂	少 少 中	黄緑	赤色337 黄

22号住居跡

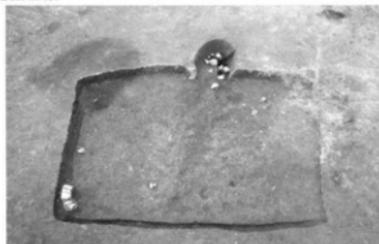
本遺構の平面形状は長方形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを指す。規模は長軸が3.8mで、短軸が2.9mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね15cm前後を測り、覆土は2層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査では焚き口と思われる位置から燻道にかけての弱い被熱範囲を検出したのみである。床面では遺構中央部からカマド前面にかけて若干の硬化が認められ、北側と東側の壁下を除き、細く浅い周溝が巡る。この床面では支柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。遺物の出土範囲は遺構全体に及ぶが、特にカマド周辺に纏まる傾向がある。出土遺物の器種器形は須恵器の坏類と壺類、及び土師器の坏と壺等があり、その他ではカマド軸の補強素材として用いられていた瓦片の出土もある。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期末に帰属するものと考えられる。



— 22号住居跡完掘全景 —



— 22号住居跡セクション —



— 22号住居跡遺物出土状況全景 —



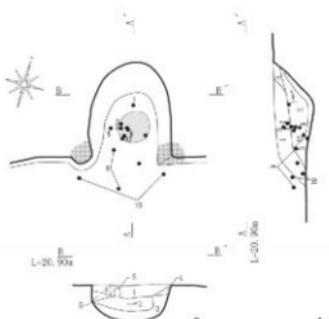
SI-22 上層説明
 1. 10YR 3/3 暗褐色土 コーム粒中。
 2. 10YR 4/3 に近い黄褐色土 コーム粒多。

0 2m
 (1/80)

第101図 22号住居跡



— 22号住居跡カマドセクション —



SI-22 シヤウノ土層説明
 1. 7.5YR 3/3 暗褐色土 焼土粒・白砂少。
 2. 7.5YR 4/4 褐色土。
 3. 7.5YR 5/2 に近い褐色土 コーム粒多。
 4. 7.5YR 5/2 に近い褐色土 粘土中。
 5. 7.5YR 6/3 褐色土 焼土粒多。

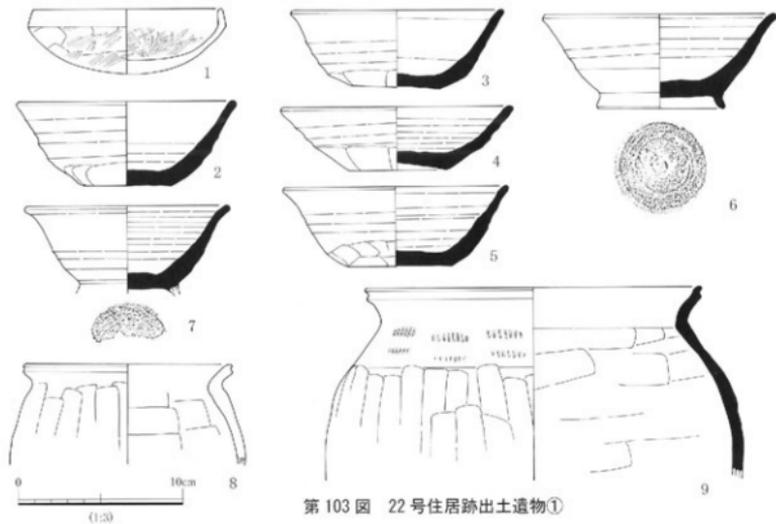
(1/40)

0 1m

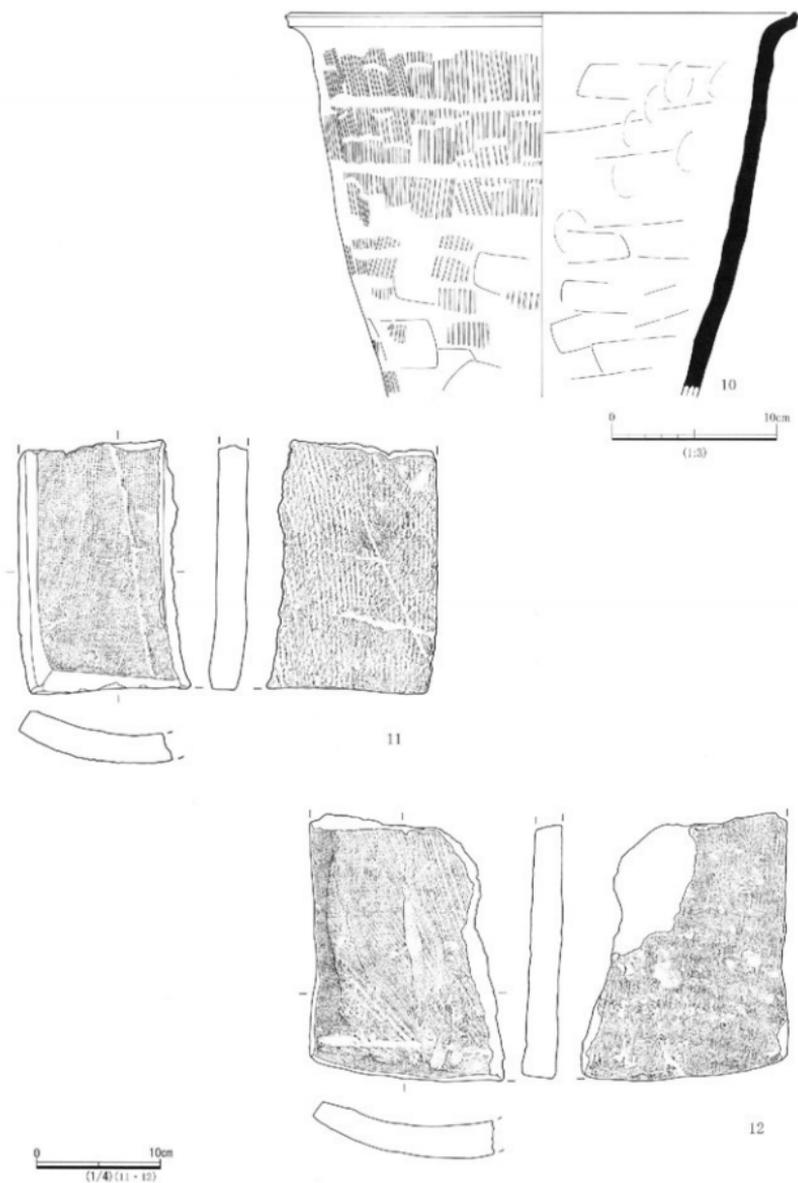
第102図 22号住居跡カマド



— 22号住居跡カマド遺物出土状況 —



第103図 22号住居跡出土遺物①



第 104 图 22 号住居跡出土遺物②

第 25 表 22 号住居跡遺物観察表

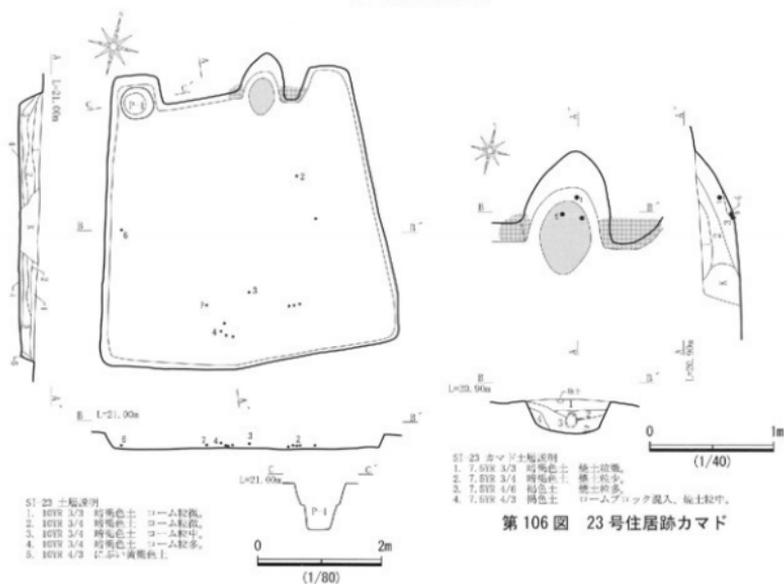
遺物 No.	種類	形状	口径	径高	底径	器種の特徴	胎形の特徴	色調	胎土	産地	備考
22 住 1	土師	平	(11.2)	4.0		底面は丸底。胴部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的に外反する。口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面 5/6	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面は平直。外面はヘラケツリ後ミガキ。	黄 2, 304/3 赤 2, 305/5	長石 少 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	貫通	
22 生 2	須恵	坪	13.0	5.2	6.9	底面は平直。胴部は緩線的に開き、口縁部は直線的に外反する。 残存率：口縁部～底面 2/3	内外両面にシロクハ製。外面体部下湾及び底面は手持ちヘラケツリ。酸化銅焼成。	黄 2, 305/5 赤 2, 305/4	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	不貞	
22 生 3	須恵	坪	12.6	4.8	5.7	底面は平直。胴部は緩線的に開き、口縁部は直線的に外反する。 残存率：口縁部	内外両面にシロクハ製。外面体部下湾及び底面は手持ちヘラケツリ。酸化銅焼成。	黄 2, 305/4 赤 2, 305/5	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	不貞	
22 年 4	須恵	坪	(13.6)	3.9	6.1	底面は上げ底気味の平直。胴部は緩線的に開き、口縁部は直線的に外反する。 残存率：口縁部～底面 3/5	内外両面にシロクハ製。外面体部下湾及び底面は手持ちヘラケツリ。酸化銅焼成。	黄 2, 304/3 赤 2, 304/2	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	不貞	
22 生 5	須恵	坪	(13.3)	4.9	6.6	底面は平直。胴部は緩線的に開き、口縁部は直線的に外反する。 残存率：口縁部～底面 2/3	内外両面にシロクハ製。外面体部下湾及び底面は手持ちヘラケツリ。酸化銅焼成。	黄 2, 305/5 赤 2, 305/4	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	不貞	
22 住 6	須恵	台形母形	13.9	5.9	(7.8)	底面はへらの字状に付される。胴部は緩線的に開き、口縁部は直線的に外反する。 残存率：口縁部～底面 1/4	内外両面にシロクハ製。外面体部下湾及び底面は手持ちヘラケツリ。酸化銅焼成。	黄 2, 305/5 赤 2, 305/4	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	貫通	赤色 357 類
22 年 7	須恵	高台母形	(12.1)	(5.4)	-	底面は丸底。胴部は直線的に開き、口縁部は直線的に外反する。 残存率：口縁部～底面 1/4	内外両面にシロクハ製。外面体部下湾及び底面は手持ちヘラケツリ。	黄 2, 305/5 赤 2, 305/2	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	貫通	
22 年 8	1 師	小型盤	(12.2)	(8.2)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的に外反する。口縁部で上方に翹まされる。 残存率：口縁部～胴部 1/4	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はヘラケツリ。外面は胎底のヘラケツリ。	黄 2, 305/4 赤 2, 305/4	長石 少 赤土 少 黒炭 少 鉄屑 少 炭屑 中	貫通	赤色 317 類
22 生 9	1 師	盤	(20.1)	(11.8)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的に外反する。口縁部で上方に翹まされる。 残存率：口縁部～胴部 1/4	口縁部は内外両面にヨコナダ。一部は平明と成る。内面はヘラケツリ。外面は胎底のヘラケツリ。	黄 2, 305/4 赤 2, 305/4	長石 少 赤土 少 黒炭 少 鉄屑 中 炭屑 中	貫通	赤色 317 類
22 生 10	須恵	壺	(30.4)	(23.8)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は直線的に外反する。口縁部で上方に翹まされる。 残存率：口縁部～胴部 1/4	口縁部は内外両面にヨコナダ。内面はヘラケツリ。外面は胎底のヘラケツリ。	黄 2, 305/4 赤 2, 305/5	長石 中 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中 炭屑 中	貫通	
22 住 11	瓦	型小瓦				長さ 28.8cm 幅 13.0cm 厚さ 2.4cm 重さ 1016.4g	凸面は胎形。凹面は胎底のヨコナダ。胎底はへらによる面取り。	黄 2, 305/4 赤 2, 305/4	長石 少 赤土 少 黒炭 中 鉄屑 中	良好	赤色 317 類
22 住 12	瓦	平瓦				長さ 22.0cm 幅 14.5cm 厚さ 2.5cm 重さ 1250g	凸面は胎形。凹面は胎底のヨコナダ。胎底はへらによる面取り。	黄 2, 305/4 赤 2, 305/4	長石 少 赤土 中 黒炭 中 鉄屑 中	良好	赤色 317 類

2 3 号住居跡

本遺構の平面形状は至な方形を呈し、主軸方向は N-17°-8 を指す。規模は長辺が 4.8m で、短辺が 4.0m を測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね 35 cm 前後を測り、覆土は 5 層からなる明瞭な自然堆積の層相を呈す。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では焚き口と思われる位置から赤色還元した火床面と、その火床面下の掘り方を検出している。床面では遺構中央部とカマド前面に顕著な酸化範囲が認められる。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。本遺構ではカマド横の西側、東側の両隅に平面形状が不整な方形を呈す張り出しが付されており、この張り出しの規模は、西側隅のものが長辺 70 cm、短辺 50 cm で、遺構確認面から円形の土坑状に窪むその底部までの深さは凡そ 70 cm を測り、東側隅のものが長辺 80 cm、短辺 45 cm を測り、床面と同じ高さで延びている。遺物の出土は少量ながらカマド内と遺構南側に集中し、その器種器形は須恵器の坏類と甕、及び土師器の甕等があり、その他では丸瓦片も出土している。これらの遺物は 9 世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期末に帰属するものと考えられる。



— 23号住居跡発掘全景—



第105図 23号住居跡



— 23号住居跡セクション—



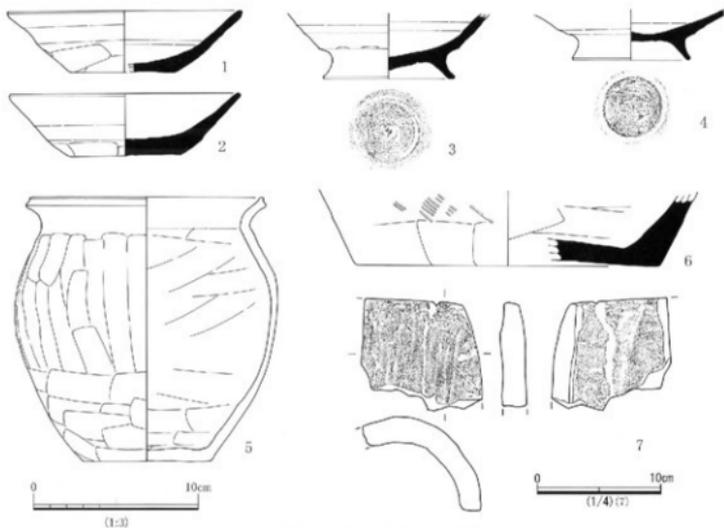
— 23号住居跡遺物出土状況全景—



— 23号住居跡カマドセクション—



— 23号住居跡カマド遺物出土状況—



第107図 23号住居跡出土遺物

第26表 23号住居跡遺物観察表

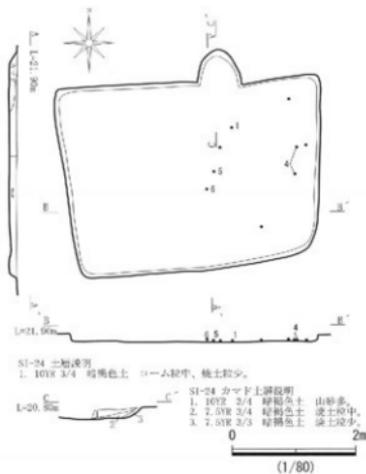
遺物 No.	種類	器種	口径	総高	底径	器母の特徴	彫形の特徴	色産	土士	産成	備考
23住 1	灰皿	坏	14.0	3.7	6.6	底部は平底。体部は直線的に狭き口縁部に至る。 残存率：口縁部～底辺5/6	内面下部はヘラナダ。内外面共にコクロ磨製。内面下部はヘラナダ。底部下縁及び底部は手持ちヘラナダ。	青 7.0335/4 赤 3.0096/3	長石 緑砂 心灰 黒炭	少 少 少 少	普通
23住 2	灰皿	杯	(13.8)	3.9	7.1	底部は平底。体部は直線的に狭き口縁部に至る。 残存率：口縁部～底辺1/2	内外面共にコクロ磨製。体部下縁及び底部は手持ちヘラナダ。踵化は浅。	青 7.0335/3 赤 7.0335/3	長石 緑砂 心灰 黒炭	中 少 少 少	普通
23住 3	灰皿	高台付牙	-	(4.0)	7.8	高台はハの字状に付される。高めの部分。体部は直線的に狭くと裾廣さされる。 残存率：体部下半～底辺 高台部一部欠損	内外面共にコクロ磨製。底部は同軸へラナダ。	青 3.0096/3 赤 3.0096/4	長石 緑砂 心灰 黒炭	中 少 少 少	穂積み灰が残る。 普通
23住 4	灰皿	高台付牙	-	(3.1)	7.0	高台はハの字状に付される。高めの部分。体部は直線的に狭くと裾廣さされる。 残存率：体部下半～底辺5/6	内外面共にコクロ磨製。底部は同軸へラナダ。	青 3.0097/3 赤 7.0337/4	長石 緑砂 心灰 黒炭	中 少 少 少	赤色は打製 普通
23住 5	土師	小型甕	13.8	16.2	7.7	高台は平底。胴部は縁や内に内納し、口縁部は広くの外反する。口縁部で上方にも下方にも廣まされる。 残存率：口縁部～底辺5/6	口縁部は内外面共にコロナダ。内面はヘラナダ。外側上部は踵位のラタナダ。下部は横位のヘラナダ。	青 5.134/4 赤 5.134/5	長石 緑砂 心灰 黒炭	多 多 少 少	普通
23住 6	灰皿	甕	-	(4.0)	13.5	底面はやや上げ気味の平底。体部は縁やかに内納する。口縁部は広くの外反する。 残存率：胴部下半～底辺1/3	内面はヘラナダ。外面は横位のヘラナダ後向き。	青 2.0351/1 赤 3.0095/2	長石 緑砂 心灰 黒炭	少 少 少 少	新治産物 普通
23住 7	瓦	丸瓦	-	-	-	長さ 59.1cm 幅 39.7cm 厚さ 2.0cm 重さ 376.9g	当面はナダ。回面は有目が残る。縁部はへくによる面取り。一枚作り。	青 2.0353/3 赤 7.0336/4	長石 緑砂 心灰 黒炭	少 中 少 少	赤色は打製 良好

24号住居跡

本遺構の平面形状はやや歪な長方形を呈し、主軸方向はN-1°-Wを指す。規模は長辺が2.8mで、短辺が2.1mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね10cm前後と浅く、覆土を分層する事はできなかった。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査では焚き口と思われる位置から煙道にかけての弱い被熱痕を検出したのみである。床面ではカマド前面から遺構南側にかけて拡がる硬化範囲を検出する事ができた。この床面では主柱穴と考えられるビットの検出は無く、その他の施設に伴うビット類の検出も無い。遺物の出土範囲は遺構東側半分に限定され、この出土遺物の器種器形は須恵器の坏及び土師器の坏と甕等であり、このうち土師器坏の外面には平板名の「よ」と似る判読不明の墨書が施されている。その他ではカマド袖の補強素材として用いられていたと思われる瓦片の出土もある。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期末に帰属するものと考えられる。



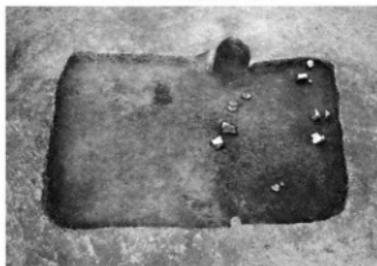
- 24号住居跡完掘全景 -



第108図 24号住居跡



— 24号住居跡セクション —



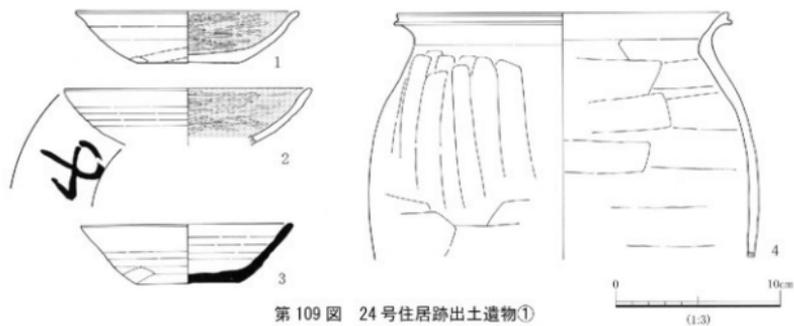
— 24号住居跡遺物出土状況全景 —



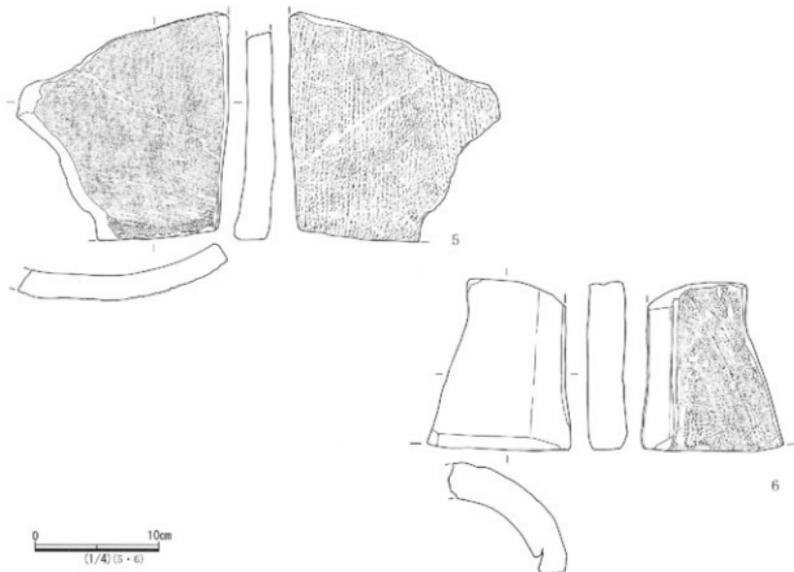
— 24号住居跡調査風景 —



— 24号住居跡カマドセクション —



第109図 24号住居跡出土遺物①



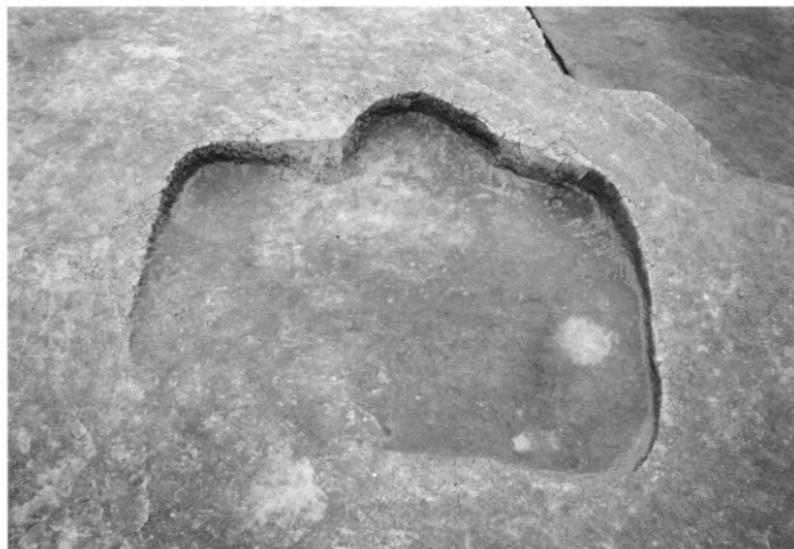
第110図 24号住居跡出土遺物②

第27表 24号住居跡遺物観察表

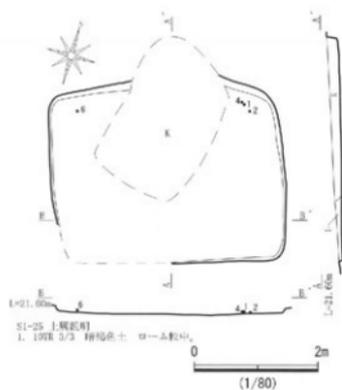
遺構No.	種類	形状	口径	器高	口径	器厚の特徴	器形の特徴	色産	粘土	状態	備考
24住1	土師	杯	(13.3)	3.2	6.3	両面は平肌。体壁は直線的に厚さ。口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～器高2/3	内外両面にココロ裏面。内面はココロ裏面粗くツギキ。外面は器下部及び口縁部は平持ちヘラツクリ。内面は黒色肌理。	内 53.9 外 3095.3	赤土 少 少 少 少 少	普通	赤色(17)肌
24住2	土師	杯	(14.0)	(3.5)	-	底面は平肌。体壁は縁や少に内湾し、口縁部は直線的に厚さ。 残存率：口縁部～器高1/2	内外両面にココロ裏面。内面はココロ裏面粗くツギキ。外面は器下部及び口縁部は平持ちヘラツクリ。	内 53.9 外 7.338.4	赤土 少 少 少 少	普通	赤色(17)肌
24住3	須賀	杯	(12.0)	3.7	(6.4)	底面は平肌。体壁は直線的に厚さ。口縁部は直線的に厚さ。 残存率：口縁部～器高2/3	内外両面にココロ裏面。外面は器下部及び口縁部は平持ちヘラツクリ。	内 3994.1 外 3092.2	赤土 少 少 少 少	普通	赤色(17)肌
24住4	土師	突	(19.7)	(15.1)	-	胴部は縁や少に内湾し、口縁部は直線的に厚さ。口縁部は直線的に厚さ。口縁部は直線的に厚さ。 残存率：口縁部～器高1/2	口縁部は内外両面にココロが、内面はヘラツクリ。外面上部は僅かにヘラツクリ。下部は横位のヘラツクリ。	内 7.338.1 外 7.338.5	赤土 少 少 少 少	普通	赤色(17)肌
24住5	瓦	平瓦	長さ 18.6cm 幅 17.1cm 厚さ 2.0cm	重さ 772.3g	-	両面は長肌平肌。器面は平肌。口縁部はヘラによる曲がり。一枚作り。	両面は平肌。器面は平肌。口縁部はヘラによる曲がり。一枚作り。	内 3.934.1 外 2.310.2	赤土 少 少 少 少	良好	
24住6	瓦	丸瓦	長さ 14.2cm 幅 11.6cm 厚さ 2.8cm	重さ 791.9g	-	両面は平肌。器面は平肌。口縁部はヘラによる曲がり。一枚作り。	両面は平肌。器面は平肌。口縁部はヘラによる曲がり。一枚作り。	内 3096.2 外 7.338.5	赤土 少 少 少 少	良好	

25号住居跡

本遺構の平面形状は長方形を呈し、主軸方向はN-18°-Wを指す。規模は長軸が3.8mで、短軸が3.0mを測る。遺構確認面から床面までの深さは10cm～5cmと浅く、覆土を分層する事はできなかった。本遺構の北側壁中央部にはカマドも付設していたと思われるが、この位置には平面形状が不整な長方形を呈す現代の掘込みが入り込むため、今回の調査では極めて微痕痕と焼土を検出したに過ぎない。床面では遺構中央部から南側にかけて顕著な硬化範囲を検出する事ができた。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。遺物の出土は少量ながら遺構全体に分布し、この出土遺物の器種器形は須恵器の坏類と甕類である。このうち坏1点の外面には漢字の「瓦」と似る墨書が施されている。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。



— 25号住居跡完掘全景 —



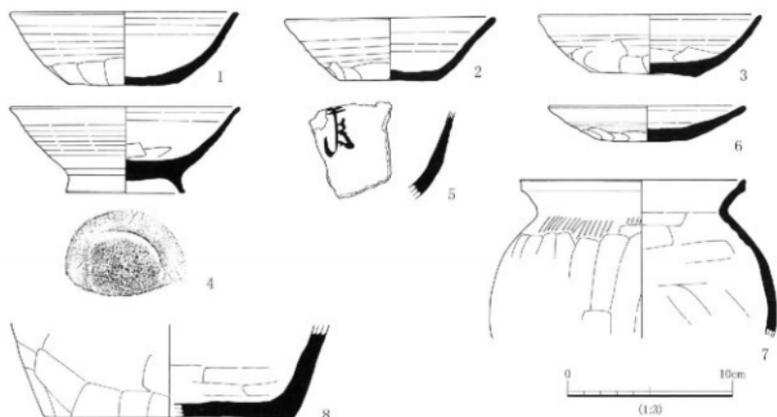
第111図 25号住居跡



— 25号住居跡セクション —



— 25号住居跡遺物出土状況全景 —



第 112 図 25 号住居跡出土遺物

第 28 表 25 号住居跡遺物観察表

遺物 No.	種類	形状	口径	器高	底径	器底の形状	器底の特徴	材質	胎土	発色	備考
25住 1	須恵	杯	13.6	4.8	6.7	底面は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面 4/5	内外面共にコクロ調。内面下部はコクロ調後ナゲ。外面体部はコクロ調。底面は平持ちヘラクスリ。焼化痕。	赤 3195/4	長石 少 砂 多 赤 黄 鉄	少 赤 黄 鉄	不具
25住 2	須恵	杯	12.5	3.8	6.1	底面は平底。体部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：ほぼ完形	内外面共にコクロ調。内面下部はコクロ調後ナゲ。外面体部はコクロ調。底面は平持ちヘラクスリ。	赤 19095/3	長石 多 砂 少 赤 黄 鉄	多 多 少 少 赤 黄 鉄	普通
25住 3	須恵	杯	(13.4)	3.7	(6.5)	底面はやや上り底気味の平底。体部は緩やかに内湾し、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底面 3/4	内外面共にコクロ調。内面下部はコクロ調後ナゲ。外面体部は緩やかに上り底気味。底面は平持ちヘラクスリ。	赤 53/2	長石 中 少 砂 少 赤 黄 鉄	中 少 赤 黄 鉄	不具
25住 4	須恵	高台付井	(13.8)	5.3	(7.2)	高台はハの字状に行われる。器の底面は平底。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。 残存率：口縁部～底面 1/3	内外面共にコクロ調。内面下部はコクロ調後ナゲ。外面体部は緩やかに上り底気味。底面は平持ちヘラクスリ。	赤 19095/2	長石 中 少 砂 少 赤 黄 鉄	中 中 中 中 赤 黄 鉄	普通
25住 5	須恵	杯	-	-	-	体部に窪みかき内湾する。 残存率：体部 1/3	内外面共にコクロ調。外面体部に窪み。 残存率：体部 1/3	赤 3195/4	長石 少 砂 少 赤 黄 鉄	少 少 赤 黄 鉄	普通
25住 6	須恵	皿	11.7	2.2	5.7	底面は平底。体部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：完形	内外面共にコクロ調。外面体部に窪み及び底面は平持ちヘラクスリ。	赤 2,996/2	長石 中 少 砂 少 赤 黄 鉄	中 中 中 中 赤 黄 鉄	普通
25住 7	須恵	小形器	(13.5)	(9.7)	-	器底は緩やかに内湾し、口縁部は僅かに外反する。口縁部で上方に湾する。残存率：口縁部～底面 2/3	口縁部は内外面共にヨコナゲ。内面はヘラクスリ。外面は平持ち後底面はヘラクスリ。	赤 19096/3	長石 少 砂 少 赤 黄 鉄	少 少 赤 黄 鉄	普通
25住 8	須恵	釜	(5.7)	(15.0)	(10.0)	底面は平底。体部は緩やかに内湾する。残存率：口縁部～底面 1/3	内面はヘラクスリ。外面は平持ちのヘラクスリ。	赤 2,100/4	長石 中 少 砂 少 赤 黄 鉄	中 中 中 中 赤 黄 鉄	普通

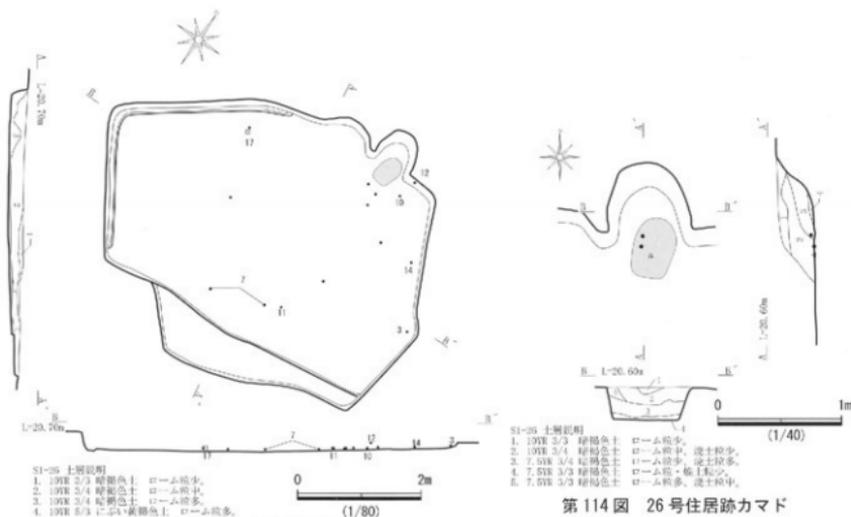
26号住居跡

本遺構の平面形状は変則的で歪な多角形を呈し、主軸方向はN-34°-Wを指す。規模は長軸が6.2mで、短軸が4.5mを測る。遺構確認面から床面までの深さは概ね20cm前後を測り、覆土は4層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構の北側隅にはカマドも付設しているが、今回の調査ではカマド内部から煙道にかけて微弱な焼成痕を検出したのみである。床面では遺構中央部からカマド前面にかけての硬化範囲が認められ、西側壁下の一部には浅い溝溝が巡る。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。遺物の出土範囲は遺構全体に及び、その器種器形は須恵器の杯類と甕類、及び土師器の甕類

等があり、その他では瓦片と土製品（土玉）も出土している。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。補足として、本遺構の平面形状が変則的で歪な事由として、複数の他遺構との重複によるものとも考えられるが、今回の調査では他遺構との重複を実証しうる痕跡を検出する事はできなかった。

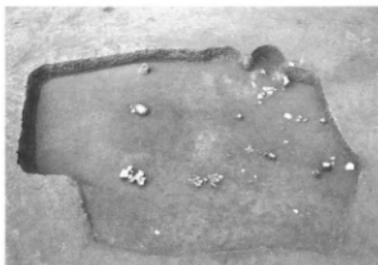


— 26号住居跡完掘全景—





— 26号住居跡セクション—



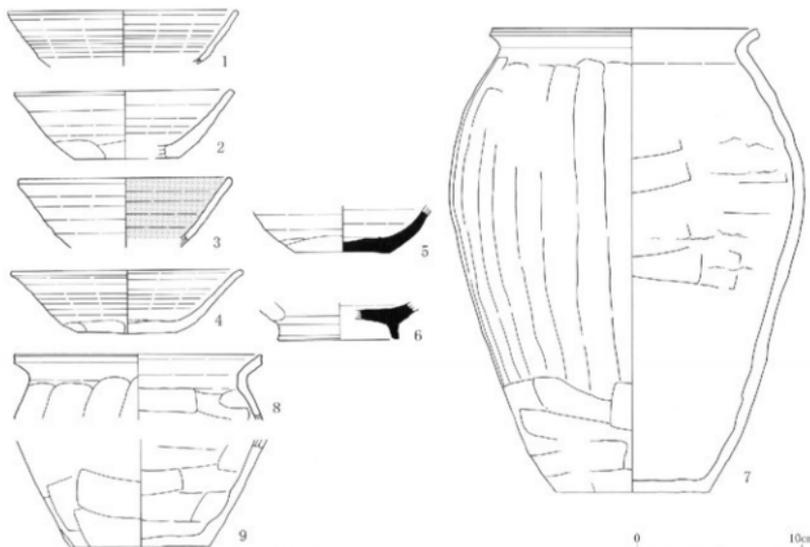
— 26号住居跡遺物出土状況全景—



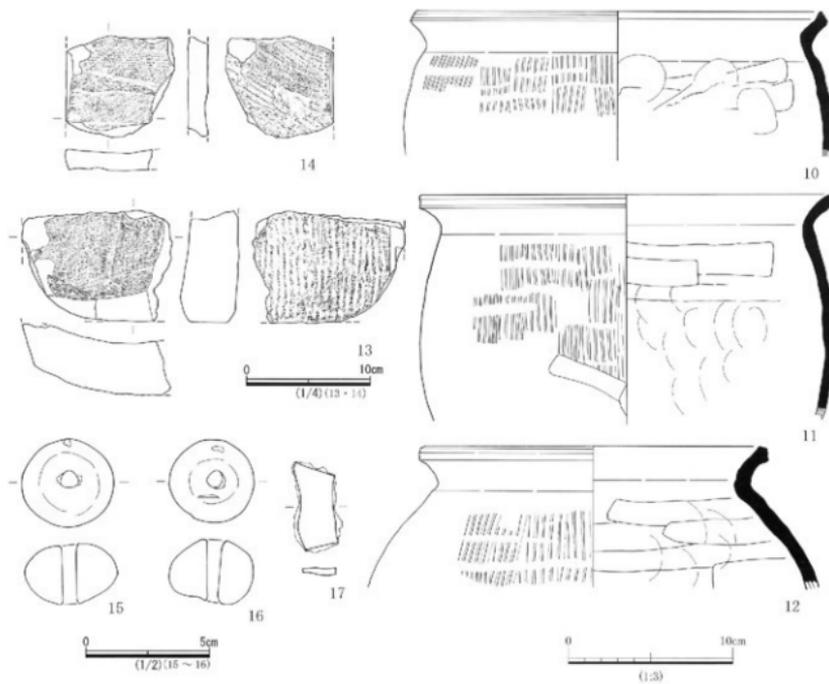
— 26号住居跡カマドセクション—



— 26号住居跡カマド遺物出土状況—



第115図 26号住居跡出土遺物①



第 116 図 26 号住居跡出土遺物②

第 29 表 26 号住居跡遺物観察表

図号	種別	図解	口径	高さ	底径	図解の特徴	形状の特徴	色調	粘土	構成	備考
28 住 1	土師	坪	(13.8)	(3.5)	-	体形直線的に狭き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底部 2/5	内外面共にロクロ調整。	A 2.5986/4 B 2.5986/8	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 2	土師	坪	(13.3)	4.2	(6.4)	底部は平底、体部は直線的に狭き、 口縁部に至る。 残存率：口縁部～底部 1/6	内外面共にロクロ調整。外面体部上 端及び底部は手持ちヘラケズリ。	A 2.5983/3 B 3.995/4	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 3	土師	坪	(12.8)	(4.2)	-	体部は直線的に狭き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～体部上半 1/8	内外面共にロクロ調整。内面黒色染 灰。	A 93/5 B 2.5986/4	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 4	土師	坪	(13.8)	3.9	(6.0)	底部は平底、体部は直線的に狭き、 口縁部は折りに外反する。 残存率：口縁部～底部 2/5	内外面共にロクロ調整。外面体部上 端及び底部は手持ちヘラケズリ。	A 10355/5 B 2.5983/3	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 5	須恵	坪	-	(2.9)	(5.8)	底部は平底、体部は緩やかに内湾す ると推測される。 残存率：体部下半～底部 2/5	内外面共にロクロ調整。外面体部上 端及び底部は手持ちヘラケズリ。	A 10355/2 B 2.5972/3	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 6	須恵	高台 付杯	-	(2.3)	(7.3)	やや高めの高台。体部は直線的に閉 くと推測される。 残存率：高台	内外面共にロクロ調整。外面体部上 端はロクロ調整後ヘラケナド。底部は 手持ちヘラケズリ。	A 379/3 B 2.5973/3	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 7	土師	甕	15.4	28.5	9.4	底部は平底、側部は緩やかに内湾し、 口縁部はくの字に外反する。 残存率：ほぼ完形	口縁部は内外面共にヨコナデ。内面 はヘラケナド。外面上部は肩位のヘラ ケズリ、下部は横位のヘラケズリ。	A 2.5986/4 B 2.5983/3	長石 砂 石 灰	普通	軸折み 残る 赤色327 黄
28 住 8	土師	甕	(14.8)	(4.0)	-	側部は緩やかに内湾し、口縁部はくの 字に外反する。口縁部で上方に横ま される。 残存率：口縁部～体部上半 1/2	口縁部は内外面共にヨコナデ。内面 はヘラケナド。外面は横位のヘラケ ズリ。	A 10366/5 B 10366/5	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄
28 住 9	土師	甕	-	(6.4)	8.3	底部は平底、側部は緩やかに内湾す ると推測される。 残存率：側部下半～底部 2/3	内面はヘラケナド。外面は横位のヘラ ケズリ。	A 2.5986/4 B 2.5983/4	長石 砂 石 灰	普通	赤色327 黄

26住10	瓦	栗	(2.4.3)	(8.1)	-	腹部は縁や小に内湾し、口縁部はくの字に外反する。口縁部で上方に曲り残存率：口縁部～腹部上半1/3	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。当て具痕が残る。外反は平行向き。	内 19106/3 外 19106/1	長石 緑砂 石英 黒砂	少 多 多 多	普通	輪郭みどりが残る 赤色は行 数
26住11	瓦	栗	(2.4.7)	(14.2)	-	腹部は縁や小に内湾し、口縁部はくの字に外反する。口縁部で上方にも曲り残存率：口縁部～腹部上半1/4	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。当て具痕が残る。外反は平行向き後斜位のヘラナデ。酸化斑あり。	内 7,9305/4 外 5335/4	長石 緑砂 石英 黒砂	少 少 少 少	不良	赤色は行 数
26住12	瓦	栗	(20.1)	(8.9)	-	腹部は縁や小に内湾し、口縁部はくの字に外反する。口縁部で上方に曲り残存率：口縁部～腹部上半1/8	口縁部は内外両面にヨコナデ、内面はヘラナデ。当て具痕が残る。外反は平行向き後ヘラナデ。	内 7,9305/4 外 7,9305/4	長石 緑砂 石英 黒砂	少 少 少 少	普通	赤色は行 数
26住13	瓦	平瓦				長さ 12.2cm 幅 9.2cm 厚さ 4.6cm 重さ 481.1g	片面は溝付き。両面は両目が残る。一枚作り。	内 7,9305/4 外 3335/5	長石 緑砂 石英 黒砂	中 中 多 多	良好	赤色は行 数
26住14	瓦	平瓦				長さ 8.8cm 幅 8.4cm 厚さ 1.8cm 重さ 136.2g	片面は尖切り。両面は両目が残る。両面はヘラによる曲がり。一枚作り。	内 7,9304/3 外 3335/1	長石 緑砂 石英 黒砂	中 中 多 多	良好	赤色は行 数
26住15	土質 土玉					長さ 3.8cm 幅 3.6cm 厚さ 2.5cm 重さ 32.0g	指による整形。	2,922/4	長石 緑砂 石英 黒砂	少 少 多 多	普通	赤色は行 数
26住16	土質 土玉					長さ 3.5cm 幅 3.4cm 厚さ 2.7cm 重さ 28.1g	指による整形。	2,924/1	長石 少 多 多	少 少 多 多	普通	
26住17	土質 土玉					長さ 7.2cm 幅 5.6cm 厚さ 0.5cm 重さ 35.8g		0992/2				

27号住居跡



— 27号住居跡完掘全景 —

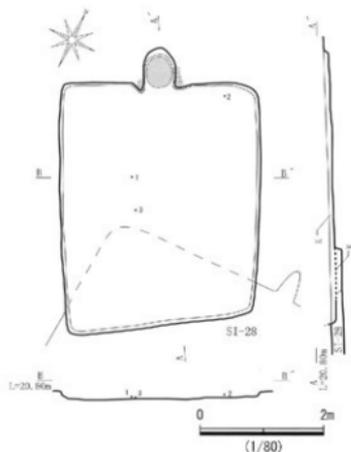


— 27号住居跡調査風景 —

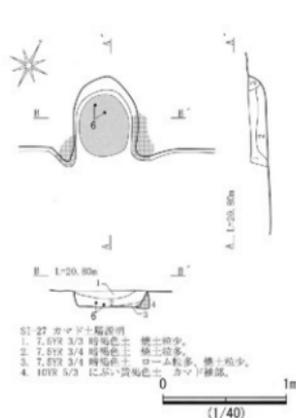


— 27号住居跡セクション —

本遺構の南側の一部は古墳時代後期の埴塚と考えられる 28 号住居跡と重複している。本遺構の平面形状はやや歪ながらも長方形を呈し、主軸方向は N-28°-W を指す。規模は長軸が 4.1m で、短軸が 3.2m を測る。遺構礎部から床面までの深さは 8 cm 前後と浅く、覆土を分層する事はできなかった。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査ではカマド内部から煙道にかけての極弱い被熱範囲と焼土を検出したのみである。本遺構には木根の攪乱が入り込み、床面の遺存状況は良好とは言えない。しかし、カマド横北西側の僅かな範囲で床面の硬化を検出する事ができた。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。遺物の出土範囲はカマド内と遺構中央部に限定され、その出土遺物の器種器形は須恵器の坏類、甕、甞、及び土師器の坏があり、その他ではカマド内から支脚に転用したと思われる製鉄炉の送風羽口の出土もある。これらの遺物は 9 世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。



第 117 図 27 号住居跡



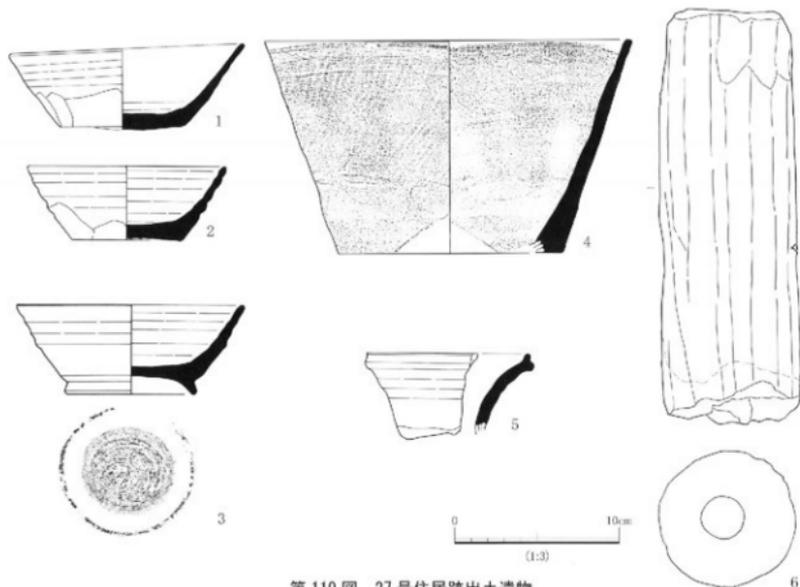
第 118 図 27 号住居跡カマド



— 27 号住居跡カマドセクション —



— 27 号住居跡カマド完掘状況 —



第 119 図 27 号住居跡出土遺物

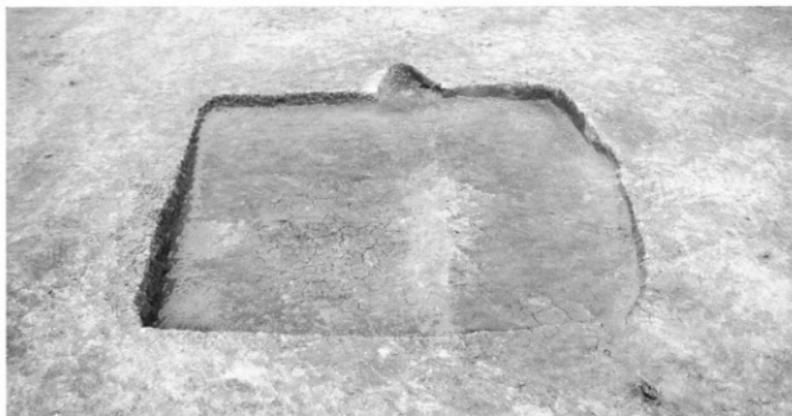
第 30 表 27 号住居跡遺物観察表

遺物 No.	種類	器種	口径	器高	底径	器厚の特徴	器形の特徴	色調	胎土	地味	備考
27 住 1	須臾	杯	14.1	5.0	7.5	底面は平底。体部は東端的に開き、口縁部に至る。 残存率：ほぼ完全形	内外面共にロクロ製。内面はロクロ調整後ナゲ。外面は下段及び底面は手持ちヘラケズリ。	赤 中 緑 中 石灰 少 黒 中	赤土 緑土 石灰 黒土	普通	
27 住 2	須臾	杯	(12.1)	4.6	6.6	底面は平底。体部は東端的に開き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底面 2/3	内外面共にロクロ製。外底面はロクロ調整後ナゲ。外面は下段及び底面は手持ちヘラケズリ。	赤 中 緑 中 石灰 少 黒 中	赤土 緑土 石灰 黒土	普通	赤色 1/7 緑
27 住 3	須臾	底面打母	(13.7)	5.5	7.7	底面は平底。体部は東端的に開き、口縁部に至る。外端は緩やかに内湾し、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底面 1/3	内外面共にロクロ製。外底面はロクロ調整後ナゲ。外面は下段及び底面は手持ちヘラケズリ。	赤 中 緑 中 石灰 少 黒 中	赤土 緑土 石灰 黒土	普通	赤色 1/7 緑
27 住 4	須臾	鉢	22.0	13.0	13.5	底面は平底。体部は東端的に開き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底面 1/3	内外面共にロクロ製。内面はロクロ調整後ナゲ。外面は下段及び底面は手持ちヘラケズリ。	赤 中 緑 中 石灰 少 黒 中	赤土 緑土 石灰 黒土	普通	赤色 1/7 緑
27 住 5	須臾	皿	(9.7)	(5.3)	—	口縁部は強く外湾し、口唇部で上方にも上方にも広まされる。 残存率：口縁部片	内外面共にロクロ調整後ナゲ。	赤 中 緑 中 石灰 少 黒 中	赤土 緑土 石灰 黒土	普通	
27 住 6	土製石	須口				長さ 25.4cm 幅 8.5cm 高さ 8.3cm 丸径 2.6cm 重さ 1258.1g	ヘラナゲ。	1.000/1	赤土 緑土 石灰 黒土	良好	

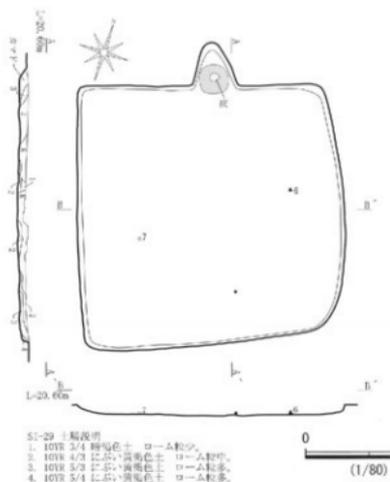
29号住居跡

本遺構の平面形状はやや歪ながらも正方形を呈し、主軸方向はN-19°-Wを指す。規模は北東、南西両軸ともに4.3mを測る。遺構確認面から床面までの深さは10cm前後と浅く、木根の攪乱が入り込むため遺存状況は悪いものの、辛うじて覆土を4層に分層する事ができた。本遺構にはカマドも付設しており、今回の調査では焚き口と思われる位置より赤色還元した火床面と、その直上よりカマド使用時に堆積したものと考えられる「灰」を検出している。上記の通り本遺構には木根の攪乱が入り込み、床面の遺存状況は良好とは言えない。しかし、カマド前面と遺構南側の一部で床面の硬化を検出する事ができた。この床面では主柱穴と考えられるピットの

検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。遺物の出土範囲はカマド付近に限定され、その出土遺物の器種器形は須恵器の坏類、及び土師器の甕類があり、その他では「釘」と思われる鉄製品と石製品の破片の出土もある。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期後半に帰属するものと考えられる。



— 29号住居跡完掘全景—



第120図 29号住居跡



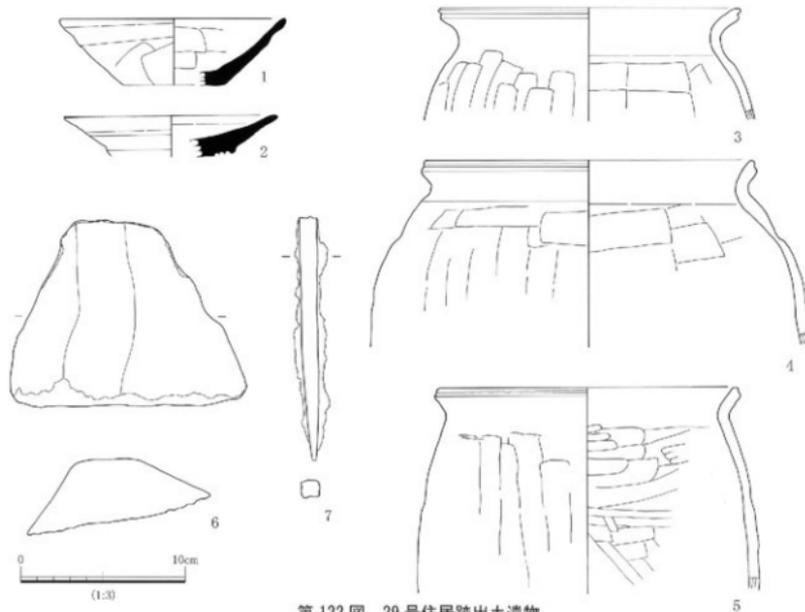
第121図 29号住居跡カマド



— 29号住居跡セクション—



— 29号住居跡カマドセクション—



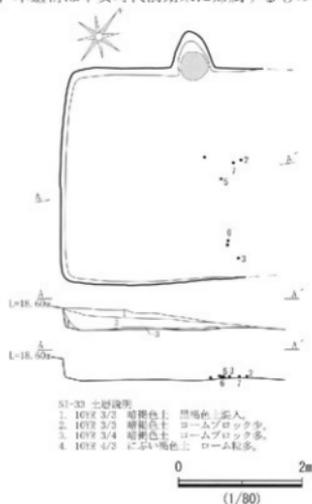
第122図 29号住居跡出土遺物

第31表 29号住居跡遺物観察表

遺物 No	種類	素材	口径	底径	底厚	遺存の状況	器形の特徴	色調	粘土	焼成	備考
29住 1	酒器	牙	(13.5)	4.1	(3.1)	底部は平底。体部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底面1/5	内外両面にロクロ調整。内面はロクロ調整後ヘラケズリ。体部下縁及び底面は手持りヘラケズリ。	赤褐色 黒褐色	長石 少 石質	普通	赤色377 敷
29住 2	酒器	高台付土	(12.7)	(2.6)	-	高台付。体部は直線的に開き、口縁部に至る。 残存率：口縁部～底面1/5	内外両面にロクロ調整。体部下縁は手持りヘラケズリ。底面は直線のヘラケズリ。	赤褐色 黒褐色	長石 少 石質	普通	赤色377 敷
29住 3	土師	葉	(17.8)	(6.9)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は斜めに外反する。口唇部で上方に揃えられ。 残存率：口縁部～胴部上半1/5	口縁部は内外両面にニコナデ。内面はヘラケズリ。外面は直線のヘラケズリ。底面は直線のヘラケズリ。	赤褐色 黒褐色	長石 少 石質	普通	赤色377 敷
29住 4	土師	葉	(19.6)	(11.3)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は外反する。口唇部で上方に揃えられ。 残存率：口縁部～胴部上半1/4	口縁部は内外両面にニコナデ。内面はヘラケズリ。外面は直線のヘラケズリ。一部横位のヘラケズリ。	赤褐色 黒褐色	長石 少 石質	普通	赤色377 敷
29住 5	土師	葉	(17.9)	(2.6)	-	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は斜めに外反する。口唇部で上方に揃えられ。 残存率：口縁部～胴部上半1/5	口縁部は内外両面にニコナデ。内面はヘラケズリ。外面は直線のヘラケズリ。	赤褐色 黒褐色	長石 少 石質	普通	赤色377 敷
29住 6	石製	砥石				長さ 11.9cm 幅 14.3cm 厚さ 4.7cm 底さ 370.6g		褐色			
29住 7	鉄製	釘				長さ 14.9cm 幅 1.1cm 厚さ 1.0cm 底さ 30.5g		黒色			

33号住居跡

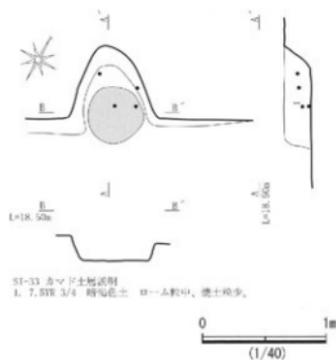
本遺構の北東側の一部は現代の耕作時に受けた削平により遺存しない。しかし、残存状況から判断して、遺構本来の平面形状は正方形を呈していたものと推定できよう。主軸方向はN-37°-Wを指し、確認し得た規模は長軸3.5mで短軸が3.0mを測る。遺構確認面から床面までの深さは最深部で35cmを測り、覆土は4層からなる自然堆積の様相を呈す。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査ではカマド内部から煙道にかけての極めて狭範囲と焼上を検出したのみである。床面ではカマド前面から遺構南側にかけて拡がる硬化範囲を検出する事ができた。この床面では主柱穴と考えられるピットの検出は無く、その他の施設に伴うピット類の検出も無い。遺物の出土はカマド内と遺構南東側に集中し、その出土遺物の器種器形は須恵器の甕類、及び土師器の坏と甕があり、その他では小型土製品(土玉)と、製鉄炉の送風羽口の破片、並びにカマド袖の補強素材として用いられていたものと考えられる瓦の出土もある。これらの遺物は9世紀後半の特徴を有している事から、本遺構は平安時代前期末に帰属するものと考えられる。



第123図 33号住居跡



— 33号住居跡セクション —



第124図 33号住居跡カマド



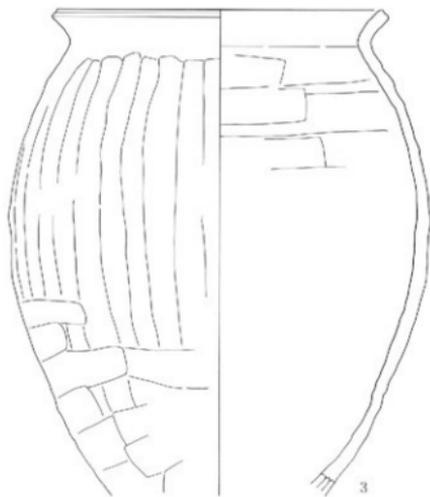
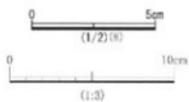
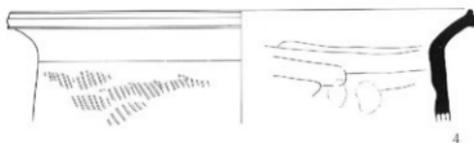
— 33号住居跡遺物出土状況全景 —



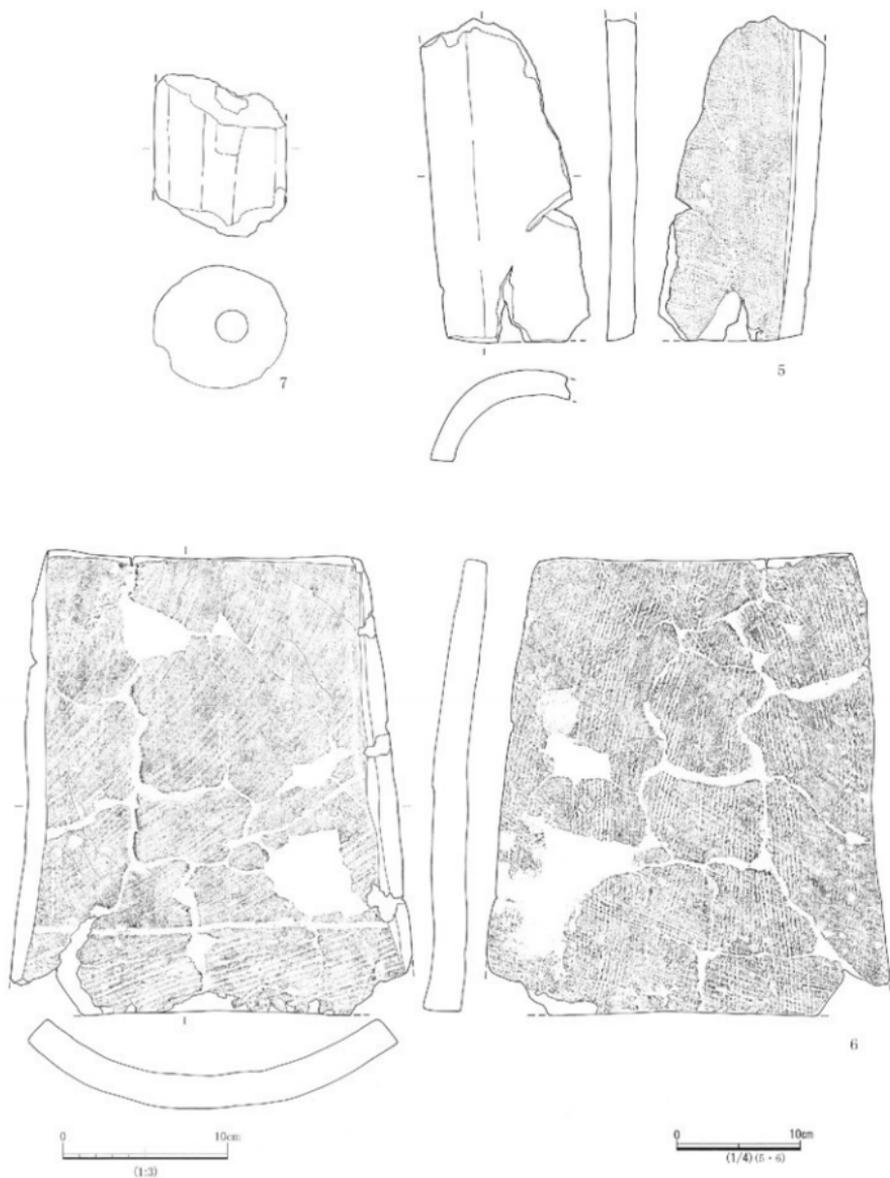
— 33号住居跡カマド調査風景—



— 33号住居跡カマド遺物出土状況—



第125図 33号住居跡出土遺物①



第 126 图 33 号住居跡出土遺物②

第32表 33号住居跡遺物観察表

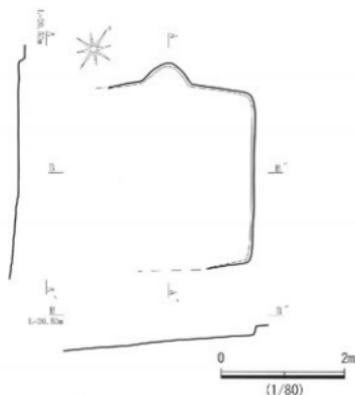
遺構 No.	種類	型種	口径	器高	口径	器底の特徴	器形の特徴	色調	胎土	焼成	備考	
33住 1	須恵	高台付耳	-	(5.4)	(7.5)	高台はへの字状に付される。高めの部分。器底は藍釉的に黒く。残存率：胴部～胴上1/3	内外面共にコテロ調整。体部下縁は胴部ヘラケズリ。器底は回転ヘラケリ痕ナシ。酸化高緑灰。	内 外 赤 黒 黒 黒 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭 黒炭 黒炭	中 少 少 少 少 少 少	不良	
33住 2	須恵	甕	(21.1)	(31.7)	-	胴部は緑やかに内湾し、口縁部はほぼ直上する。 残存率：口縁部～胴部上平1/5	内外面共にコテロ調整。内面は口縁部裏面まで直上する。外面上部はヘラケズリ後平削り。下部はヘラケズリ。	内 外 赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	中 少 少 少 少	普通	
33住 3	土師	甕	(19.3)	(29.8)	-	胴部は緑やかに内湾し、口縁部はくの字に外反する。 残存率：口縁部～胴部下平1/4	口縁部は内外面共にコテラ。内面はヘラケズリ。外面上部は現在のヘラケズリ。下部は緑灰のヘラケズリ。	内 外 赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	多 少 少 少 少	普通	
33住 4	須恵	甕	(27.8)	(6.3)	-	胴部は緑やかに内湾し、口縁部は外反する。口唇部で上方に曲まされる。残存率：口縁部～胴上1/4	口縁部は内外面共にコテラ。内面はヘラケズリ。外面上部は現在のヘラケズリ。下部は緑灰のヘラケズリ。	内 外 赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	中 少 少 少 少	普通	輪縁み痕が残る。
33住 5	瓦	瓦				長さ 26.5cm 幅 12.6cm 厚さ 2.2cm 重量 1153.0g	片面は雑なナダ。片面は布目が残る。	内 外 赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	少 多 少 少 少	良好	
33住 6	瓦	平瓦				長さ 37.9cm 幅 32.6cm 厚さ 2.7cm 重量 4719g	片面は各溝甲き。片面は糸切り板と布目が残る。添加はヘラによる粗削り。	内 外 赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	少 多 少 少 少	良好	
33住 7	土師	羽口				長さ 9.9cm 幅 8.0cm 厚さ 7.5cm 口径 2.0cm 重量 416.3g	ヘラナダ。	赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	多 多 少 少 少	普通	
33住 8	土師	土玉				長さ 2.1cm 幅 2.6cm 厚さ 2.0cm 口径 0.8cm 重量 8.0g	指による整形。	赤 黒	長石 緑砂 石炭 黒炭 黒炭	少 少 少 少 少	普通	赤色コテラ

34号住居跡

本遺構は自然地形による下り傾斜面からの検出である。この事から遺構南西側では構築当初より地山への掘り込みが浅かったものと考えられ、今回の調査ではその部分のプランを検出することはできなかった。確認し得たプランから想定すれば、遺構本来の平面形状は正方形を呈していたものと考えられる。遺構の規模は、完全に残存している北東壁の一边で4.2mを測り、主軸方向はN-35°-Wを指す。覆土は僅かに残る程度で堆積状況の観察は叶わなかった。本遺構にはカマドも付設しているが、今回の調査ではカマド内部からの僅かな焼土粒と煙道の痕跡を検出したに過ぎない。床面では硬化範囲は認められず、支柱穴と考えられるピットの検出、及びその他の施設に伴うピット類の検出も無い。また、本遺構からの遺物の出土も無い。以上の事から、本来は時期不明の遺構として報告するべきであろうが、遺構の検出位置や規模、構造の特徴から推定して、本稿では平安時代に帰属する可能性がある住居跡として取り扱う事とした。



— 34号住居跡掘削全景 —



第127図 34号住居跡

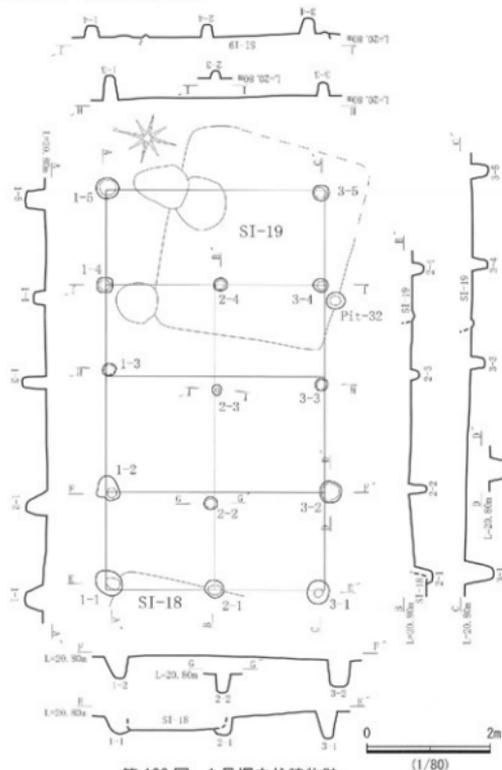


— 34号住居跡調査風景①—



— 34号住居跡調査風景②—

第4節 掘立柱建物跡



第128図 1号掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

本遺構の一部は平安時代の住居跡である18号住居跡と19号住居跡と重複しており、調査の結果、新田関係では本遺構の方が新しい事が明らかとなる。本遺構は総柱式東西建物跡と考えられるもので、棟方向はN-76°Eを指す。また、東側の妻側には大きめの庇が付設していたものと想定される。平面規格は桁行3間(5m)で梁間2間(3.5m)を測り、庇は東方向に約6尺(180cm)の張り出しを有す。各柱間の寸法はいずれも6尺前後(最短170cm~最長190cm)と概ねの近似値を測る。柱掘り方の平面形状はいずれも円形を呈し、規模は直径18cmから45cmの幅を持ち、遺構確認面から柱掘り方底部までの深さは最も深いもので約45cm、浅いもので約16cmを測る。いずれの柱穴からも、平面、断面において柱痕の検出は成されなかった。また、本遺構からの遺物の出土は無い。左記の事から本遺構の構築時期を特定する事は難しい。従って本遺構の所属年代については不明とする。補足として、本遺構の周辺にはP-1~P-15までのNoを付した15基のピット群が検出されているが、これらはその他の掘立柱建物跡として組み立つものでは無かった。



— 1号掘立柱建物跡完掘全景—

第5節 土坑

1号土坑

本遺構の平面形状は長方形を呈し、規模は長軸が110cmで短軸が70cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは概ね45cmである。遺構覆土の特徴は、ロームブロックが多量に混入する暗褐色土の単層で締まりはない。本遺構からの遺物の出土は無く、構築時期の特定には至らなかった。従って、本遺構の所属年代は不明とするが、補足として、近世以降の押地に多く観られる、農作物を保存する為に掘削された、通称「芋穴」であった可能性がある事を付け加えておく。



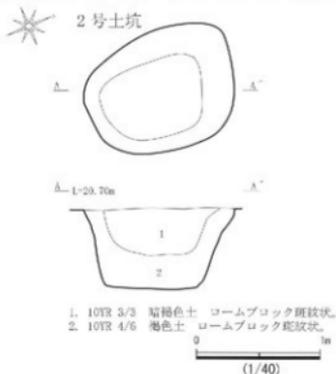
— 1号土坑完掘—



第129図 1号土坑

2号土坑

本遺構の平面形状は不整な楕円形を呈し、規模は長軸が130cmで短軸が100cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは概ね65cmである。遺構覆土は自然堆積の様相を呈し、ロームブロックが多量に混入する暗褐色土と暗褐色土の2層に分かれる。覆土に締まりはない。本遺構からの遺物の出土は無く、構築時期の特定には至らなかった。従って、本遺構の帰属年代は不明とするが、補足として、近世以降の畑地に多く窺われる、農作物を保存する為に掘削された、通称「芋穴」であった可能性がある事を付け加えておく。



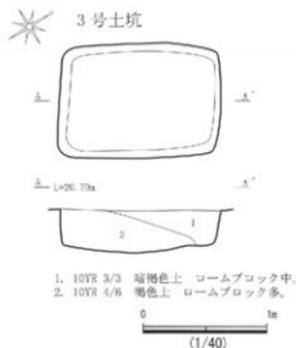
第130図 2号土坑



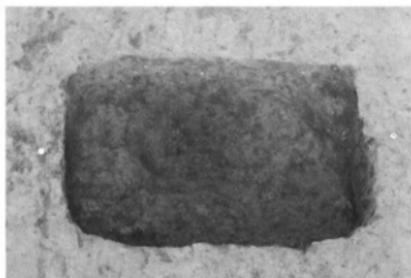
— 2号土坑完掘 —

3号土坑

本遺構の平面形状は長方形を呈し、規模は長軸が130cmで短軸が95cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは概ね35cmである。遺構覆土は自然堆積の様相を呈し、ロームブロックが多量に混入する暗褐色土と褐色土の2層に分かれる。覆土に締まりはない。本遺構からの遺物の出土は無く、構築時期の特定には至らなかった。従って、本遺構の帰属年代は不明とするが、補足として、近世以降の畑地に多く窺われる、農作物を保存する為に掘削された、通称「芋穴」であった可能性がある事を付け加えておく。



第131図 3号土坑



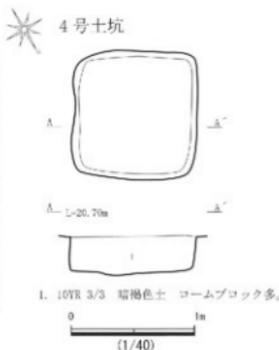
— 3号土坑完掘 —

4号土坑

本遺構の平面形状はほぼ正方形を呈し、規模は一边が約100cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは概ね30cmである。遺構覆土の特徴は、ロームブロックが多量に混入する暗褐色土の単層で締まりはない。本遺構からの遺物の出土は無く、構築時期の特定には至らなかった。従って、本遺構の所属年代は不明とするが、補足として、近世以降の畑地に多く観られる、農作物を保存する為に掘削された、通称「芋穴」であった可能性がある事を付け加えておく。



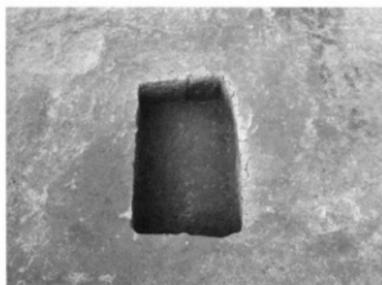
— 4号土坑完掘 —



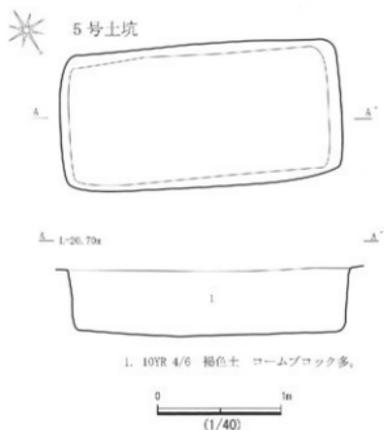
第132図 4号土坑

5号土坑

本遺構の平面形状は長方形を呈し、規模は長軸が230cmで短軸が120cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは概ね50cmである。遺構覆土の特徴は、ロームブロックが多量に混入する褐色土の単層で締まりはない。本遺構からの遺物の出土は無く、構築時期の特定には至らなかった。従って、本遺構の所属年代は不明とするが、補足として、近世以降の畑地に多く観られる、農作物を保存する為に掘削された、通称「芋穴」であった可能性がある事を付け加えておく。



— 5号土坑完掘 —



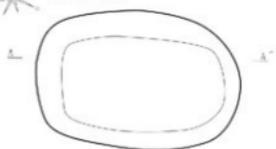
第133図 5号土坑

6号土坑

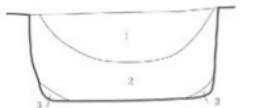
本遺構の平面形状は不整な楕円形を呈し、規模は長軸が170cmで短軸が110cmを測り、遺構確認面から底部までの深さは概ね70cmである。遺構段上は自然堆積の様相を呈し、ロームブロックが多量に混入する黒褐色土と暗褐色土主体の3層に分かれる。覆土に縮まりはない。本遺構からの遺物の出土は無く、構築時期の特定には至らなかった。従って、本遺構の偏真年代は不明とするが、補足として、近世以降の相地に多く観られる、農作物を保存する為に掘削された、通称「芋穴」であった可能性がある事を付け加えておく。



6号土坑



▲ L=20.70m



1. 10YR 2/3 黒褐色土 ロームブロック塊状状。
2. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒中。
3. 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒多。

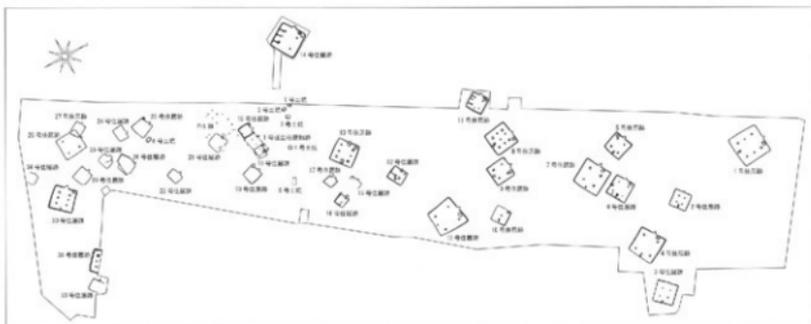


第134図 6号土坑



— 6号土坑完掘 —

第135図 遺構配置状況図



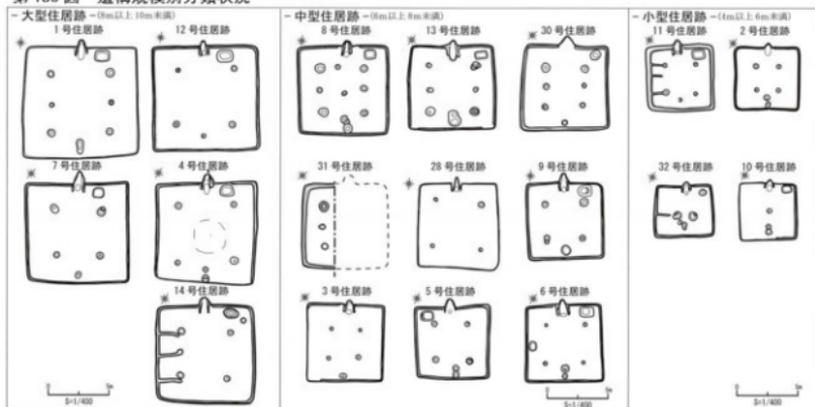
第4章 総括

第1節 検出された住居跡の構造的特徴と出土遺物について

第1項 古墳時代

今回の発掘調査によって検出された住居跡の平面形状は全てほぼ正方形を呈しており、その規模は、最大のもので一辺の長さが9.3m、最小のもので4.7mを測る。これらを任意の基準値で大きく分類すれば、8m以上10m未満の大型住居跡が5軒、6m以上8m未満の中型住居跡が9軒、4m以上6m未満の小型住居跡が4軒と3種に分ける事ができる。下図は参考までにその分類状況を示したものである。

第136図 遺構規模別分類状況



今回設定した基準値より算出した古墳時代帰属の住居跡18軒に対する大型～小型住居跡の比率は、全体を100%とした場合、大型住居跡が27.8%、古墳時代後期では平均的な規模となる中型住居跡が50.0%、小型住居跡が22.2%となる。分類した大～小型住居跡の床面積の平均値と最大値及び最小値は、大型住居跡の平均値が74.3㎡で最大値が86.5㎡、最小値が64.0㎡、中型住居跡の平均値が43.8㎡で最大値が54.8㎡、最小値が37.2㎡、小型住居跡の平均値が25.6㎡で最大値が30.3㎡、最小値が22.1㎡である。各規模の住居跡は、遺構全測図の示すとおり南北に延びる調査区全体にランダムに遍在している。整理調査の結果、この分布状況は規模による特定の規則性を持つものではなく、また、出土した遺物でも若干の新相、古相は観られるものの、この事が影響し変化するものではない事も明らかとなる。構造的な特徴では、確認し得た住居跡全体で統一されて観られるものはカマドの付設のみであり、これらカマドの付設位置は、ほぼ真北に軸を持つものが1・8・9・12・28号住居跡の5軒、北方向からやや西側に振って軸を持つものがその他の12軒である。このカマドの中でも、2号住居跡に付設するものは、焚き口には長胴甕4個体をアーチ状に組み重ね、両袖の基部には器高の低い甕を各1個体ずつ倒位に設置して補強材とした特殊な構造を有している。

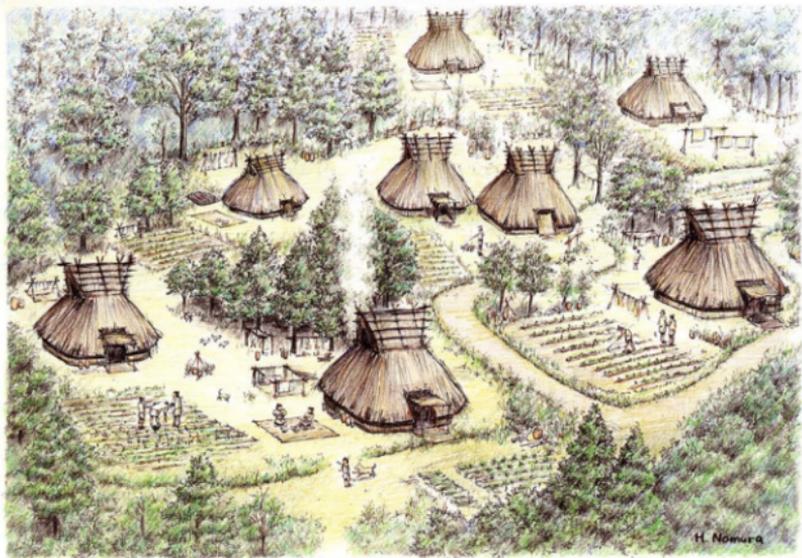


－2号住居跡カマド遺物検出状況－



－2号住居跡カマド予想復元図－

第137図 菱毛道西遺跡（古墳時代）で想定される集落の様子

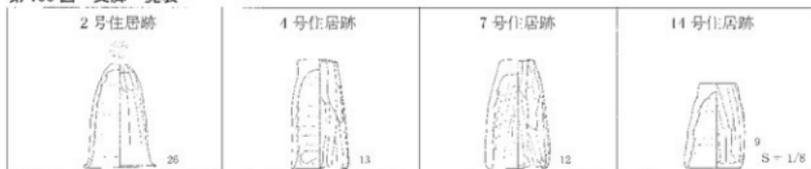


それ以外の構造では、「周溝を持つものと持たないもの」、「貯蔵穴を持つもの（付設位置も関連）と持たないもの」、「4本主柱穴のもの」、「補助柱穴の入る6本柱穴のもの」、「2本以下の変則的な主柱穴を持つもの」、「間仕切り溝を持つもの」、「出入口施設に伴うものと考えられるピットを持つものと持たないもの」、「壁が逆台形状に開き立ち上がるもの」等様々な特徴を挙げる事ができる。しかし、「2本以下の変則的な主柱穴を持つもの」のみが小型住居跡に限り当て嵌まる特徴である事を除き、その他の構造特徴に関しては、住居跡の規模や検出位置、及び出土遺物に関連して特化したものではない事が一連の調査成果から酌み取る事ができよう。続いて、各住居跡から出土した遺物についてだが、供伴して出土する遺物全体として捉えた場合、型式学上では端的な時期差を窺う事はできない。この事から、今回検出した18軒の住居跡（うち31号住居跡1軒からは遺物の出土無し）から出土した遺物に対する相対的な所見としては、一貫して6世紀終末～7世紀前半の帰属年代を与えている。しかし、先にも述べたように、特定した個体を鑑みた場合、若干の新相と古相を持つものも出土している。この根拠は、遺物の出土量が比較的多く、安定した鬼高期の土器群が出土している2号住居跡を中心軸として考えた場合のものであるが、これに従うと、古相と思われるものでは、甕類では胴部が球状、若しくはそれに近いふくよかな形状を呈するものや、胴部に細かな篋磨きが施されるもの、坏類では底部が丸底でやや器高のある大振りなもや、口縁部が短く外反するもの等がそれにあたり、新相と思われるものには、甕類では顕著な長胴化、若しくはその兆候が窺われるもの、坏類では小型のものや器高の低い扁平したもの、また明瞭な稜を持ち口縁部が強く内傾するもの等がある。しかし、これらの古・新相の遺物は、中心軸として考えた土器群と混在して出土している事から、この遺物を基として各住居跡の帰属時期の差異を導き出す事はできない。巻末に遺構別の出土遺物一覧表を掲載しているので、参照していただければ幸いである。

以上、これら住居跡の検出状況と遺物の出土状況を踏まえた上で、積極的に本遺跡で展開する古墳時代の集落の性格を考えるならば、住居跡については大～小型を呈した3種の規模に分類されるものがあり、その配置状況から、若下の新設や建て替えが行われている可能性も示唆できるが、各住居跡から出土した遺物の比較では、一部に古・新相の特徴を有するものが認められるものの、共存する遺物全体として捉えた場合、その時期差を明確に分ける事はできない。この事から、古～新相の遺物が共存して出土する事例については、型式学に因われて強引に線引きするよりも、本集落が営まれていた一連の時間枠では、古相、新相の遺物が混在した状況で、同時期に使用されていたと考えた方が合理的であろう。また、住居跡の規模や構造に関しても、時間差による変化と考えるよりも、集落内に於いてその住居跡が担う役割や必然性に寄与して特化したものと想定した方が妥当であると思われる。

最後になるが、興味深い資料として、今回検出した住居跡のカマド内からは、長胴の甕を模倣して小型化したかの様な形状の支脚が出土している。これらは「器」を転用したのとは考えにくい粗製品である事から、当初から支脚としての用途を意識して製作されたものと想定できる。下図がその支脚である。

第138図 支脚一覧表



図示した4個体中、比較的丁寧な作り込みが成されているものが2号住居跡から出土した支脚である。この4個体共通の特徴としては、外面には縦方向の寛削りが施されているものの、内面では弱いナザが認められるがほぼ木調整の為、明瞭な輪積み痕を観察する事ができる。これらと同形状の支脚が、県内、及び近県でどれほどの検出例があるものなのかは顛倒を精査していない為分かりかねるが、今回の報告では以後の研究素材となり得る可能性を考慮し、簡略なものではあるが参考資料として掲載する事とした。

第2項 平安時代

今回の発掘調査で検出した平安時代に帰属する住居跡の分布状況は、木調査区の南側約半分の範囲に集中する傾向があり、その住居跡の平面形状については、大きく「正方形」と「長方形」を基調とするものに分けられる。この形状分類に際しては、測点により若干の誤差が生じるものの、任意の基準として、概ね長・短辺の比率が10:8以上を正方形、10:8未満を長方形として捉えている。検出された住居跡の総軒数は16軒であり、このうち、平面形状が正方形のものは16・17・18・19・20・21・23・29号住居跡の8軒で、長方形のものは22・24・25・27・33号住居跡の5軒、削平や攪乱により遺構本来の形状が不明なものが15・26・34号住居跡で3軒である。各形状の比率は、検出した住居跡16軒を100%として考えた場合、正方形のものが50%、長方形のものが31%、形状不明のものが19%であり、正方形を呈するものがその半数を占めている。形状別の遺構分布状況では、正方形を基調としたものは平安時代の遺構が検出された範囲全体に亘っているものの、長方形を基調とするものでは、当該時期の遺構が検出された範囲を、更に南北を軸に2分割した南側に偏って分布する状況を示している。また、整理調査の結果、これら各住居跡の規模については、その形状と検出位置に特定の規則性を持つものではない事が明らかとなっている。参考までに、形状別の規模を床面積で求めてみたが、正方形を呈するものの平均値は約13.5㎡であり、最大値が23号住居跡の約19.2㎡で、最小値が17・19号住居跡の約8.7㎡、長方形を呈するものの平均値は約12.1㎡で、最大値は33号住居跡の約13.1㎡で、最小値が22号住居跡の約10.9㎡であった。続いて、各住居跡の構造的特徴についてだが、全体に共通するものではカマドの付設と、床面からの主柱穴の検出が

成されなかった事の2点のみが挙げられ、このカマドの付設位置は各住居跡で若干の誤差が認められるものの、概ね北西寄りにその軸を有している。このうち、長方形を呈する住居跡では、短辺側にカマドが付設するものは27号住居跡1軒、長辺側にカマドが付設するものが22・24・25・33号住居跡の4軒である。その他の構造に関しては、「床面にピットを伴うもの」、「床面に地床炉が付設するもの」、「貯蔵穴の痕跡を遺すもの」、「カマド横に張り出しを持つもの（ピットを伴うか否かの細別有り）」等に分けられるが、これらは全体的に共通して観られる特徴では無く、各遺構それぞれが持つ固有の構造特徴である。まず、「床面にピットを伴うもの」と「床面に地床炉が付設するもの」であるが、この2点は16号住居跡に当て嵌まる構造で、遺構南側壁下にて出入口施設に伴うものと考えられるP-1のピット1基が検出され、このピットの北側約60cm先では平面形状が直径約40cmの円形で、断面が浅い皿状を呈する地床炉の付設が認められた。次に「貯蔵穴の痕跡を遺すもの」には、遺物が出土していない15号住居跡と、その南西方向約2m先に隣接する17号住居跡があり、この貯蔵穴はいずれもカマドを正面に見た左側に付設するもので、双方とも平面形状は不整な円～楕円形で、断面は浅い鍋底状を呈す。

最後に、今回提示した構造特徴の中で最も特筆されるものとして「カマド横に張り出しを持つもの（ピットを伴うか否かの細別有り）」を挙げたい。この構造は、16・17・18・19・20・23号住居跡の6軒に観られる特徴で、このうち、23号住居跡についてはカマドを正面に見た左右両側にその張り出しを有している。また、その特徴を有す住居跡の分布状況は、23号住居跡を除く5軒全てが半径10m以内の範囲に集中している。下図はその住居跡を一覧したものである。

第139図 カマド横に張り出しを持つ住居跡

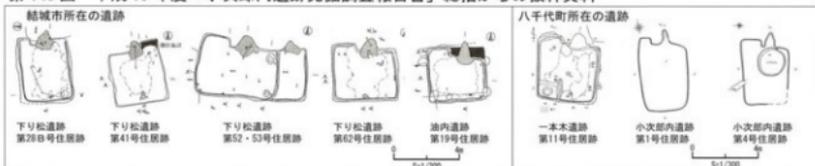
S=1/300



上図の通り、形状や規模には若干の違いが見受けられるものの、23号住居跡を除いた5軒の住居跡では、カマドを正面に見た左側にその張り出しが付されている事がわかる。この特筆される構造は大きく4タイプに分かれ、平面形状が不整な楕円形を呈する浅い土坑状に掘り窪められているものが16・19・20号住居跡の3軒、同じ土坑状でも、底部に近づくにつれその直径が狭まるロート状を呈したものが18号住居跡の1軒、平面形状が真円に近く、円柱状にしっかりと掘り込まれたものが23号住居跡の左側の張り出しで、床面からそのまま平坦に延長されるものが17号住居跡1軒と23号住居跡の右側の張り出しである。

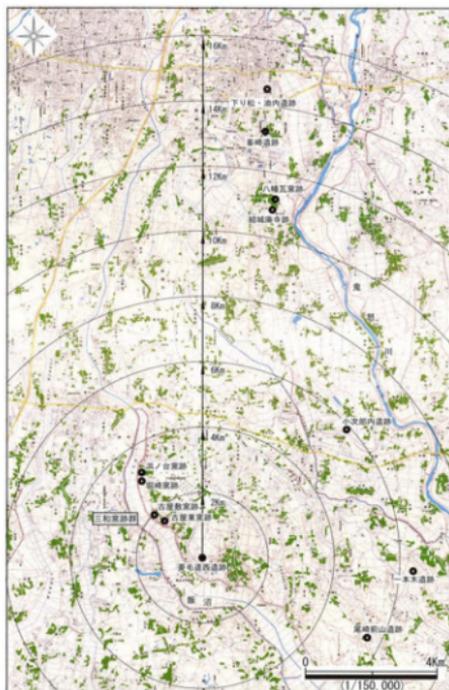
偶然だが、過去に当方で調査報告を行った、同町内の大字新井地区に所在する「小次郎内遺跡」でも、このカマド横に張り出しを有した住居跡を検出した経緯がある。下図はその際報告した資料の抜粋である。

第140図 平成19年度「小次郎内遺跡発掘調査報告書」総括からの抜粋資料



『小次郎内遺跡発掘調査報告書』より抜粋した資料の通り、図示した2軒の住居跡にはカマド横に張り出しを認める事ができる。この1・4号住居跡に付されるカマド横の張り出しは、「菱毛道西遺跡」で検出した17号住居跡と同様に、床面からそのまま平坦に延長されるもので、その張り出しが付される位置は、いずれもカマドを正面に見た左側である。また、同一、若しくは類似した特徴を持つ資料として、平成8年度に八千代町教育委員会より報告された、町内仁江戸地区に所在する「一本木遺跡」と、平成11年に(財)茨城県教育財団により報告された、隣接する結城市内、下り松地区に所在する「下り松・油内遺跡」から検出されている住居跡6軒も合わせて提示している。このうち、「一本木遺跡」の第11号住居跡と、「下り松遺跡」の第28B・53・64号住居跡の4軒については、「菱毛道西遺跡」で検出された17号住居跡とほぼ同様の特徴を有するのだが、「下り松遺跡」第41号住居跡では「棚状施設」と考えられている類似構造を単独で持ち、「油内遺跡」第19号住居跡においては「棚状施設」と「張り出し」双方の構造特徴を持ち合わせている。これら住居跡各6軒の帰属時期は、その山上遺物から、「小次郎内遺跡」11号住居跡が9世紀末～10世紀前半で4号住居跡が10世紀後半、「一本木遺跡」11号住居跡が9世紀前半、「下り松遺跡」第28B・41・53号住居跡が9世紀後半、第62号住居跡が9世紀中頃、「油内遺跡」第19号住居跡が9世紀後半の年代視で捉えられたものである。これら「棚状」若しくは「張り出し」と呼称される構造とその用途については諸説あるようだが、関東1第6集からの類例を集成した論文では、詳細な分析と秀逸な考察が成された。桐生直彦2001『壘をもつ堅穴建物跡にみられる棚状施設の研究 関東地方の事例を中心に—第1～2分冊』があり、「財団法人 茨城県教育財団」発行の『研究ノート』6・8・10号では、川津法伸氏により茨城県内での検出事例が紹介されている。この論文を援用しながら、本遺跡と同町内「一本木遺跡」、「小次郎内遺跡」から検出された「張り出し」を持つ住居跡に関して、私見を交えながら若干の考察を試みるならば、16・17・18・19・20号住居跡のカマド横に付されたこの「張り出し」は、本来、「油内遺跡」から検出されている第19号住居跡と同様に、左右対称に突出したものであったが、一方に付されていた「棚状施設」は、その掘り込みの深度が浅い「素掘りタイプ」であった為、現代の耕作や表土除去による削平の影響を受けて潰滅してしまった可能性があるとして考えられよう。また、16・18・19・20・23号住居跡の「張り出し」の底部に認められる、土坑状の窪みと凹柱状の掘り込みについては、「棚状施設」とは補充関係にあったものと捉えられる貯蔵穴、若しくはそれに準ずる機能を有していたものと思われ、土坑状の窪みや掘り込みを持たずに床面がそのまま延長する、本遺跡の17・23号住居跡と「一本木遺跡」第11号住居跡、「小次郎内遺跡」11・4号住居跡の「張り出し」についても、広義で「物置スペース」として機能させていたものと解釈して難は無いと思われる。補足として、「棚状施設」と「張り出し」が左右対称に突出して付される構造であったと想定した第一の根拠は、「油内遺跡」の第19号住居跡の検出例も合わせた建築学的な一般論として、上物構造の一部が要部的に突出して多角形を成す建物を構築するよりも、単純に方形を基として建物を構築した方が建築強度を高く保ちやすく、且つ端的に施工性も向上するとの考えに依るものである。無論、この見解は例外構造を持つ上物の存在を否定するものではない。

桐生氏の論文によると、「棚状施設」や「張り出し」の構造を持つ住居跡が観られる遺跡の性格は、国府や四分寺、地方官衙に関連するものから、窯業、製鉄等の生産に関わるもの、また、郷等の中心的集落から一般集落に至るまでと多岐にわたるものであるとし、少なくともこの構造は、古代に於いては遺跡の性格に関わる事無く、かなり普遍的に採用されていたものであると総体的に捉えたい。工房、あるいは工人集団と関係のある遺跡からの検出事例が目につく点にも注目している。後述するが、本遺跡からの出土遺物にも、「瓦」や「羽口」など特定の工房から生産される遺物が含まれている。この事は、上記の事例と同様に、木集落に於いても、工房に深く関与する工人集団が居住していた可能性を十分に指摘しうるものであると考える。



第141図 菱毛道西遺跡と周辺遺跡の位置

甕類の出土もみられるが、総体的には坏類が主体となり出土している。これら出土した須恵器は、型式学的編年を援用すると、いずれも概ね9世紀後半～末に帰属時期を求める事ができるものであるが、この中でも、17・27号住居跡の資料がやや古相で、20・22・23・24号住居跡の資料が新相であろうと思われる。このうち、16号住居跡の2、18号住居跡の12、20号住居跡の1・2・5、21号住居跡の2・10、22号住居跡の2・3・4・5、23号住居跡の2、25号住居跡の1・3、26号住居跡の11、33号住居跡の1の資料は、酸化焰焼成により個体が赤褐色化した、所謂「酸化焰の須恵器」である。この須恵器は、品質よりも量的補充を目的として簡素な窯で製造されたと考えらるもので、今回図示し得た資料87点中、16点がこの「酸化焰の須恵器」であり、その比率は全体量に対し約18%である。また、20号住居跡の1と22号住居跡の2・3・5の資料は、全体と比較すると若干異なる質感を持ち、特に、22号住居跡の3点に関しては、他の資料よりも重厚な造りである事が分かる。さらに、25号住居跡の6の資料については、9世紀後半～末の遺物と供伴して出土する類例が少ないものである。これら出土した須恵器の産地についてだが、23号住居跡の6のみが新治産と考えられるもので、その他のほとんどが、バミスとガラス質鉱物を含有する三和産胎土の特徴を有したものである。しかし、その成形と焼成に関しては、現認されている「三和窯跡群」の製品と比較した場合、全体的にやや品質が劣るものが多い。本遺跡と飯沼に沿った北西方向に位置する上記の「三和窯跡群」は近接しており、この中でも一番離れている「浜ノ台窯跡」までが直線距離で約3km、「古屋東窯跡」にいたっては直線距離で約1.8kmと至近である。この事から、本遺跡で出土した須恵器は、9世紀後半～末に稼働していた「三和窯跡群」のいずれかの窯跡から搬入されたものと想定する事が道理的には適切であると思われる。しかし、先述した

最後に、桐生氏の論文中でも提唱されているものだが、調査に携わる者が「棚状施設」に対する認識レベルの向上に努めることはもとより、今後に於いても、この「見逃されやすい構造」の検出率をより実態に近づける為にその特性を十分に理解し、細心の注意を払った精緻な発掘調査を心がける必要があると考える。

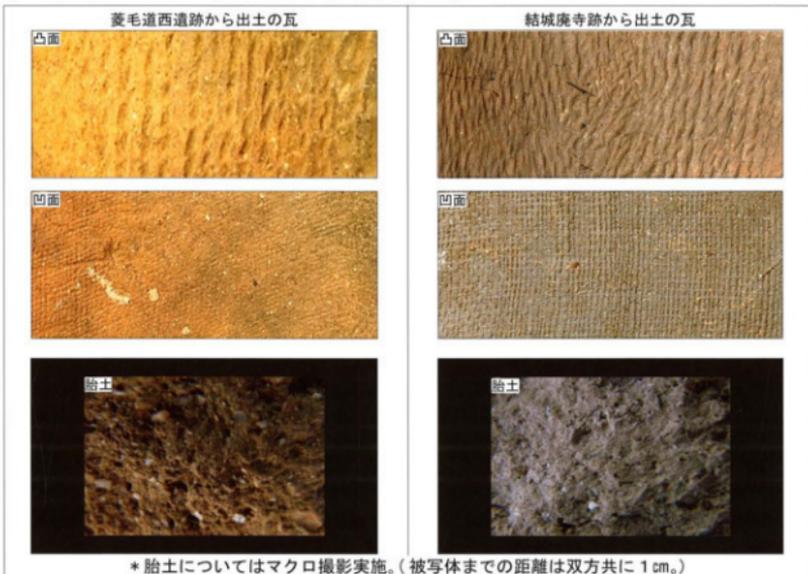
続いて今回の発掘調査によって得られた当該期の出土遺物についてだが、土器類では住居跡全体としては須恵器の出土比率が高く、そこに少量の土師器が混在する状況で、21号住居跡からは1点のみであるが灰軸陶器の底部破片も出土している。その他では、20・29号住居跡2軒からは鉄製品（釘）が、当該時期の遺構として検出した16軒の住居跡の半数を占める16・19・20・22・23・24・26・33号住居跡8軒からは瓦片が、16・17・18・27・33号住居跡では製鉄炉に使用する送風羽口が出土しており、26・33号住居跡からは土製品（土玉）の出土もある。まずは土師器についてだが、その器種構成は甕類の比率が高く、坏類に関しては若干数の出土にとどまる。

続いて須恵器だが、こちらの器種構成では

ように、本遺跡全体として捉えた須恵器の品質や、21号住居跡の6の資料のような不良品を利用している点を踏まえて考えた場合、これらが正規の窯元から搬入されたものとは想定せずに、「三和窯跡群」の工人集団から製作技法の一部を学び、新たに窯を興して「器」の生産に着手した経験の浅い別工人集団が存在し、本遺跡の須恵器はその工房からもたらされた可能性があると指摘しても、何ら無理は生じないと思われる。

続いて、16・19・20・22・23・24・26・33号住居跡8軒から出土している瓦だが、これらの多くはカマドの補強部材としての転用を目的に持ち込まれたものだと思うれ、その種類は、「丸瓦」・「鬚斗瓦」・「平瓦」の3種である。この瓦の製作技法は、寺院創建の古い時期に親られる、桶巻作りの格子叩きや横目方向の短縄叩きでは無く、主に補修瓦として供給されていた凸型成形台1枚作りであり、全てに縦目方向の長縄叩きが施された新しい時期の造瓦技法が用いられている。そして、この瓦の胎土も、前述の須恵器と同様に三和産の特徴を有するものである。これらの瓦が、補修等の事由で廃材となった後、再利用の目的でその施設から持ち出されたものなのか、若しくは瓦の供給元である瓦窯から直接入手したものなのかについては判然としない。因みに、本遺跡近辺では、現在のところ瓦葺きの建物跡や瓦窯跡は見えていない。

第142図 菱毛道西遺跡と結城廃寺跡から出土した瓦の比較



そこで、その真相と搬入元の可能性を模索すべく、本遺跡から北方向約11km先の結城市に所在する、大量の土器類と瓦類が出土した「結城廃寺跡」の瓦を実見して検証する事とし、本遺構から出土した瓦との造瓦技法と胎土の比較を試みた。今回実見が叶った、本遺跡から出土の瓦と同時期のものと考えられる結城廃寺跡出土の補修瓦は、主に隣接地に所在する「八幡瓦窯跡」から供給されたものであるが、その造瓦技法自体に本遺跡から出土した瓦との大きな相違点を認める事はできなかった。しかし、結城廃寺跡から出土した平瓦の縄叩きは、本遺跡から出土している瓦よりも若干強めに叩き締められているように思われ、その痕跡は明瞭で深い印象を受けた。また、本遺跡より出土の瓦よりも、結城廃寺跡から出土した瓦のほうが凹面に「離れ砂」が多く付着している。さらに、何よりも明らかな差異が認められるものがその胎土で、目視ではあるものの、結城廃寺跡から出土の瓦と、本遺跡で出土した瓦の胎土では全くの別物である。そして、今回

検証し得た結城鹿守跡から出土の補修瓦の中には、本遺跡から出土した瓦の胎土と同一の特徴を有するものは認められなかった。このことから、結城鹿守跡から出土した補修瓦の全量を比較した訳ではないので断言こそできないが、現段階では、本遺跡から出土した瓦は結城鹿守跡に補修瓦として供給されていたものではなく、また、そこから持ち出されたものでもないかと解釈する事ができよう。今回の検証に於いては、本遺跡から出土した瓦の搬入元を特定するには至らなかったが、その可能性を示すならば、現在共に未発見ではあるが、本遺跡近辺に所在の可能性のある瓦葺きの建物跡、或いはその建物跡に瓦を供給していた、地場でも三和産の材料が入り可能な瓦窯跡から持ち込まれたものであったと想定する事もできよう。補足として、同町内、他遺跡での瓦の出土事例では、尾崎地区に所在する「尾崎前山遺跡」からも少量であるが瓦片の出土例がある。この瓦片については、本遺跡で出土した瓦との比較を試みた結果、双方とも同一の胎土を有する事が判明した。この資料は、現在、八千代町歴史民俗資料館にて展示・保管されている。

最後に、16・17・18・27・33号住居跡から出土した羽口についてだが、これらはカマドの支脚として転用されていたもので、このうち16・18・27・33号住居跡から出土したものは未使用であり、17号住居跡から出土の羽口は製鉄炉で使用後に持ち込まれたものと思われ、その先端部は被熱により溶解し、成分溶渾の付着が窺われるものである。これらの羽口はその形状から箱形製鉄炉に装着されるものと考えられるが、通風孔が狭い事から、製鉄初期段階で用いられる大型の炉体では無く、2次精錬以降の小型の炉体で使用されたものと想定されよう。本遺跡の東方向約5.8km先の同町内尾崎地区には、9世紀代に「領主製鉄」として操業されたと目されている「尾崎前山遺跡」があるが、昭和53～55年にかけて実施された発掘調査時には羽口の出土が認められなかった為、こちらの炉体は「送風羽口が装着されない構造」であったとの見解が示され、それに基づき復元整備もなされている。同町内での製鉄関連遺跡の発見事例は、現在のところ他にない。

以上、今回の発掘調査によって発見された平安時代の遺構と遺物を概観してきたが、これらの事から本遺跡で考えうる当該集落が持つ性格の可能性について述べるなら、本集落が営まれていたと思われる9世紀後半～末は、全国的に律令体制が崩れはじめ、群衙が衰退する時期にもあたり、在庁官人制や地子田経営の展開が顕著にみられるようになる。また、この後成立してゆく在地領主化の礎ともなる時期でもあり、これに伴い地方豪族層が積極的に生産工房に関与するようになる。そして、これらの時節は例外なく、本集落にも何らかの影響をもたらしていたものと考えられ、先述の「酸化焰の須恵器」や、「瓦」、製鉄炉の「羽口」等、特定の工房で生産される遺物類の出土はその裏付けとなる資料であり、検出された住居跡の構造に於いても、その特異な同一性から、習俗、若しくは生業を共有した集団の存在を示唆するには十分な根拠となり得るものだと考えられよう。これらに従えば、本集落に営みを求めた人々は、出土遺物である、質よりも量的補充を趣旨とした「酸化焰の須恵器」や、「瓦」の生産、または「製鉄関連工房」に深い係わりを持つ、在地領主直轄のもと稼働していた土着の工人集団であったと考えると、大きく間違いが生じる可能性は低いと思われる。いずれにせよ、本遺跡近辺に於いては、上記で仮定した工房、生産跡等は未だ発見されていない。今後の展望としては、本遺跡付近はもとより、周辺での発掘調査の充実が計られ、これら一連の仮説がより確証を持った説へと移行しうるに有効な資料が蓄積されてゆく事に期待したい。

最後に、文末となってしまう大変恐縮ではありますが、本稿を執筆するに際しまして、市川博物館学芸員 山路直充氏、市川市教育委員会 松川由次氏、結城市教育委員会 齊藤伸明氏、下妻市教育委員会 赤井博之氏、水戸市教育委員会 川口武彦氏、御毛野考古学研究所 土生朗治氏、の諸氏からは、御多忙を極める中にも関わらず、多大な御協力を御教示を賜りました。この事、改めて御芳名を記して感謝の意を表すとともに、心より御礼申し上げます。次第です。

文責・齋藤 洋

第2節 菱毛道西遺跡と飯沼周辺の遺跡

本節では、菱毛道西遺跡の大きな特徴と考えられる古墳時代後期の大型竪穴住居跡と平安時代竪穴住居跡出土の瓦について、飯沼周辺の遺跡の発掘調査事例等を紹介し、当遺跡が飯沼流域で持つ意味と今後の課題について検討し総括としたい。

第1項 古墳時代後期の大型竪穴住居跡

菱毛道西遺跡の古墳時代後期の住居跡は18軒確認され、1軒を除き6世紀末から7世紀前半の年代が与えられている。前節において、18軒の住居跡はその規模から、一边が8m以上10m未満の大型住居跡が5軒、6m以上8m未満の中型住居跡が9軒、4m以上6m未満の小型住居跡が4軒の3種類に分類されている。

飯沼流域では、当遺跡以外に発掘調査事例はないが、飯沼の西部を南北に流れ現在の利根川に合流する宮古川・大川流域では、旧三和町、旧総和町で同時期の遺跡が調査されている。旧三和町では仁達の浅間前遺跡で7世紀前半の住居跡が6軒調査されているが、一边が約8mの大型住居跡が1軒、6m代の中型住居跡が3軒、6m未満の小型住居跡が2軒である。駒込の広町遺跡では7世紀末の住居跡2軒、上片田の吹上遺跡では7世紀末の住居跡3軒が調査されているが、広町遺跡の一边6.8mの中型住居跡1軒以外すべて4mから5m代の小型の住居跡である。旧総和町では、駒羽根の駒羽根遺跡で1軒、葛生の磯ノ木遺跡で1軒、関戸の蔵王遺跡で1軒、柳橋の北新田A遺跡で3軒、久能の香取西遺跡で3軒、上大野の本田山遺跡で8軒の住居跡が調査されているが、蔵王遺跡で7.5m、北新田A遺跡で7.7m、本田山遺跡で6.8mの中型住居跡各1軒以外はすべて6m未満の小型の住居跡である。

飯沼の東部では、鬼怒川流域の旧千代川村下栗の野方台遺跡で、古墳時代後期だけで110軒以上の住居跡が確認されている。その多くが一边6m前後の中型の住居跡である中で、一边約11mの大型住居跡が1軒あり注目される。

発掘調査によって規模の分かる調査事例を見てきたが、ほとんどの遺跡で集落内に大型住居跡は1軒であるのに対し、菱毛道西遺跡のように8mを超える大型住居跡が5軒も存在することは、当遺跡の特徴と考えてよいであろう。

集落と古墳との関連を見てみると、旧千代川村の野方台遺跡と野方台古墳群（円墳外18基）、旧総和町の香取西遺跡と向原古墳群（円墳3基）、本田山遺跡と本田山古墳群（円墳7基）との関連が考えられているが、菱毛道西遺跡では、他の遺跡では見られない大型住居跡がありながら、遺跡周辺には古墳が確認されていない。飯沼流域における古墳時代の集落と古墳との関連については、今後の課題である。

第2項 平安時代竪穴住居跡出土の瓦

菱毛道西遺跡の平安時代の住居跡は16軒確認され、9世紀後半の年代が与えられている。この時期の特徴は、半数の8軒の住居跡から瓦が出土していることである。カマドの構築材として利用されていたものが3軒、残りは覆土内からの出土である。

八千代町内では、当遺跡の他に4遺跡から瓦が出土している。仁江戸の一本木遺跡、栗山の古堂遺跡、西入山の大山道南遺跡は表様によるものであるが、昭和55年に調査された尾崎前山遺跡では2軒の住居跡から出土した平瓦片が接合している。

飯沼中流域にあたる旧石下町では、鴻野山の塚前遺跡から平瓦、郷ノ上遺跡から軒平瓦等が出土しているが、郷ノ上遺跡出土の軒平瓦は、千葉県我孫子市船戸遺跡出土の軒平瓦と同范であることが確認されて

いる。飯沼上流域では旧三和町尾崎の杉ノ前遺跡、さらに上流の西仁連川流域では、結城市小田林の本田B遺跡、田間の香取前遺跡、北南茂呂の南茂呂遺跡、東茂呂の東茂呂北原遺跡から布目瓦が表採されている。調査事例としては、昭和61年から62年にかけて調査された小田林遺跡の83号土坑から、平瓦、丸瓦、熨斗瓦が出土している。

飯沼・西仁連川流域の東部を流れる鬼怒川流域では、結城市欠畑の結城廃寺跡、上山川の八幡瓦窯跡がある。住居跡出土事例としては、平成2年から6年にかけて調査された峯崎遺跡、平成8年に調査された油内遺跡、ドリ松遺跡がある。これらの3遺跡は、古代下総国結城郡の中心的集落と考えられている。峯崎遺跡では4軒の住居跡から平瓦、丸瓦、熨斗瓦が、油内遺跡では1軒の住居跡から丸瓦が出土し、カマドの構築材として利用されている。ドリ松遺跡では13軒の住居跡の他、鍛冶工房、土坑等から平瓦、丸瓦が出土しているが、1軒の住居跡でカマドの構築材として利用されていた以外は、すべて覆土内からの出土である。

鬼怒川流域の旧千代川村では、村岡の木田屋敷遺跡、皆葉の山神西遺跡等11遺跡から瓦が表採されている。本田屋敷遺跡は平成8年に調査され、溝跡から軒平瓦が出土している。

飯沼流域西部の宮古川流域では、旧総和町で昭和58年から59年にかけて調査された柳橋の北新田A遺跡で1軒、平成12年から13年にかけて調査された稲宮の行屋西遺跡で1軒、平成12年に調査された上大野の木田山遺跡で2軒の住居跡覆土内から、平瓦、丸瓦が出土している。

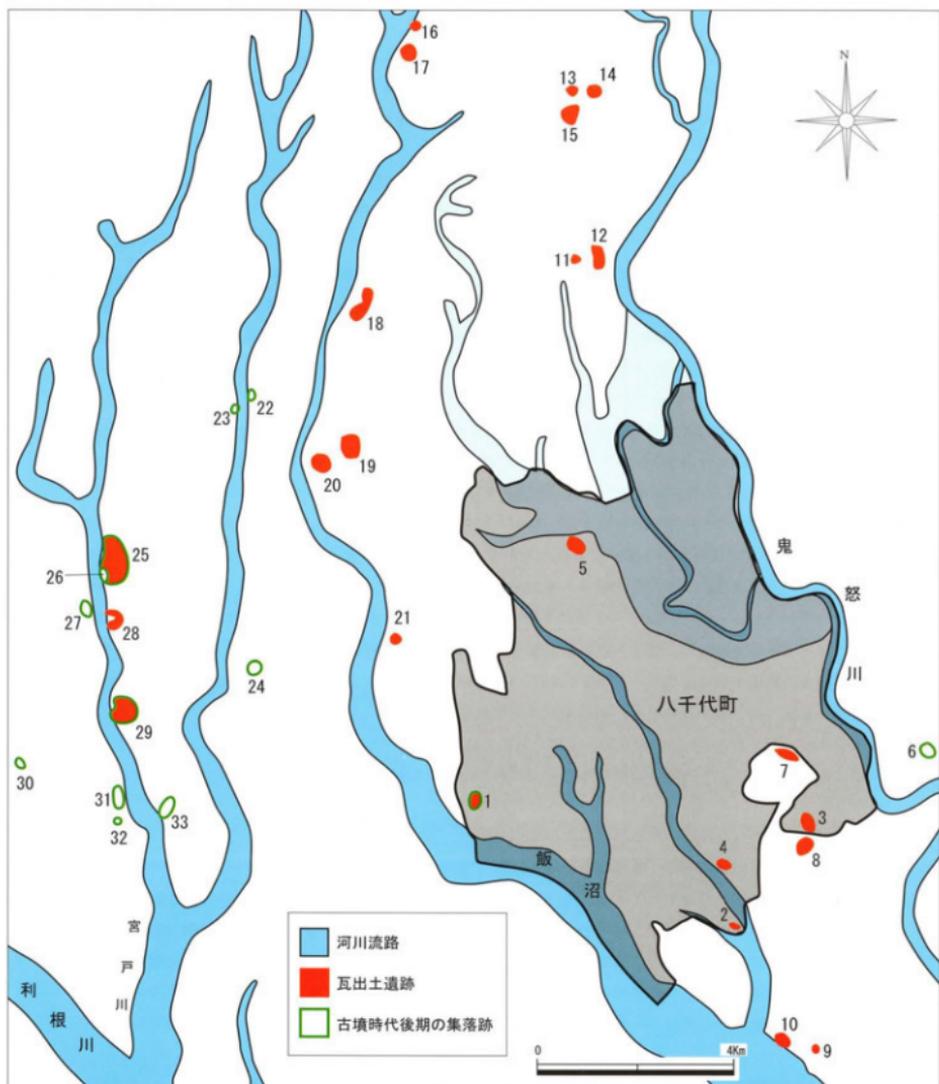
以上、飯沼流域を中心に周辺地域の瓦出土遺跡、調査事例等を紹介してきたが、結城市のドリ松遺跡の13軒の住居跡からの瓦出土例を除いて、他の遺跡では集落内で1・2軒の住居跡からの出土である。菱毛道西遺跡のように集落の半数の住居跡から多量に出土した例は無く、飯沼流域を中心とした地域において当遺跡の大きな特徴と言えるだろう。旧石下町の郷ノ上遺跡や旧千代川村の本田屋敷遺跡、山神西遺跡、八千代町の本木遺跡等は、集落内に仏教関連施設等の瓦葺きの建物跡が推定されているが、菱毛道西遺跡では調査の結果からは瓦葺きの建物跡の存在は確認されていない。菱毛道西遺跡出土の多量の瓦はどこから搬入されたものなのだろうか。結城市の下り松遺跡出土の瓦は、周辺に結城廃寺跡、八幡瓦窯跡との関連を指摘することができる。菱毛道西遺跡の周辺では現在のところ瓦窯跡は確認されていないが、1節で指摘しているように、当遺跡が立地する飯沼流域内で瓦生産に関する遺跡の存在を推定できるのではないだろうか。

菱毛道西遺跡の発掘調査は、試掘調査で確認された遺跡範囲の8割以上を調査したことになり、古代の集落のほぼ全容を掘り起こしたことになる。それだけに、調査で得られた多くの貴重な成果を如何に活用して行くか今後の大きな課題である。総括では、検出された住居跡と出土遺物を分析し、周辺地域の遺跡との関連について検討してきた。古墳時代後期的大型堅穴住居跡を持つ集落とその領域、出土遺物では須恵器や瓦から飯沼流域での生産跡の存在の可能性など、飯沼流域を中心とした一つの地域性を考えることができるのではないだろうか。

文責・山野井 哲夫

第33表 菱毛道西遺跡 平安時代瓦出土住居跡

住居跡	主な出土瓦	備考	住居跡	主な出土瓦	備考
16号住	平瓦4	カマド袖構築材	23号住	丸瓦1	
19号住	平瓦1		24号住	平瓦1・丸瓦1	
20号住	丸瓦1	カマド内	26号住	平瓦2	
22号住	平瓦2	カマド袖構築材	33号住	平瓦1・丸瓦1	



- 1 菱毛道西遺跡 2 尾崎前山遺跡 3 一本木遺跡 4 古堂遺跡 5 大山道南遺跡 6 野方台遺跡・野方台古墳群
 7 本田屋敷遺跡 8 山神西遺跡 9 塚前遺跡 10 郷ノ上遺跡 11 結城廃寺跡 12 八幡瓦窯跡 13 油内遺跡 14 下り松遺跡
 15 峯崎遺跡 16 本田B遺跡 17 小田林遺跡 18 香取前遺跡 19 東茂呂北原遺跡 20 南茂呂遺跡 21 杉ノ前遺跡 22 広町遺跡
 23 吹上遺跡 24 浅間前遺跡 25 本田山遺跡 26 本田山古墳群 27 蔵王遺跡 28 行屋西遺跡 29 北新田A遺跡 30 駒羽根遺跡
 31 香取西遺跡 32 向原古墳群 33 磯ノ木遺跡

第143図 飯沼周辺の主な古墳時代後期の遺跡と瓦出土遺跡分布図 (5=1/100,000)

第4章 第1節 参考・引用文献一覧

- 奈良・平安時代研究班 1992 『9世紀後半の器種構成とその割合について』『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団
 浅井哲也 1991 『茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)』『研究ノート』巻月号 財団法人茨城県教育財団
 浅井哲也 1992 『茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)』『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団
 奈良・平安時代研究班 1993 『10世紀の器種構成とその割合について』『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団
 川津法伸 1998 『竊の墓をもつ住居について(2)』『研究ノート』8号 財団法人茨城県教育財団
 川津法伸 2000 『竊の墓をもつ住居について(3)』『研究ノート』10号 財団法人茨城県教育財団
 八千代町史編さん委員会 1987 『八千代町史(通史編)』八千代町
 藤原 均 1997 『本木道跡発掘調査報告書』八千代町教育委員会・本木道跡調査会
 斎藤 浩 2007 『小次郎内遺跡発掘調査報告書』八千代町・八千代町教育委員会・地域文化財コンサルタント
 斉藤伸也他 1996 『茨城県結城市 葦崎道跡』結城市文化財調査報告書第7集 結城市教育委員会他
 植生寛孝 2001 『竊をもつ懸穴墓物跡にみられる棚状施設の研究 - 関東地方の事例を中心に -』第一・二分冊
 茨城県教育財団 1999 『一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 下り松道跡・油内道跡』建設省他
 茨城県立歴史館 1994 『茨城県における古代瓦の研究』学術調査報告書4
 辻 史郎 2001 『下総国結城寺の創設位置と瓦について』『古代』第110号 早稲田大学考古学会
 川口武志 2008 『常陸新治郡常陸岡田寺院と礼堂遺跡出土文字瓦の様相 - 史跡新治庵考跡・上野原瓦屋出土資料を中心に -』
 『明治大学古代学研究所紀要』第6号 明治大学
 松田礼子・松本太郎他 2001 『千葉県市川市 下総国府路・岡野台遺跡緊急発掘調査報告書』市川市教育委員会
 松川由他他 2007 『千葉県市川市 下総区分道跡 - 第44-2地点発掘調査報告書』市川市教育委員会
 松川由次・藤原 祥雄 2009 『千葉県市川市 須和町遺跡 - 第73地点発掘調査報告書』市川市教育委員会・地域文化財センター
 森井博之 1997 『鎌倉副官実朝の須永館の系譜 - 茨城県 -』『東洋の須永館 関東地方における歴史時代発掘の系譜 -』古代学研究所

第4章 第2節 参考・引用文献一覧

- 『茨城県における古代瓦の研究』茨城県立歴史館 1994.3
 『八千代町史 通史編』八千代町史編さん委員会 1987.3
 『八千代町史 資料編 考古Ⅲ』八千代町史編さん委員会 1988.3
 『八千代町道跡地図』八千代町教育委員会 2003.3
 『結城市遺跡分布地図・地名表』結城市教育委員会 1984.3
 『三和町史 通史編 原始・古代・中世』三和町史編さん委員会 1996.3
 『三和町史 資料編 原始・古代・中世』三和町史編さん委員会 1992.3
 『総和町史 通史編 原始・古代・中世』総和町史編さん委員会 2005.7
 『総和町史 資料編 原始・古代・中世』総和町史編さん委員会 2002.3
 『千代川村の道跡』千代川村史編さん委員会 2001.3
 『千代川村生活史 第3巻 前近代史料』千代川村史編さん委員会 2001.3
 『千代川村生活史 第5巻 前近代遺史』千代川村史編さん委員会 2003.3
 『下町町史』若下町史編さん委員会 1988.3
 『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998.3
 『千葉県県の歴史 資料編 考古4(道跡・遺構・遺物)』千葉県 2004.3
 『一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書
 下り松道跡・油内道跡(上巻・下巻)』財団法人茨城県教育財団 1999.3
 『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
 総和地区(北新出A道跡)』財団法人茨城県教育財団 1986.3
 『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
 結城地区(小市林道跡)』財団法人茨城県教育財団 1989.3
 『尾崎前山道跡』八千代町教育委員会 1981.3
 『本木道跡』八千代町教育委員会 1997.3
 『茨城地区埋蔵文化財発掘調査報告書』山武考古学研究所 2006.2
 『葦崎道跡』結城市 1996.3
 『結城栄寺第1次発掘調査概要』結城市教育委員会 1989.3
 『結城八幡瓦窯跡』結城市教育委員会 2003.3
 『浅間前道跡』古河市教育委員会 2008.3
 『水郷南志辺道跡』常陸市教育委員会 2007.3
 『本郷由道跡』常陸市教育委員会 2007.3
 『広町遺跡・宮前遺跡・伏上道跡』三和町教育委員会 1999.3
 『下栗野方台遺跡』千代川町教育委員会 1993.3
 『駒形根・火櫃A道跡』結和町教育委員会 1991.3
 『藤玉遺跡・行屋西遺跡』総和町 2002.3
 『小市山道跡(第1号)』総和町教育委員会 2002.3
 『本田山道跡(谷塚町遺跡部分)』総和町教育委員会 2002.3
 『磯ノ木遺跡・原遺跡』総和町 2004.3
 『新田道跡』総和町 2004.3

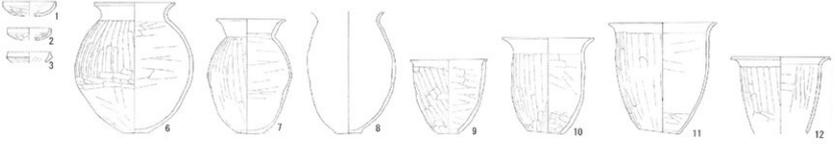
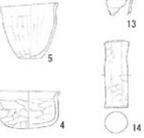
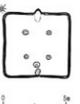
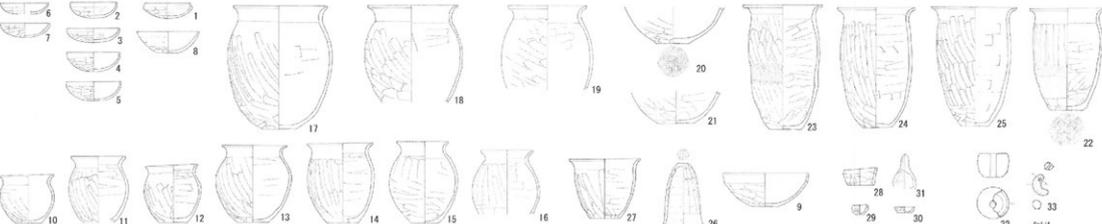
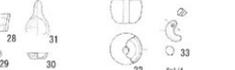
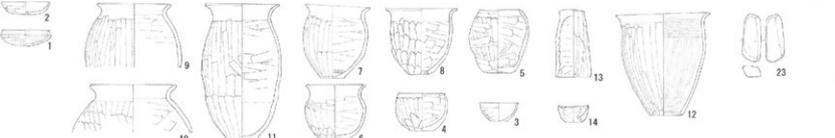
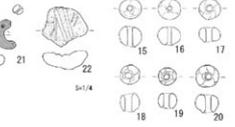
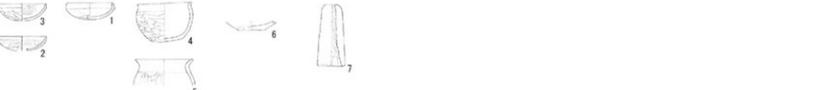
第34表 住居跡一覧表
古墳時代後期

名称	規模(m)			面積 (m ²)	方位	形状	カマド	貯蔵穴	柱穴	備考
	長軸	短軸	深さ							
1号住居跡	9.3	9.3	0.4	86.5	N-4°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	7	大型住居跡
2号住居跡	5.2	5.2	0.4	27.0	N-39°-W	正方形	北壁中央部	なし	6	カマド補強材に長編管使用。 「土器模倣の支腿」出土。
3号住居跡	6.1	6.1	0.25	37.2	N-48°-W	正方形	北壁中央部	なし	5	3方に周溝巡る。
4号住居跡	8.1	8.1	0.4	65.6	N-30°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	6	「廻り抜き障子」。 「土器模倣の支腿」出土。
5号住居跡	6.1	6.1	0.4	37.2	N-29°-W	正方形	北壁中央部	北西コーナー	6	4方に周溝巡る。
6号住居跡	6.1	6.1	0.3	37.2	N-37°-W	正方形	北壁中央部	北東コーナー	7	西壁中央にピット。
7号住居跡	8.5	8.5	0.3	72.3	N-42°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	5	4方に周溝巡る。 「土器模倣の支腿」出土。
8号住居跡	7.4	7.4	0.4	54.8	N-8°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	9	地床伊付段
9号住居跡	6.2	6.2	0.35	38.4	N-6°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	5	4方に周溝巡る。
10号住居跡	4.7	4.7	0.5	22.1	N-35°-W	正方形	北壁中央部	北東コーナー	3	周溝深い。
11号住居跡	5.5	5.5	0.65	30.3	N-34°-W	正方形	北壁中央部	北東コーナー	5	西壁より3本の間仕切り溝。
12号住居跡	9.1	9.1	0.4	82.8	N-11°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	5	大型住居跡
13号住居跡	7.1	7.1	0.6	50.4	N-38°-W	正方形	北壁中央部	北東コーナー	7	南側溝を除き4方に周溝巡る。
14号住居跡	8.0	8.0	0.6	64.0	N-34°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	5	西壁より3本の間仕切り溝。 「土器模倣の支腿」出土。
26号住居跡	6.5	6.5	0.2	52.3	N-5°-W	正方形	北壁中央部	なし	4	周溝なし。
30号住居跡	7.1	7.1	0.5	50.4	N-47°-W	正方形	北壁中央部	北東コーナー	7	4方に周溝巡る。
31号住居跡	6.8	(2.6)	0.6	(46.2)	—	(正方形)	北壁中央部	不明	(3)	住居の半分が調査区外。
32号住居跡	4.8	4.8	0.55	23.0	N-29°-W	正方形	北壁中央部	北壁中央東側	4	西壁より1本の間仕切り溝。

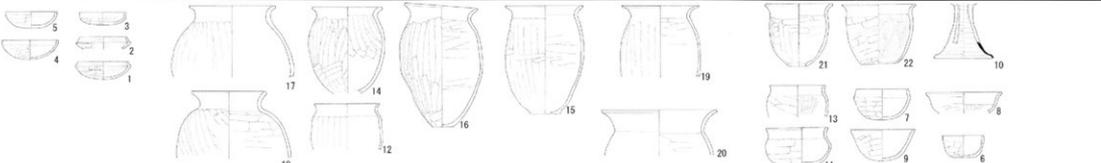
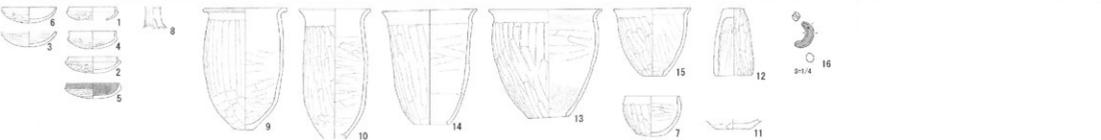
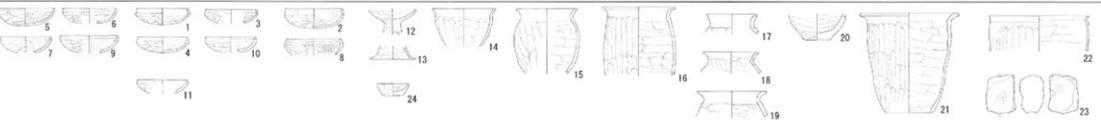
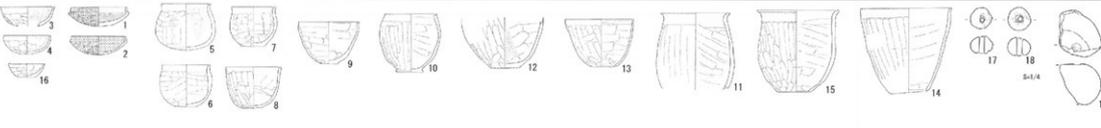
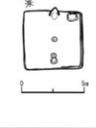
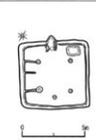
平安時代

15号住居跡	3.7	3.7	0.03	(13.7)	N-20°-W	(正方形)	北壁中央部	(北西コーナー)	(1)	住居の南側半分以上は埋滅。
16号住居跡	3.2	3.2	0.25	10.2	N-24°-W	正方形	北壁中央部	なし	1	地床平。張り出し有り。 羽口・瓦出土。
17号住居跡	2.9	2.9	0.08	8.4	N-14°-W	歪んだ方形	北壁中央部	なし	1	北西隅に張り出し有り。 羽口出土。
18号住居跡	3.5	3.2	0.2	11.2	N-1°-E	歪んだ長方形	北壁中央部	なし	1	北西隅に張り出し有り。 羽口出土。
19号住居跡	3.3	2.8	0.05	9.2	N-1°-E	(長方形)	北壁中央部	なし	0	北西隅に張り出し有り。 瓦出土。
20号住居跡	4.4	4.0	0.15	17.6	N-17°-W	長方形	北壁中央部	なし	0	北西隅に張り出し有り。 瓦出土。
21号住居跡	4.6	4.0	0.2	18.4	N-27°-W	歪んだ方形	北壁中央部	なし	0	一部に埋滅。灰粒陶器出土。
22号住居跡	3.8	2.9	0.15	11.0	N-17°-W	長方形	北壁中央部	なし	0	一部に埋滅。瓦出土。
23号住居跡	4.8	4.0	0.35	19.2	N-17°-W	歪んだ方形	北壁中央部	なし	0	北西・北東隅に張り出し有り。 瓦出土。
24号住居跡	2.8	2.1	0.1	5.9	N-1°-W	歪んだ長方形	北壁中央部	なし	0	墨書土器・瓦出土。
25号住居跡	3.8	3.0	0.1	11.4	N-18°-W	長方形	北壁中央部	なし	0	墨書土器出土。
26号住居跡	6.2	4.5	0.2	(27.9)	N-34°-W	歪んだ多角形	(北壁中央部)	なし	0	重様?コーナーカマド? 瓦出土。
27号住居跡	4.1	3.2	0.08	13.1	N-28°-W	歪んだ長方形	北壁中央部	なし	0	28位を切る。羽口出土。
29号住居跡	4.3	4.3	0.1	18.5	N-19°-W	歪んだ正方形	北壁中央部	なし	0	カマドより「灰」検出
33号住居跡	3.5	3.0	0.35	10.5	N-37°-W	(正方形)	北壁中央部	なし	0	住居の東側が埋滅。 羽口・瓦出土。
34号住居跡	(4.2)	—	0.15	(17.6)	N-35°-W	(正方形)	北壁中央部	なし	0	住居の西側半分ほど埋滅。

古墳時代後期出土遺物①

住居跡 S=1/300	供膳具	煮炊具・貯蔵具・その他 S=1/10
<p>1号住居跡*</p> 		
<p>2号住居跡</p> 		
<p>3号住居跡*</p> 		
<p>4号住居跡*</p> 		
<p>5号住居跡*</p> 		

古墳時代後期出土遺物②

住居跡 S-1/300	供膳具 煮炊具・貯蔵具・その他 S-1/10
<p>6号住居跡</p> 	
<p>7号住居跡</p> 	
<p>8号住居跡</p> 	
<p>9号住居跡</p> 	
<p>10号住居跡</p> 	
<p>11号住居跡</p> 	

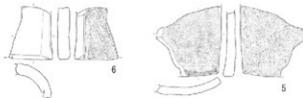
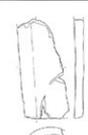
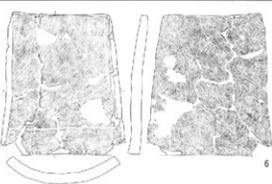
古墳時代後期出土遺物③

住居跡 S=1/300	供膳具	煮炊具・貯蔵具・その他	S=1/10
<p>12号住居跡</p>			
<p>13号住居跡</p>			
<p>14号住居跡</p>			
<p>28号住居跡</p>			
<p>30号住居跡</p>			
<p>32号住居跡</p>			

平安時代出土遺物①

住居跡	S=1/300	供膳具	煮炊具・貯蔵具・その他	S=1/10
16号住居跡				
17号住居跡				
18号住居跡				
19号住居跡				
20号住居跡				
21号住居跡				
22号住居跡				

平安時代出土遺物②

住居跡 S=1/300	供膳具	煮炊具・貯蔵具・その他	S=1/10
23号住居跡 	   		S=1/10
24号住居跡 	  		S=1/10
25号住居跡 	    		S=1/10
26号住居跡 	             		S=1/10
27号住居跡 	    		S=1/10
29号住居跡 	     		S=1/10
33号住居跡 	   	  	S=1/10

遺構写真図版



古墳時代後期住居跡



1号住居跡



2号住居跡



3号住居跡



4号住居跡



5号住居跡



6号住居跡



7号住居跡



8号住居跡



9号住居跡



10号住居跡



11号住居跡



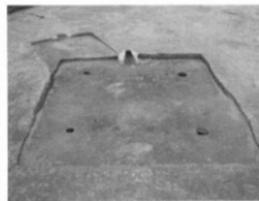
12号住居跡



13号住居跡



14号住居跡



28号住居跡



30号住居跡



31号住居跡



32号住居跡

平安時代住居跡



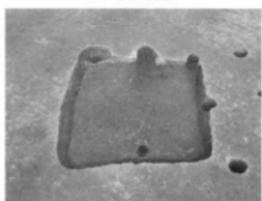
15号住居跡



16号住居跡



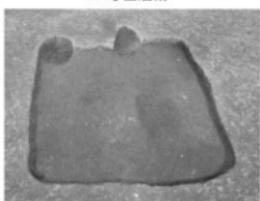
17号住居跡



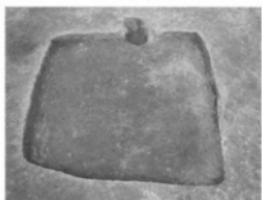
18号住居跡



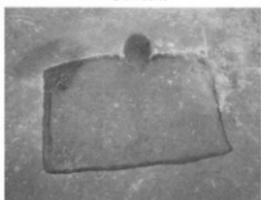
19号住居跡



20号住居跡



21号住居跡



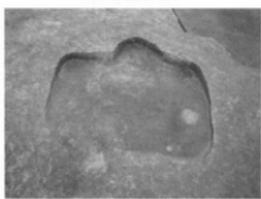
22号住居跡



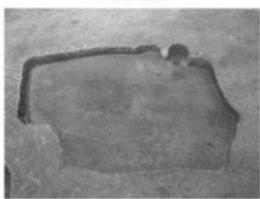
23号住居跡



24号住居跡



25号住居跡



26号住居跡



27号住居跡



29号住居跡



33号住居跡



34号住居跡



1号掘立柱建物跡（時期不明）



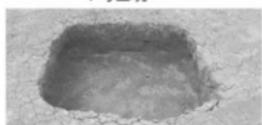
1号土坑



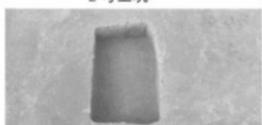
2号土坑



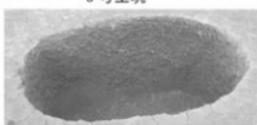
3号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑

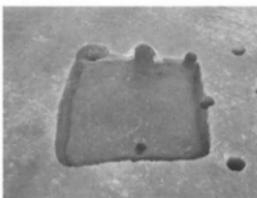
カマド横に張り出しを持つ住居跡（平安時代）



16号住居跡



17号住居跡



18号住居跡



19号住居跡



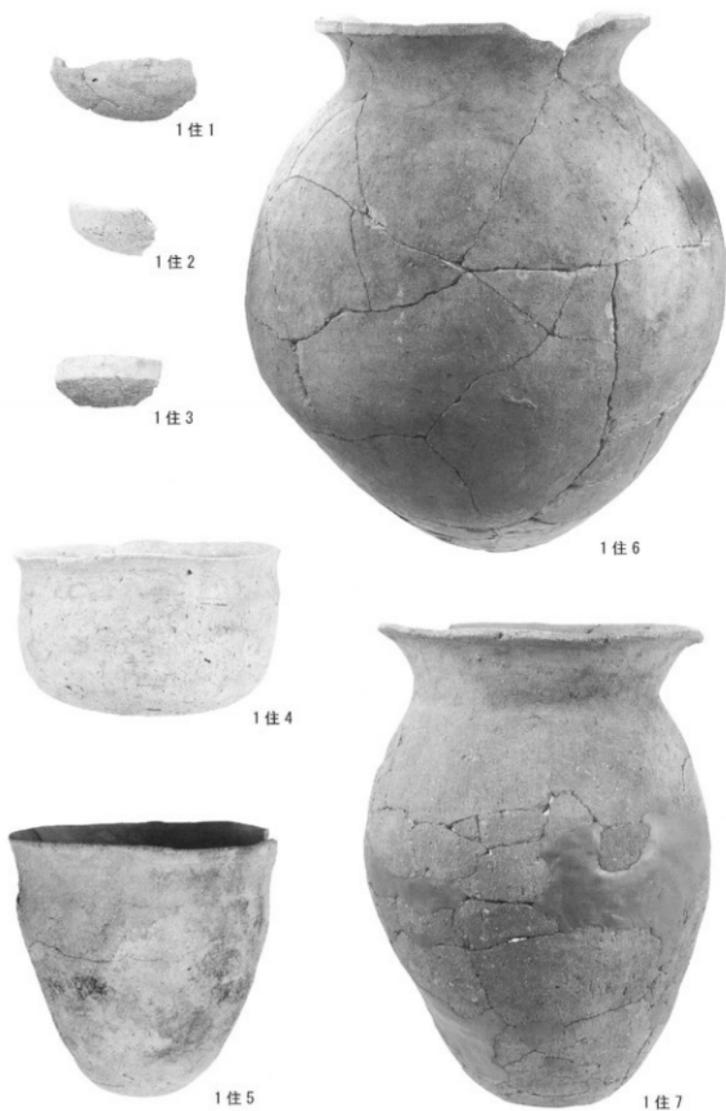
20号住居跡



23号住居跡

遺物写真図版





図版1 1号住居跡出土遺物



1住8



1住9



1住12

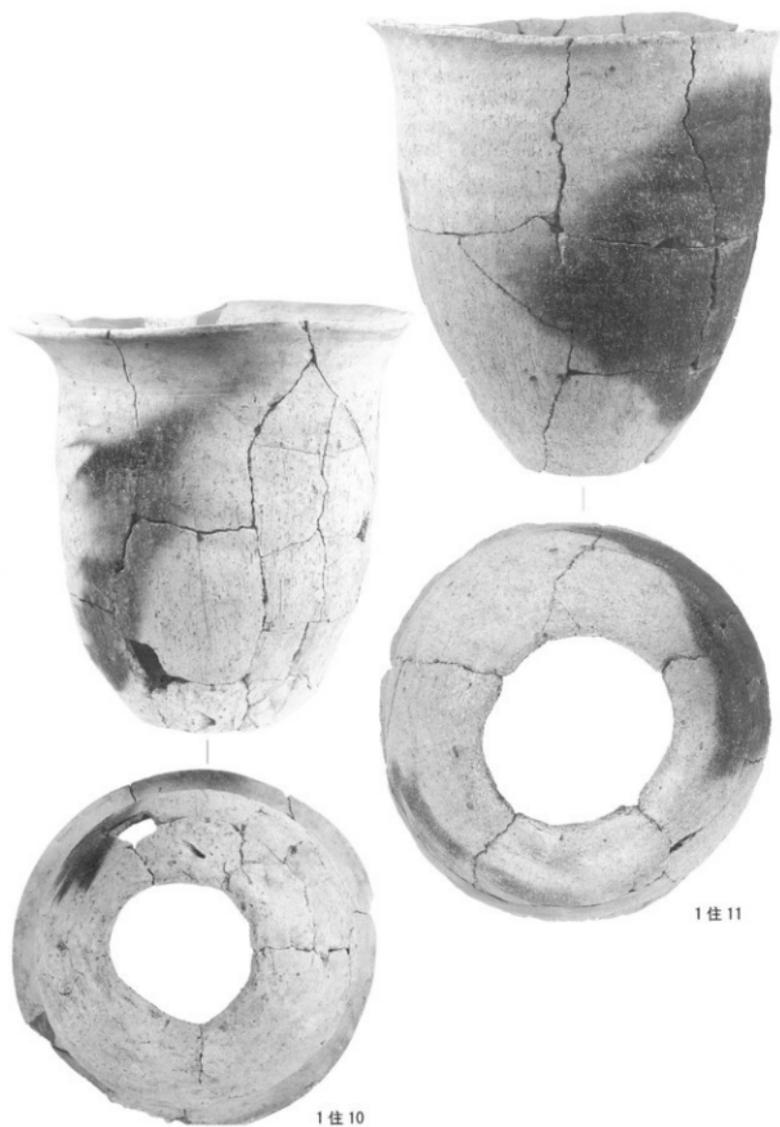


1住13



1住14

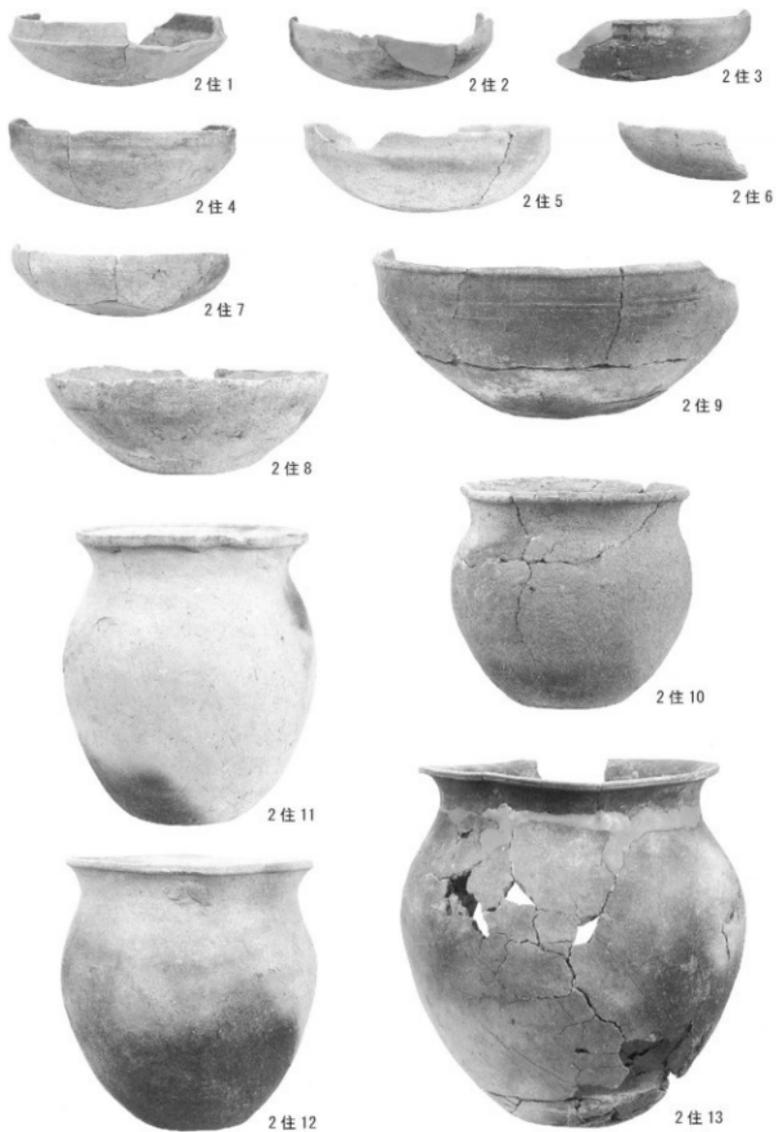
图版2 1号住居跡出土遺物



1住11

1住10

図版3 1号住居跡出土遺物



図版 4 2号住居跡出土遺物



2住14

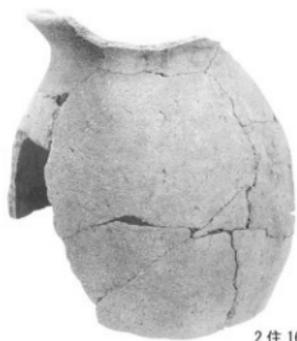


2住15



2住17

图版5 2号住居跡出土遺物



2住16



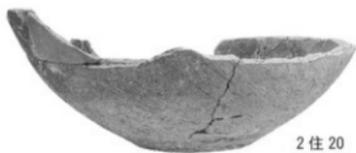
2住18



2住19



2住21



2住20



2住22

图版6 2号住居跡出土遺物



2住23



2住24

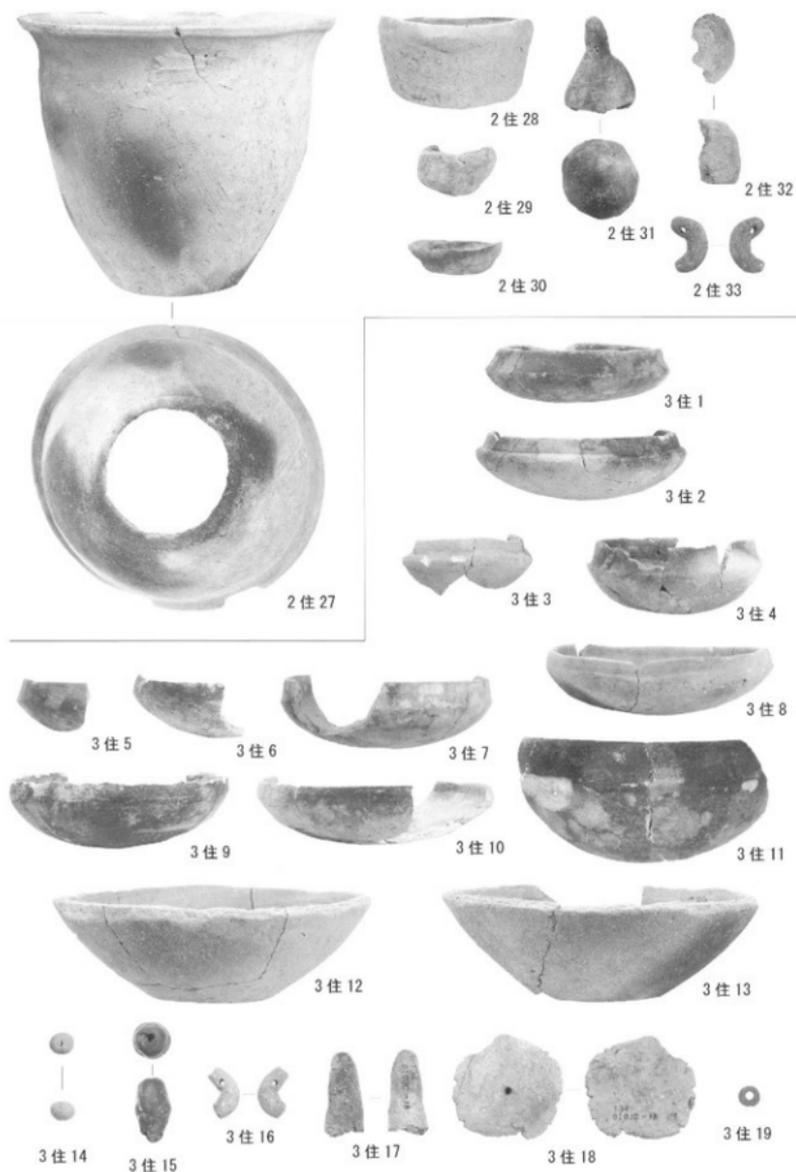


2住25



2住26

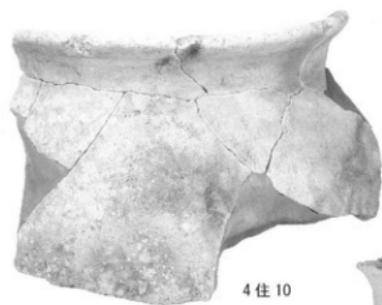
图版7 2号住居跡出土遺物



图版 8 2·3号住居跡出土遺物



図版9 4号住居跡出土遺物



4住10



4住11



4住12

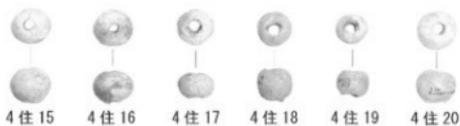
图版 10 4号住居跡出土遺物



4住13



4住14



4住15

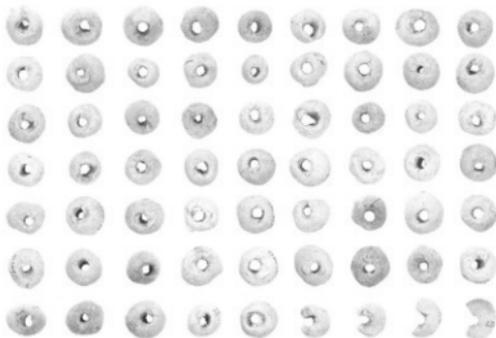
4住16

4住17

4住18

4住19

4住20



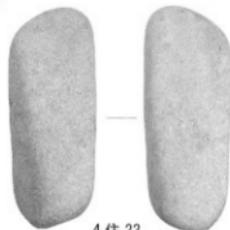
土玉一括



4住21



4住22



4住23



5住1



5住2



5住3



5住4



5住6

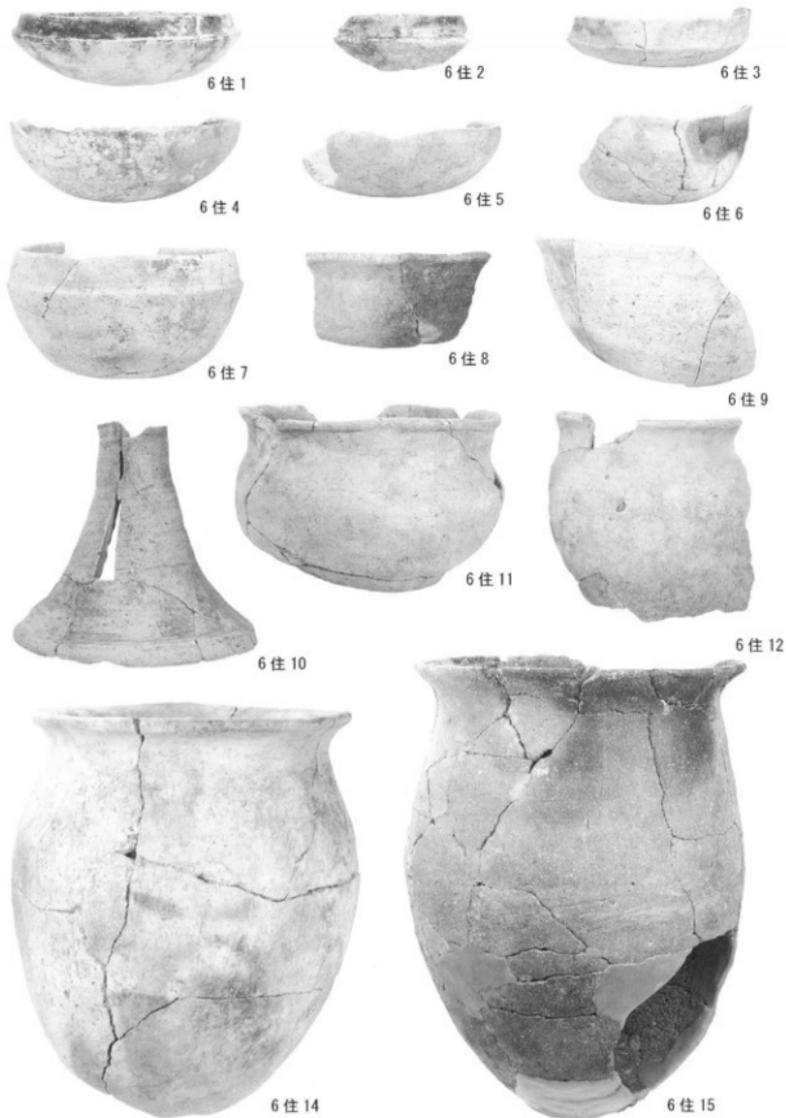


5住5



5住7

図版 11 4・5号住居跡出土遺物



図版 12 6号住居跡出土遺物



6住16



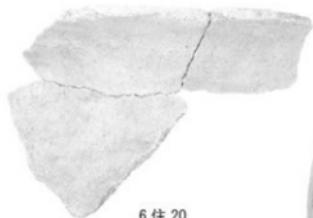
6住19



6住13



6住17

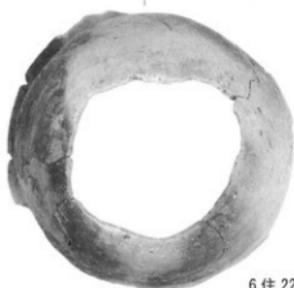
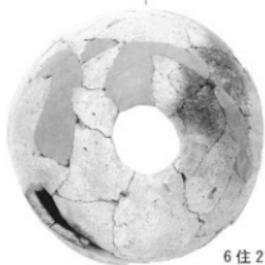


6住20



6住18

図版 13 6号住居跡出土遺物

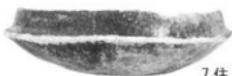


6住21

6住22



7住1



7住2



7住3



7住4



7住5



7住6



7住8



7住7



7住11



7住12

図版 14 6・7号住居跡出土遺物



7住10



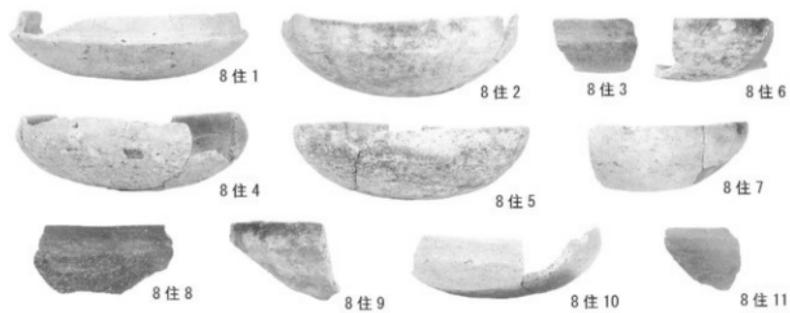
7住13



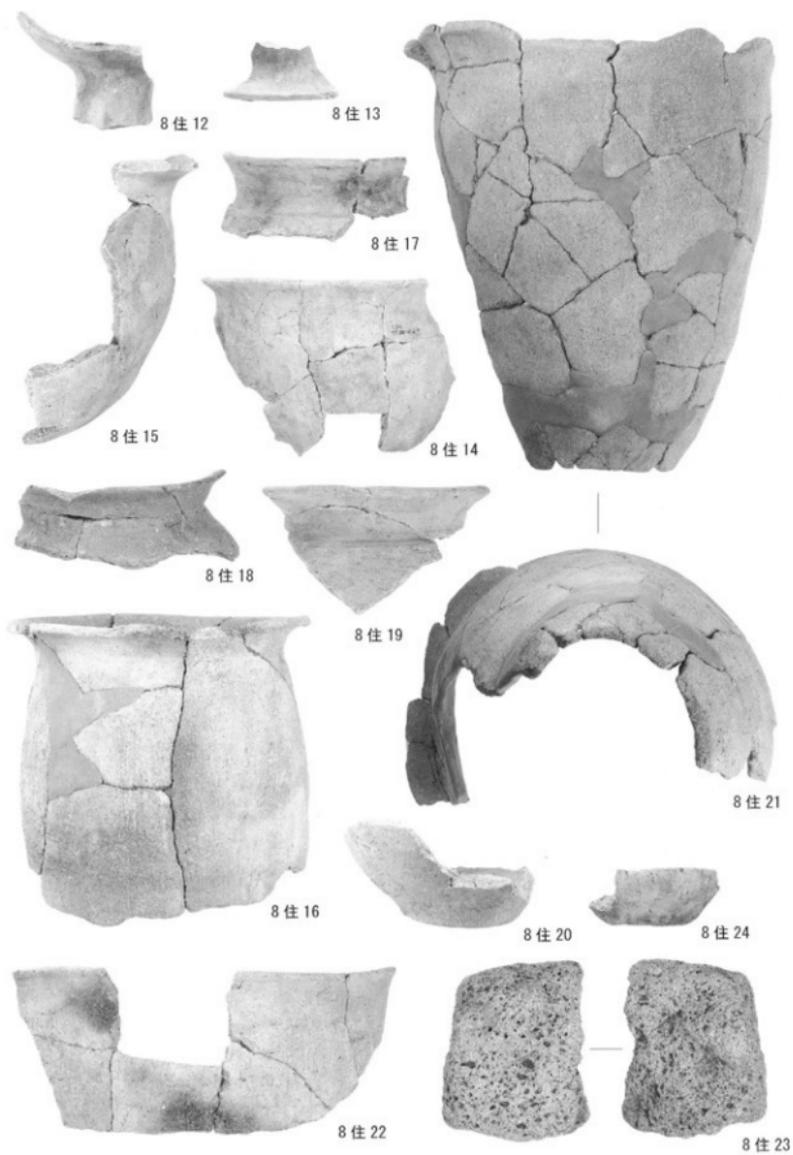
7住9



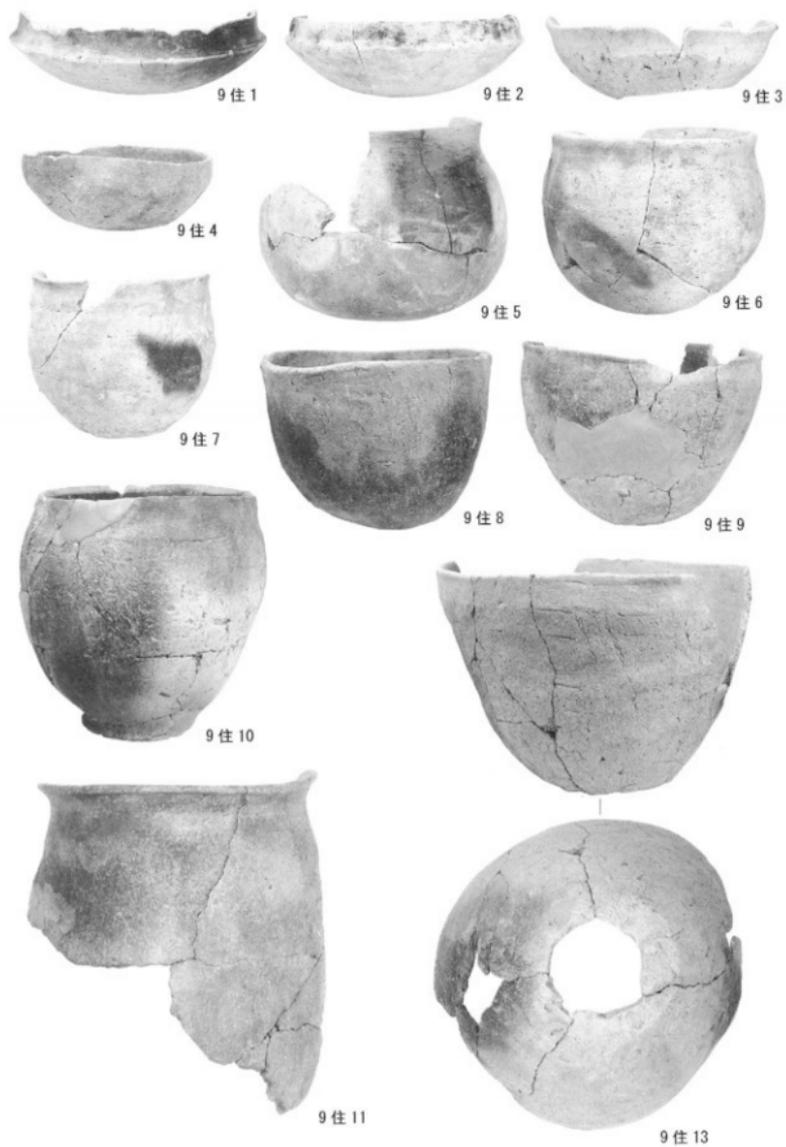
图版 15 7号住居跡出土遺物



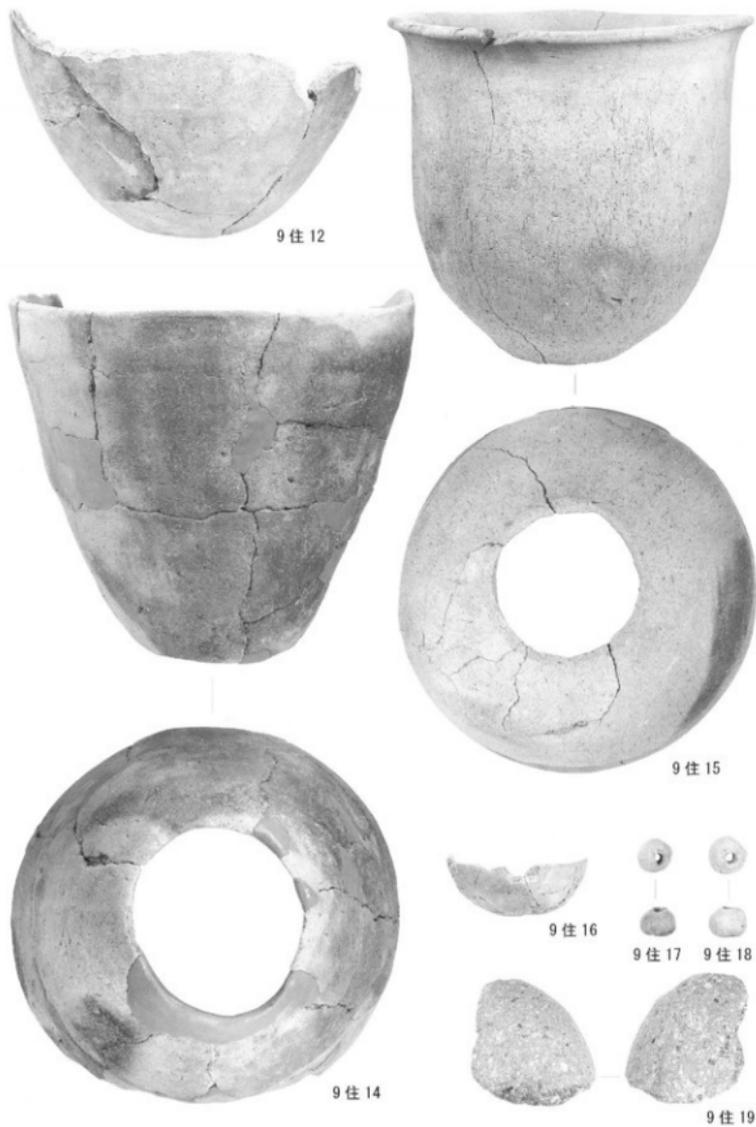
図版 16 7・8号住居跡出土遺物



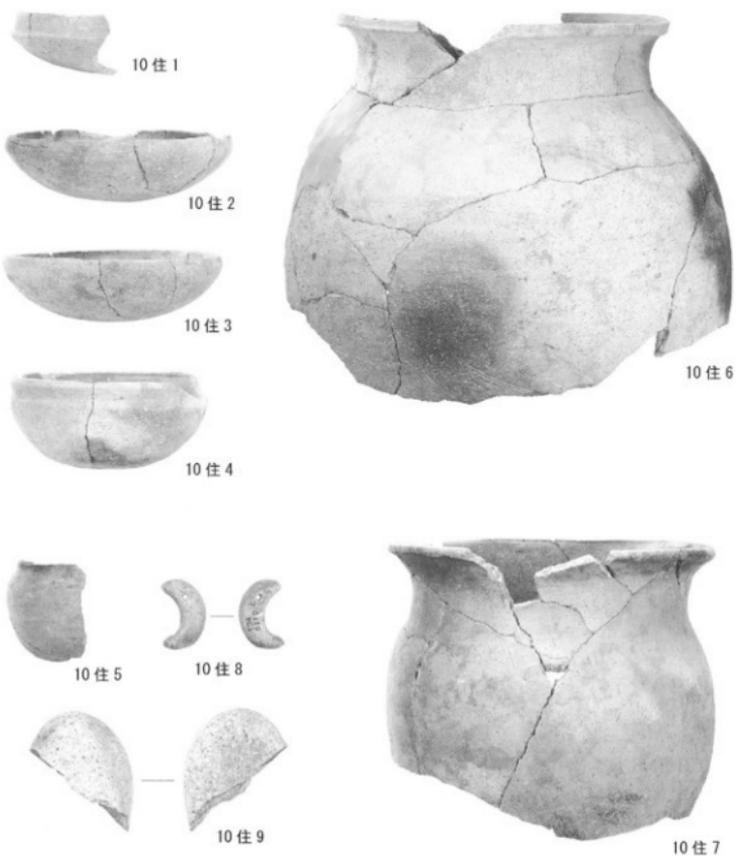
图版 17 8号住居跡出土遺物



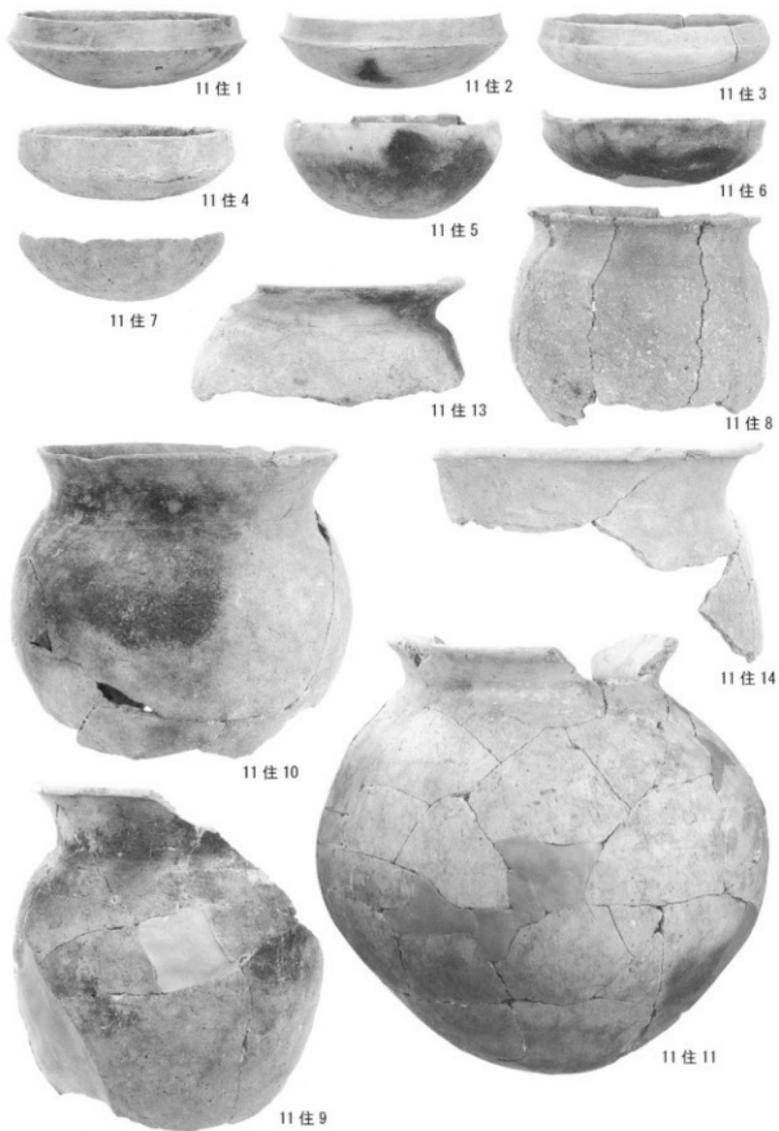
图版 18 9号住居跡出土遺物



图版 19 9号住居跡出土遺物



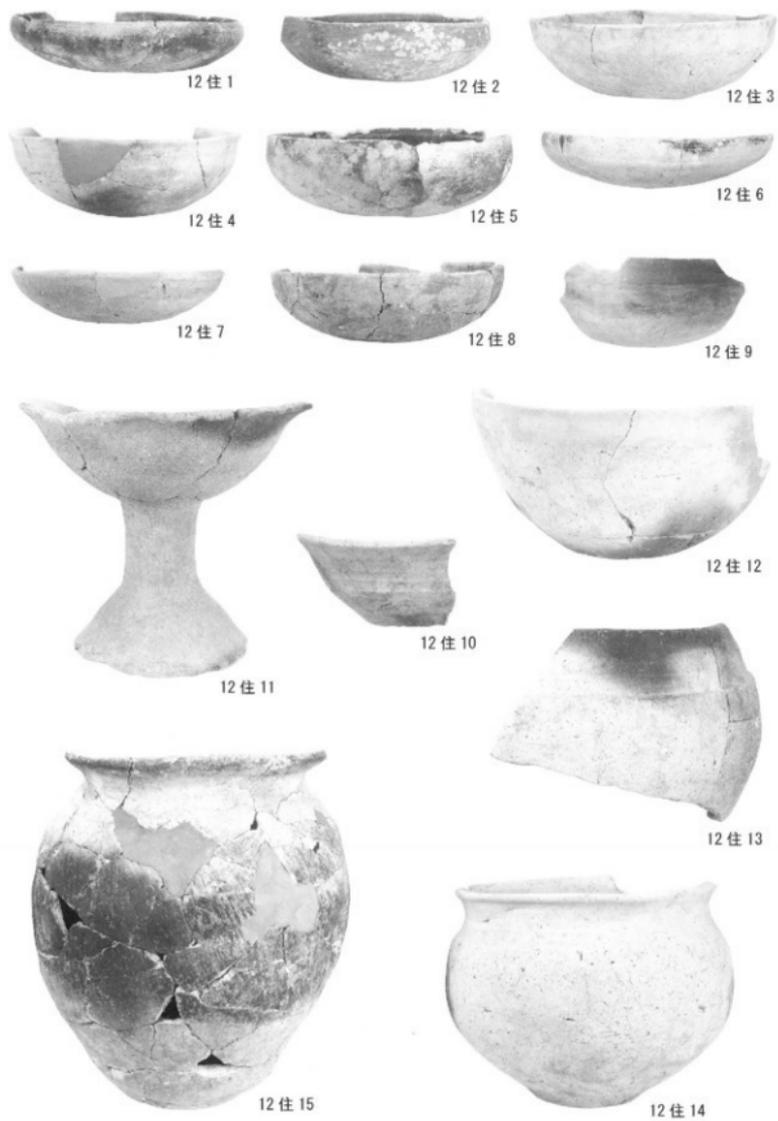
图版 20 10号住居跡出土遺物



图版 21 11号住居跡出土遺物



图版 22 11号住居跡出土遺物



图版 23 12号住居跡出土遺物



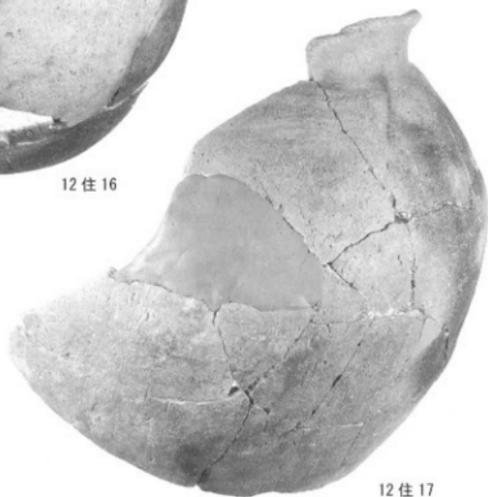
12住18



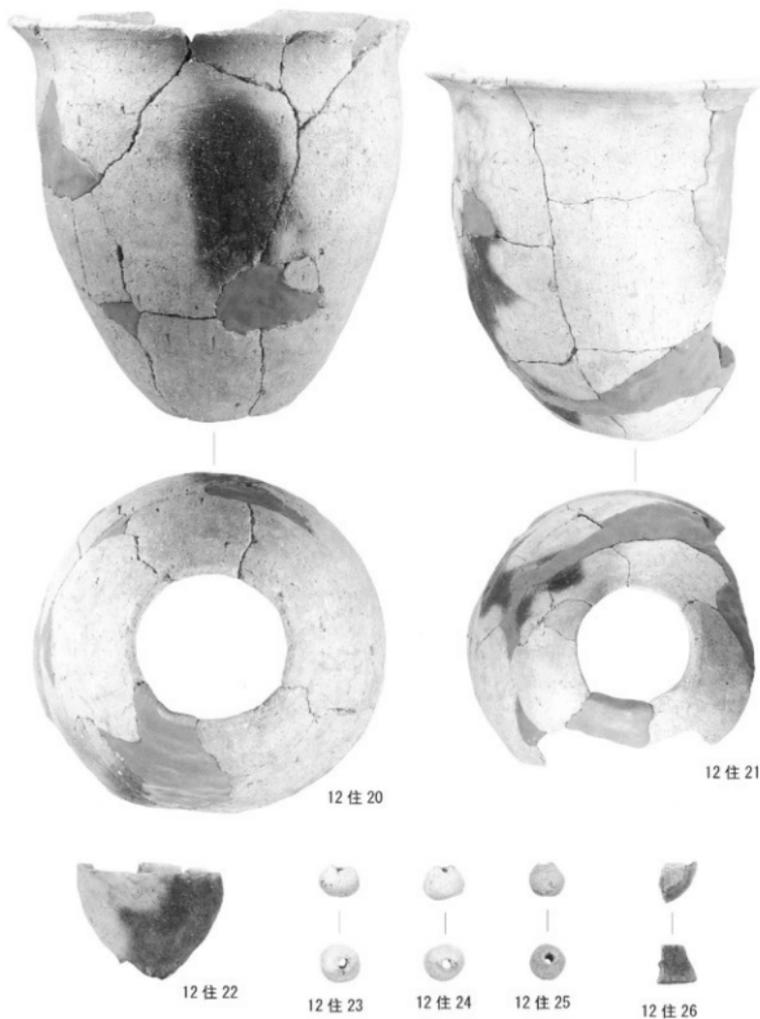
12住19



12住16



12住17



图版 25 12号住居跡出土遺物



图版 26 13号住居跡出土遺物



13 住 9



13 住 6



13 住 13



13 住 12



13 住 10



13 住 11



14 住 1



14 住 2



14 住 3



14 住 4



14 住 5



14 住 7

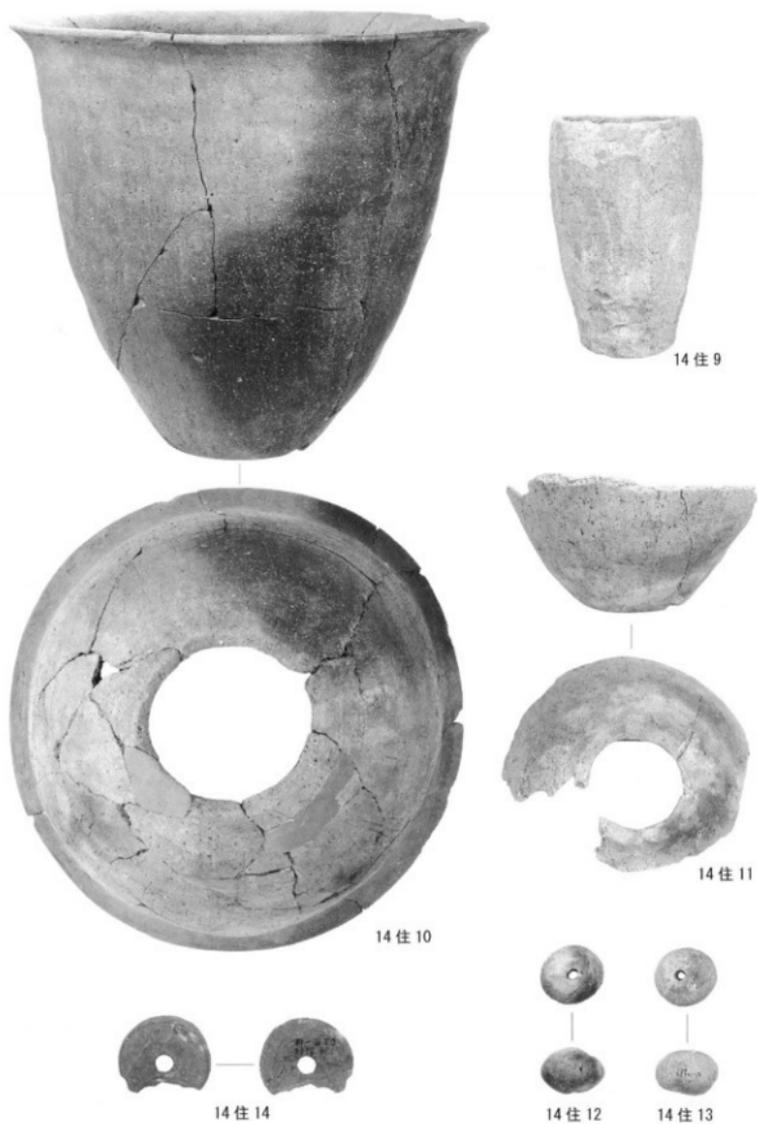


14 住 8

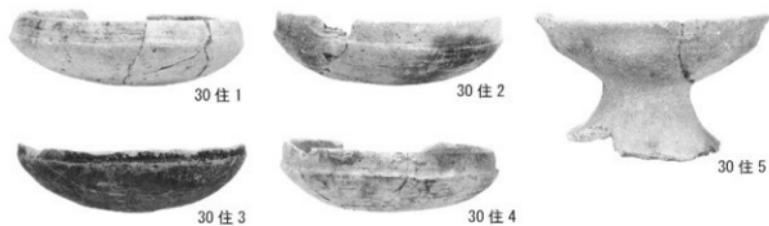
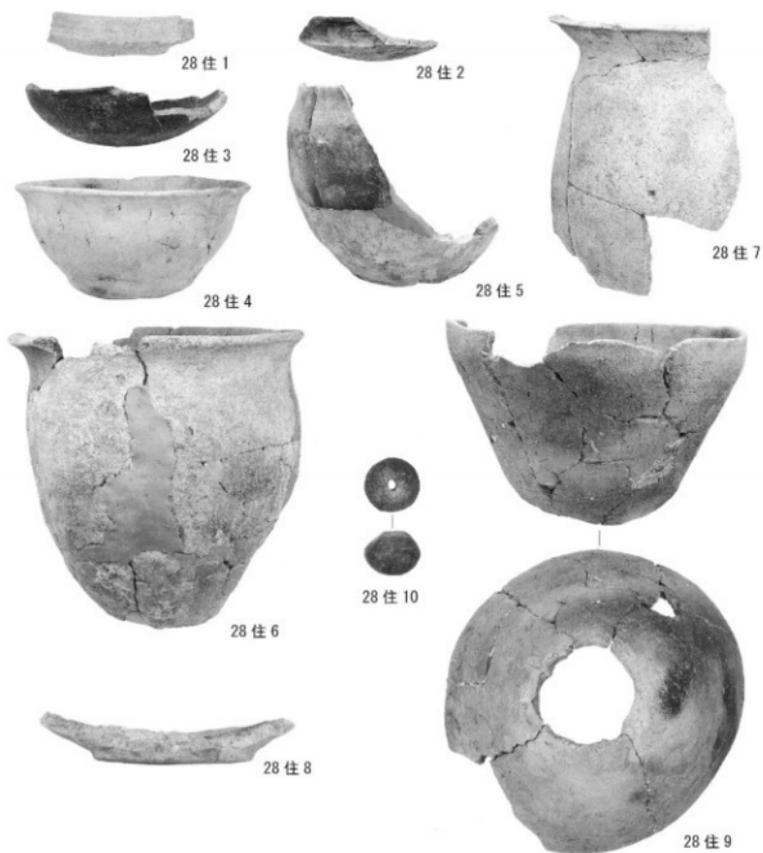


14 住 6

图版 28 14 号住居跡出土遺物



图版 29 14号住居跡出土遺物



图版 30 28·30号住居跡出土遺物



30住6



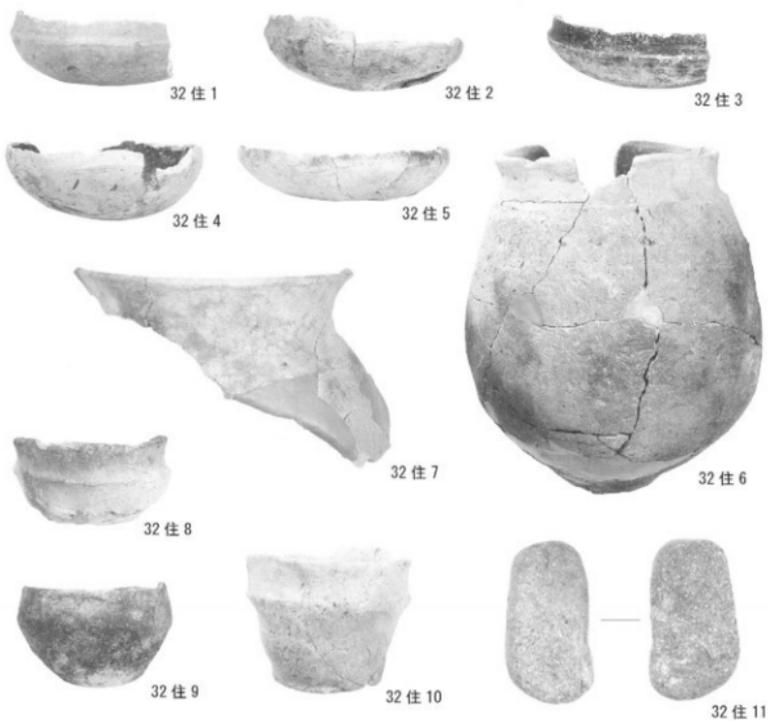
30住7



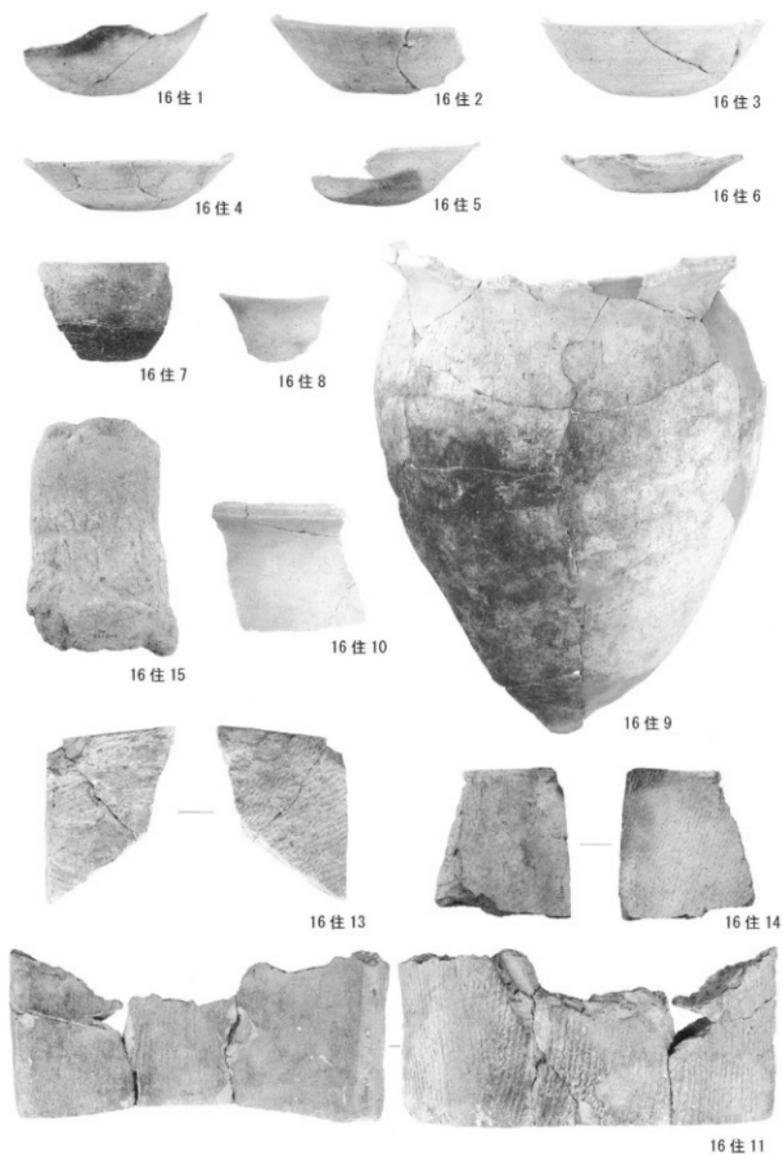
30住8



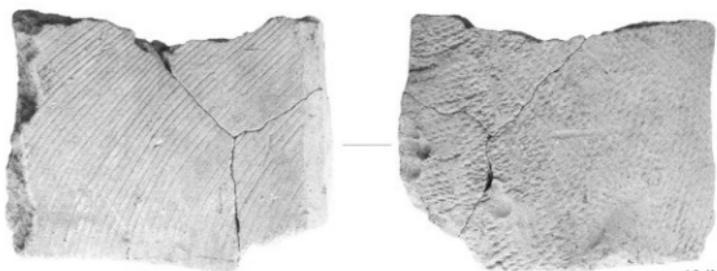
30住9



图版 32 32 号住居跡出土遺物



图版 33 16 号住居跡出土遺物



16住12



17住1



17住2



17住3



17住4



17住5



17住6



18住1



18住2



18住3



18住4



18住5



18住6



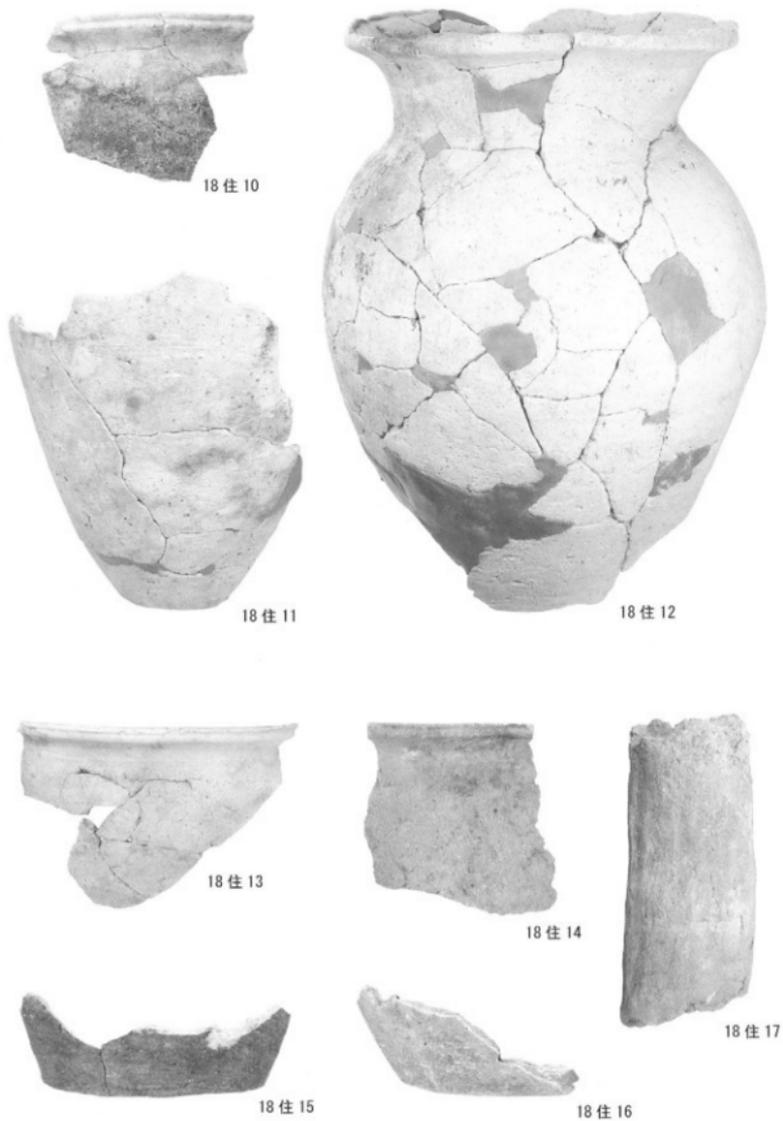
18住7



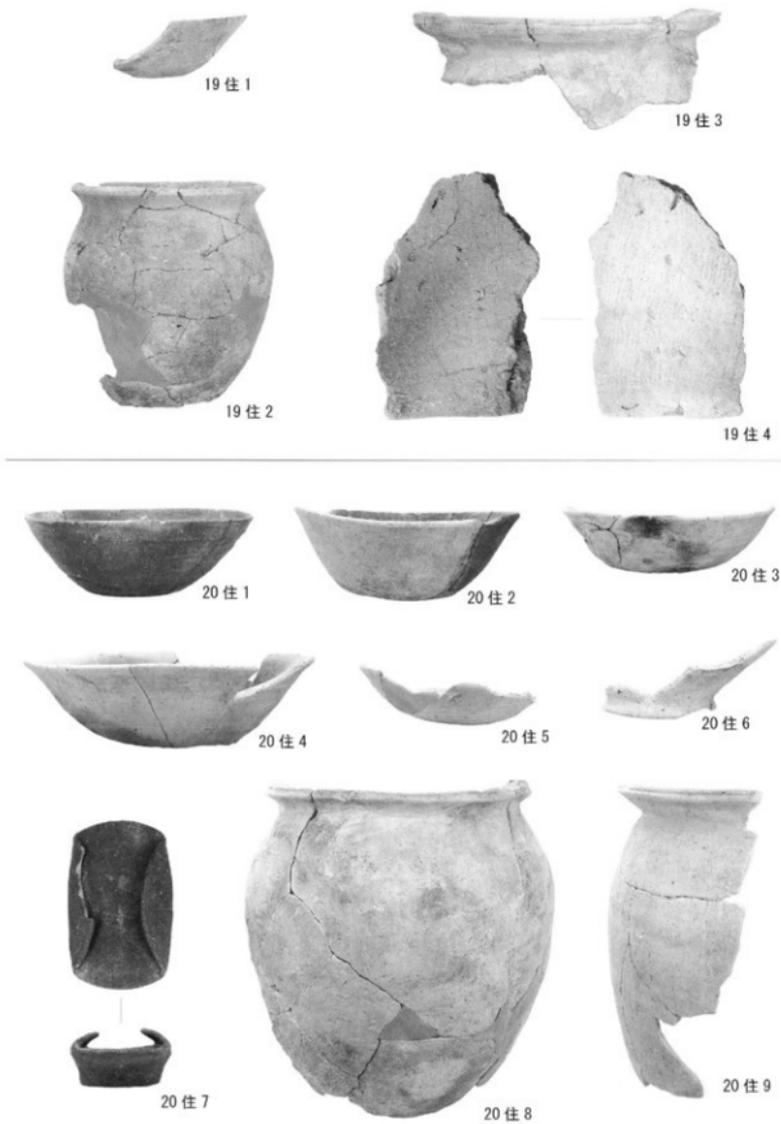
18住8



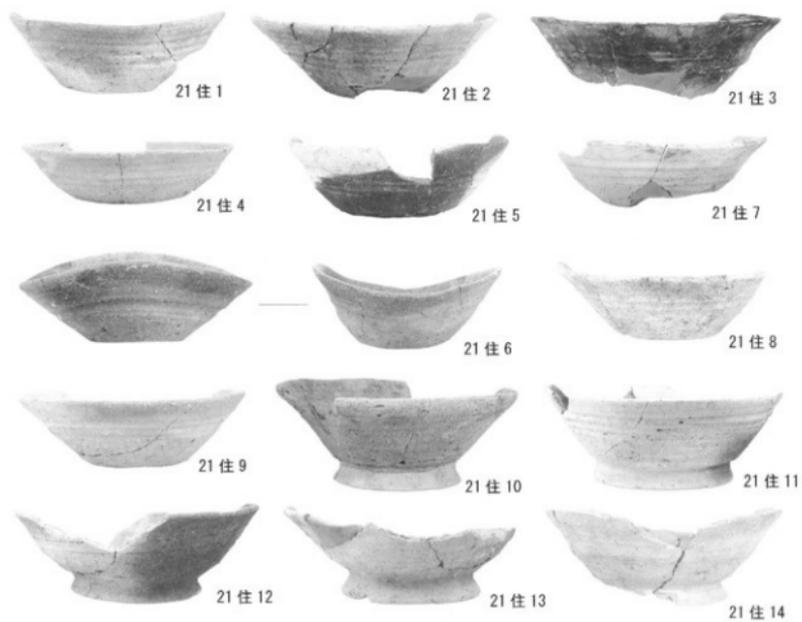
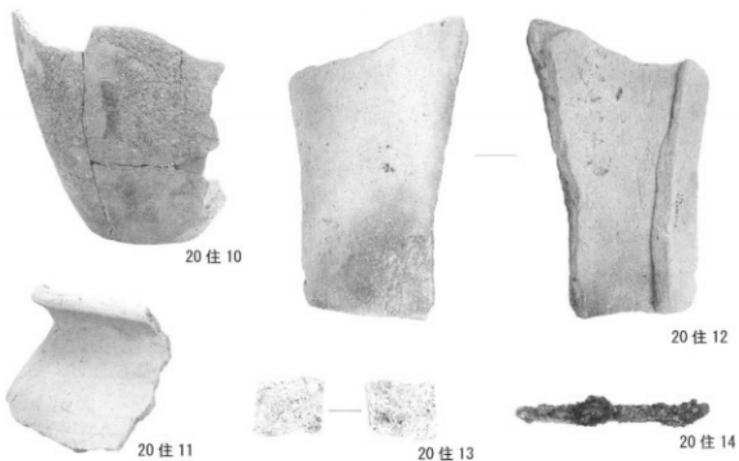
18住9



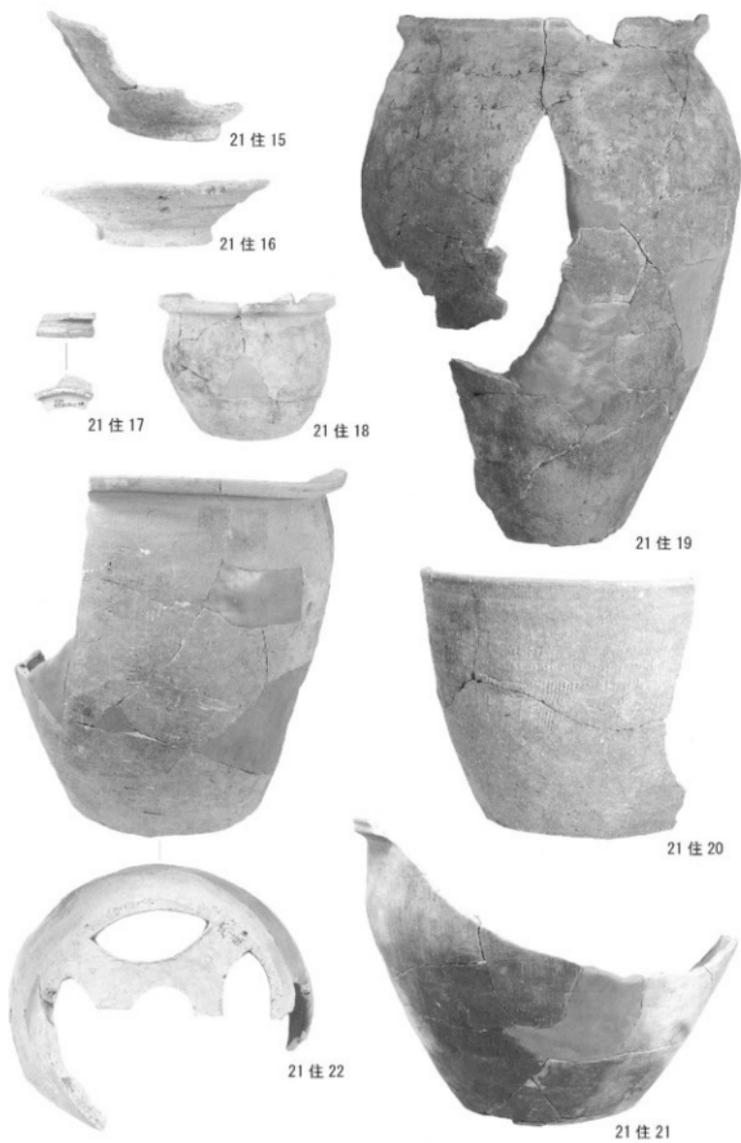
図版 35 18号住居跡出土遺物



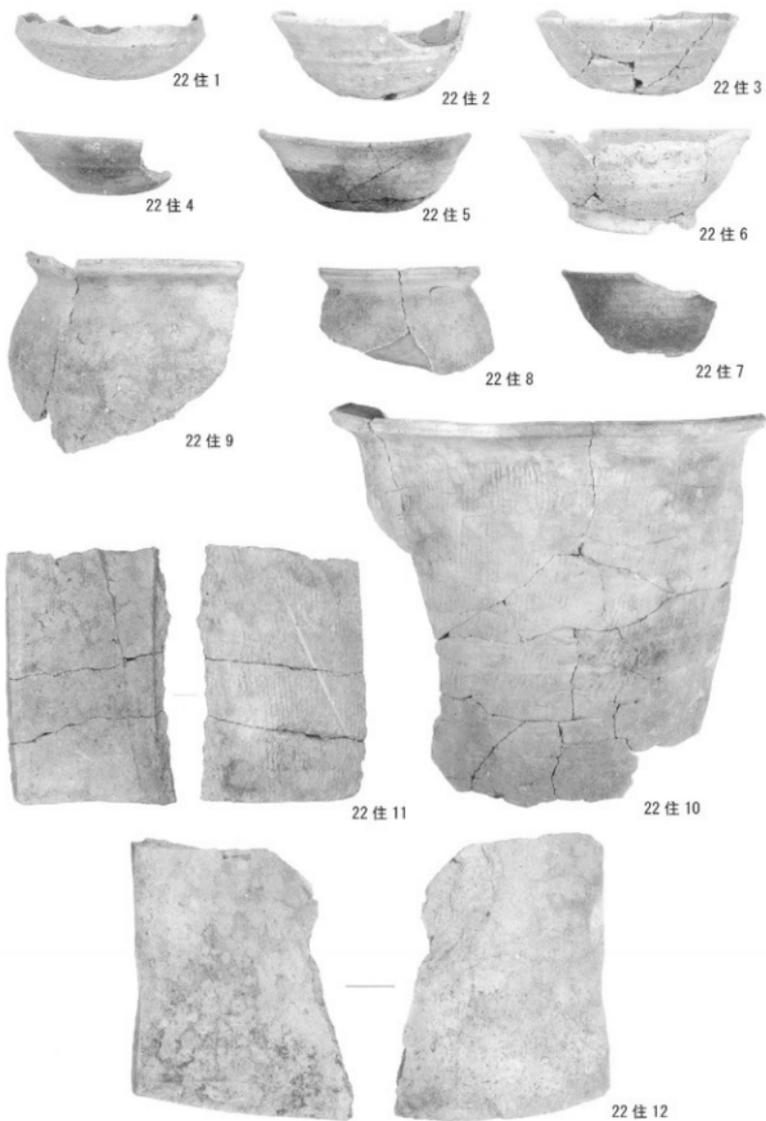
図版 36 19・20号住居跡出土遺物



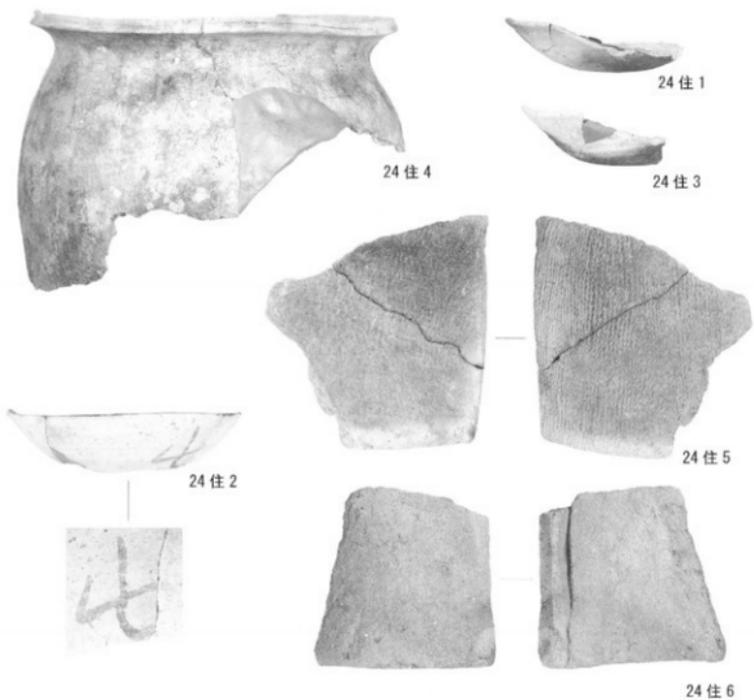
図版 37 20・21号住居跡出土遺物



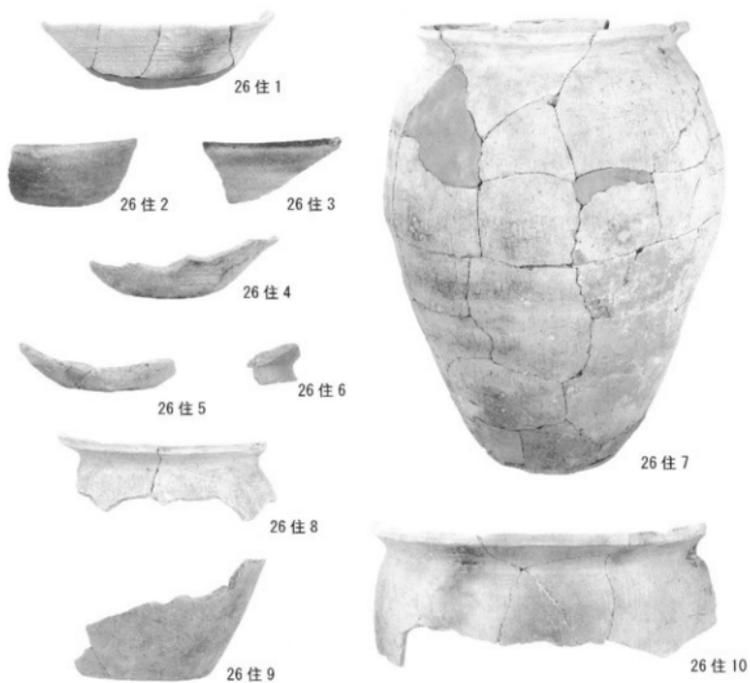
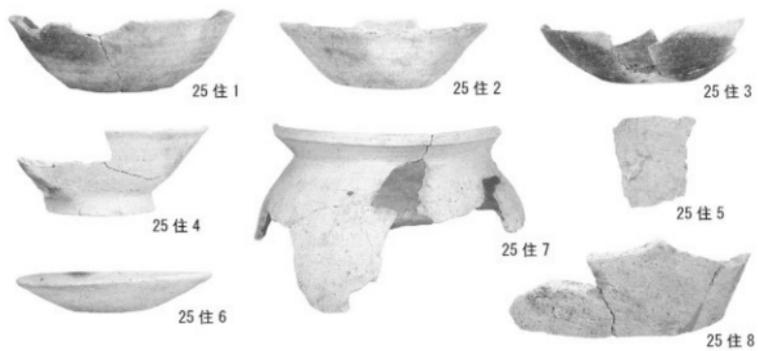
图版 38 21号住居跡出土遺物



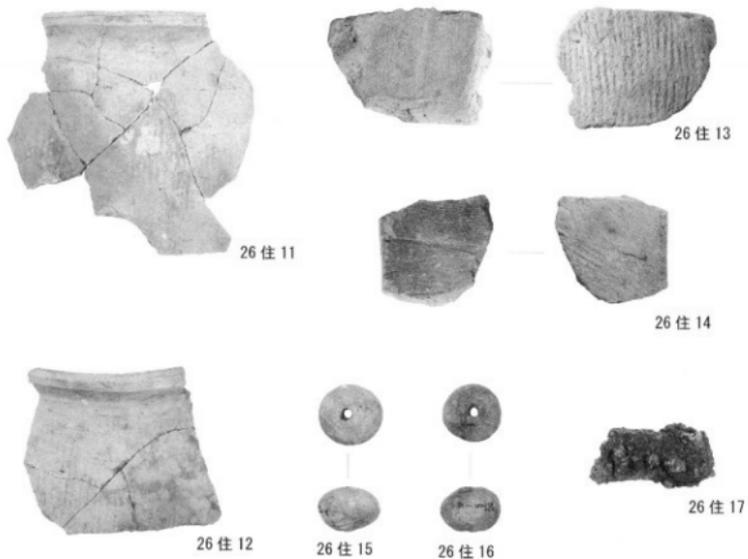
图版 39 22 号住居跡出土遺物



図版 40 23・24 号住居跡出土遺物



図版 41 25・26 号住跡出土遺物



図版 42 26・27 号住居跡出土遺物



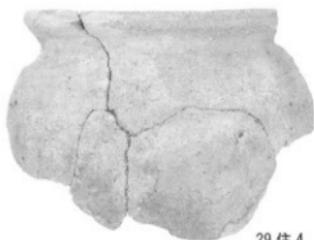
29 住 1



29 住 2



29 住 3



29 住 4



29 住 5



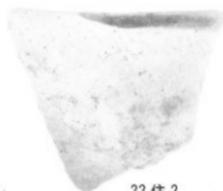
29 住 6



29 住 7



33 住 1



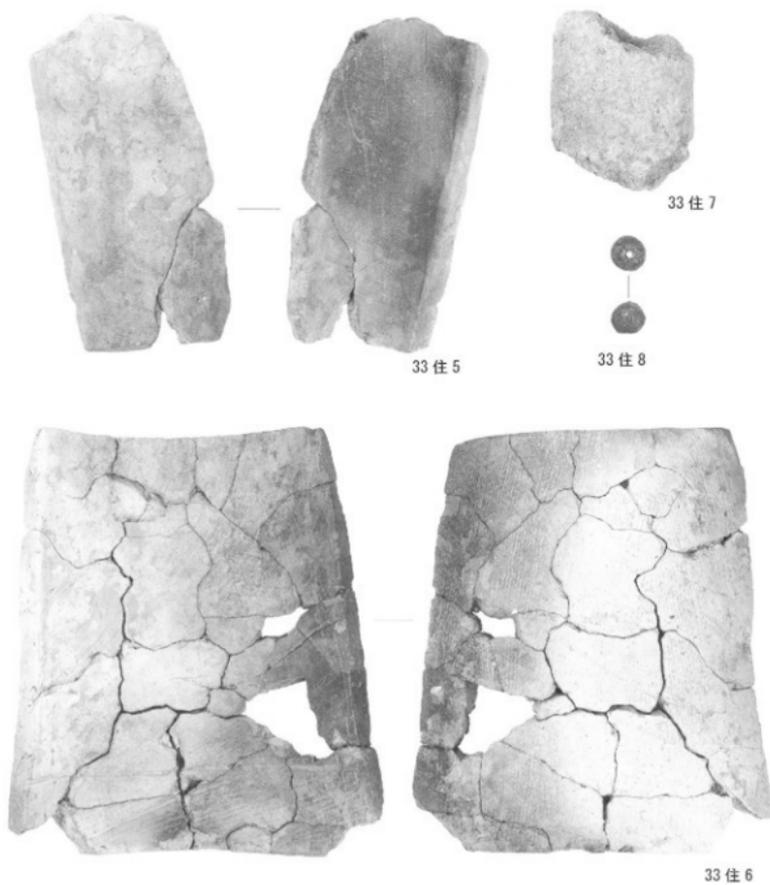
33 住 2



33 住 4



33 住 3



图版 44 33 号住居跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひしけみちにしいせき							
書 名	菱毛道西遺跡							
副 書 名	株式会社エフビコム工場建設に伴う遺跡の発掘調査							
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	13							
編 集 者	山野井哲夫、齋藤 洋、大橋 生							
著 者 名	山野井哲夫、齋藤 洋、野村浩史							
編集機関/ 所在地	株式会社地域文化財コンサルタント/〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12 八千代町教育委員会/〒300-3572 茨城県結城郡八千代町大字菅谷1170							
発行年月日	西暦2009年 7月 24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° / ' "	° / ' "		m ²	
ひしけみち 菱毛道西 いせき 遺跡	いせきみちのうらうら 茨城県結城郡 やちよまちおおむね 八千代町大字 ひしけみち 平塚	08521	134	36° 9' 29"	139° 51' 20"	20070913 ~ 20071115	10,000	工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
菱毛道西 遺跡	集落	古墳時代	堅穴住居跡 18軒	土師器：坏、甕他 須恵器：坏、甕他 石製品：紡錘車他 土製品：土玉、土鏝他		一辺が9mを越す大型の堅穴 住居跡。2号住居跡のカマドに は複数の土器を組み合わせて 補強した痕跡が残る。		
平安時代		堅穴住居跡 14軒	土師器：坏、甕他 須恵器：坏、甕他 灰釉陶器：高台坏境 鉄製品：釘他 瓦片 羽口		堅穴住居跡カマド内から瓦 片・羽口が出土 墨書土器2点出土			
時期不明		堅穴住居跡 2軒 樹立柱建物跡 1 上杭 6 ピット群						
要 約	<p>今回の発掘調査によって検出された遺構は、古墳時代に属する住居跡が18軒、平安時代に属する住居跡が14軒、時期不明の住居跡が2軒、同じく時期不明の樹立柱建物跡が1棟、近世以降のものと考えられる方形～楕円形を呈す上杭6基である。今回本調査を実施した調査区内での時代別の遺構分布状況としては、古墳時代の遺構は調査区北側に囲まられているものの全体的に偏在するもので、その規模は比較的大型のものが多く見られる。また、いずれの住居跡も溝状断面から床面までの掘り込みが深く、壁土及び遺物の遺存状況は大変良好である。平安時代では、遺構の検出は調査区南側半分に限定され規模はそのほとんどが小型であり、遺構確認面からの床面までの掘り込みは相対的にやや浅めである。出土遺物では土師器、須恵器の「甕」類がその主体となるが、灰釉陶器の破片やカマド内より遺存状況の良い「瓦」等の出土もある。また、カマドを正面に見た左側ないし右側に平面形状方形～楕円形の張り出しが付設する住居跡6軒も検出している。本遺跡での総合的な遺構の分布状況として、調査区の東側には旧地形の「谷」が調査区とはほぼ平行して入り込み、検出された各時代の遺構は、この「谷」の縁辺に沿った南北方向を中心軸に展開していた事が明らかとなった。</p>							

八千代町埋蔵文化財調査報告書13

茨城県結城郡八千代町大字平塚

菱毛道西遺跡

～株式会社エフビコ工場建設に伴う遺跡の発掘調査～

発行日 平成21年7月24日

編集 株式会社 地域文化財コンサルタント 〒286-0201 千葉県富里市日古台1-23-12
TEL 0476-93-0770 FAX 0476-93-0538

発行 八千代町教育委員会 〒300-3592 茨城県結城郡八千代町大字雀谷1170 TEL 0299-43-1111
株式会社 エフビコ 〒721-0952 広島県福山市曙町1-12-15 TEL 084-953-1145
株式会社 地域文化財コンサルタント 〒286-0201 千葉県富里市日古台1-23-12

印刷 社会福祉法人 東京コロニー コロニー印刷 〒165-0023 東京都中野区江原町 2-6-7
TEL 03-3953-3536 FAX 03-3951-9163 URL <http://colony.gr.jp/>